

史跡 永納山城跡 I

—水門・城門・内部施設等確認調査報告書—
(平成18～20年度調査)

2009年3月

西条市教育委員会

史跡 永納山城跡 I

—水門・城門・内部施設等確認調査報告書—
(平成18～20年度調査)

2009年3月

西条市教育委員会



永納山城跡遠景（南から）

道前平野（手前）と今治平野（奥側）の中間に位置し、
燧灘に隣接する。



永納山城跡全体写真（上：昭和 53 年撮影 下：平成 15 年撮影）
中央には、北側に開口する大きな谷を有する。北西部（左上）が医王山。



H19 - 4トレンチ遺構検出状況（北から）

谷に平行する列石や地業層の存在等から、城門の一部である可能性が高い。



H19 - 4トレンチ遺構検出状況（北から）

粘土や砂質土を使用した地業層が確認できる。



H19 - 24 トレンチ 土塁断割り状況

土塁が明確に列石前面を覆う状況を確認した。



H19 - 24 トレンチ 列石の前後に検出したピット

序 文

西条市では、今回の調査に先立ち平成 14 年度から 16 年度にかけ、古代山城 永納山城跡の国史跡指定を目指した発掘調査を実施し、平成 16 年 2 月に国史跡指定申請を行いました。その結果、永納山城は遺跡の歴史的価値が認められ、平成 17 年 7 月 14 日に国史跡に指定されました。

一方で、城門や水門、内部施設といった遺構の詳細に関しては、その存否さえ明らかでない状況であり、そこで平成 18 年度から 3 カ年をかけ、遺構の存否を確認することを目的とした発掘調査を実施してきました。調査の結果、城門の一部と考えられる遺構や列石を覆う土塁の存在など、多くの事実が明らかになるとともに、全容解明に向けた課題もはっきりとしてきました。それらの調査成果をまとめたものが、本報告書であります。

本報告書が、古代から連綿と続く当地域の歴史をひも解く資料として、古代史研究の一助となるとともに、地域文化の理解や学習に活用されることを願っています。

また、調査全般にわたり、調査指導委員会の先生方をはじめとする関係各位・関係機関の皆様方にご指導・ご助言を賜り、さらに、地元市民の皆様方には、調査実施に際し、各方面においてご協力をいただいたおかげで、今回、多くの成果を上げることができたことを厚くお礼申し上げます。

平成 21 年 3 月

西条市教育委員会
教育長 田中 明

例 言

- 1 本書は平成 18 年度から平成 20 年度に国庫補助事業として実施した、「西条市内遺跡発掘調査事業」の成果報告書である。
- 2 本事業は西条市が事業主体となり、西条市教育委員会が事務局として実施した。
- 3 本書に使用した座標系は世界測地系であり、方位は座標北を示す。
- 4 本書における土層の色調及び遺物の色調については、『新版標準土色帖』（農林水産省林技術会議事務局監修、財団法人日本色彩研究所監修）を使用した。
- 5 各図面の縮尺は、挿図目次に明記した。
- 6 本書の執筆は渡邊芳貴、田中いづみ、児玉渚が行い、編集は渡邊が行った。なお、編集については、楠理佐が補佐した。
- 7 出土遺物及び関係資料は、西条市教育委員会で保管している。

目 次

第1章 遺跡の概要と環境	1
第1節 永納山城跡の位置	1
第2節 永納山城跡周辺の歴史的環境	3
第3節 遺跡の概要	6
第2章 調査の目的と経過	9
第1節 調査の目的	9
第2節 調査組織	9
第3節 調査の経過	10
第3章 調査の成果	13
第1節 水門推定地の調査	14
第2節 城門推定地の調査	24
第3節 内部施設推定地の調査	36
第4節 城壁構造の調査	78
第5節 出土遺物	85
第4章 ま と め	89
第1節 調査の成果	89
第2節 今後の調査に向けての課題	99

挿 図 目 次

図 1 - 1	永納山城位置図 (S = 1/50000)	1
図 1 - 2	西日本の古代山城分布図	2
図 1 - 3	瀬戸内海の地形と古代山城 (S ≒ 1/1000000)	2
図 1 - 4	永納山城跡周辺の遺跡分布図 (S = 1/100000)	4
図 1 - 5	永納山城跡 史跡指定範囲 (S = 1/6000)	7
図 3 - 1	トレンチ配置図 (S = 1/5000)	13
図 3 - 2	北部水門推定地周辺地形図 (1) (S = 1/1000)	14
図 3 - 3	北部水門推定地周辺地形図 (2) (S = 1/300)	15
図 3 - 4	H18 - 1 トレンチ平面および断面図 (S = 1/60)	16
図 3 - 5	H19 - 4 トレンチ北区平面および断面図 (S = 1/60)	17
図 3 - 6	H19 - 4 トレンチ南区平面および断面図 (S = 1/60)	19
図 3 - 7	H19 - 3 トレンチ周辺地形図 (S = 1/1000)	20
図 3 - 8	H19 - 3 トレンチ平面および断面図 (S = 1/60)	22
図 3 - 9	北東部城門推定地周辺の地形図 (S = 1/1000)	24
図 3 - 10	H18 - 2 トレンチ周辺地形図 (S = 1/200)	25
図 3 - 11	H18 - 2 トレンチ平面・断面・立面図 (S = 1/60)	26
図 3 - 12	H18 - 3 トレンチ平面・断面・立面図 (S = 1/80)	27
図 3 - 13	南東部城門推定地周辺地形図 (S = 1/1000)	28
図 3 - 14	H19 - 1 トレンチ平面図および H 断面図 (S = 1/60)	31
図 3 - 15	H19 - 1 トレンチ立面図および E 断面図 (S = 1/60)	32
図 3 - 16	H19 - 1 トレンチ A・D 断面図 (S = 1/60)	33
図 3 - 17	H19 - B・C 断面図 (S = 1/60)	34
図 3 - 18	H20 - 1 トレンチ平面および断面図 (S = 1/60)	35
図 3 - 19	北東部内部施設確認トレンチ周辺地形図 (S = 1/1000)	37
図 3 - 20	H18 - 5 トレンチ・5 トレンチ拡張区平面および断面図	38
図 3 - 21	H18 - 4 トレンチ平面および断面図 (S = 1/80)	39
図 3 - 22	H18 - 6 トレンチ平面および断面図 (S = 1/80)	39
図 3 - 23	H18 - 7 トレンチ平面および断面図 (S = 1/80)	41
図 3 - 24	H18 - 8 トレンチ平面および断面図 (S = 1/80)	41
図 3 - 25	H18 - 9 トレンチ平面および断面図 (S = 1/80)	41
図 3 - 26	H18 - 10 トレンチ平面および断面図 (S = 1/80)	42
図 3 - 27	H18 - 11 トレンチ平面および断面図 (S = 1/80)	42
図 3 - 28	H18 - 12 トレンチ平面および断面図 (S = 1/80)	44
図 3 - 29	H18 - 13 トレンチ平面および断面図 (S = 1/80)	44
図 3 - 30	H18 - 14 トレンチ・14 トレンチ拡張区平面および断面図 (S = 1/80)	46
図 3 - 31	H18 - 15 トレンチ平面および断面図 (S = 1/80)	48
図 3 - 32	H18 - 16 トレンチ平面および断面図 (S = 1/80)	48
図 3 - 33	東部内部施設確認トレンチ周辺地形図 (S = 1/2000)	49
図 3 - 34	H19 - 5 トレンチ平面および断面図 (S = 1/80)	50
図 3 - 35	H19 - 6 トレンチ平面および断面図 (S = 1/80)	50
図 3 - 36	H19 - 7 トレンチ平面および断面図 (S = 1/80)	51
図 3 - 37	南東部内部施設確認トレンチ周辺地形図 (S = 1/2000)	52

図3 - 38	H19 - 8トレンチ平面および断面図 (S =1/80)	53
図3 - 39	H19 - 9トレンチ平面および断面図 (S =1/80)	53
図3 - 40	H19 - 11トレンチ平面および断面図 (S =1/80)	54
図3 - 41	H19 - 12トレンチ平面および断面図 (S =1/80)	55
図3 - 42	H19 - 13トレンチ平面および断面図 (S =1/80)	55
図3 - 43	H19 - 14トレンチ平面および断面図 (S =1/80)	56
図3 - 44	南部内部施設確認トレンチ周辺地形図 (S =1/1000)	57
図3 - 45	H19 - 15トレンチ平面および断面図 (S =1/80)	58
図3 - 46	H19 - 16トレンチ平面および断面図 (S =1/80)	59
図3 - 47	H19 - 17トレンチ平面および断面図 (S =1/80)	59
図3 - 48	H19 - 18トレンチ平面および断面図 (S =1/80)	60
図3 - 49	南西部内部施設確認トレンチ周辺地形図 (S =1/1000)	61
図3 - 50	H19 - 19トレンチ平面および断面図 (S =1/80)	62
図3 - 51	H19 - 20トレンチ平面および断面図 (S =1/80)	63
図3 - 52	西部内部施設確認トレンチ周辺地形図 (S =1/1000)	64
図3 - 53	H19 - 21トレンチ平面および断面図 (S =1/80)	65
図3 - 54	H19 - 22トレンチ平面および断面図 (S =1/80)	66
図3 - 55	H19 - 23トレンチ平面および断面図 (S =1/80)	66
図3 - 56	谷低地部内部施設確認トレンチ周辺地形図 (S =1/1000)	68
図3 - 57	H20 - 2トレンチ平面および断面図 (S =1/80)	69
図3 - 58	H20 - 3トレンチ平面および断面図 (S =1/80)	69
図3 - 59	H20 - 4トレンチ平面および断面図 (S =1/80)	70
図3 - 60	H20 - 5トレンチ平面および断面図 (S =1/80)	71
図3 - 61	H20 - 6トレンチ平面および断面図 (S =1/80)	72
図3 - 62	南東部尾根緩斜面の内部施設確認トレンチ周辺地形図 (S =1/1000)	73
図3 - 63	H20 - 7トレンチ周辺地形図 (S =1/300)	74
図3 - 64	H20 - 7トレンチ平面および断面図 (S =1/60)	76
図3 - 65	H20 - 7トレンチ断割り部 礫検出状況 (S =1/20)	77
図3 - 66	西部城壁構造確認トレンチ周辺地形図 (S =1/1000)	78
図3 - 67	H19 - 24トレンチ周辺地形図 (S =1/300)	79
図3 - 68	H19 - 24トレンチ平面および断面図 (S =1/80)	81
図3 - 69	H19 - 24トレンチ西区 平面および断面図 (S =1/60)	82
図3 - 70	H19 - 24トレンチ東区 平面および断面図 (S =1/60)	84
図3 - 71	永納山城跡出土遺物 1 (S =1/3)	85
図3 - 72	永納山城跡出土遺物 2 (S =1/2)	86
図3 - 73	永納山城跡出土遺物 3 (16 ~ 18 : S =1/1、19・20 : S =1/2)	87
図4 - 1	H19 - 4トレンチ周辺の地形断面図 (S =1/250)	91
図4 - 2	谷部に位置する水門・城門の例 (1) 佐賀県おつぼ山神籠石 (② S =1/400、③ S =1/100)	92
図4 - 3	谷部に位置する水門・城門の例 (2) 福岡県御所ヶ谷神籠石 (S =1/300)	93
図4 - 4	石製唐居敷が用いられた城門例 (S =1/300)	94
図4 - 5	永納山城跡城門想定図 (S =1/300)	95

第1章 遺跡の概要と環境

第1節 永納山城跡の位置

永納山城跡の絶対位置は、遺跡の中心で北緯 33 度 58 分 39 秒・東経 133 度 3 分 10 秒であり、行政区分上は愛媛県西条市河原津・楠及び今治市孫兵衛作に所在する。

永納山城の地理的環境を広範囲で捉えると、東西約 450 km に及ぶ瀬戸内海の中南部に位置する。朝鮮半島から海を渡り関門海峡を抜け瀬戸内海に至ると、そこには大小多数の島が広がり、当然ながら多くの海峡・水道・瀬戸が存在する。瀬戸内地方は、これらによっていくつもの小地域に分けられるのであるが、この瀬戸内中部には、特に島の密度が高い芸予諸島が海の関所のように存在する。また、周辺の潮流は複雑な様相を示し、芸予諸島と高縄半島によって分断される斎灘いつきさだと燧灘ひうちなだをつなぐ来島海峡は、古くから瀬戸内海の交通・軍事等の要衝であり、最大の難所ともなっている。現在では本州と四国を結ぶ「しまなみ海道」がこれらの島々を結んでいるが、この愛媛県側の出発点となるのが高縄半島であり、永納山城はその付け根に位置する。

次に陸地部に目を向けると、永納山城の南方眼下には県下第二の広さを誇る道前平野が広がる。道前平野は中山川やその支流、及び大明神川などの河川からなる典型的な沖積平野であり、平野中央から北部にかけては古くから人々の活動痕跡が見受けられる。さらに、北方には当時の国府推定地のあ



(この地図は、国土地理院発行の5万分の1地形図(西条)を使用したものである。)

図1-1 永納山城位置図

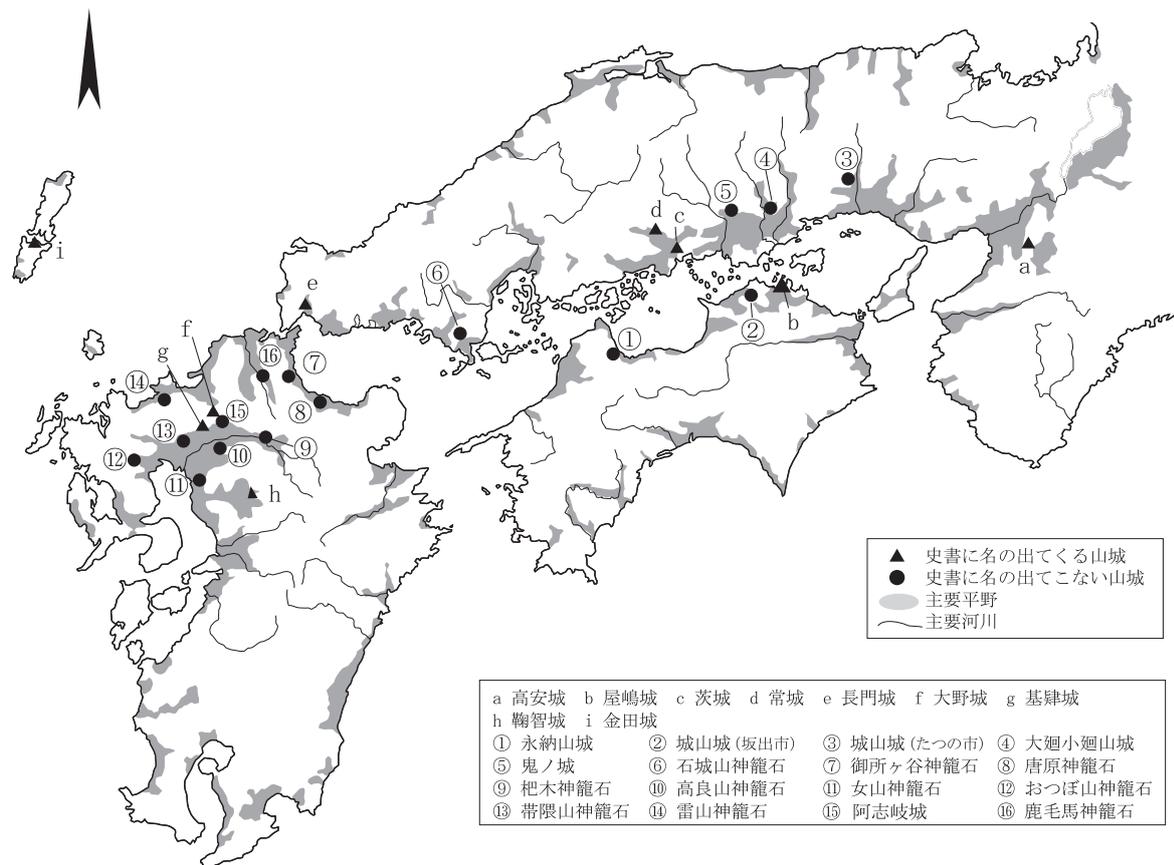


図1-2 西日本の古代山城分布図



図1-3 瀬戸内海の地形と古代山城 (S ≒ 1/1000000)

る今治平野を望み、芸予諸島の一部やその向こうに広がる斎灘も見渡すことができる。

また道前平野の沿岸部は、当平野をつくり上げてきた河川より流れ出る土砂によって長い年月をかけ、遠浅の海岸や干潟が形成されてきた。現在、海岸線は江戸時代に行われた干拓や昭和期の開発により海側に移動しており、当時の姿は残していない。しかし、永納山の山頂に立つと、そこから正面には海が目前に開け、さらに足元を見下ろすと、ふもとは陸地となっているが、いまだ入江状を呈しており、眼下に燧灘を見渡す場所に築城されていた永納山城の姿がさらに鮮明に浮かびあがる。

中・四国地域に築かれた古代山城が瀬戸内海沿岸に点在することは周知の事実であるが、これらは瀬戸内海をその両岸から挟み込むように、各重要地域を見据える要衝に築かれたとも捉えうる。中でも永納山城が瀬戸内海に極めて近接しているという点、瀬戸内海を西から東に向け進んできた場合、最大の難所を抜けた直後の死角的な位置に存在している点は特徴的であり、まさに海を意識した山城であったことを示している。

第2節 永納山城跡周辺の歴史的環境

永納山城跡周辺では、主に縄文時代以降に人々の活動の痕跡が認められ、縄文時代後期に入ると永納山の南山麓から世田山麓にかけて、六軒家遺跡群・世田山麓遺跡群など遺跡の分布が広がる。

続く弥生時代には永納山周辺の遺跡数は減少するものの、平野全体に遺跡が広がるようになり、中期以降、その数が増加する。久枝遺跡や新池・小池遺跡の調査では、地域の拠点的作用を果たした集落の様相の一端が明らかとなった。また、近年の調査では弥生時代前期の遺跡の確認例も増加しており、成福寺Ⅷ遺跡では磨製石剣が出土する等、重要な資料も発見されている。これらの状況は、弥生時代における当地域の発展状況を示すと共に、古代へもつながる地域間交流の拠点としての役割を示しているものと考えられる。

次に、永納山城築城の前段階となる古墳時代には、近年、前期の墳墓資料も新たに発見されてきているが、遺跡数は主に後期以降に集中する。まず集落については、永納山城跡の約1.5 km南に位置する長網Ⅰ遺跡・Ⅱ遺跡、福成寺遺跡などで古墳時代後期の建物跡が確認されている。特に長網Ⅱ遺跡2次調査では、鉄生産に関わる多量の遺物が出土しており、大規模集落の中核部としての機能が想定されている。墓域については、永納山の東丘陵に位置した永納山東Ⅰ・Ⅱ遺跡で、古墳時代前期から中期にかけての土坑墓・石槨墓が確認されている。また、南に位置する成福寺4号墳は古墳出現期の墳墓とされ、平野北部の古墳時代前半期の様相も徐々に明らかになりつつある。中期には永納山周辺に目立った遺跡は確認されていないものの、後期に至ると、世田山古墳群・六軒家古墳群などの群集墳が丘陵沿いに数多く築造されるようになる。さらに永納山の南を流れる北川や大明神川周辺の平野部にも甲賀原古墳群や楠古墳群など多くの群集墳が分布している。これら古墳の中には、後世の開発により消滅しているものもあるが、その数の多さや残された副葬品などから、当地で在地豪族が成長していたことが推測できる。これらの墳墓に埋葬された人々の子孫が後に、永納山城築城に関わった可能性は十分考えられる。

永納山城が築かれた古代には、道前平野に周敷・桑村の2郡が置かれ、以前から国府推定地のある今治平野や南海道などとの関連で当地域の重要性が指定されていた。これらについて発掘調査成果に沿ってしてみると、永納山城跡から約7 km南に位置する久枝Ⅱ遺跡では、8世紀代の官衙関連施設

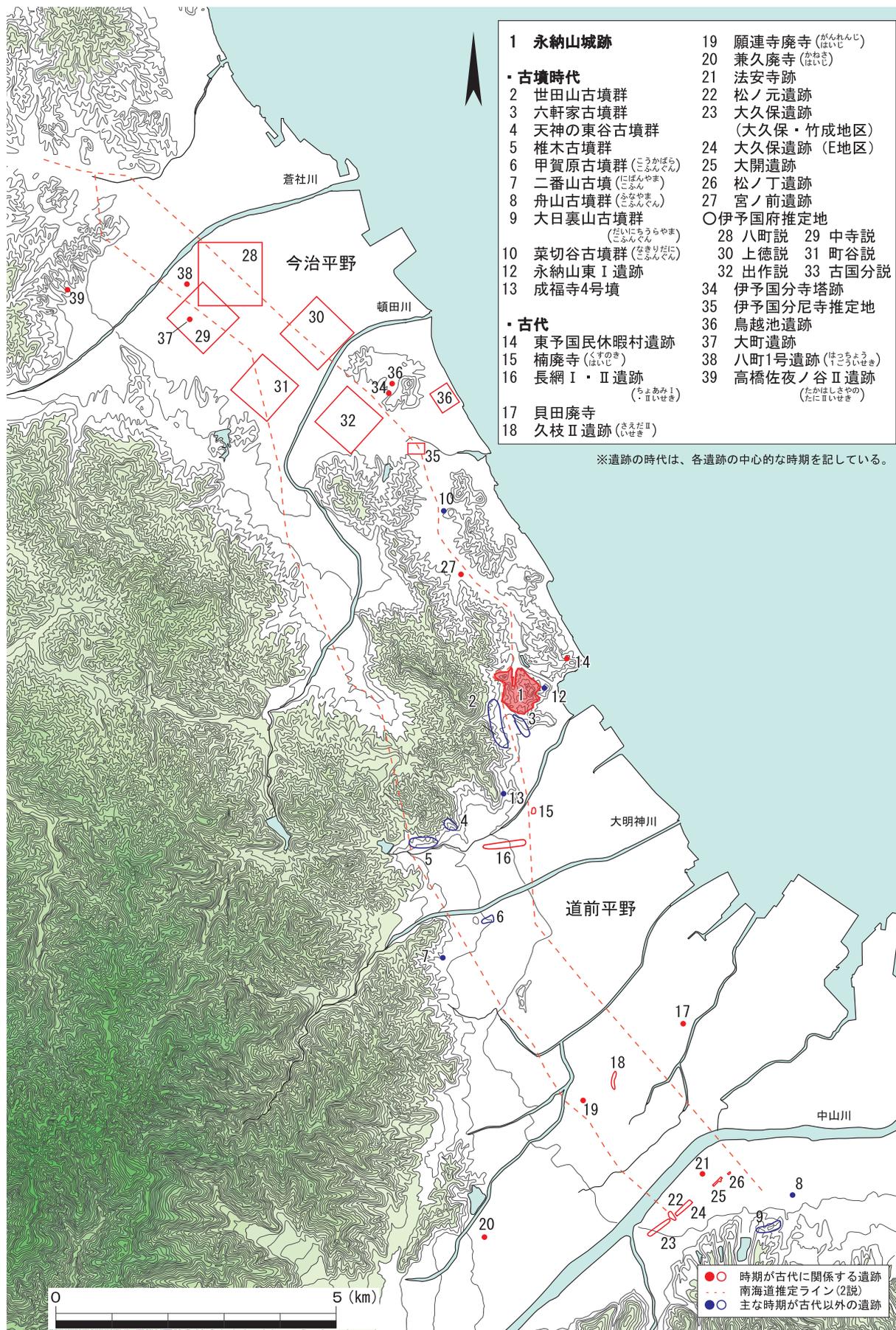


図1-4 永納山城跡周辺の遺跡分布図

と考えられる建物跡や柵列が確認された。さらに中山川をはさみ、南に位置する松ノ元遺跡では、古代官道との関連性が指摘される道路状遺構の調査が行われている。道前平野を通過する南海道については、大きく2説あるが、発掘調査によって道路状遺構が確認されたのは松ノ元遺跡だけである。今なお、南海道のラインが確定されたとはいえないが、南海道に関する研究は大きく前進したといえる。さらに、松ノ元遺跡周辺は、一般国道11号小松バイパスに伴う発掘調査が実施され、先の道路状遺構周辺の集落の状況も明らかにされ、その結果、8世紀代における官衙関連施設と一般集落からなる景観の変遷が復元されている。

また、永納山に程近い長網Ⅰ・Ⅱ遺跡では、掘立柱建物跡や大溝が検出され、まとまった遺構の検出状況から、永納山城や南海道との関係も視野に入れた当地域の重要性が指摘されている。

なお、中山川の南岸、先述の松ノ元遺跡の傍には、県内最古の古代寺院とされる法安寺があり、古代において平野全体が広範囲に開発されていた様相がうかがえる。

一方、今治平野には越智郡が置かれ、伊予国府や国分寺等が存在した。国府の所在は確定していないが、推定地周辺では官衙的な遺物が出土した八町1号遺跡が、周辺の丘陵部では国府に関連すると思われる窯跡である宮ノ前遺跡や四国最古の製鉄遺跡である高橋佐夜ノ谷Ⅱ遺跡が調査されている。これらの遺跡と永納山城跡との直接的な関わりは現段階では明らかでないが、この地域が社会的に発展していたことは十分うかがい知れる。

なお、中世の動乱期では、道前平野も幾度か戦場となり、丘陵部の要所には山城がいくつも築造されるようになる。とくに永納山の西にそびえる世田山には、南北朝期に2度の大きな合戦が行われた世田山城が築かれていた。

《参考文献》

- 櫛部 大作 編 『高橋佐夜ノ谷Ⅱ遺跡』今治市教育委員会 2007
- 土井 光一郎 他編 『永納山東Ⅰ遺跡・永納山東Ⅱ遺跡』(財)愛媛県埋蔵文化財調査センター 2008
- 中野 良一 編 『八町1号遺跡』- 2次調査区 - 今治市教育委員会 1995
- 中野 良一 他 編 『長網Ⅰ遺跡 長網Ⅱ遺跡 実報寺高志田遺跡』(財)愛媛県埋蔵文化財調査センター 2005
- 柴田 昌児他編 『大久保遺跡(大久保・竹成地区・E地区)・大開遺跡・松ノ丁遺跡(1次・2次)』(財)愛媛県埋蔵文化財調査センター 2008
- 松村 さを里他編 『世田山4号墳・成福寺Ⅷ遺跡・成福寺3・4号墳・松木池遺跡・長網Ⅰ遺跡2次』(財)愛媛県埋蔵文化財調査センター 2007
- 三好 裕行 編 『旦遺跡・宮ノ前遺跡』『一般国道196号今治バイパス埋蔵文化財調査報告書』(財)愛媛県埋蔵文化財調査センター 2000

第3節 遺跡の概要

1 永納山城跡の地形

永納山城は、現在は独立山塊となっている2つの山塊を城域として取り込む。遺跡の中心となるのは通称「永納山」と呼ばれる山塊であり、その大きさは東西780m・南北970mで、中央には北へ向け開く大きな谷が存在する。もう1つの山塊は、北西部に位置する医王山である。

永納山の高さは、最高所となる山頂で標高132.4mを測る。城域内には北西部の医王山を含めると7カ所の頂上があり、山の稜線はこれらを結ぶように大小のアップダウンを繰り返しながら連なる。その地形的特徴を見ていくと、南西部から南部、東部では尾根筋から尾根斜面にかけ岩盤の露出が顕著であり、中には垂直に切り立った露岩により絶壁となる場所もみられる。これらに対し北東部や北部は、永納山山頂から尾根が比較的緩やかな傾斜で延び、北の谷へ向かい下っていく。次に西部は多少の起伏はあるものの、尾根は比較的緩やかに延びる。しかし、西部頂上から北西の医王山方向へは尾根が急傾斜で下り、医王山との間には現在県道孫兵衛作壬生川線が通過している。なお、県道の下に流れる小川の存在などから、当時は小さな谷によって分けられていたものと想定できる。

医王山は標高131mを測り、永納山山頂とほぼ同じ高さである。山肌には各所に岩盤が露出し、特に中腹より上ではこれらの岩盤が場所によっては垂直に切り立っており、まさに岩山という言葉が当てはまる山塊である。

2 遺跡発見から今回調査に至る経緯

永納山城跡は、昭和52年4月、当時の東予市文化財専門委員の遺跡分布調査中に発見され、同年7月から翌53年2月（1次調査）、53年5月から54年3月（2次調査）と二次にわたる確認調査が実施されている。調査に際しては調査団を設置し、奈良国立文化財研究所（現 独立行政法人国立文化財機構 奈良文化財研究所）及び愛媛県教育委員会の指導の下、遺構の確認が行われた。調査目的は遺跡の性格把握及び範囲の確定であり、調査の結果、列石・土塁を基本とした城壁外郭線が構築される古代山城であることが明らかとなった。この時点で城壁の外郭線総長は約2.5kmであることが示され、さらに外郭線上には水門・城門といった遺構の存在も推定されている。これらの調査終了段階で一部の市民から史跡指定を目指す声があがり、市教育委員会も昭和54年度に、指定に向けた作業を進めたが、この時点での史跡申請は実現しなかった。

申請断念と共に調査や保存への動きも停滞していたが、近年、史跡指定への気運が再燃することとなる。その背景には、高度経済成長による開発が一段落し、地域文化・文化財に対する市民の関心が高まったことや、市の方針として貴重な文化財を保護・活用していくことにより、地域の活性化を図るようになったことがあった。また、遺跡の価値を見直すという点では、平成11年度から3カ年をかけ、市内遺跡詳細分布調査が実施されている。遺跡分布の詳細な把握は、文化財の保護、開発行為との共存のために欠かせないものである。愛媛県埋蔵文化財調査センター等の指導を受け、多くの市民ボランティアの参加を得て実施した調査によって、市内における遺跡包蔵地はそれまでの約2倍となる315件（旧東予市）に増加し、地域の歴史的環境を再認識することとなった。また、平成11年

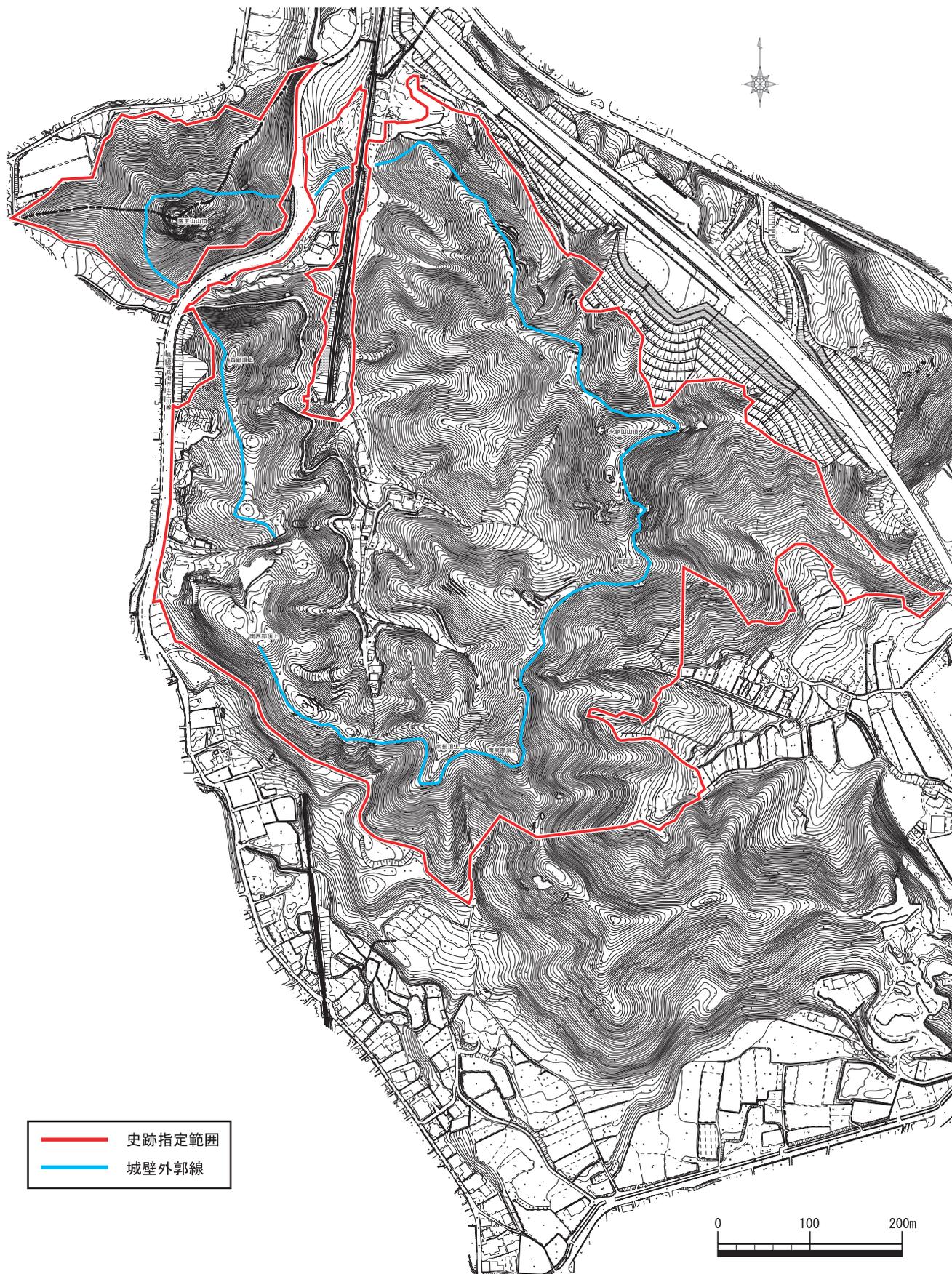


图 1 - 5 永納山城跡 史跡指定範圍

度には永納山城内の試掘調査も実施され、7カ所にトレンチが設定されたが、この調査では内部遺構に関する明確な手がかりを得ることはできなかった。しかし、現地を踏査する中で、主要な城壁構造である列石と土塁が長距離にわたり続いている状況が再確認され、古代山城の築城当時の姿を現在も良好に残していることが判明した。これらの成果から、市は改めて永納山城跡を重要遺跡であると位置付けた。

そこで市では平成14年度から3カ年計画を立て、永納山城跡の将来的な保存・活用を前提とした範囲確認調査を実施することとした。調査にあたっては「永納山城跡調査指導委員会」を組織し、全体計画を協議した上で現地調査にのぞみ、その結果、様々な城壁構造が明らかとなった。これらの成果を踏まえ、平成17年2月4日付で国史跡指定申請書を提出し、同年5月20日、国の文化審議会で指定の答申が出され、同年7月14日付、文部科学大臣 中山成彬、文部科学省告示第101号をもって国史跡として指定された。また、平成18年度には、平成16年度段階で史跡指定申請を行えなかった1筆について、史跡申請を行い、平成19年7月26日に国史跡に追加指定された。現段階での史跡指定面積は、406,276.54 m²に及び、その内訳は西条市 390,076.54 m²、今治市 16,200.00 m²である。

このように国史跡となり、遺跡の歴史的価値は認められたものの、これまでの調査は主に遺跡範囲の確認を目的とした城壁周辺の調査であったため、城内施設および城門や水門といった遺構に関しては、存否さえ不明な状態であった。その一方で、今後遺跡の適切な保存管理ならびに整備活用を行なう上では、遺跡の詳細な内容把握を欠かすことができなかった。

そこで、平成18年度から再び、遺構確認のための発掘調査を3カ年計画で実施し、遺跡の実態解明を目指すこととなった。

第2章 調査の目的と経過

第1節 調査の目的

永納山城跡の遺構は、これまでの調査により、主に城壁部分について、その状況が明らかにされてきた。しかし、城門や水門、あるいは城内の施設等の城壁以外の遺構に関しては、全くといってよい程、本格的な調査が実施されていなかった。

西条市としても、平成17年の史跡指定を機に、遺跡の保存や整備に取り組む必要性を十分認識しているところであるが、遺跡の適切な保存整備を計画し実践していくためには、遺構の正確な把握が不可欠であった。

そこで、これら内部施設等これまで詳細の不明であった遺構の存否を確認することを主な目的に、平成18年度から3カ年をかけ、トレンチ調査を実施することとした。

第2節 調査組織

調査組織は以下のとおりである。

西条市永納山城跡等調査指導委員会

役 職	氏 名	所 属
委員長	下 條 信 行	愛媛大学法文学部教授
副委員長	石 松 好 雄	下関市立考古博物館館長
委 員	狩 野 久	元岡山大学教授
委 員	長 井 數 秋	愛媛考古学研究所所長
委 員	岡 田 敏 彦	愛媛県埋蔵文化財調査センター調査課長
委 員	白 石 成 二	愛媛県立今治工業高等学校教諭

*所属は委嘱時

オブザーバー：愛媛県教育委員会文化財保護課

事務局の体制

役 職	平成18年度	平成19年度	平成20年度
教 育 長	星 加 映 二	星 加 映 二	星 加 映 二 (21年1月24日まで) 田 中 明 (21年1月26日から)
管 理 部 長	眞 鍋 廣 行	眞 鍋 廣 行	細 川 秀 美
社 会 教 育 課 長	高 橋 貴 晴	能 瀬 敏 男	阿 蘇 浩 造
歴 史 文 化 振 興 係 長	高 橋 秀 行	三 浦 執	三 浦 執
歴 史 文 化 振 興 係 主 査	—	—	岩 崎 晃 彦
歴 史 文 化 振 興 係 主 任	岩 崎 晃 彦	岩 崎 晃 彦	渡 邊 芳 貴 (調査担当)
歴 史 文 化 振 興 係	—	—	児 玉 渚 (調査担当)
歴 史 文 化 振 興 係	—	—	楠 理 佐
東 予 郷 土 館 長	武 田 秀 孝	秋 川 忠 義	—
東 予 郷 土 館 主 任	渡 邊 芳 貴 (調査担当)	渡 邊 芳 貴 (調査担当)	—
東 予 郷 土 館	田 中 い づ み (調査担当)	田 中 い づ み (調査担当)	—

発掘調査作業員

佐伯 勲・高瀬 遵・武田 忠義・田島 信恵・利根 千代美・豊田 良郎・日野 敬三・榎 重信・村上 修二・渡邊 實（50音順）

調査協力者

調査ならびに報告書作成にあたっては下記の方々にご指導・ご教示をいただきました。記して、感謝の意を表します。

赤司 善彦・大田 幸博・大橋 雅也・柴田 昌児・須原 緑・谷山 雅彦・出宮 徳尚・乗岡 実・原田 保則・松尾 洋平・三吉 秀充・向井 一雄・村上 恭通・村上 幸雄・矢野 祐介・山下 信一郎・山元 敏裕・吉田 広（敬称略・50音順）

また、地元の市民団体である「永納山古代山城跡の会」には、現場の内外でサポートいただいた。

第3節 調査の経過

1 平成18年度

西条市教育委員会では、永納山城跡の内部施設等確認調査の開始に際し、適切な遺跡発掘調査を実施していくために県内外の専門家からなる組織として「西条市永納山城跡等調査指導委員会」を設置した。そして、現地調査開始に先立ち、平成18年6月30日に第1回調査指導委員会を開催し、3ヵ年の調査計画及び18年度調査地の協議を行った。

現地調査期間：平成18年8月29日～平成19年2月28日

調査範囲：遺跡北東部

調査経過：調査では、水門推定地1ヵ所、城門推定地2ヵ所、内部施設候補地13ヵ所にトレンチを設定した。調査前半は主に城門・水門推定地を中心に調査を進めたが、結果として城門推定地2ヵ所は共に城門ではなく、外郭城壁線の一部であることが明らかとなった。このうち1ヵ所については、良好に土塁が残存しており、これまで調査を行った中でも、最も典型的な版築土塁が良好に残存していることを確認した。水門推定地に関しては、土塁・列石がずれ落ちた状態で検出され、谷開口部付近が大きく改変されていることが明らかとなった。内部施設については、北端部の尾根から調査を始め、



平成18年度現地説明会風景（平成19年1月13日）

谷へ向かう丘陵平坦部にトレンチを設定していった。このうち、2ヵ所のトレンチでピットを検出したが、いずれのトレンチにおいても遺物が出土しなかったため、永納山城との直接的な関わりは明らかにできなかった。

調査期間中には12月1日（金）に第2回調査指導委員会を開催し、現地で指導を受けるとともに、次年度以降の調査方針を協議した。また、平成19年1月13日（土）には現地説明会を開催し、約80名の参加を得た。

2 平成19年度

当年度は3ヵ年計画の2年度目にあたり、現地調査に最も重点を置き、ほぼ1年を通して発掘調査を行った。

調査期間：平成19年5月15日～平成20年3月12日

調査範囲：遺跡全域の尾根平坦部・北部水門推定地・西部水門推定地・南東部城門推定地

調査経過：調査開始当初は、遺跡北東部で前年度調査地の拡張・追加調査を実施した。その結果、内部施設については、前年度に検出したピットより下層で近現代の瓦片が出土し、これらのピットが古代山城の時期のものではない事が明らかとなった。また、東部から南東部にかけて新たに設定したトレンチにおいても、後世の開墾により地山面まで掘削されているところが多く、内部施設の存否に関する手がかりをつかむことはできなかった。

その一方で、水門推定地の追跡調査として設定したH19-4トレンチにおいて、通常の城壁と異なる構造の遺構を確認した。さらに南東部の城門推定地（H19-1トレンチ）では、明確に城門と判断できる遺構は確認できなかったものの、列石の途切れる部分や、その左右の列石に従来の列石よりも大型の石が使用されている状況が確認された。

このような中、10月12日に平成19年度の第1回調査指導委員会を開催し、これらの内容について協議を実施した。まずH19-4トレンチ検出の遺構については、JR線路付近である点や後世に作られた井戸が隣接する事から、これ以上の拡張調査を実施できない状態であることを理解した上で、現在得られている限られた情報から評価するほかないことが確認された。その結果、谷に並行する列石の並びやそれらの列石を据えるための地業の状況から、水門に付随する城門の痕跡である可能性が最も高いであろうという判断に至った。南東部の城門推定地に関しては、20年度に拡張調査を実施すべきという指針が示された。

調査後半となる第1回調査指導委員会以降は、10月から12月にかけて、内部施設の確認調査と並行して、遺跡西部で城壁構造の解明を目的とした調査を実施した。その結果、列石を覆うように積み上げられた土塁や列石前面の柱穴を確認することができた。これらの状況を確認できたことは、築城当初の城壁の姿や列石の意義を考察していく上での大きな成果であったといえる。また、西部頂上付近では、約20mにわたり石積みが築かれている状況を確認した。年の明けた平成20年2月15日には、これらの調査成果に対する協議と20年度調査の方針の協議を目的に、第2回調査指導委員会を開催した。

第2回調査指導委員会後は土塁断割りやトレンチ拡幅



平成19年度第2回調査指導委員会風景
(平成20年2月15日)



調査期間中には、現地説明会以外の日にも多くの方々に見学いただいた。

による城壁構造の把握に関する追加調査を実施した後、埋め戻しを行い、平成20年3月12日に現地調査を終了した。なお、調査期間中の平成19年12月16日には水門推定地周辺トレンチの公開を中心とした現地説明会を開催し、100名を超える市民の参加を得た。

3 平成20年度

当年度は3ヵ年計画の最終年度にあたり、現地調査は過去2ヵ年の補足的調査という位置づけであり、規模は前年より小さなものとなった。

調査期間：平成20年5月15日～平成20年11月10日

調査範囲：中央の谷低地部・南東部尾根内側緩斜面・南東部城門推定地

調査経過：18・19年度の調査結果を受け、本年度は尾根筋より城内側に下った緩やかな斜面及び中央の谷低地部にトレンチを設定し、内部施設に関連する遺構並びに遺物の確認調査を実施した。また、19年度調査において評価を保留していた南東部の城門推定地に追加トレンチを設定し、内容把握を目指した。現地調査は、この城門推定地の追加調査（H20-1トレンチ）から開始し、それと並行して城内側緩斜面の調査（H20-7トレンチ）に着手した。城門推定地については、前年度の尾根外側斜面結果同様に、城門と断定できる情報を得ることはできなかった。緩斜面のトレンチにおいては、砂質の崩落土が1m以上堆積していたため、調査最中にトレンチ壁が大規模に崩落するというアクシデントがあり、7月中旬の梅雨明けまで一時的に調査を中断するという状況に陥った。しかし、調査再開後には崩落土下に遺構面の可能性のある層を検出する等の成果が上がった。限られた範囲の調査のため、詳細は明らかにできなかったが、永納山城の内部の状況を解明する上で重要な場所となる可能性が高い。この点に関しては、7月25日に開催した調査指導委員会において、次年度以降に拡張調査を実施し、遺構の存否を明らかにするべきであるとの提言をいただいた。

また、7トレンチを中断すると同時に谷低地部5ヵ所にトレンチを設定し、遺構・遺物の確認調査を開始したが、湧水のため狭いトレンチ内で掘り下げを行える範囲がさらに制限された。そのために、遺構の存否は確定できなかったが、想像以上に後世の土砂が堆積していることが判明した。

以上のように多くの課題を抱えながらも、調査区の制限から当年度の調査は8月22日に一旦終了した。その後は、断続的に現地に入り、補足確認を実施するにとどめた。

なお、第1回調査指導委員会での提言を受け、内部協議を実施した結果、H20-7トレンチ周辺については、21年度以降に継続して確認調査を実施することとなり、調査の具体的方針については、10月22日開催の第2回調査指導委員会において協議を行った。



梅雨時期には、トレンチ壁の崩壊や湧水により、作業に支障をきたすことも度々あった。また、梅雨明け後には、記録的な猛暑の下、連日気温40度を越す中での作業となった。

第3章 調査の成果

本章では、3カ年の発掘調査成果について調査の目的ごとに述べていく。なお、各トレンチの位置は図3-1に示すとおりである。

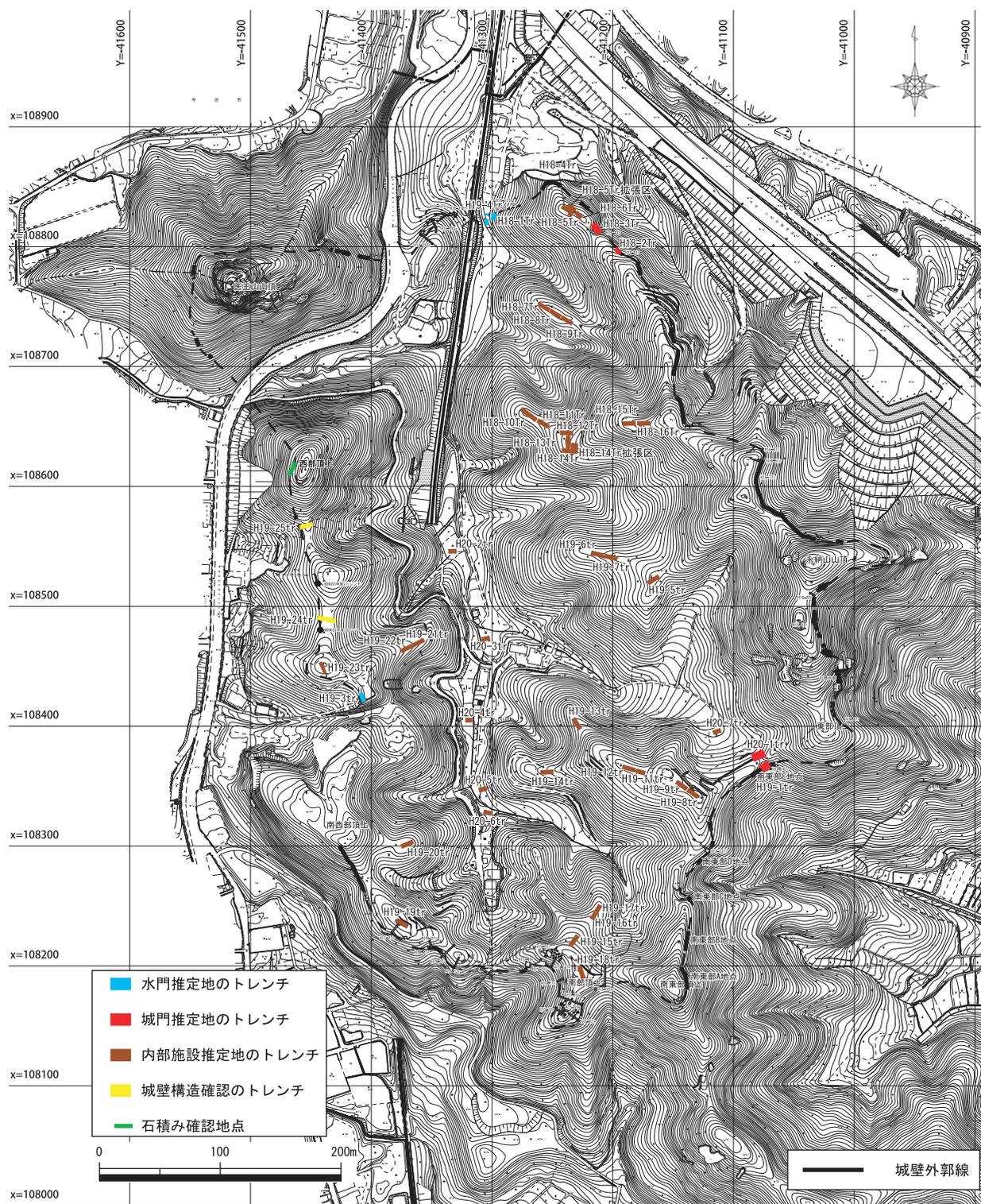


図3-1 トレンチ配置図

第1節 水門推定地の調査

永納山城跡では、これまで水門遺構は発見されていないが、遺跡発見当初から遺跡中央を南北に伸びる谷の開口部に水門が存在していた可能性が指摘されている。しかし、谷には現在 JR 予讃線が通過しているため、水門の存否は確認されていなかった。このような中、平成 16 年度の外郭線確認調査で、永納山北東部の北端列石から谷へ向かう列石（H16 - 12 トレンチ A～C 区）が検出されたことにより、この列石と線路との間に水門の痕跡が見つかる可能性が出てきた。そこで、水門の痕跡を確認することを目的として、列石よりさらに谷側に 2 つのトレンチを設定し、調査を実施した（図 3 - 2・3）。

また、西部地区には、やや小規模ではあるが、西側へ向けて開ける谷地形部分が存在することから、ここを水門推定地として調査を実施した（図 3 - 7）。

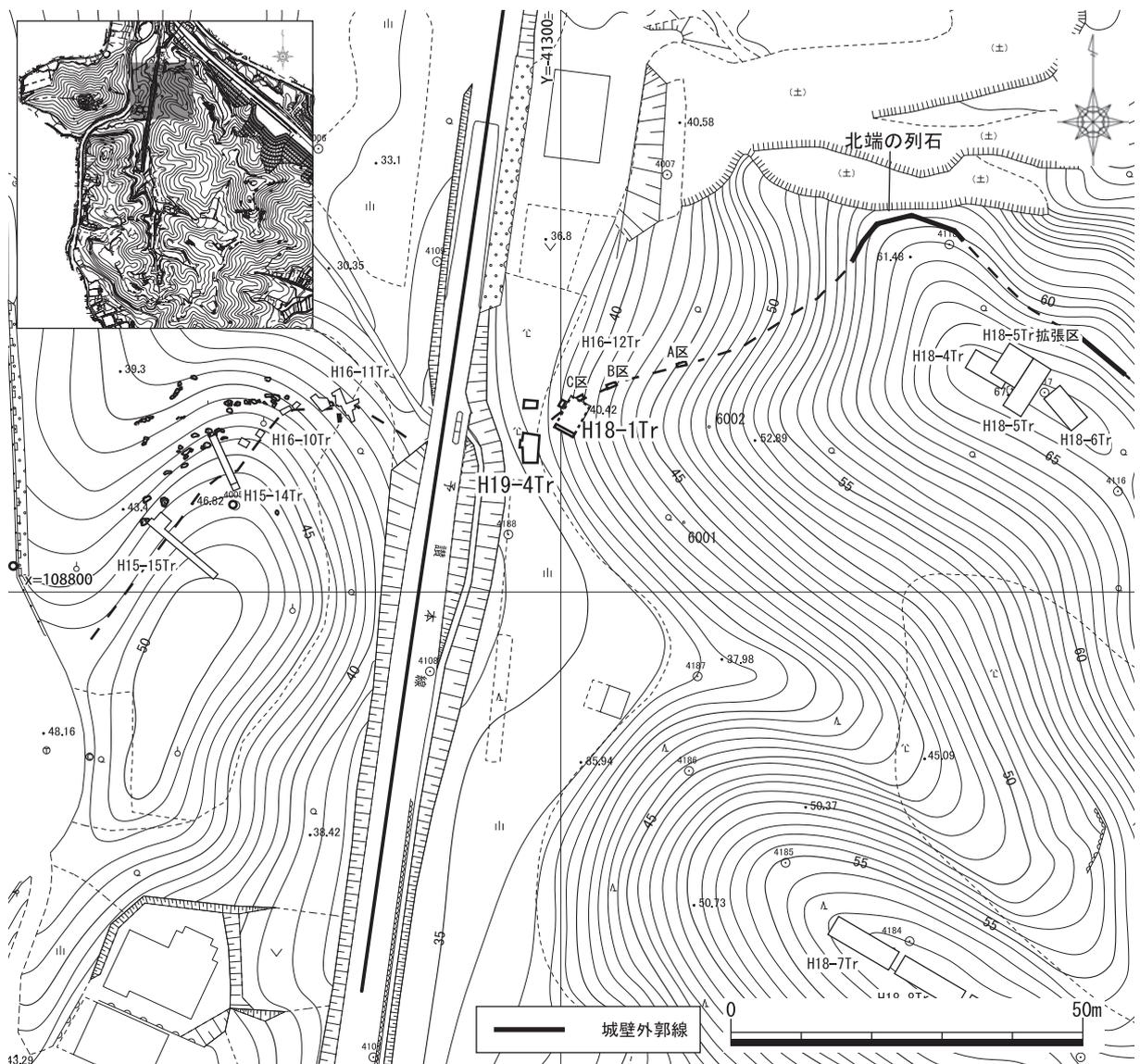


図 3 - 2 北部水門推定地周辺地形図（1）

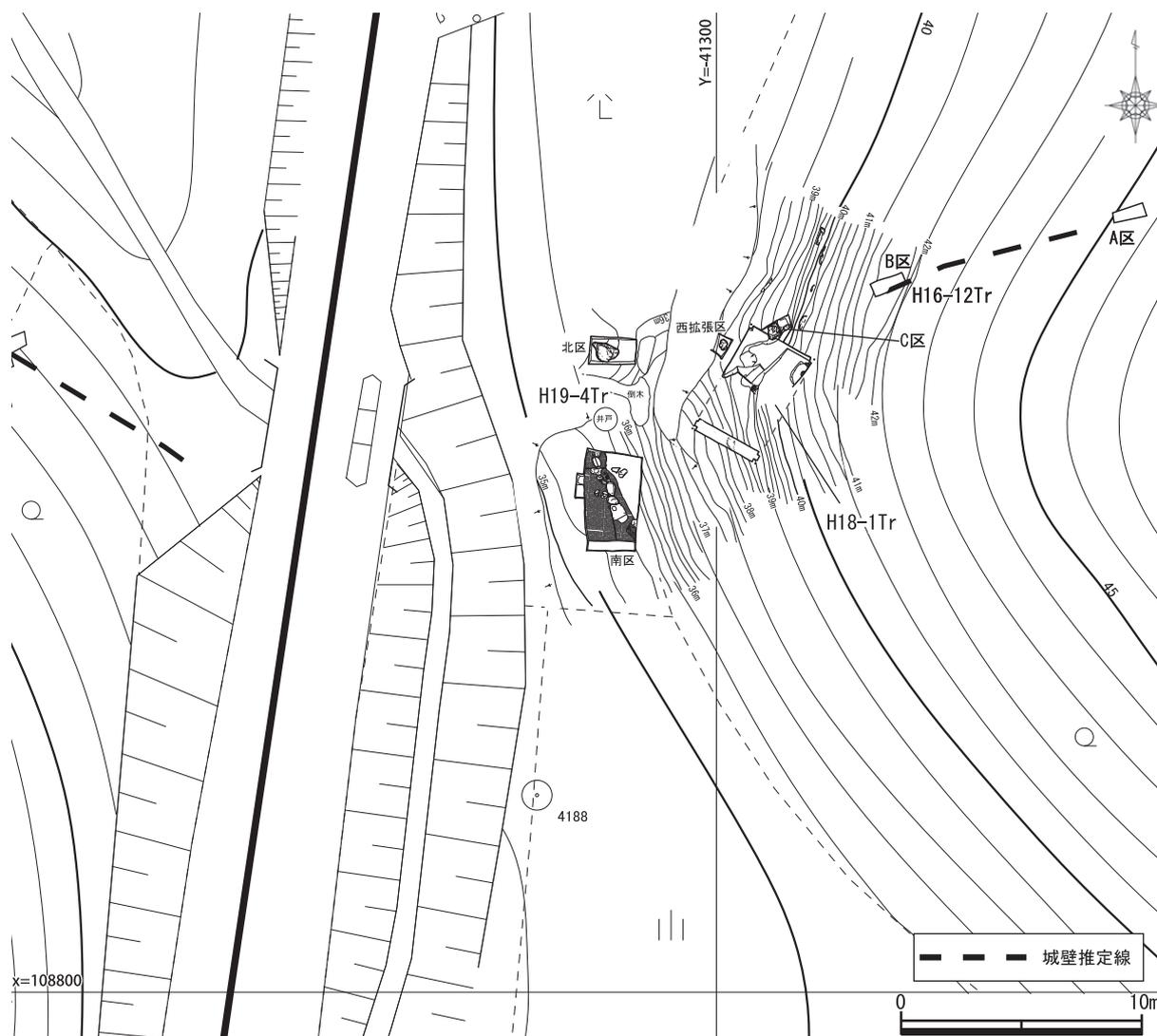


図 3 - 3 北部水門推定地周辺地形図 (2)

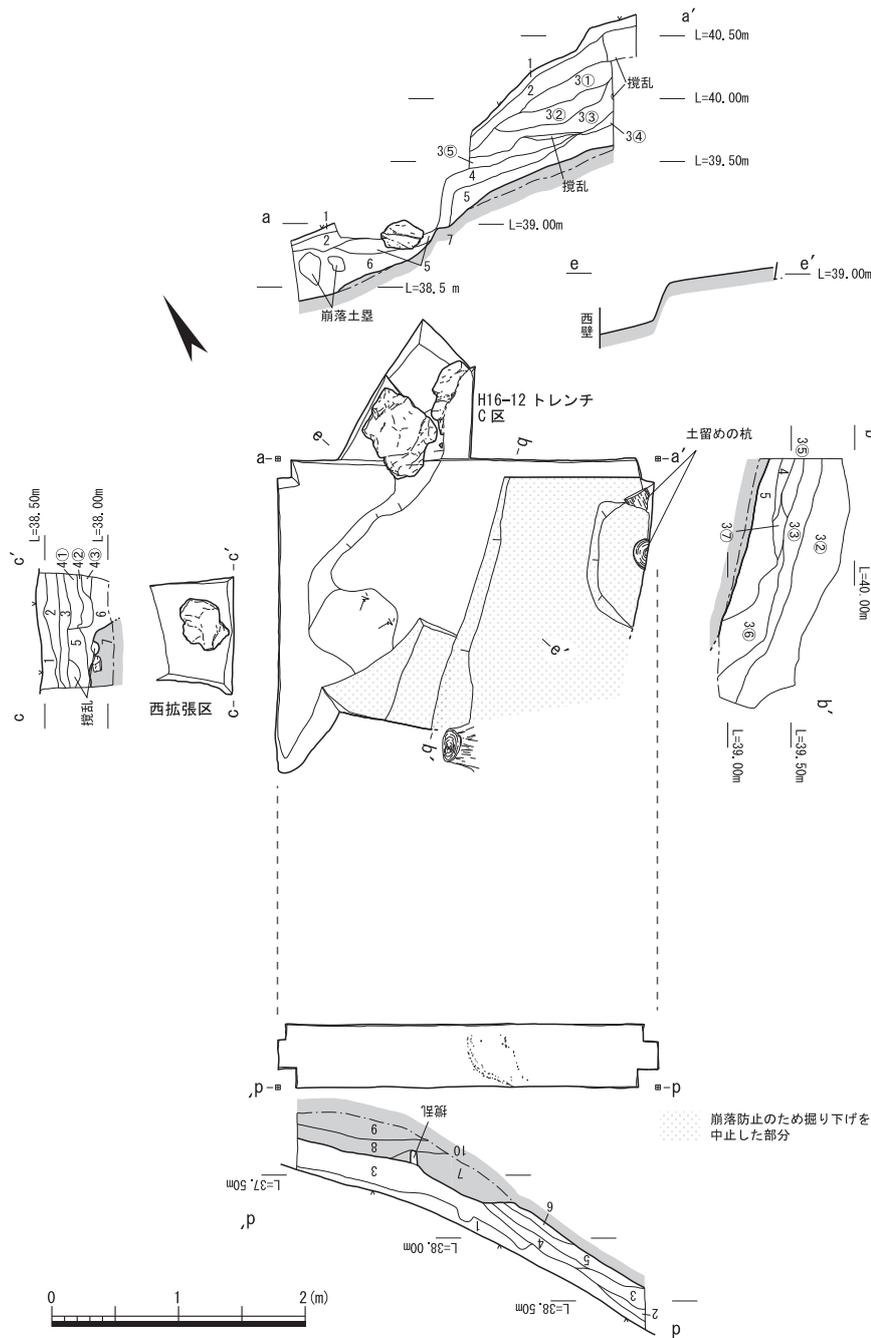
1 中央の谷開口部付近 (北部) の調査 (図 3 - 2・3)

(1) H18 - 1 トレンチ (図 3 - 4)

H18-1 トレンチは、H16-12 トレンチのうち、最も谷側に位置する C 区に接するように設定した。トレンチ規模は東西 3 m × 南北 5 m で、標高は最も高い北東隅で 40.6 m、低い南西隅で 37.4 m である。調査は、まず C 区に接する北側から着手し、状況に応じて西拡張区、トレンチ南端へと進めていった。

調査を始めてすぐ、トレンチの東側の表土下に、現代に打ち込まれたと思われる土留めの杭を検出した。この杭周辺の土はしまりがなく崩落の危険性があったため、東側の掘り下げを中止し、トレンチ西側のみを発掘した。調査の結果、城壁の下部構造と考えられるテラス部や、転落した列石と考えられる長さ 40 cm 程度の粗割の石などを検出したのみで、水門の痕跡は確認できなかった。なお、トレンチの南端を土塁確認のため幅 50 cm で掘り下げたが、土塁や土塁の崩落土は確認できず、表土から約 50 cm の深さで地山を検出した。調査によって得られた遺構の所見は以下のとおりである。

列石および下部構造 トレンチ北側で検出した地山 (7 層) は、西 (谷側) が低く、東が 30 cm 程度



《H18-1 トレンチ層序》

a - a' ・ b - b' 断面土層

- 1: 表土。
- 2: 明褐色 (7.5YR4/3)。2 ~ 4 mm 大の礫を多く含む、しまりの弱い土。

土層崩落土

- 3: ① 褐色 (10YR4/6)。
- ② にぶい黄褐色 (10YR4/3)。ブロック状に明褐色 (7.5YR5/6) 混じる。しまりの弱い土。
- ③ 褐色 (7.5YR4/4)。2 mm 大の礫を含み、やや粘性はあるが、しまりの弱い土。
- ④ 暗褐色 (10YR3/3)。黒色 (10YR2/1) 混じる。しまりの弱い土。
- ⑤ 明褐色 (7.5YR5/8)。5 mm 大の礫を多く含む。しまりは弱い。②層との境は硬くしまる。
- ⑥ 暗褐色 (7.5YR5/8)。5 mm 大の礫をわずかに含む。粘性のない。しまりの弱い土。
- ⑦ 褐色 (7.5YR4/6)。5 mm 大の礫を多く含む。やや粘性はあるがしまりの弱い土。
- 4: 明褐色 (7.5YR5/8)。部分的に版築土層が確認できるが、大半は根による攪乱のため、分層不可。
- 5: 橙色 (7.5YR5/6)。5 mm 大の礫を若干含む。しまりのない土。
- 6: 明褐色 (7.5YR5/6)。土色が安定せず、しまりのない層。崩れた土層がブロック状に混じる。

地山

- 7: 橙色 (5YR6/6)。固くしまる岩盤風化土。

c - c' 断面土層

- 1: 表土。
- 2: a-a' 断面 2 層に同じ。

- 3: 黄褐色 (10YR3/4)。1 ~ 5 mm 大の礫、砂粒を含む。
- 4: ① 黄褐色 (10YR5/6)。1 ~ 5 mm 大の礫、砂粒を含む。粘性、しまり共に弱い。
- ② 暗褐色 (10YR3/4)。1 ~ 5 mm 大の礫、砂粒を多く含む。粘性、しまり共に弱い。
- ③ にぶい黄褐色 (10YR5/4)。1 ~ 7 mm 大の礫、砂粒を上層より多く含む。粘性、しまり共になし。
- 5: a-a' 断面 6 層に同じ。
- 6: 橙色 (7.5YR6/8)。岩盤風化土混じる。粘性はないが、若干しまりあり。土器片 (時期不明) 出土。
- 7: 橙色 (7.5YR7/6)。地山。岩盤風化土。

d - d' 断面土層

- 1: 表土。
- 2: a-a' 断面 2 層に同じ。
- 3: 褐色 (10YR4/6)。2 mm 大の礫を含む。粘性は低いが、ややしまりがある土。
- 4: 黄褐色 (10YR5/6)。3 mm 大の礫を含む。粘性、しまり共にややあり。
- 5: 明褐色 (10YR5/8)。3 mm 大の礫をわずかに含む。粘性はややあるが、しまりのない土。
- 6: 明褐色 (10YR5/6)。3 mm 大の礫を含む。

地山

- 7: 橙色 (7.5YR6/8)。岩盤風化土。
- 8: 明褐色 (10YR5/8)。
- 9: 黄褐色 (10YR5/6)。砂質土。
- 10: 明褐色 (10YR7/6)。砂質土。

図 3 - 4 H18 - 1 トレンチ平面および断面図

の高さのテラス状に整形されていた。テラスの段の落ち際のラインが列石推定線と平行であることから、このテラス部分は土塁の下部構造となる可能性が高い。このように考えると、列石はテラスの上か前面に、直接あるいは盛土をして据えられたと考えられる。しかし本トレンチでは、このことを検証できるような、元位置を保った列石は検出できなかった。そこで、H16 - 12 トレンチ C 区の南側の列石が残るトレンチ北壁土層 (a-a' 断面) を確認したところ、テラスの下の段に土塁崩落土 (5・6層) が堆積しており、その上に列石が乗っていることが観察できた。このことから、列石がテラス下段に直接置かれていた可能性はなくなった。また、この列石に北接する列石が一段高い所で検出されていることから、列石は本来テラス上段に据えられていた可能性が高い。しかし、テラスの規模や列石の据えられ方など、下部構造については、今回の調査では明らかにできなかった。

土 塁 約 10 cm の厚さの表土や、15 ~ 75 cm 程度堆積した土塁崩落土 (2 ~ 3 層) を除去したところ、硬くしまった層 (4 層) を検出し、当初は、この層が残存する土塁であるの可能性が高いと想定した。しかし、確認のために行った地山までの断割りの結果、4 層の下で土塁崩落土 (5 層) を検出したことから、4 層もまた土塁崩落土であることがわかり、トレンチ内には土塁が残存していないことが明らかとなった。なお、北壁 (実測図 a - a' 断面) の 6 層では、崩落した版築土塁がブロック状に混じることが確認された。

これらの点から、本トレンチ周辺で過去に大規模に土塁が崩落したことがうかがえるものの、崩落の時期や範囲などについては、不明である。

(2) H19 - 4 トレンチ (図 3 - 5・6)

本トレンチは、H18 - 1 トレンチのさらに西側に位置し、永納山中央の谷に最も近接する場所に設定した。トレンチは、谷に向かい下っていく急斜面が一旦平坦となる地形の変換点に位置し、西側は再び崖状に落ち込み、谷底に至る。谷底には永納山中央を流れる猿子川及び JR 予讃線の線路が南北に走る。

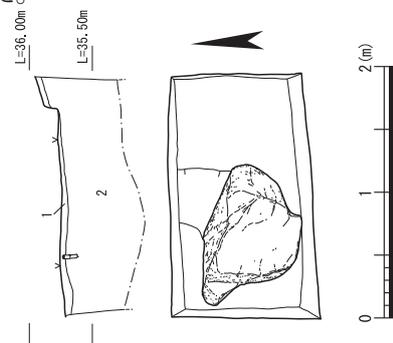
なお、トレンチ中央付近に井戸が設けられていたことから、この井戸をはさんでトレンチ北側を北区、南側を南区とした。

北 区

薄く堆積した表土 (1 層) を除去したところ、ガラス片や空缶などが多量に混入した層 (2 層) を確認した。2 層を掘り下げていくと、地表面からおおよそ 20 cm の深さのところ、長辺 1.1 m・短辺 0.8 m を測る大型の石を検出した。しかし、石の下にもなお 2 層が続いており、この石は元位置を保つものではなく、ガラス片等と一緒に投棄されたことが判明した。大きさから、この石は永納山城に関連する可能性が高いが、尾根斜面から転落した列石であるのか、あるいは谷部に存在したであろう水門に用いられた石であったのかは不明である。



写真 3 - 1 H19 - 4 トレンチ周辺の地形。
写真奥には JR 線路が見える。
(東から)



《H19 - 4 トレンチ北区層序》
1: 表土。
2: にぶい黄褐色 (10YR4/3)。砂、~5mm 大の礫を含むしまりのない土。ガラス片が非常に多く混じる。

図 3 - 5 H19 - 4 トレンチ北区
平面および断面図

南区

本区は、当初1×2mの規模で東西に長軸をとり設定したが、調査の進展に応じて南北及び東に拡張した。

表土下には崩落土が厚く堆積しており、その厚さはトレンチ全体を通じて1m前後であった。これらの崩落土を除去していく過程で、長さ約60cm・幅30cm(S1)の石を検出した。そこで引き続き慎重に崩落土を除去したところ、S1に接してさらに別の石(S3)が存在することが確認でき、これらの石が列状に並ぶ可能性がでてきた。また、この2石を境として、その東西で土の質が異なる状況も明らかとなった。石の東側(山側)では地山が検出されるのに対し、西側(谷側)では明らかに崩落土とは異なる強い粘性をもった土が面的に広がっていたのである。このような状況からトレンチを拡張し、調査を進めていった結果、粘質土層上面に数個の石と共に3基のピットを検出した。

そこで、トレンチ南端部を部分的に断割り、粘質土と地山との関係を調査した。その結果、地山の上に厚さ1m以上にわたって、粘質土や砂質土が細かく積み重ねられている状況を確認でき、これらが人工的に積み重ねられた造成土であることが明らかとなった。以下に、検出した遺構の説明を行う。

造成土(地業層) 谷に向かう地山の落ち込み部を埋めるように地業がなされている。地業層の厚さは、南壁断割り部分で確認した限りでは、1.2m以上におよぶ(南壁8層～19層)。また、地業は、粘質土(層によっては粘土と呼べるほど粘性の強いものもみられる)、砂質土を互層状に積み重ねることによってなされ、各層は4～30cm程度の厚みをもつ。これらの層は、東から西に向け若干傾斜しており、西側(谷側)が低くなり、下層になるほど厚みを持っていた。なお、地業層には、硬くしめる層も見られるものの、土塁のような堅固さはない。

列石 確実に元位置を保っているとは判断できる石は、トレンチ中央に並ぶ3石(S1～3)である。大きさは、最も大きいS1で、長辺60cm・短辺30cmを測る。これらの石の積み方・並び方をみると、S2がS1・3の下に位置していることから、これらの石が少なくとも二段に積み重ねられていたことがわかる。また、S1の長辺が南北方向を示すのに対し、S3は東西方向を示している。元位置を保つ石の数が少ないため、確実なことはいえないものの、ここに石の列の変換点が存在していた可能性も想定できる。なお、S1の北にはやや小振りの礫が散在しており、これらの一部は本来、S1～3とともに一列に並んでいた可能性もある。

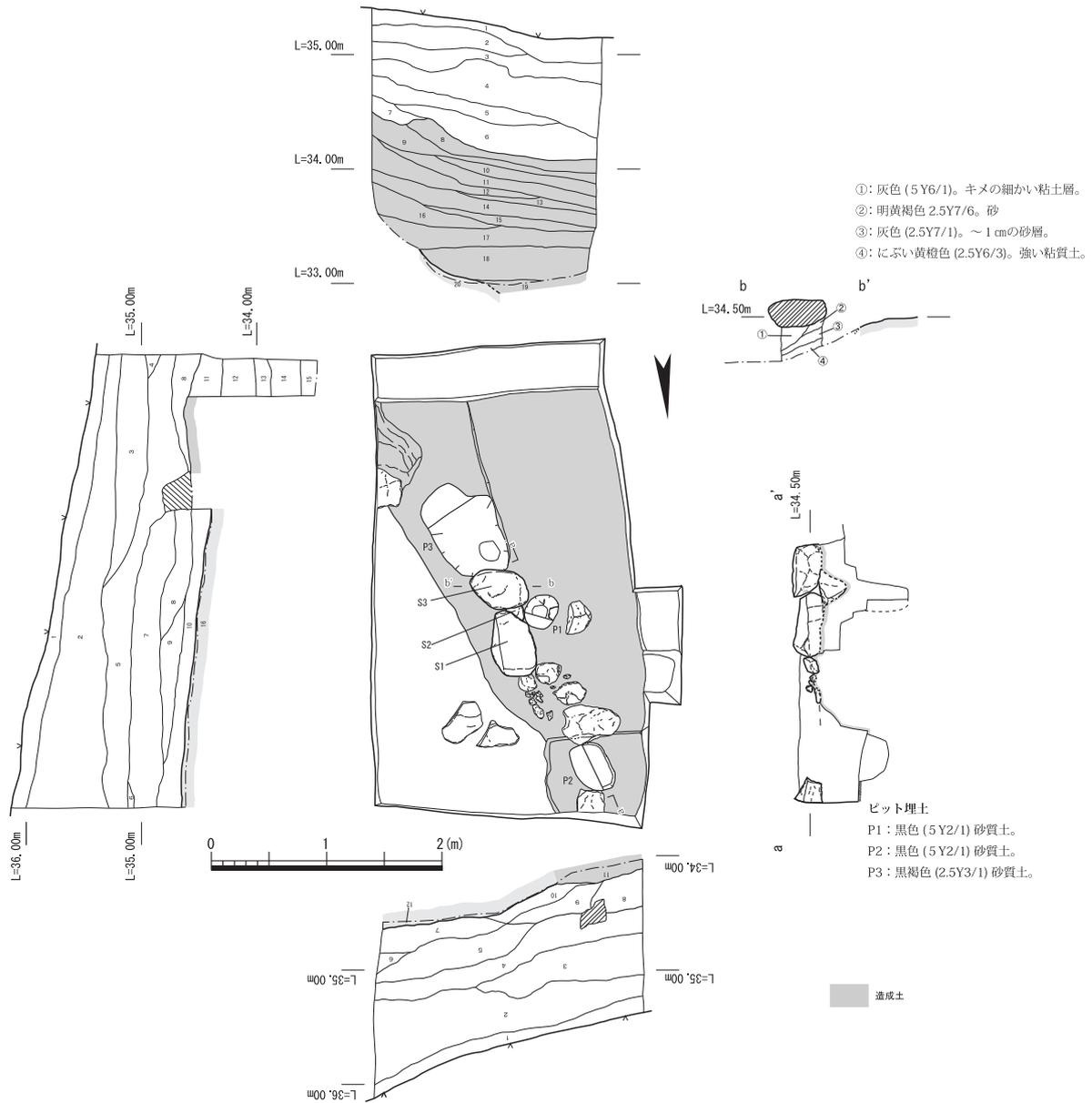
ピット 地業面を掘り込むように大小3基のピット(P1～3)を検出した。

P1 列石の西側に位置し、列石にほぼ接する。直径は30cm、深さは現状で約43cmを測る。柱痕は確認できないが、列石との位置関係から、柱穴の可能性が高い。埋土は、しまりのない黒色土であり、地業層の粘質土、砂質土とは明確に質が異なっていた。また、壁際に10cm前後の礫を検出したが、これらは地業層に潜り込んでいることから、柱穴に関連するものというより、地業段階に混じり込んだものである可能性が高い。

P2 トレンチ北端付近に位置し、30×44cmの楕円形を呈する。P1に比べやや大きく、P1との関係は不明である。埋土は黒色砂質土の単層であり、柱痕は確認できなかった。

P3 P1の南に位置する。54×90cmの不整形円形を呈し、ピットというよりもむしろ、土坑のようなものと考えられる。しかし出土遺物はなく、遺構の性格は不明である。

遺構の性格 以上のように、谷に並行する列石やその前面の柱穴、厚さ1m以上に及ぶ地業層の存在



《H19 - 4 トレンチ南区層序》

<北壁>

- 1: 表土。
- 2: 崩落土。褐色 (10YR4/4)。～5mmの礫が混じる粗い土。
- 3: 灰白色 (10YR8/1) 硬化土。水道管理施設に伴う土。
- 4: 崩落土。黄褐色 (10YR5/6)。水道管理施設以前に崩落した土。
- 5: 崩落土。褐色 (10YR4/6)。4層に比べ、粗い。
- 6: 崩落土。
- 7: 崩落土。明黄褐色 (2.5Y6/8) 砂質土。
- 8: 灰白色 (10YR7/1) 粘質土層。北壁で確認できる地業層の最上層の可能性が高い。
- 9: 赤褐色 (5YR4/8) 砂質土。硬くしまるが、粘りはない。
- 10: 褐色 (7.5YR5/4)。砂混じりの粘質土。
- 11: にぶい黄橙色 (2.5Y6/3)。粘質土。平面で検出している地業面に対応。
- 12: 地山。黄褐色 (7.5Y7/8)。砂質土。

<東壁>

- 1: 表土。
 - 2: 北壁2層に対応。
 - 3: 崩落土。
 - 4: 造成土。北壁3層に対応。
 - 5: 北壁4層に対応。
 - 6: 北壁5層に対応。
 - 7: 北壁6層に対応。
 - 8: にぶい黄色 (2.5Y6/4)。きめの細かい砂質土。
 - 9: 褐色 (7.5YR5/4) 土。砂混じりの粘質土。
 - 10: 北壁7層に対応。
- 造成土
- 11: 灰白色 (2.5YR8/1)。砂層。
 - 12: 黒色 (5Y2/1)。～5mm程度の砂混じりの粘質土。
 - 13: 灰色 (5Y6/1)。キメの細かい粘土層。
 - 14: 灰色 (2.5Y7/1)。～1cmの砂層。硬くしまる。
 - 15: 灰白色 (2.5Y8/2)。粘質土。～5cmの礫混じる。
- 地山
- 16: 北壁12層に対応。

<南壁>

- 1: 東壁1層に対応。
 - 2: 東壁2層に対応。
 - 3: 東壁3層に対応。
 - 4: 東壁4層に対応。
 - 5: 東壁5層に対応。
 - 6: 橙色 (7.5YR6/8) 砂層。
 - 7: 東壁8層に対応。
- 造成土
- 8: にぶい黄橙色 (2.5Y6/3) 強い粘質土。～5mmの礫がわずかに混じる。
 - 9: 東壁11層に対応。
 - 10: 黄灰色 (2.5Y4/1) 砂質土に若干粘土が混じる。
 - 11: 灰オリーブ (5Y5/2) 強い粘質土。わずかに砂が混じる。
 - 12: 東壁12層に対応。
 - 13: オリーブ黒色 (5Y2/2) キメの細かい砂質土。硬くしまる。
 - 14: 東壁13層に対応。
 - 15: 暗灰黄色 (2.5Y4/2)。～5mm砂混じる粘質土。硬くしまる。
 - 16: 東壁14層に対応。
 - 17: 東壁15層に対応。
 - 18: にぶい黄色 (2.5Y6/4)。～1cm程度の砂層。硬くしまる。
 - 19: オリーブ黒色 (5Y2/2) 粘質土。
 - 20: 明黄褐色 (2.5Y6/8)。
- 地山
- 20: 明黄褐色 (2.5Y6/8)。

図3 - 6 H19 - 4 トレンチ南区平面および断面図

から、この遺構が単なる城壁構造とは考えがたい。そこで、遺構の立地環境や他の古代山城の例を参考にすると、水門の横に付随する城門の痕跡である可能性が最も高いと判断できる（第4章 まとめ参照）。このように理解すると、列石は城門東壁の基礎部分であり、地業はここに門を構築するためになされたものと考えられる。そして西壁は、従来指摘されている水門と同様、旧国鉄の線路工事によってすでに破壊されているのであろう。しかし、残された情報が非常に少ないため、この城門が具体的にどのような構造であったのかは明らかにできなかった。また、問題も多々残されているが、東は急傾斜面、西はJR線路という立地環境上、危険を伴うことから、これ以上のトレンチ拡張は実施しなかった。

2 西部水門推定地の調査（図3-7）

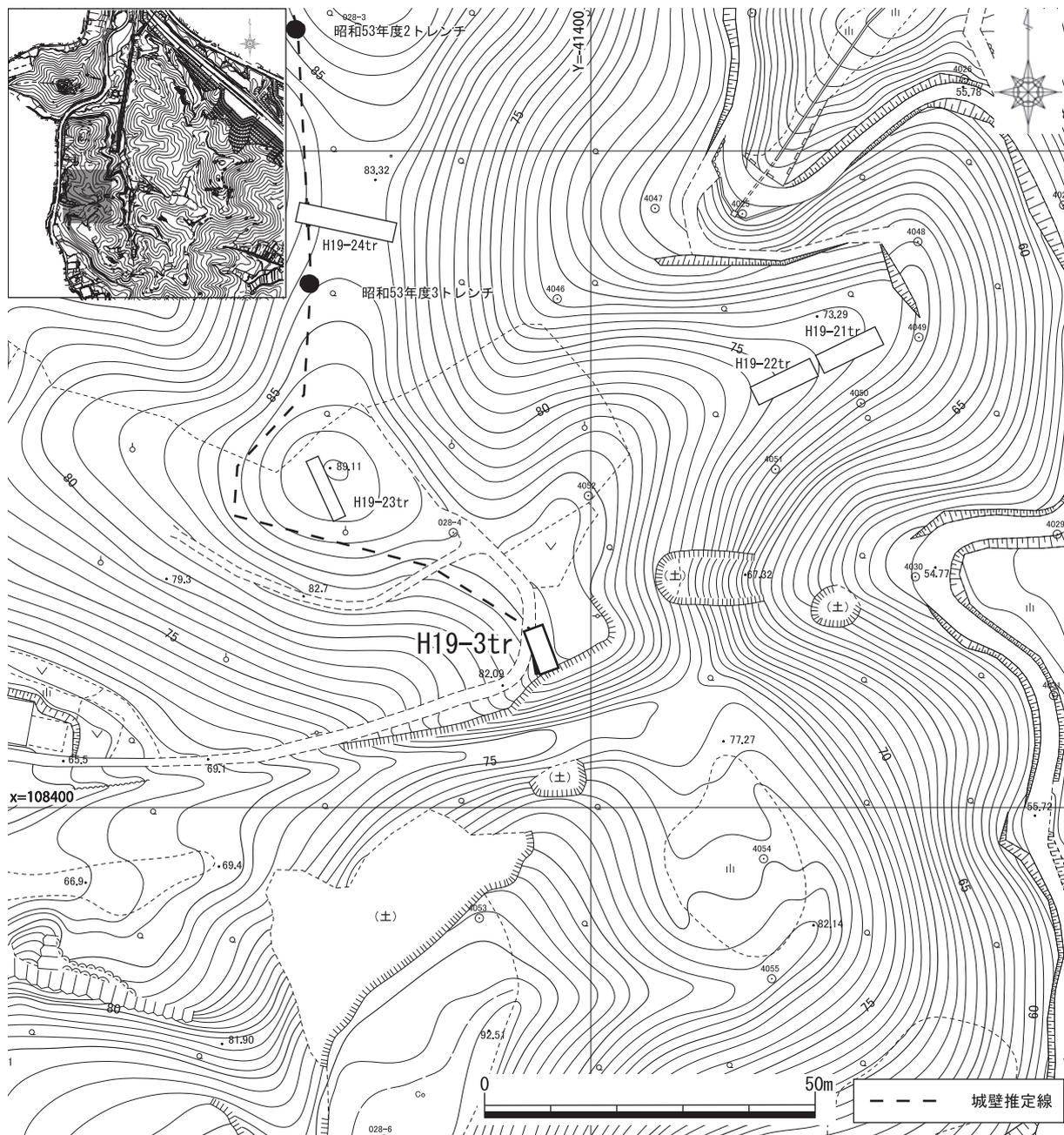


図3-7 H19-3トレンチ周辺地形図

西部の城壁外郭線は、現在その大半が地中に埋没しており、地表面から観察できる部分は限られている。今回、この西部城壁外郭線の推定ライン上にある東西に抜ける谷に接する場所に水門の存在を想定し、トレンチを設定した。



写真3-2 H19-3トレンチ内に横たわる列石（手前が作業道）

（1）H19-3トレンチ（図3-8）

トレンチは、南北7m×東西3mの規模で設定した。トレンチの北西部は果樹園に伴う作業道によって削平されており、トレンチ中央（作業道の南側）には、この作業道設置の際に動かされた列石を現在も露出した状態で確認できる（写真3-2）。トレンチ内には、表土（1層）が10cm前後の厚さで堆積しており、その下に崩落土と考えられるにぶい黄褐色土層（2層）が広がる。2層も表土同様に約10cm程度の厚みで堆積していた。

城壁構造 2層を除去した段階で、トレンチ全体に非常に硬くしまった土層を検出した。この段階で、作業道設置時に移動させられた石に連続していたであろう列石を2石確認できた。このうち右側の石は、大半が土層に覆われている状態であり、築城当初に列石が露出していなかったことを示しているものと理解できた。そこで、列石の延長と土層の構造を確認するために、土層の一部を断割ることとした。

その結果、土層検出面から約30cm掘り下げたところで、列石を2石確認し、その背後に裏込め状の石を検出した。また、この段階で、列石前面には盛土と理解できる硬化土（10層）が堆積しており、列石から35cm程離れたところに列石に比べやや小振りの礫を確認した。そこで、前面構造の把握を目的にこの硬化土を除去したところ、列石と礫の間でピット（P1）を1基検出した。

列石 断割り部での確認によると、列石背後には地山が続くことから、列石は地山を平坦に揃えた上に据えられたものと判断できる。背後の地山の状況をみると、地山は緩やかに傾斜しており、その延長が列石下に潜り込んでおり、列石を据えるための平坦面も、さほど大きく掘削したものではないと思われる。しかし、列石前面については、ピット検出面より下層の掘り下げを行わなかったため、列石前面の盛土の下には背後から地山が続くのか、あるいは列石を据えるために盛土によってテラスの造成が行われていたのかは確認できていない。

また、列石の大きさについては、断割り部で検出した列石が2石とも壁にかかっているため、全容ははっきりしないが、南側のもので奥行き57cmを測る。列石の加工については、さらに部分的な観察となるが、前面・上面ともに比較的平滑であり、切石ではないものの、面を意識して加工された可能性も考えられる。

裏込め状の石 これらの石は、これまでの例同様に、列石に比べやや小振りの粗割り石が用いられる。大きさ35～50cmのものが列石背後に並び、さらに20cm弱の小さなものがその周囲にみられる。

列石前面の構造 断割り部で確認したピット（P1）と礫は、ともに列石前面の盛土面で検出した。ピットは東西方向に長い楕円形を呈し、その大きさは長径36cm・短径30cmである。半裁した結果、埋土には、径10cm強の柱痕と考えられる層（①層）を確認した。このピットを柱穴と理解するならば、それに接するように置かれる礫は柱の補強の役割を果たしていた可能性も考えられるが、ピットと礫との直接的な関係は不明である。先述のようにピットは、断割りによって土層を除去した後に盛土面

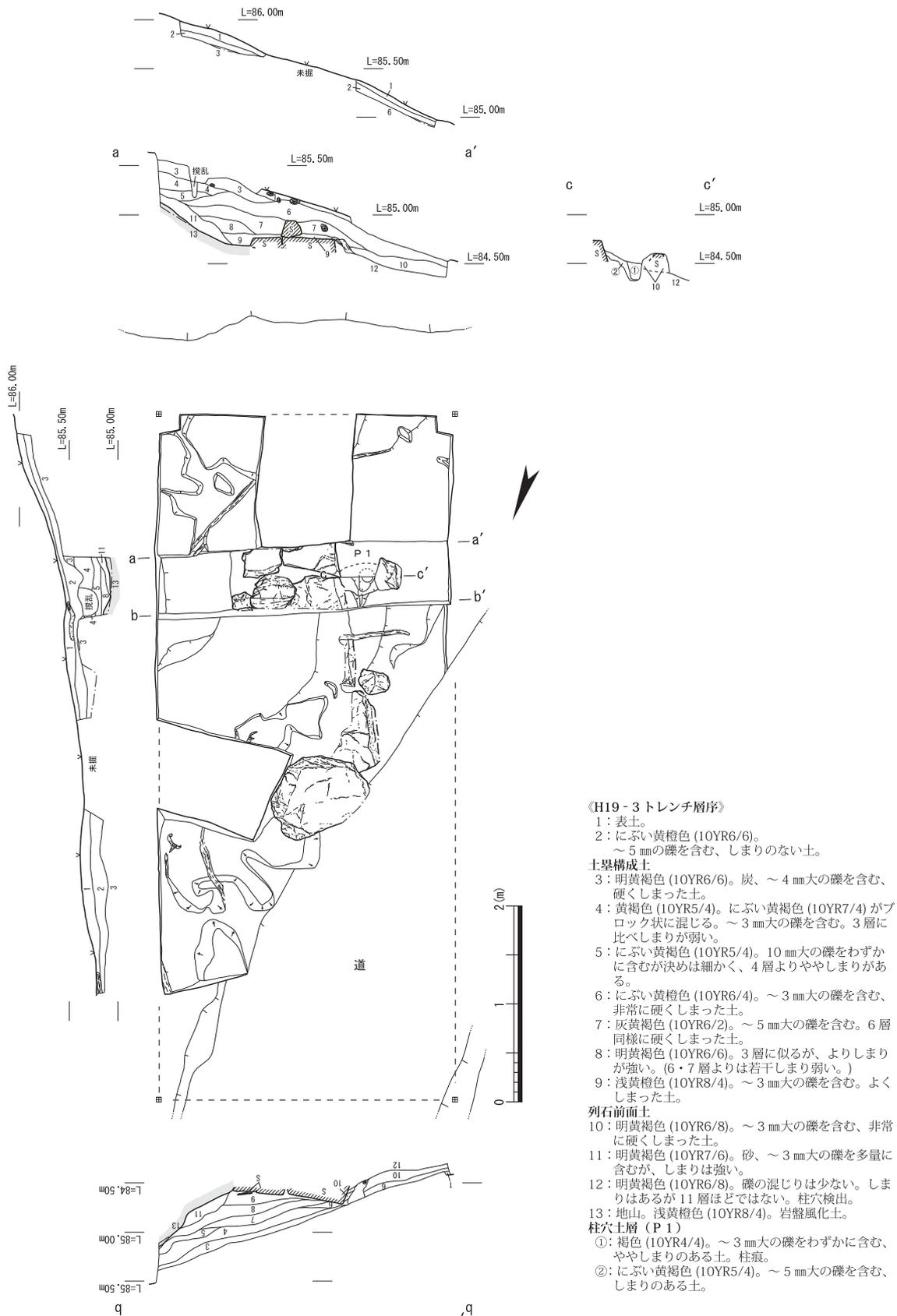


図3 - 8 H19 - 3 トレンチ平面および断面図

で確認した。さらに、土塁を検出した段階では、ピット、礫ともに確認できなかったことから、ピットに立てられていたであろう柱（杭）は、列石を据え置き、盛土を行った後に使用され、列石上部の土塁を積み上げる段階には除去されていた可能性が高い。

土 塁 断割りによって把握できた土塁は、どの層も硬くしまりはあるものの、積み方は後述するH19 - 24 トレンチや過去の調査例に比べ粗雑である。また、層ごとの土の違いも明確ではない。トレンチ内にある樹木の根による攪乱に起因する部分もあると思うが、この点を差し引いても全体的に粗い土が用いられている。また、断面確認においても、平面観察同様に土塁が列石を覆う状況を追認できた。しかし、トレンチ外まで土塁が続くため、列石前面の土塁の収束部分は把握できなかった。

以上のように、本トレンチは水門推定地として調査を実施したが、結果として、列石と土塁による城壁を確認し、水門に係する遺構は認められなかった。

第2節 城門推定地の調査

城門については、外郭線上の尾根鞍部に数カ所が推定されていたが、これまで本格的な調査はなされておらず、その所在は不明であった。今回は、地形的な特徴やこれまでの調査によって明らかとなった城壁外郭線との関係から調査地を決定した。なお、城門推定地として設定したトレンチは北東部に2カ所（H18-2・3トレンチ）、南東部に2カ所（H19-1・H20-1トレンチ）の4カ所である。

1 北東部城門推定地の調査（図3-9）

(1) H18-2トレンチ（図3-10・11）

本トレンチは、城門の存否の確認を目的に、平成16年度に調査したH16-8トレンチを拡幅して設定した。前回調査では、石積みと立石による城壁構造を確認し、立石の北西側は、幅約140cmの扁平な石とその北に続く列石、および列石の上に残る硬化土を検出した段階で掘り下げを停止していた。硬化土については、土塁の可能性が高いとしたものの、石積みと立石は、永納山城の城壁の中では特異な構造であり、全体的な評価については課題が残されていた。今回、この特異性から、城門の存在する可能性を想定した。

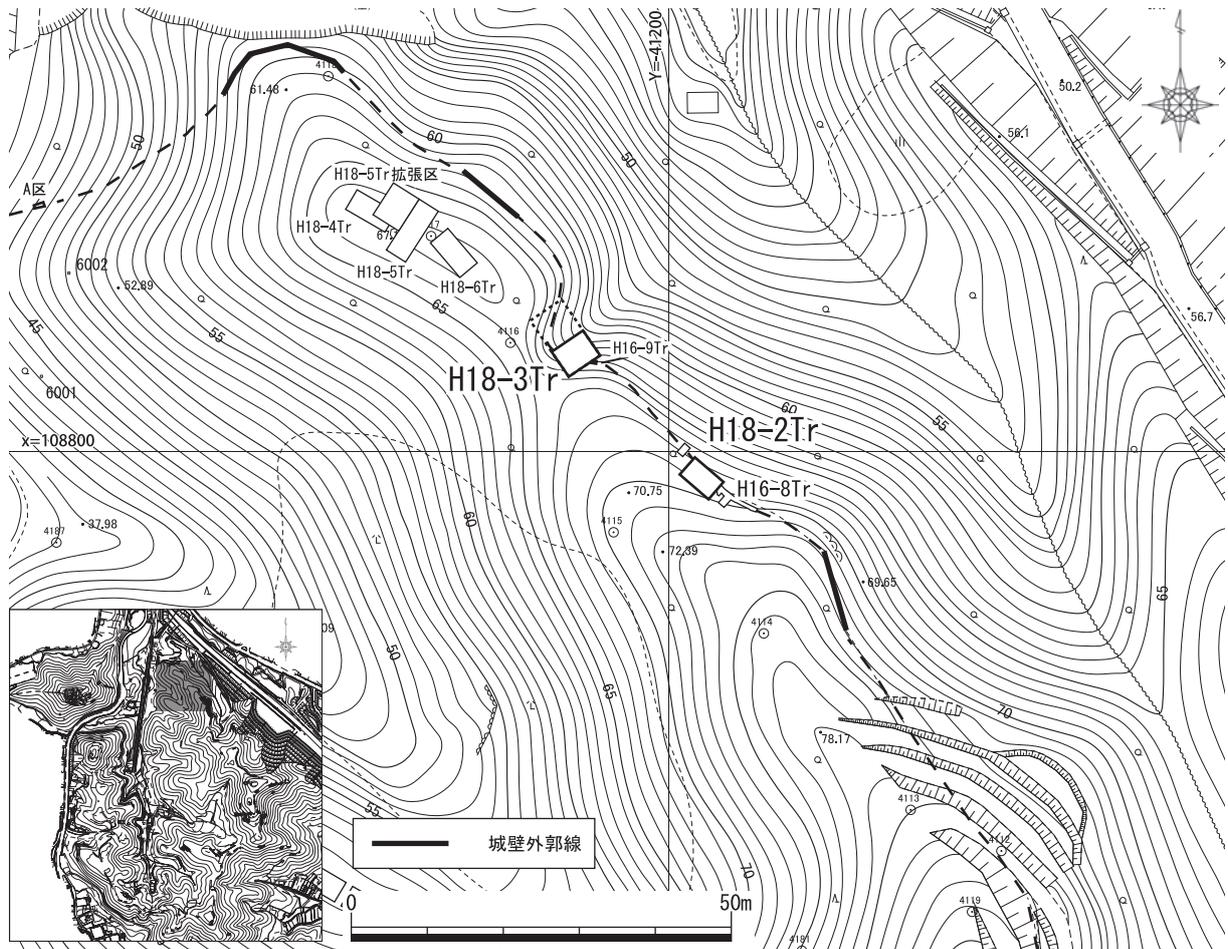


図3-9 北東部城門推定地周辺の地形図

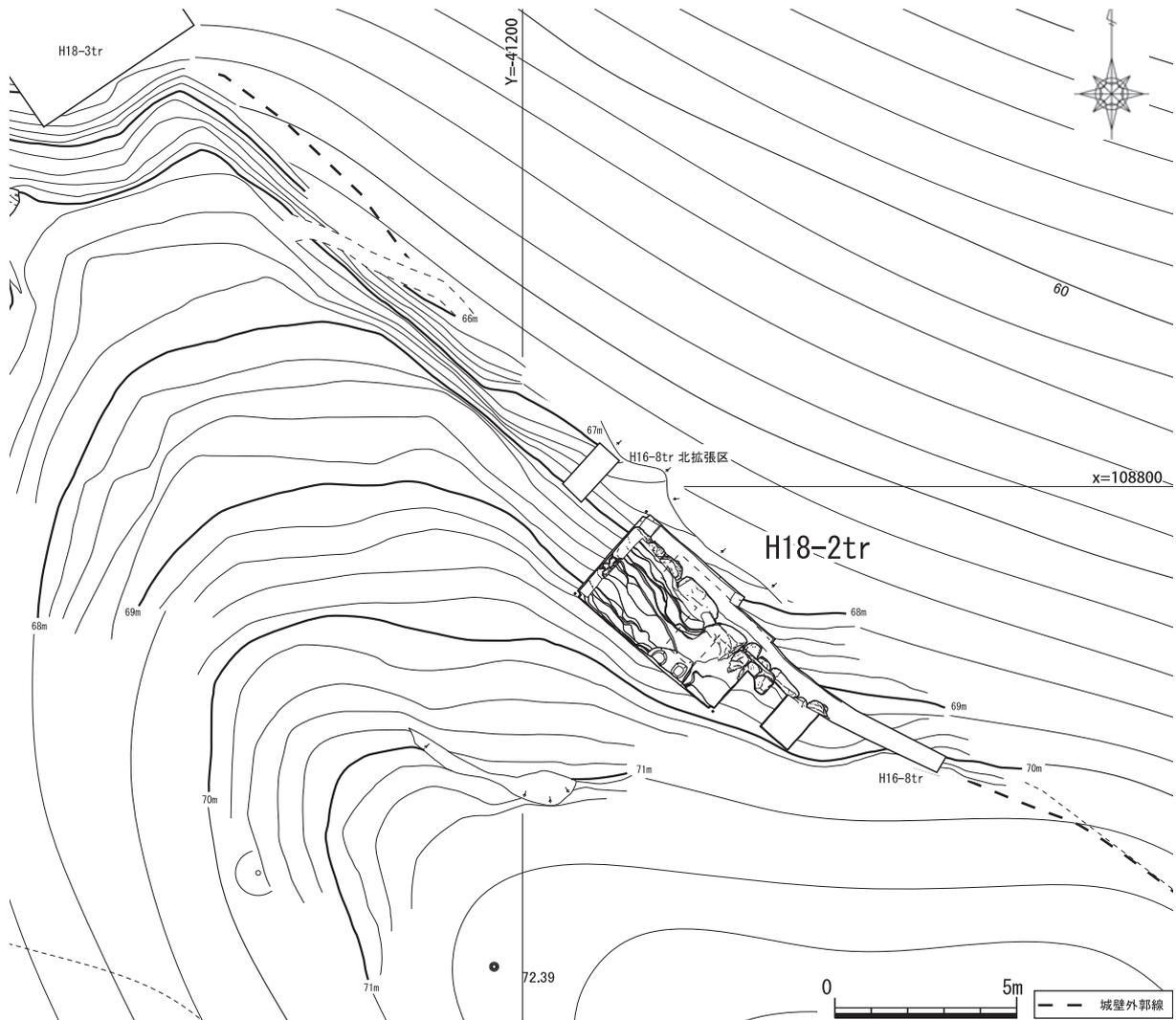


図3-10 H18-2 トレンチ周辺地形図

トレンチ設定後、表土を除去していったところ、前回調査時に検出した硬化土が全体に広がることを確認した。そこで、これらが土塁であるかどうかを明らかにするため、トレンチ北端を部分的に断割ることとした。その結果、この硬化土が土塁であり、良好な状態で残存していることが明らかとなるとともに、当箇所には城門が築かれていなかったことが判明した。以下では、調査によって明らかとなった城壁構造について説明する。

列石および下部構造 列石は、石積みおよび立石以北にすでに確認していたものを含め4石検出した。これらは、尾根の傾斜に沿うように南から北へ向け緩やかに傾斜するように配置されている。列石の石材は花崗岩で、粗く割っただけの石が用いられる。個々の列石を見ると、横幅は最大のもので幅140cmを測る。しかし、最小のものは幅30cm強であり、大きさに統一性はみられない。その他の数値については、断割り部で検出した列石を例にとると、厚さ48cm、奥行き108cmを測る。また、過去の調査によって確認されているもの同様に、奥行きを長くにとって石を据え置く構造であったことがわかる。また、列石の背後には裏込め状に置かれる礫を検出した。これらは、長さ20cm前後の小振りのもので、乱雑に置かれている。さて、次に列石と裏込め状の礫を据え置く下部構造については、調査当初は地山を整形したものと捉えていた。しかし、列石前面で列石の下に見られる土が、断割り

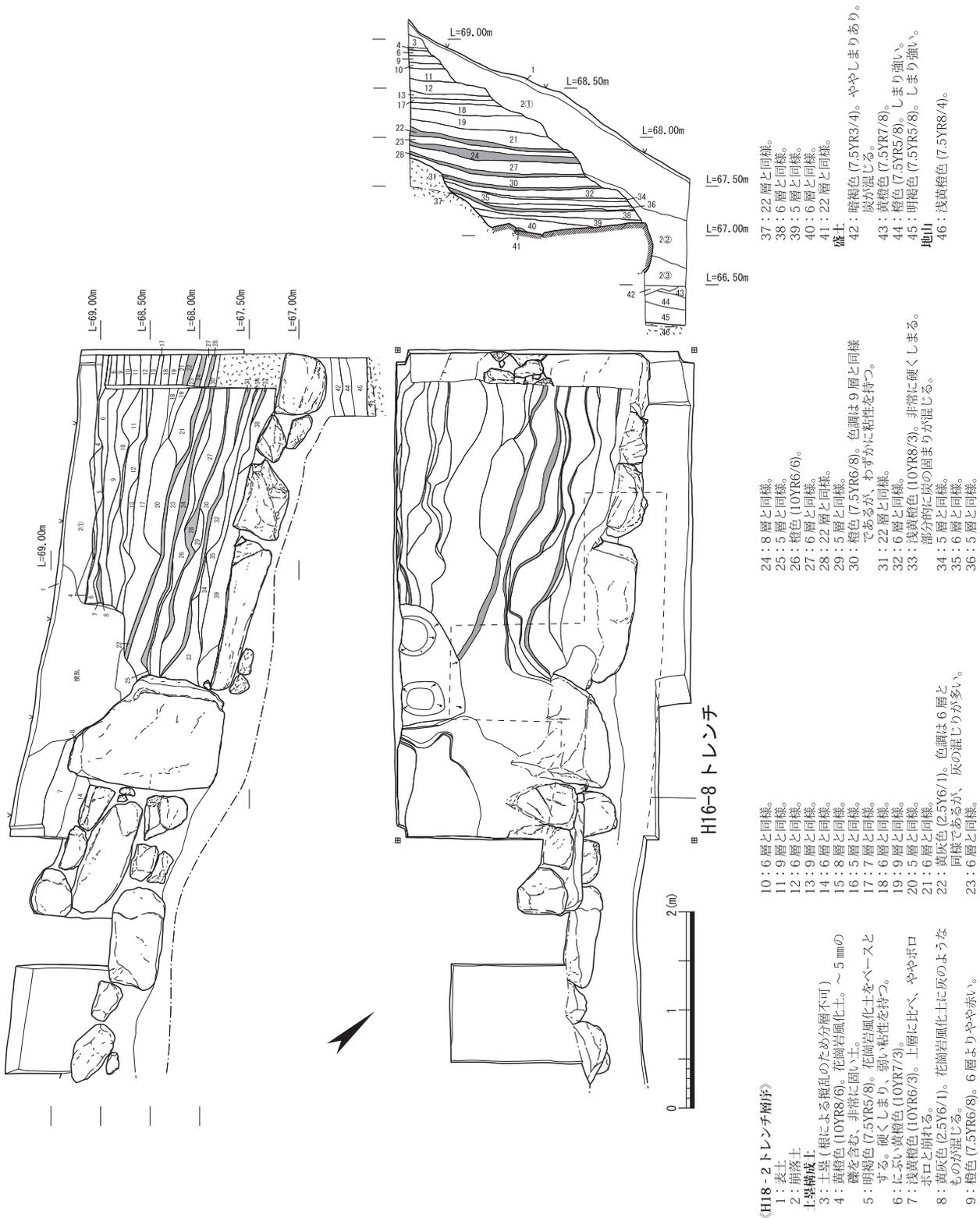


図3 - 11 H18 - 2 トレンチ平面・断面・立面図

によって列石背後で検出した地山の土に比べ柔らかく、質が異なることから、列石前面を一部掘り下げて断面による確認を行った。その結果、列石下端から約30cm下に地山を検出した。また、列石下端と地山との間には、土塁ほどの硬さはないものの、しまりの強い土がほぼ水平に堆積していた(42～45層)。これらが、列石を据えるための盛土であったと考えられる。

土 塁 土塁は、列石背後の地山が緩やかに立ち上がっていく状況から判断すると内托土塁であった可能性が高い。残存する土塁の厚さは、最も厚い奥壁部で約 140 cm、列石上面からの残存する最高部までの比高差は約 190 cmを測る。これに列石の高さを加えると、少なくとも 240 cm以上の高さで城壁が築かれていたと考えられる。土塁の土は、花崗岩風化土で構成され、城内側に向かってはほぼ水平に、正面からみると列石の傾斜に沿うように、斜めに積み上げられている。各層は非常に硬くつき固められ、特に残存する土塁の下半部は、黄灰色砂質土と橙色粘質土が厚さ 1～3 cm 程度と薄く積み重ねられる。

(3) H18 - 3 トレンチ (図 3 - 12)

本トレンチは、H18 - 2 トレンチの約 20m 北西、H18 - 4～6 トレンチ (後述) を配した平坦面のすぐ南に位置する尾根の鞍部に設定した (図 3 - 9)。鞍部の両端には、調査前から列石が露出しており、このうち南側については平成 16 年度の調査 (H16 - 9 トレンチ) で、列石の上に版築土塁が残存することを確認している。しかし、この鞍部自体では列石が途切れることから、城門の存在を想定してトレンチを設定した。トレンチの規模は、鞍部の幅や両端に残存する列石間の距離を元に、東西 5 m、南北 9 m とした。

まず、表土下の状況を把握するために、トレンチの南半分を調査した。厚さ 5～20 cm の表土と、10～60 cm 程度の厚さで堆積した土塁崩落土 (2 層) を除去したところ、約 30 度と急傾斜の岩盤を検出し、遺構は全く確認されなかった。このような岩盤の状況から、この鞍部は地すべりによる崩壊地形であると判断した。したがって、崩壊以前には列石が据えられ、土塁が築かれていた可能性が高い。

以上の結果を踏まえ、遺跡保護の観点から、北半分は掘り下げを行わなかった。

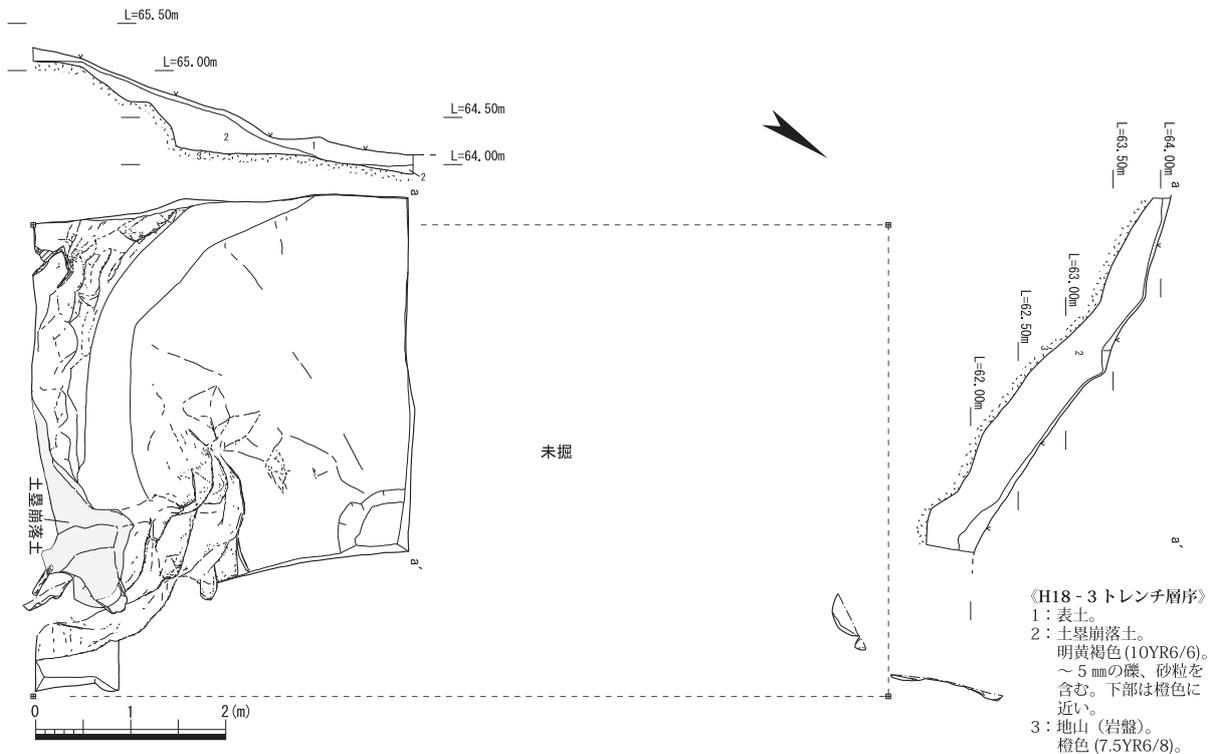


図 3 - 12 H18 - 3 トレンチ平面・断面・立面図

2 南東部城門推定地の調査（図3 - 13）

南東部城門推定地は、東部頂上から30mほど西に下った標高80m前後の尾根鞍部に位置し、燧灘に面する。この鞍部周辺では、城外側斜面で長さ15mの範囲に列石線を確認しており、南東部E地区として、平成15年度に地区の東端で城壁構造確認のための発掘調査を行っている（H15 - 16トレンチ）。この南東部E地区のうち鞍部の最も低い部分では、列石と土塁が長さ約5.7mにわたって途切れる箇所が存在していた。

永納山城が海を強く意識して造られた山城であり、中でもこの地点が最も海に面した尾根の鞍部である点や、途切れた部分の両サイドに比較的大きな列石が用いられている点などから、以前よりこの場所は城門である可能性が指摘されていた。そこで、城門の有無を確認する目的でH19 - 1トレンチを、さらに平成20年度には尾根内部にもH20 - 1トレンチを設定し、確認調査を実施した。

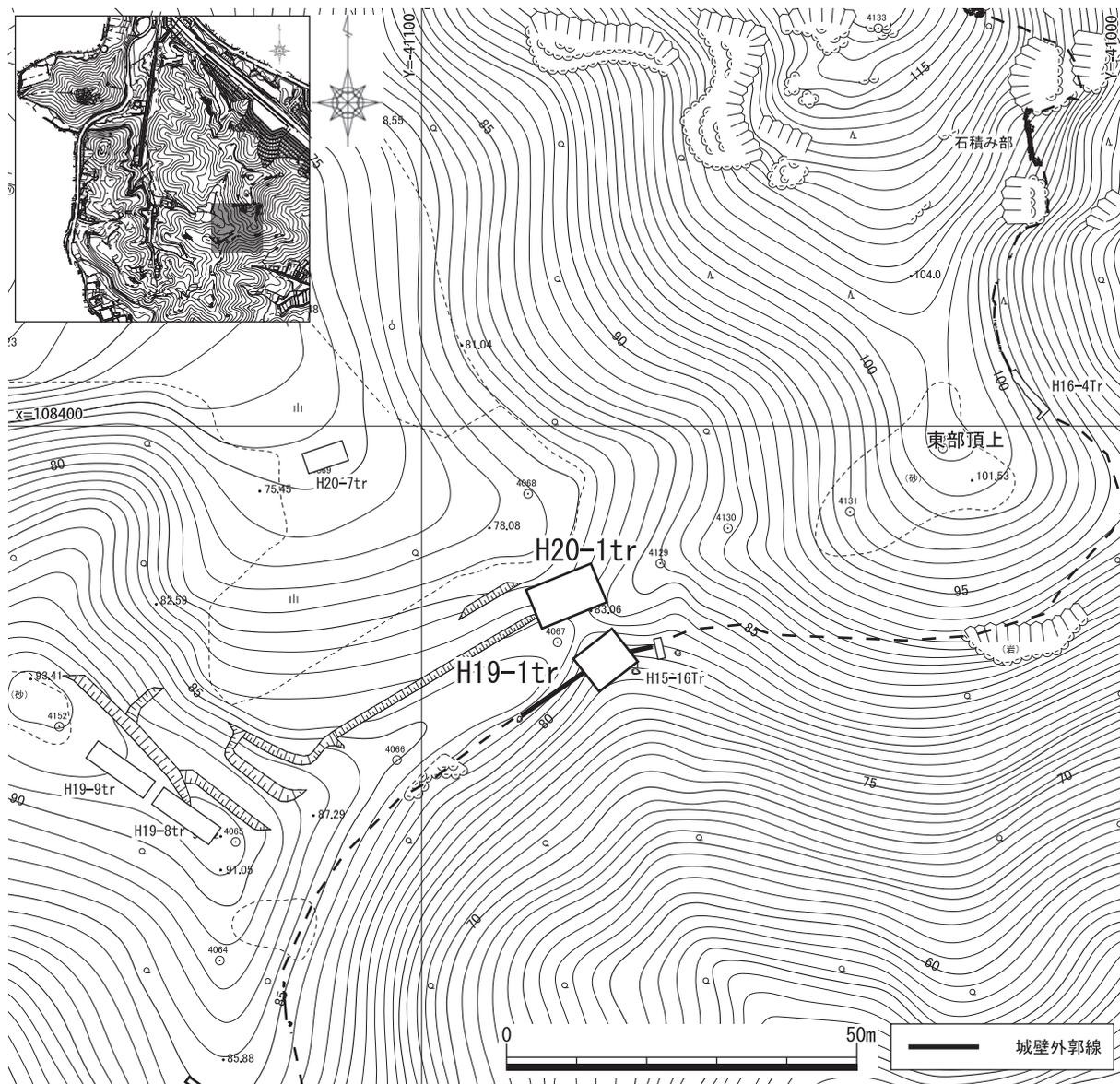


図3 - 13 南東部城門推定地周辺地形図

(1) H19 - 1 トレンチ (図3 - 14 ~ 17)

本トレンチは、列石の途切れている部分を中心に据え、その両サイドの列石が収まるように東西7m×南北6mで設定を行った。しかし、調査の進展に応じて拡張を行っていった結果、最終的には東西11m×南北10mの規模のトレンチとなった。

調査の結果、列石と土塁・下部構造に関する良好な所見を得ることができ、さらに列石線より一段低い場所で列石状に並んだ石を確認する等の成果があった。しかし、現段階でこの地点が確実に城門であると判断できる所見を得ることはできなかった。

城門推定地 (列石欠損部分) 表土(1層)、崩落土(2層)の堆積は薄く、地表から深さ10cm程度で地山を検出した。地山はトレンチ北側から急傾斜で南側(城外側)に落ち込み、そこには階段状の加工や、敷石などの城門に関連する遺構は見受けられなかった。また、土塁との境にあたる部分でも、門壁となるような石積みや柱穴などは確認できなかった。

列石 トレンチを西に拡張したことにより、調査前に確認していたトレンチ東側の列石やトレンチ西側の大きな列石に加えて、新たに4石の列石を確認した。これらの列石の法量は平均して幅40~70cm・厚さ20cm程度であるが、西側の列石の東端に位置する石は幅120cm・奥行130cm・厚さ50cmと他の列石に比べて非常に大きい。対する東側では拡張区も含め3石の列石を確認したが、これらは他の多くの列石と同様に小振りのものであった。しかし、トレンチ外にはトレンチの1m程東に、西側の大きな1石と同様の大きさの列石が2石露出している(写真3-3)。この2石は、西側に続く小振りの列石に比べて数10cm前方に位置する。この石の配置には、①大型の2石が前方にせり出してしまった可能性と、②小型の石の前に大型の石があり、小型の石は裏込め状の石であった可能性などが考えられる。この点については、斜面に転落した大型の石があることから、後者の可能性が高いと思われるが、現段階では正確な判断はできない。ただし、この尾根鞍部に他と比べ大型の石を用いているという事は間違いない事実であり、その特殊性は注目に値する。

下部構造 これらの列石は、いずれも地山に盛土を施した上に据えられている。トレンチ西側の列石下では、厚さ20cm前後の盛土が2層(A断面37・38層)確認できる。また、列石前面のテラス部分の状況を確認するために設定した西拡張区では、列石下から地山まで5層の盛土(D断面5~9層)



写真3 - 3 H19 - 1 トレンチ調査前の地形 列石の途切れる尾根中央が鞍状にくぼむ。○は大型の列石。1・2はほぼ元位置を保ち、3は転落したものと考えられる。

を確認した。現状では盛土上部は崩落しているため、列石前面のテラスの幅は不明であるが、盛土の幅が水平距離で列石前面から5m以上に及ぶことから、テラスはある程度の広さを有していたことが推測できる。

土 塁 トレンチ東西の壁沿いで土塁を確認する事ができたが、土塁の構造や残存状況には違いが見られた。まず、トレンチ西側の土塁(A・E・H断面)は、

現状で高さ約 2.8m・奥行約 7.2m を測り、版築工法で築かれている。版築層は 33 層確認でき、下層(12～36 層)と上層(4～11 層)で積み方に違いがみられる。下層では 5 cm 前後の薄い層を 2～4 層重ね、その間に 10～20 cm 程度のやや厚みのある層が入るのに対し、上層では 30 cm 前後の厚みのある層が、緩やかな傾斜で積み重ねられる。この傾斜の緩い上層部を断割ってみたところ、8～11 層までは地山の傾斜に沿うように堆積し、4～7 層ではほぼ水平に積み重ねられる。なお、この土塁は現在では踏み分け道となっている尾根頂部の最も高いところで収束し、尾根内側には及んでいないことが確認できた。

なお、この上層の土塁中には、1×1.5m 程度の範囲で集石を確認した。これらの石は拳大～60 cm 程度の大きさで、5～7 層(A 断面)にかけて検出した。これらの石が列状に並ぶ可能性を考え、トレンチ内外で確認を行ったが、この地点以外では検出できなかった。したがって、この集石が土塁構築時に混入したことは間違いないが、その目的は明らかにできなかった。

また、西拡張区では、列石前面に下部構造の盛土とは異なる硬化土が存在し、列石を覆っている場所も見られる。残存状況が悪く、確かなことはいえないが、列石を覆う土塁の痕跡の可能性もある。

一方で、トレンチ東側の土塁(C 断面)では、木の根による攪乱が激しく、残存状況が良好ではないものの、6 層の土塁構成土(4～9 層)を確認できた。しまりの強い層が水平に積まれていたが、いずれも層の厚さが 10 cm 以上と厚く、西側の土塁に比べると積み方は粗い。

前面の列石 土塁の基礎となる列石とは別に、トレンチの南側で列状に並んだ 5 つの石を確認した(前面列石)。これらの前面列石は、上の列石線から水平距離にして約 2.5m 南(城外)側に前面を揃えて一列に並び、約 2 m 低い地点に位置する。列石の大きさは、幅 20 cm 前後のものから 70 cm 前後のものまであり、統一性はみられない。また、5 石に続く石は確認できなかった。

これらの列石は、前面のラインがそろっていることや人工的に積まれたと考えられる層(F・G 断面 4～6 層)の上にあることから、意図的に配置された可能性が高い。しかし、永納山城に伴うと判断できる所見を得ることはできなかった。

(2) H20 - 1 トレンチ (図 3 - 18)

本トレンチは、H19-1 トレンチの調査結果を受け、尾根内側斜面の状況を確認する目的で設定した。

調査の結果、表土下には崩落土層が厚いところで 80 cm、薄いところでは 10 cm 程度の厚さで堆積していたが、これらを除去するとトレンチ全体に地山を検出し、石積みや土壁、柱穴といった城門に関連する遺構は確認できなかった。また、尾根斜面であるため、地山は城内側に向け傾斜して下っていくが、地山にも明確に永納山城に伴うと考えられる遺構は検出されなかった。

なお、トレンチ中央で上下に平行して走る横幅約 7.2m と 4.5m の段を検出した。テラスは幅約 80 cm であり、水平ではなく尾根側から谷側に向け若干傾斜する。時期は不明である。トレンチ周辺には、戦後の開墾に伴う段の痕跡が現在も残っており、この段はこれらと一連のものである可能性も考えられる。しかし、若干方向性が異なることから、一概に開墾に伴うものとも断定はできない。これらの段が永納山城に伴うものであるのかどうかは判断できなかった。

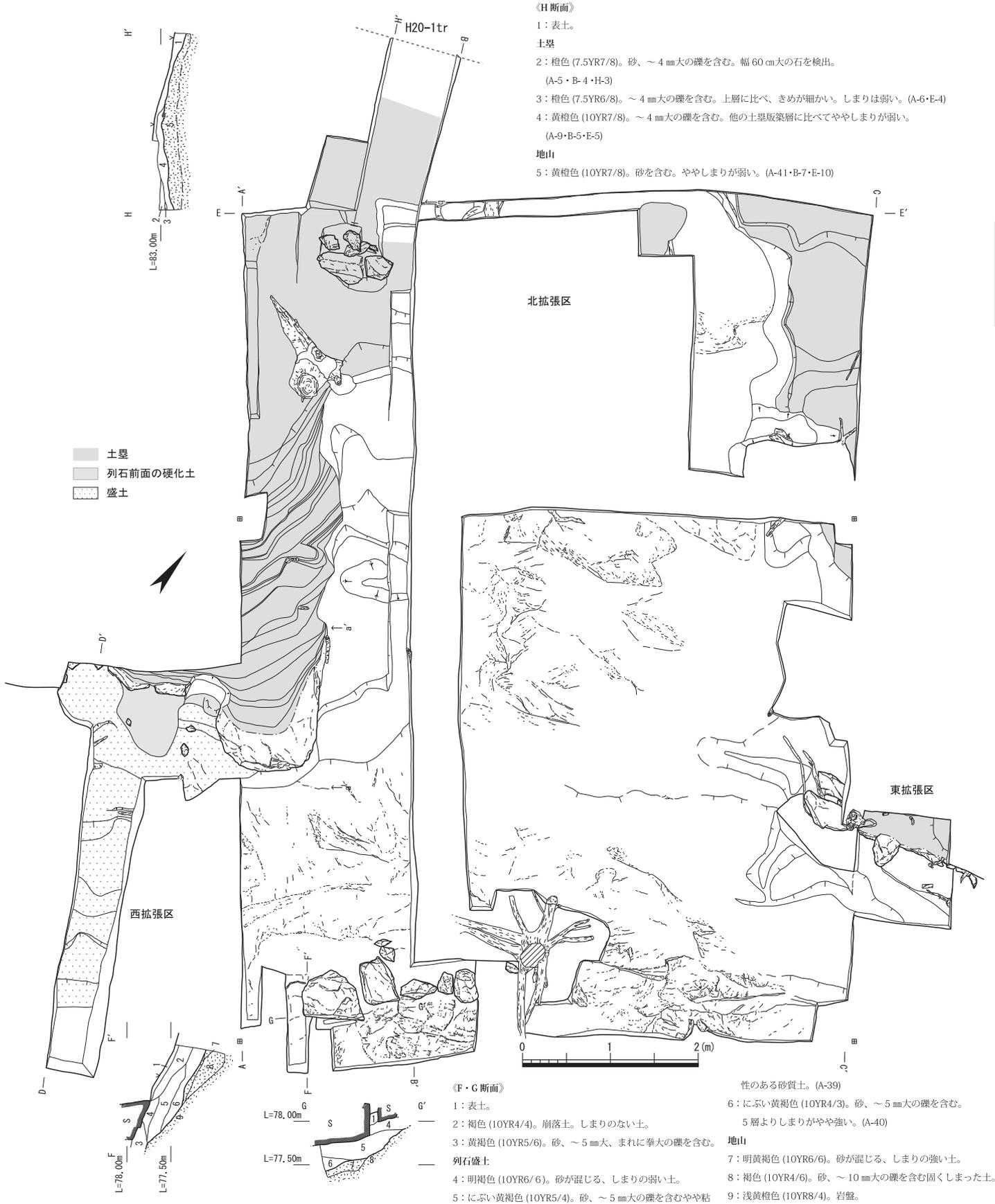
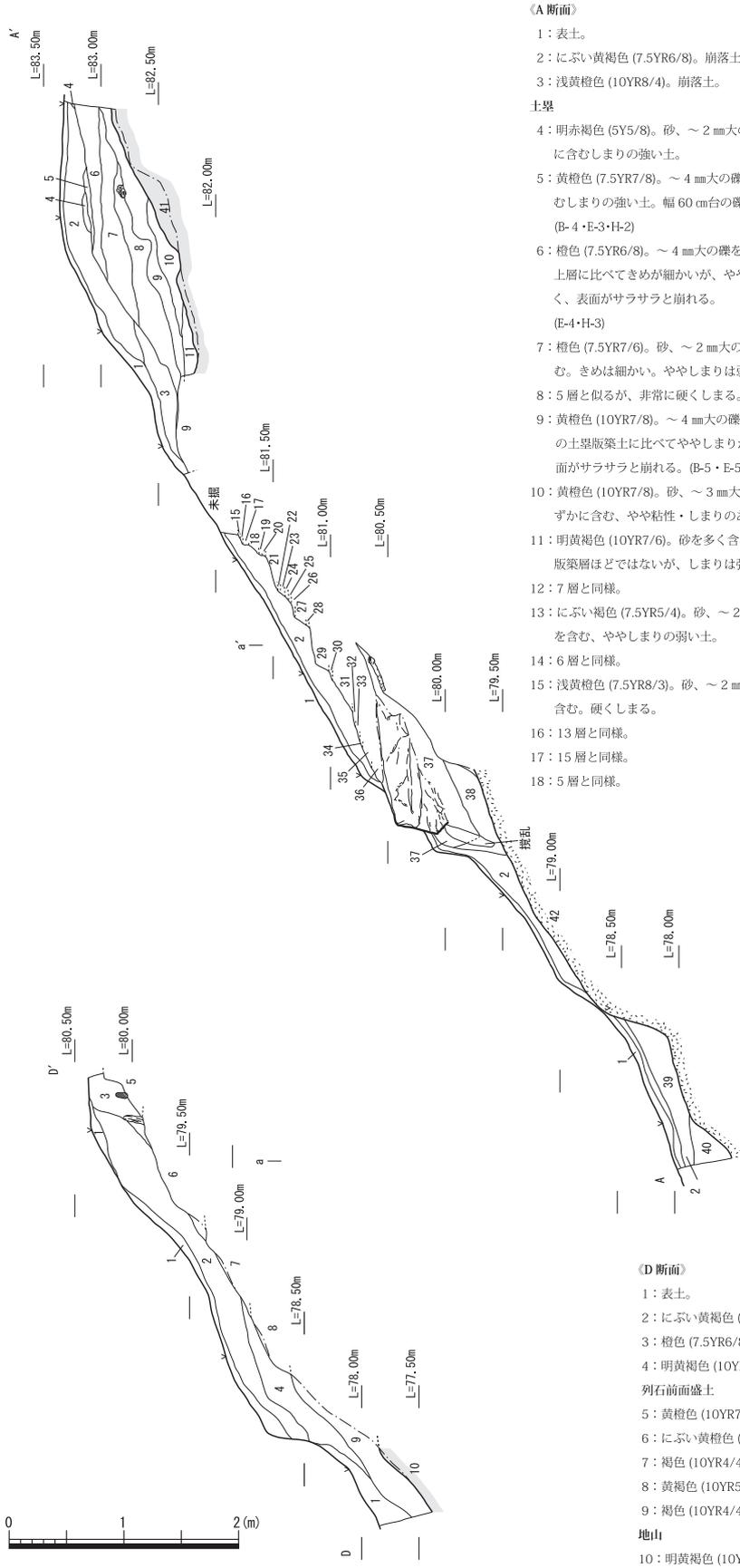


図 3 - 14 H19 - 1 トレンチ平面図および H 断面図



* 立面図の土層番号はA断面に対応する。(立面図は平成20年度調査の断前前の状況)

図3-15 H19-1トレンチ立面図およびE断面図



《A断面》

- 1：表土。
- 2：にぶい黄褐色(7.5YR6/8)。崩落土。
- 3：黄褐色(10YR8/4)。崩落土。
- 土塁
- 4：明赤褐色(5Y5/8)。砂、～2mm大のをわずかに含むしまりの強い土。
- 5：黄褐色(7.5YR7/8)。～4mm大の礫、炭片を含むしまりの強い土。幅60cm台の礫を検出。(B-4・E-3・H-2)
- 6：橙色(7.5YR6/8)。～4mm大の礫を含む。上層に比べてきめ細かいが、ややしまりが弱く、表面がサラサラと崩れる。(E-4・H-3)
- 7：橙色(7.5YR7/6)。砂、～2mm大の礫を多く含む。きめは細かい。ややしまりは弱い。
- 8：5層と似るが、非常に硬くしまる。(E-4・H-3)
- 9：黄褐色(10YR7/8)。～4mm大の礫を含む。他の土塁版築土に比べてややしまりが弱く、表面がサラサラと崩れる。(B-5・E-5・H-4)
- 10：黄褐色(10YR7/8)。砂、～3mm大の礫をわずかに含む、やや粘性・しまりのある土。
- 11：明黄褐色(10YR7/6)。砂を多く含む、他の版築層ほどではないが、しまりは強い。
- 12：7層と同様。
- 13：にぶい黄褐色(7.5YR5/4)。砂、～2mm大の礫を含む、ややしまりの弱い土。
- 14：6層と同様。
- 15：浅黄褐色(7.5YR8/3)。砂、～2mm大の礫を含む。硬くしまる。
- 16：13層と同様。
- 17：15層と同様。
- 18：5層と同様。
- 19：明褐色(7.5YR5/6) 砂を含む。
- 20：7層と同様。
- 21：5層と同様。
- 22：4層と同様。
- 23：13層と似るが、炭を含み、しまりが強い。
- 24：4層と同様。
- 25：23層と同様。
- 26：5層と同様。
- 27：15層と同様。
- 28：5層と同様。
- 29：19層と同様。
- 30：7層と同様。
- 31：19層と同様。
- 32：7層と同様。
- 33：5層と同様。
- 34：19層と同様。
- 35：6層と似るが、よりしまりが強い。
- 36：5層と同様。
- 列石置土
- 37：にぶい黄褐色(10YR7/4)。きめ細かく、やや粘性あり。
- 38：黄褐色(10YR5/6)。～2mm大の礫を含む。しまり弱い。
- 39：にぶい黄褐色(10YR5/4)。砂、～5mm大の礫を含むやや粘性のある砂質土。(F・G-5)
- 40：にぶい黄褐色(10YR4/3)。砂、～5mm大の礫を含む。39層より、しまりがやや強い。(F・G-6)

地山

- 41：黄褐色(10YR7/8)。砂を含む。ややしまりが弱い。(B-7・E-10・H-5)
- 42：岩盤。浅黄褐色(10YR8/4)。

《D断面》

- 1：表土。
- 2：にぶい黄褐色(7.5YR6/4) 崩落土。～2mm大の礫を含むしまりのない土。
- 3：橙色(7.5YR6/8) 崩落土。砂、～2mm大の礫を少量含む、しまりなし。
- 4：明黄褐色(10YR6/6) しまりのない砂質土。
- 列石前面盛土
- 5：黄褐色(10YR7/8) やや粘性のある、しまりのある土。
- 6：にぶい黄褐色(10YR5/4) きめ細かくしまりのある土。
- 7：褐色(10YR4/4) 硬くしまった土。
- 8：黄褐色(10YR5/6) きめ細かくしまりはあるが、若干やわらかい土。
- 9：褐色(10YR4/4) ～3mm大の礫を少量含む粘性のある土。
- 地山
- 10：明黄褐色(10YR7/6)に橙色(7.5YR6/6)混じる。砂を若干含む、粘性のある土。

図3-16 H19-1 トレンチA・D断面図

第3章 調査の成果

《B断面》

- 1: 表土。
 - 2: にぶい黄褐色 (7.5YR6/8)。崩落土。しまりのない土。
 - 3: にぶい黄褐色 (10YR6/4)。砂、～5mm大の礫を含むしまりのない土。
- 土層**
- 4: 黄褐色 (7.5YR7/8)。砂、～4mm大の礫を含む。幅60cm台の礫が検出。
(A-5・E-3・H-2)
 - 5: 黄褐色 (10YR7/8)。～4mm大の礫を含む。他の土層版築土に比べてややしまりが弱く、表面がサラサラと崩れる。(A-9・E-5・H-4)

地山

- 6: 浅黄褐色 (10YR8/3)。～5mm大の礫を含むきめ細かい土。固くしまるが、表面は風化している。
- 7: 黄褐色 (10YR7/8)。～浅黄褐色 (10YR8/3) 砂を含む、ややしまりが弱い土。(A-41・E-10・H-5)
- 8: 黄褐色 (10YR7/8)。～5mm大の礫を含む土。固くしまるが、表面が剥離しやすい。
- 9: 明赤褐色 (5YR5/8)。岩盤。部分的に風化するがしまりは強い。
- 10: 浅黄褐色 (7.5YR8/3)。岩盤。部分的に風化する。
- 11: 明黄褐色 (10YR7/6)。岩盤風化土。
- 12: 浅黄褐色 (10YR8/4)。岩盤。部分的に風化する。

《C断面》

- 1: 表土。
 - 2: にぶい黄褐色 (7.5YR6/8)。崩落土。しまりのない土。
 - 3: 黄褐色 (10YR5/8)。～4mm大の礫を含む。根が多く、しまりが弱い土。
- 土層**
- 4: 黄褐色 (10YR5/6)。～5mm大の礫を含むややしまりのある土。
 - 5: 褐色 (10YR4/6)。～3mm大の礫を含む土。4層に比べしまりが強くなる。
(E-6)
 - 6: 明赤褐色 (5YR5/8)。～3mm大の礫を含むしまりの強い土。(E-7)
 - 7: 6層と同様。(同一層の可能性もあるが、比高差があるため分層している)
 - 8: 明黄褐色 (10YR6/8)。～3mm大の礫を含むしまりの強い土。
 - 9: 褐色 (10YR7/6)。土層構成土。ややしまりのある土。

地山

- 10: 浅黄褐色 (10YR8/4)。岩盤が露出する。

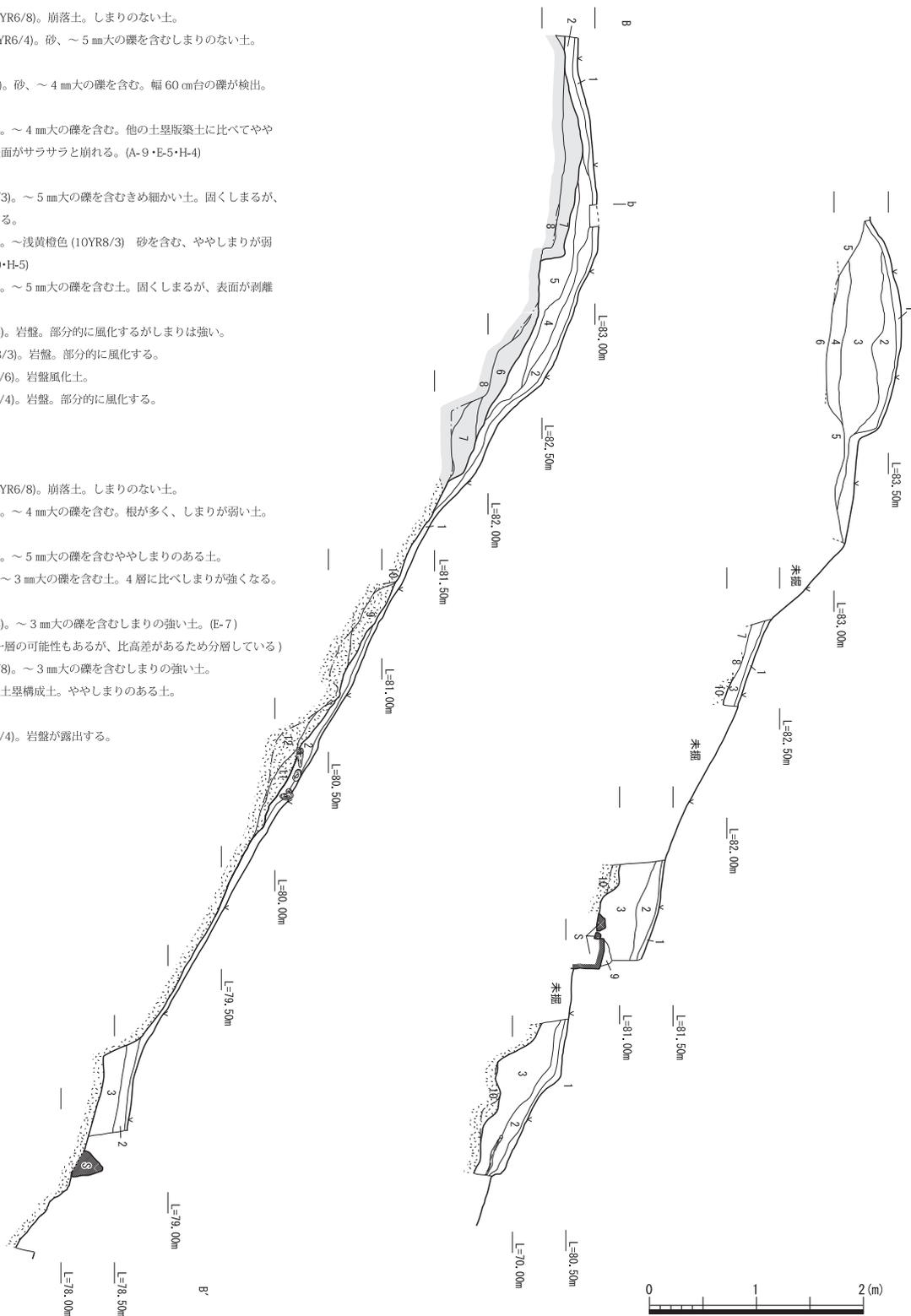


図3-17 H19 - B・C断面図



《H20 - 1 トレンチ層序》

- 1: 表土。腐葉土。
- 2: 暗灰黄色 (2.5Y5/2)。～2mm大の礫を多く含む。ぼろぼろ崩れ、キメが粗く、砂と細かい木の根が多く混じる土。南側に向かい、土が若干黒味を帯びる。
- 3: 黄褐色 (10YR5/8)。～2mm大の礫を多く含む。非常に硬くしまった土。
- 4: 明黄褐色 (10YR6/8)。～2mm大前後の礫をまばらに含む。3層より弱いが、しまりのある土。若干粘性がある。
- 5: 黄橙色 (10YR7/6)。～3mm大の礫を多少含む。若干粘性がある。しまりのない土。
- 6: 地山。明黄褐色 (10YR6/8)。
- 7: 岩盤。

図 3 - 18 H20 - 1 トレンチ平面および断面図

第3節 内部施設推定地の調査

永納山城跡では、内部施設に関してこれまで本格的な発掘調査は行われておらず、踏査等による礎石の確認例も全くなかった。したがって、広大な城内のどこに内部施設の存在を想定し、確認トレンチを設定すべきかが調査開始前の最大の検討課題であった。そこで、中央に大きな谷を抱き、まとまった平坦面をほとんど有さないという地形的特徴に加え、他の古代山城における建物跡の検出例を参考にして検討を行った結果、中央の谷に向かい八手状に伸びる尾根の平坦部に最も施設が存在する可能性が高いと判断した。次に谷低地部には、現在も民家が存在することから、ここも候補地として位置づけた。また谷低地部については、遺構に加え、遺物の集積している可能性も想定した。

さらに、場所は限定されるものの、南東部尾根筋から谷に向かい下る斜面にも比較的緩やかなで広範囲な傾斜部があり、ここにもトレンチを設定することとした。

1 北部から北東部の調査（図3 - 19）

1 - 1 H18 - 4 トレンチ～ H18 - 6 トレンチ概要

永納山の東側丘陵部の最北端に位置する尾根は、比較的広い平坦面を有しており、現在は樹木が生い茂り視界を遮っているが、本来は非常に見晴らしのよい場所である。さらに踏査の段階で平坦面には、長さ30cm程度の石が点在することを確認していた。これらの石の存在から、この平坦面に礎石を伴う施設が存在することを想定し、トレンチを設けて遺構の確認を行った。トレンチは3カ所設定し、北から順にH18 - 4・5・6トレンチとした。

(1) H18 - 4 トレンチ（図3 - 21）

本トレンチは、尾根に平行するかたちで6×3mの大きさに設定した。厚さ10～20cm程度で堆積する表土を除去すると、そのすぐ下で地山を検出した。地山面では、2つの掘り込みを確認した。1つは、トレンチの中央の幅130cm・深さ40cm程度の掘り込み、もう1つはトレンチ南側の幅40cm・深さ10cm程度の溝状の掘り込みである。前者は樹木の根による攪乱と考えられる。一方、後者は後述するH18 - 5・6トレンチで検出した溝と一連のものである。しかし、この溝では遺物が出土していないため、時期や永納山城との関連は不明である。

(2) H18 - 5 トレンチ・5 トレンチ拡張区（図3 - 20）

本トレンチは、尾根筋に直行するかたちで、8×3mの大きさに設定した。表土は全体に10cm程度と比較的薄く、これらを除去すると部分的に2層がみられるものの、ほぼトレンチ全体に地山が広がることを確認した。

地山面を精査したところ、9基のピット（P1～9）を確認した。ピットには、径20～50cm強のものまでみられるが、30cm程度のものが多い。現存の深さは、すべて20cm未満と全体的に浅く、埋土に柱跡の確認できるものはない。これらは、一見するとほぼ等間隔に南北に並んでいるかのような印象を受ける。しかし、それぞれのピットは、トレンチの壁際に位置するため、現状のトレンチ内

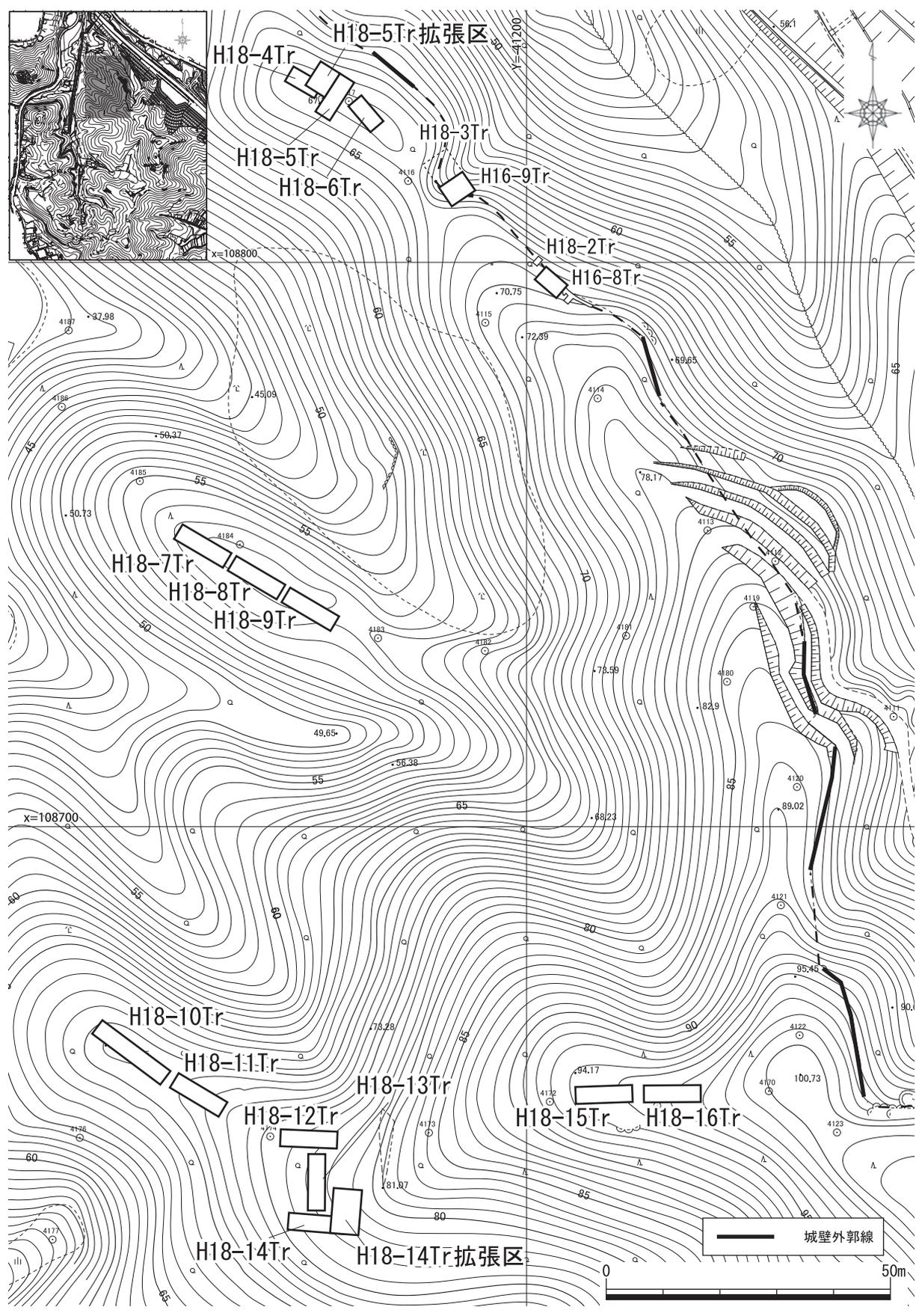
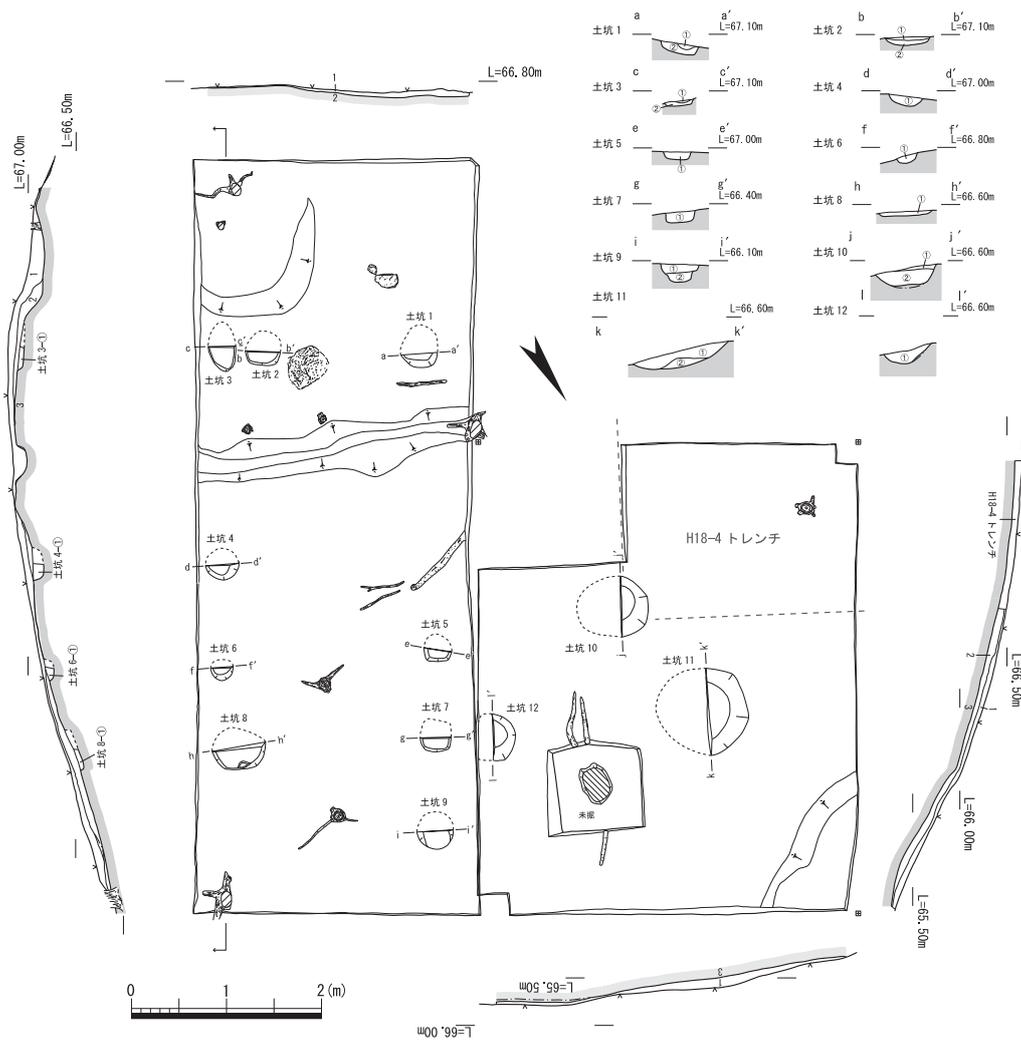


図 3 - 19 北東部内部施設確認トレンチ周辺地形図



《H18-5 トレンチ層序》

- 1: 表土。
- 2: にぶい黄褐色 (10YR5/4)。～5 mm大の礫を含む、しまりのない土。
- 3: 地山。岩盤風化土層。
- 土坑 1**
 - ①: 黒褐色 (10YR3/2)。4 mm大の礫をわずかに含む、しまりのない土。
 - ②: 黄褐色 (10YR6/8)。5 mm大の礫を多く含むしまりの弱い土。
- 土坑 2**
 - ①: 黒褐色 (10YR3/2)。3～4 mm大の礫を多く含む、しまりの弱い土。
 - ②: にぶい黄褐色 (10YR3/4)。わずかに砂粒が混じる、サラサラでしまりのない土。
- 土坑 3**
 - ①: 黒褐色 (10YR3/2)。2 mm大の礫を含む、しまりの弱い土。
 - ②: にぶい黄褐色 (10YR6/4)。きめ細かく、しまりのない土。
- 土坑 4**
 - ①: 黄褐色 (10YR5/6)。～5 mm大の礫を多く含む、しまりの弱い土。根が多く上面近くで炭を検出。
- 土坑 5**
 - ①: にぶい黄褐色 (10YR4/3)。～3 mm大の礫を含む、きめ細かくしまりの弱い土。
- 土坑 6**
 - ①: にぶい黄褐色 (10YR4/3)。～3 mm大の礫を含む、しまりの弱い土。

- 土坑 7**
 - ①: 黒褐色 (10YR3/2)。きめ細かく、しまりの弱い土。
- 土坑 8**
 - ①: 黒褐色 (10YR3/2)。～4 mm大の砂や礫を含む、きめ細かくしまりの弱い土。
- 土坑 9**
 - ①: 褐色 (10YR4/4)。～3 mm大の礫、砂粒を若干含む、きめ細かくサラサラのしまりの弱い土。
 - ②: 明黄褐色 (10YR6/6)。～6 mm大の礫を多く含む、サラサラでしまりの弱い土。
- 土坑 10**
 - ①: 暗褐色 (10YR3/4)。砂、3 mm大の礫を多く含む、しまりがある土。
 - ②: 褐色 (10YR4/4)。砂、2 mm大の礫を含む。①層に比べてしまりが弱い。
- 土坑 11**
 - ①: 暗褐色 (10YR3/4)。P5-10①層と同様。
 - ②: 黄褐色 (10YR5/6)。～10 mm大の礫含むしまりのある土。
- 土坑 12**
 - ①: 褐色 (10YR4/4)。～10 mm大の礫を含むしまりがなく、ぼろぼろ崩れる土。根による攪乱か。

図3-20 H18-5 トレンチ・5 トレンチ拡張区平面および断面図

で完結するのかわを確認する必要が生じた。そこで、トレンチを西側に拡張し、平成19年度に拡張区として調査を実施した。その結果、新たにピットが3基検出されたものの、それらに規則性はみとめられなかった。したがって、すでに検出していたピットと拡張区のピットは、一連のものである可能性は低い。また、今回検出したこれらのピットからは、遺物は全く出土していないため、遺構の時期は不明である。

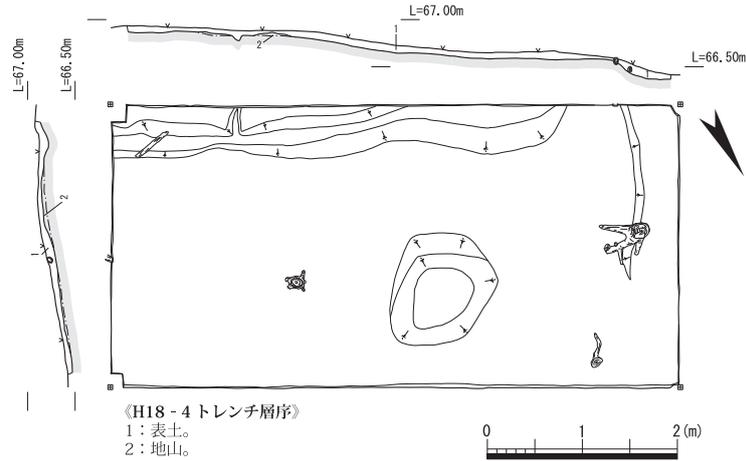


図 3 - 21 H18 - 4 トレンチ平面および断面図

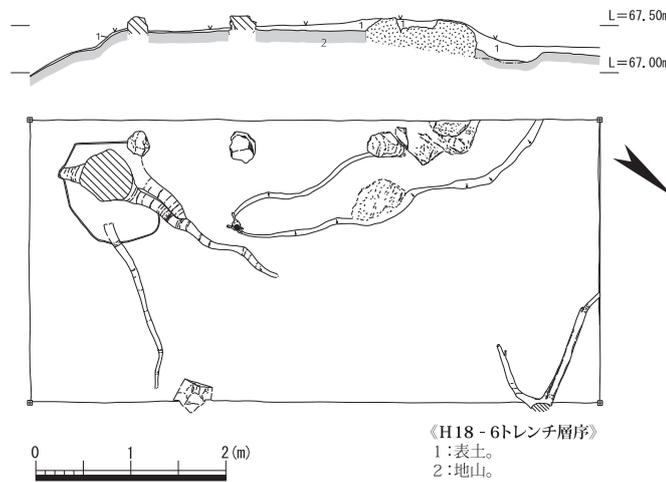


図 3 - 22 H18 - 6 トレンチ平面および断面図

(3) H18 - 6 トレンチ (図 3 - 22)

トレンチ内には表土 (1 層) が 5 ~ 10 cm 程度の厚さで堆積しており、これらを除去するとトレンチ全体に地山が現れ、明確な遺構は確認できなかった。なお、踏査段階で確認していた石は、岩盤の一部が露出したものや地山面から浮いた状態で現在地に留まっていたものであり、遺構に関連する石でないことが明らかとなった。

また、トレンチ西半には幅 70 cm、深さ 15 cm 程度の溝状の掘り込みを確認した。この溝は H18-4・5 トレンチで検出したものと一連のものと考えられる。しかし、他のトレンチ同様に時期や性格は不明である。

1 - 2 H18 - 7 トレンチ ~ H18 - 9 トレンチ概要

H18 - 6 トレンチの約 90m 南には、中央の谷に向かって南東 - 北西方向に伸びる尾根が存在する。この尾根は標高約 59m で、平坦面の広さは今回調査した中でも比較的広い部類に入る。この平坦面に遺構の存在を想定して、平坦面の中心軸と平行に東西 10m、南北 3m のトレンチを、1m 間隔で 3カ所設定した。山側から谷に向かって、H18 - 7・8・9 トレンチの順である。

(1) H18 - 7 トレンチ (図3 - 23)

設定した3カ所のトレンチのうち、最も山側に位置するトレンチである。厚さ5～10cmの表土の下には、岩盤風化土(2・3層)が30～40cmとやや厚く堆積し、それらを除去したところ地山を検出した。しかし、地山検出面は樹木や竹の根などの攪乱による凹凸が激しく、遺構は確認できなかった。

(2) H18 - 8 トレンチ (図3 - 24)

3カ所のトレンチの中央で、ちょうど平坦部の中央にも位置するトレンチである。表土、岩盤風化土(2層)を除去したところ地山を検出した。本トレンチでも、攪乱による掘り込みを検出したのみで、遺構は確認できなかった。なお、1・2層除去中にトレンチ中央北壁沿いで、長さ約70cmと30cmの石を検出し、遺構に関連することも期待されたが、地山まで掘り下げた結果、これらの石は岩盤から割れて分離したものであることが判明した。

(3) H18 - 9 トレンチ (図3 - 25)

H18 - 9 トレンチは、3カ所のトレンチのうち、最も東(谷)側に位置する。表土およびその下の岩盤風化土(2層)を除去すると、地山を検出した。しかし、H18 - 7・8 トレンチ同様に、遺構は確認できなかった。

なお、2層から弥生時代中期の高塚口縁部の細片が出土したが、現在のところ、トレンチ周辺では同時期の遺構は確認されていない。

1 - 3 H18 - 10 トレンチ～H18 - 16 トレンチ概要

H18 - 7～9 トレンチより約90m南に位置する谷に向かう尾根上にH18 - 10～16 トレンチを設定した。この尾根は、平坦面の数から3地点に区分できる。まず1地点目は、城壁が巡る尾根筋から城内側に入ってすぐの、標高95m前後に存在する平坦面である。残りの2地点は、谷側に向かい下っていく標高78m前後、71m前後の平坦面である。それぞれの平坦面に遺構が存在することを想定し、7カ所のトレンチを設定した。トレンチは標高の低い平坦面からそれぞれH18-10・11 トレンチ、H18 - 12～14 トレンチ、H18 - 15・16 トレンチとした。

H18 - 10・11 トレンチ

H18-10・11 トレンチは、3つの平坦面のうち最も標高が低く、谷側に位置する平坦面に設定した。現地踏査時に、この平坦面には長さ70cmを越える石が点在することや、西側に集石があることを確認していた。

(1) H18 - 10 トレンチ (図3 - 26)

平坦面の長軸と平行に設定した東西15m×南北3mのトレンチである。調査前の段階では平坦な東側に対し、先述の集石と接する西側は、地面が若干盛り上がり、大小の石が露出している状況であった。

薄く堆積した表土や岩盤風化土(2層)を除去すると、部分的に岩盤が露出した地山を検出した。

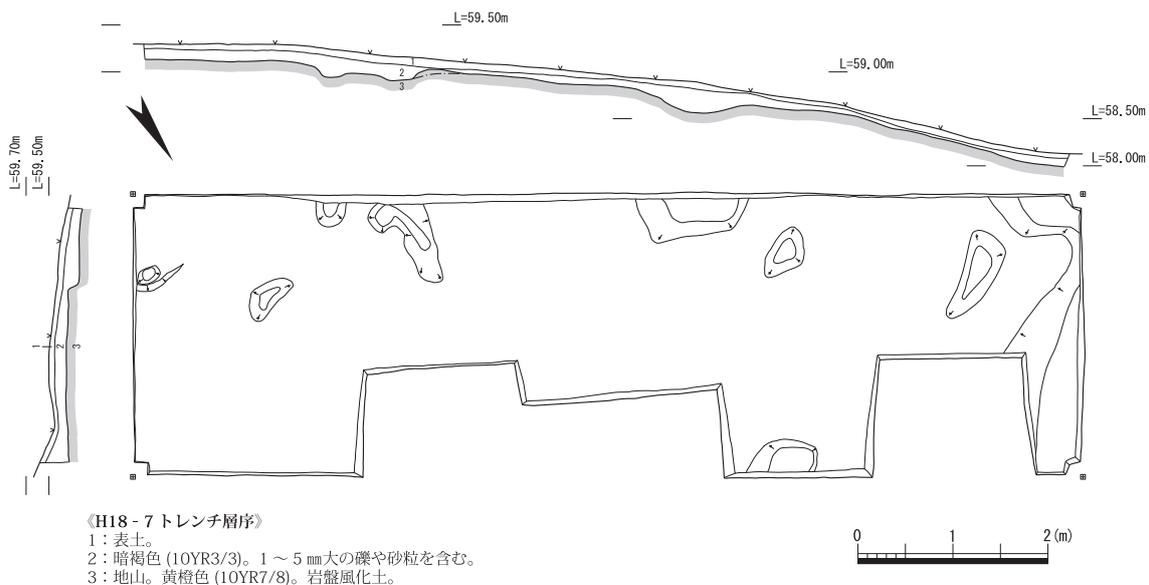


図 3 - 23 H18 - 7 トレンチ平面および断面図

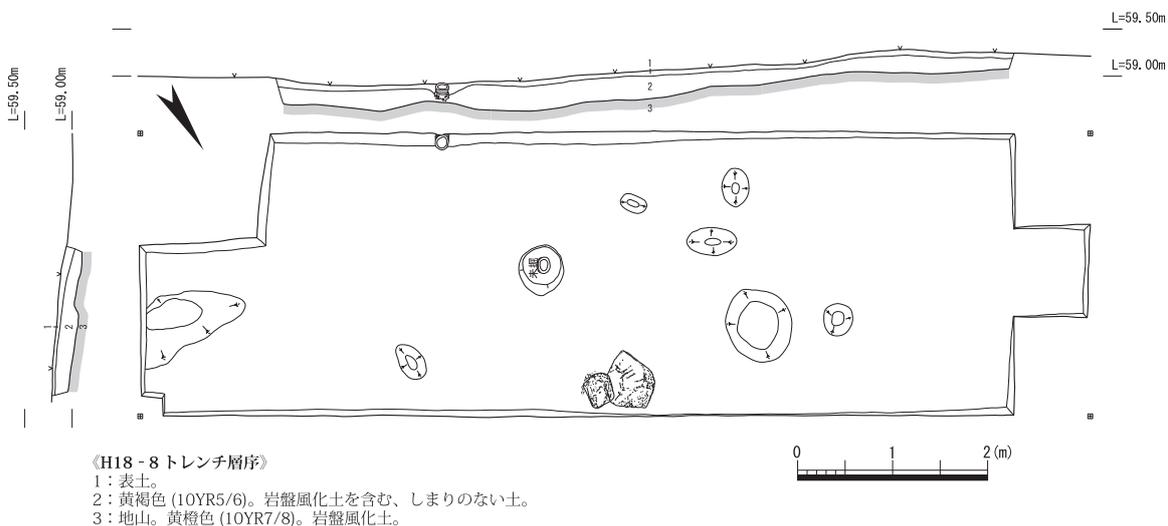


図 3 - 24 H18 - 8 トレンチ平面および断面図

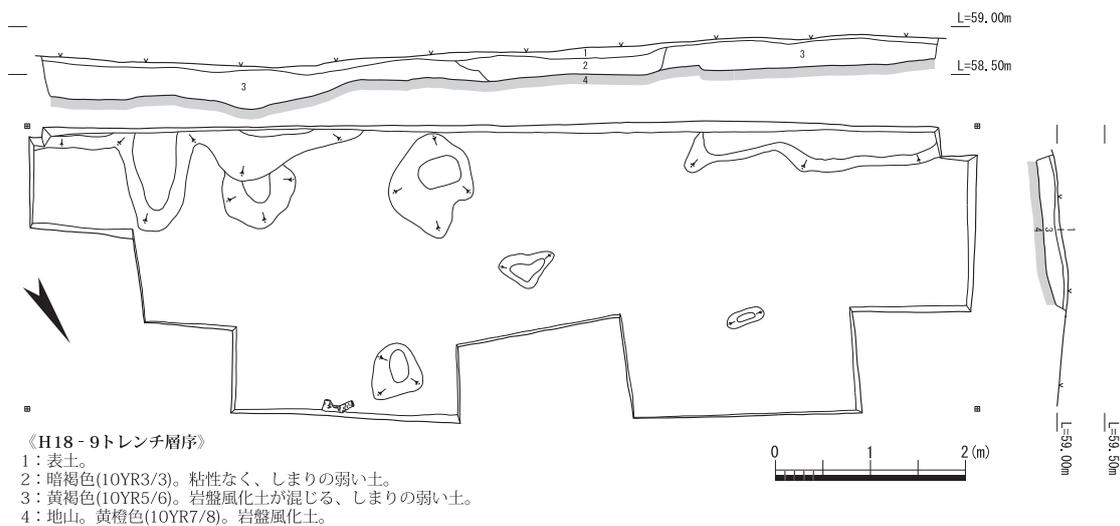


図 3 - 25 H18 - 9 トレンチ平面および断面図

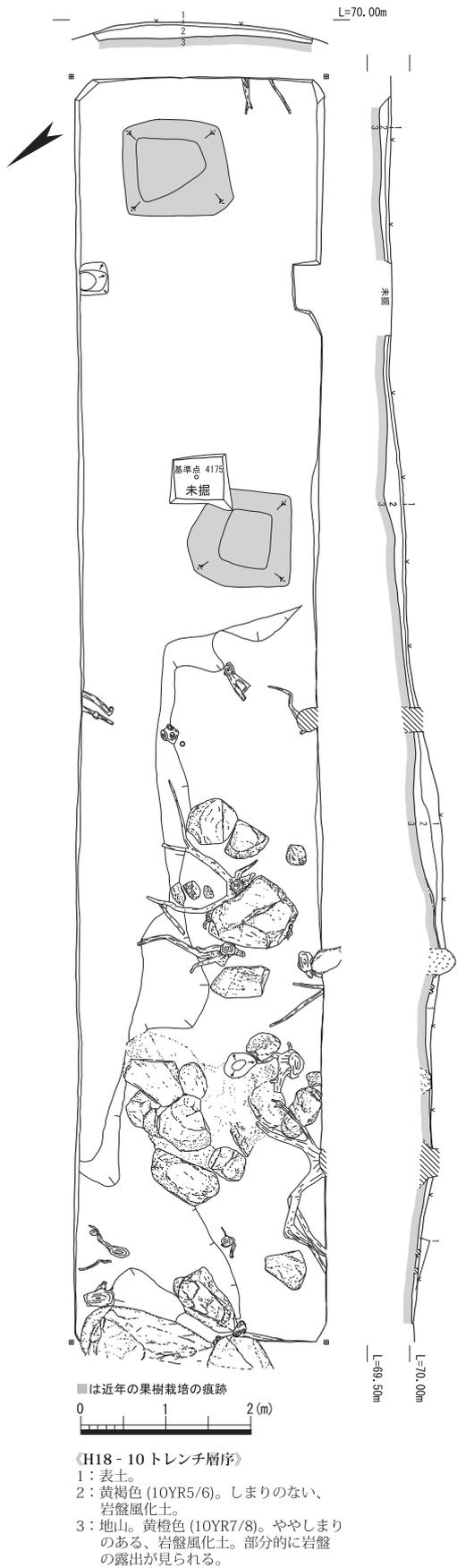


図3 - 26 H18 - 10 トレンチ平面および断面図

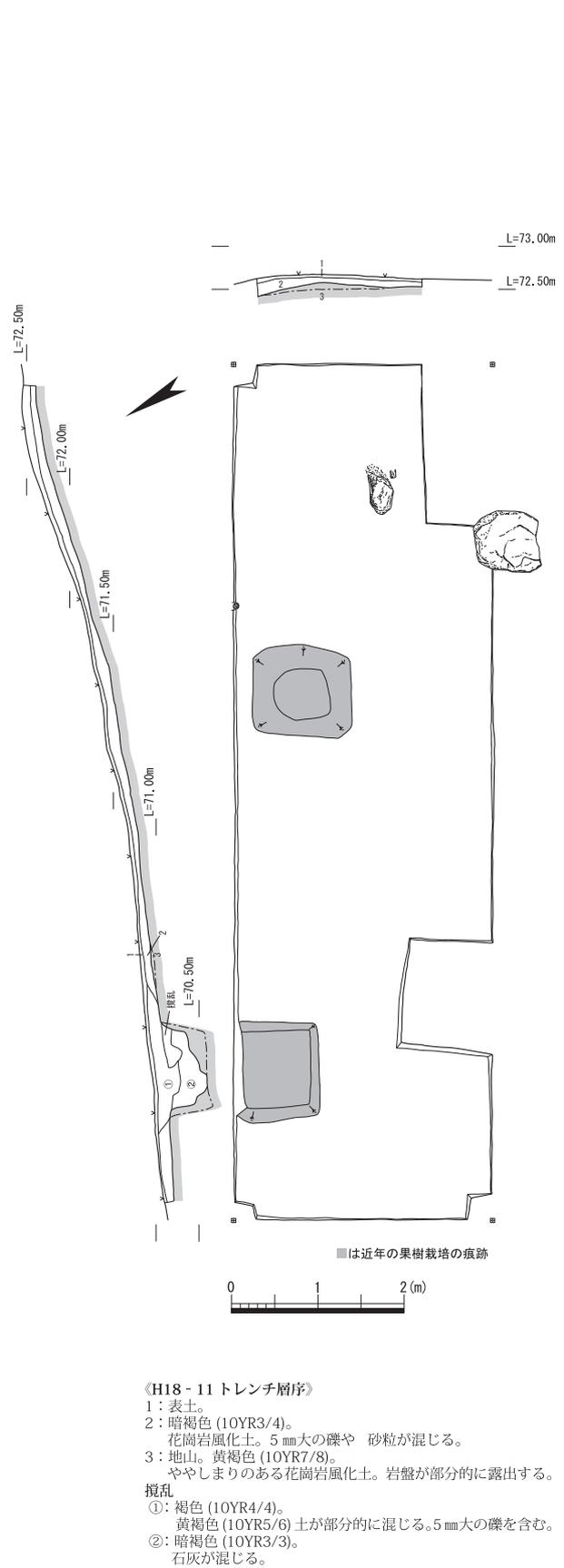


図3 - 27 H18 - 11 トレンチ平面および断面図

調査の結果、トレンチ東側の地山検出面では3基の掘り込みを、西側では壇状の高まりを確認した。しかし、明確に永納山城に伴うと判断できる遺構は確認できなかった。なお、トレンチ東側の掘り込みについては、いずれの埋土にも石灰の塊やビニールなどが混入していたことから、後世の攪乱坑であると判断した。

壇状の高まり 西側では、当初より露出していた他にも多くの石を検出したが、これらは岩盤の一部で、人為的に配されたものではなかった。これに対し、この岩盤周辺は、壇状に高まったように人工的に整形されていることを確認した。この高まりは断面台形状で、段差は30 cm程度であるが、樹木の根によって周辺が攪乱されたものではない。ちょうど、岩盤が露出した部分が壇になっていることから、トレンチ外側の集石部に関連する遺構の可能性はある。しかし、壇の東側にはプラスチック製のパイプが埋め込まれていたことから、東側の攪乱と同様に、後世の開墾に伴うものとも考えることもできる。いずれにしても、今回の調査ではこれらを裏付ける資料を検出していないため、時期・性格ともに判断できなかった。

(2) H18 - 11 トレンチ (図3 - 27)

H18 - 10 トレンチの1.5 m東側に、ほぼ長軸をそろえて設定した東西10m × 南北3mのトレンチである。

表土、岩盤風化土(2層)を除去すると、部分的に岩盤が露出する地山を検出した。地山検出面では、H18-10 トレンチ同様の掘り込みを2基確認している。そのうち1基は北壁沿いに位置していたため、北壁を観察すると、この掘り込みは2層上面から掘り込まれていることが分かった。この掘り込みは、ビニールやプラスチック片が混じる2層を掘り込んでいることや、埋土がH18 - 10 トレンチの攪乱と類似していたことから、後世の改変によるものと判断した。もう1基も、掘り方や埋土の特徴が類似することから、同様の攪乱と思われる。

なお、永納山城に伴う遺構は確認できなかった。

H18 - 12 ~ 14 トレンチ

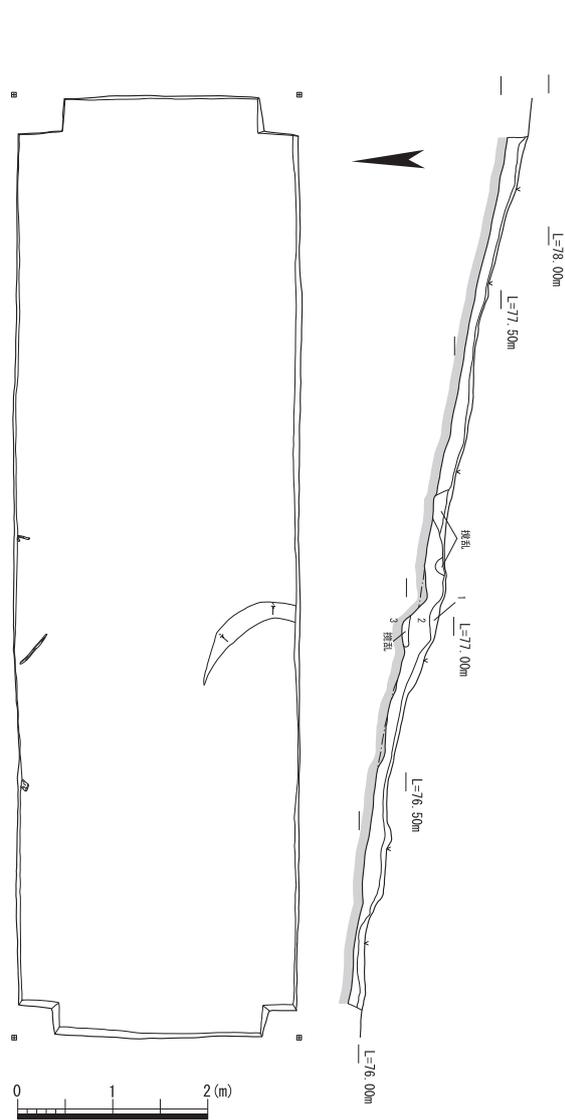
H18 - 12 ~ 14 トレンチは3段の平坦面のうち、2段目に位置する平坦面に設定した。平坦面の南側斜面には段々畑が営まれていた痕跡があり、この周辺も土地の改変を受けている可能性が高い。しかし、広い平坦面を有することから、永納山城に伴う内部施設等の遺構が残存することを想定して、3カ所にトレンチを配した。

(1) H18 - 12 トレンチ (図3 - 28)

平坦面の北側に、尾根筋と平行に東西に主軸として設定した、東西10m × 南北3mのトレンチである。薄い表土、約20 cmと比較的厚く堆積した岩盤風化土(2層)を除去したところ、地山を検出した。なお、遺構は確認できなかった。

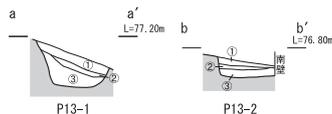
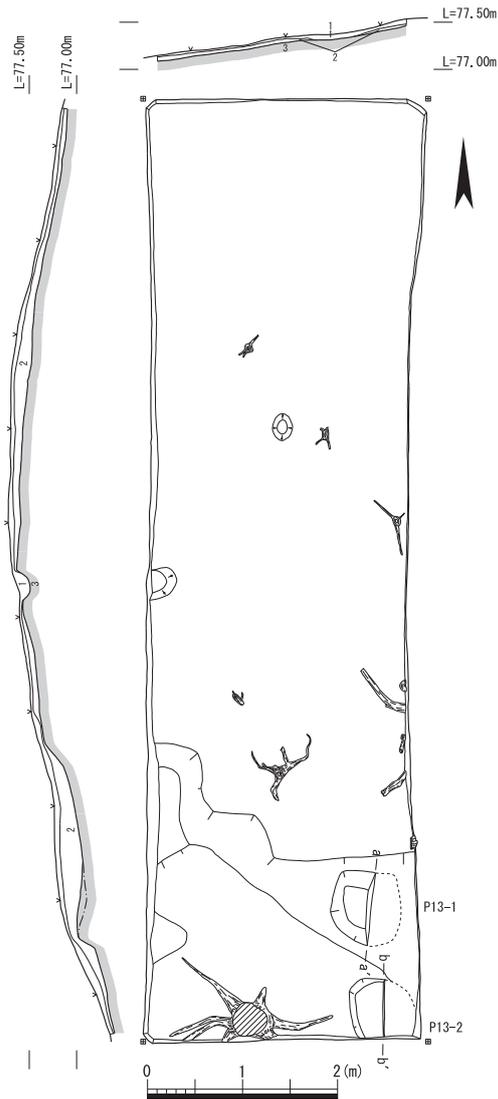
(2) H18 - 13 トレンチ (図3 - 29)

南北に長軸を取り、H18 - 12 トレンチの1 m南に同トレンチに直交するように設定した南北10m × 東西3mのトレンチである。表土、岩盤風化土(2・3層)の下で地山を検出した。南北のH18 -



《H18 - 12トレンチ層序》

- 1: 表土。
- 2: にぶい黄褐色(10YR5/4)。~5mm大の礫を含む、きめ細かくしまりの弱い土。
- 3: 地山。黄橙色(10YR7/8)。しまりがなく、ぼろぼろと崩れる土。



《H18 - 13トレンチ層序》

- 1: 表土。
- 2: にぶい黄褐色(10YR6/6)。1~5mm大礫や砂粒を含む、しまりの弱い土。
- 3: 地山。黄橙色(10YR7/8)。しまりの弱い岩盤風化土。
- P13-1 土層
 - ①: 明黄褐色(10YR6/6)。5mm大の礫を含む、しまりの弱い土。
 - ②: 黄褐色(10YR7/8)。5mm大の礫や砂を含む、岩盤風化土。
 - ③: 黄褐色(10YR5/6)。3mm大の礫や砂粒が混じる。砂粒は2層より細かく、量も多い。足袋のコハゼ出土。
- P13-2 土層
 - ①: 明黄褐色(10YR6/6)。P13-1①層と同様。
 - ②: 黄褐色(10YR7/8)。P13-1②層と同様。
 - ③: 黄褐色(10YR5/6)。P13-1③層と同様。

図3 - 28 H18 - 12 トレンチ平面および断面図

図3 - 29 H18 - 13 トレンチ平面および断面図

12・14（後述）トレンチの地山が比較的平坦であるのに対し、本トレンチの地山は北側から中央に向かって高くなり、南側は段差を持って落ち込んでいた。段差が、本来の地形であるのか、後世の改変によるものかどうかは不明である。なお、この段差の傾斜部で2基のピットを検出し、北側からP

13 - 1、P 13 - 2とした。この2つのピットは検出当初、近接するH18 - 14トレンチで先に確認していた柱穴群に関連する遺構と考えていた。しかし、調査の結果、ピットは新しい時期のものと判明した。

P 13 - 1 斜面のため、検出面では北側が高くなっているが、底面は平らな断面逆台形状の掘り込みである。埋土は、礫や砂が多く混じった土(③層)に、岩盤風化土(②層)が薄くかぶり、その上にトレンチの3層に似たしまりの弱い土(①層)が堆積している。遺構床面から足袋のコハゼが出土したため、比較的新しい時代に掘り込まれたものであると判明した。

P 13 - 2 P 13 - 2で遺物は出土しなかったが、埋土の質及び堆積状況がP 13 - 1と非常に類似していることから、同じ時期と性格の遺構であると判断した。

(3) H18 - 14 トレンチ (図3 - 30)

H18 - 13トレンチから1m南に設定した、東西10m×南北3mの規模のトレンチである。H18 - 12・13トレンチに比べて、トレンチ内は平坦であった。

トレンチ内の土は表土(1層)、花崗岩風化土(2・3層)、遺構検出層(4層)に分層できる。トレンチ東端では1～3層が厚さ約30cmで堆積しているが、西に向かって次第に堆積が薄くなり、トレンチ西端では厚さ10cmに満たない。なお、2層はトレンチ東端のみ堆積していた。本トレンチでは4層でピットを6基確認した。ピットはトレンチの東半分に集中し、このうち2基には柱痕と考えられる層が確認できた。これらのピットの規模は直径が50～80cmで、深さは20cm前後、深いもので30cmである。ピット番号は、北西隅をP 14 - 1として、時計回りにP 14 - 2～6とした。

柱痕を伴うピット (P 14 - 2・4)

P 14 - 2 平面形は円形で、規模は長さ77cm、幅68cm、深さが現存で15cmを測る。柱痕は直径23cmを測る。埋土は、掘り方部分が黄橙色ブロックの混じる粘質土であるのに対し、柱痕部分はしまりのないにぶい黄橙色を呈する。

P 14 - 4 平面形は円形で、直径51cm、深さ15cmを測り、柱痕は直径20cmを測る。埋土は、掘り方部分が黄褐色の粘質土であるのに対し、柱痕部分は掘り方埋土より若干明るい黄褐色土を呈する。

2つのピットの埋土は、柱痕の色調は若干異なるものの、掘り方部分(共に②層)がやや粘性のある黄褐色土という点で類似している。しかし、いずれも遺物は出土しておらず、両者の関連は不明である。なお、2つの柱穴の距離は心々間で2.6mである。

柱痕を伴わないピット (P 14 - 1・3・5・6)

P 14 - 1 平面形は円形で、断面は2段掘り状となり、深さは30cmである。埋土の大半は樹木の根により攪乱されているため、柱痕の有無は明らかではない。埋土の一部(②層)がP 13 - 1・2②層と類似している点、P 13 - 2との距離が1m程度である点などから、P 13 - 1・2と同様、後世の攪乱の可能性も高い。

P 14 - 3・5・6 平面形はいずれも円形で、深さは現存で20～25cmを測る。埋土に若干の違いはあるものの、しまりの弱い岩盤風化土という点では共通している。

なお、柱穴を伴うピット、柱穴を伴わないピットのいずれのからも、遺物は出土していない。

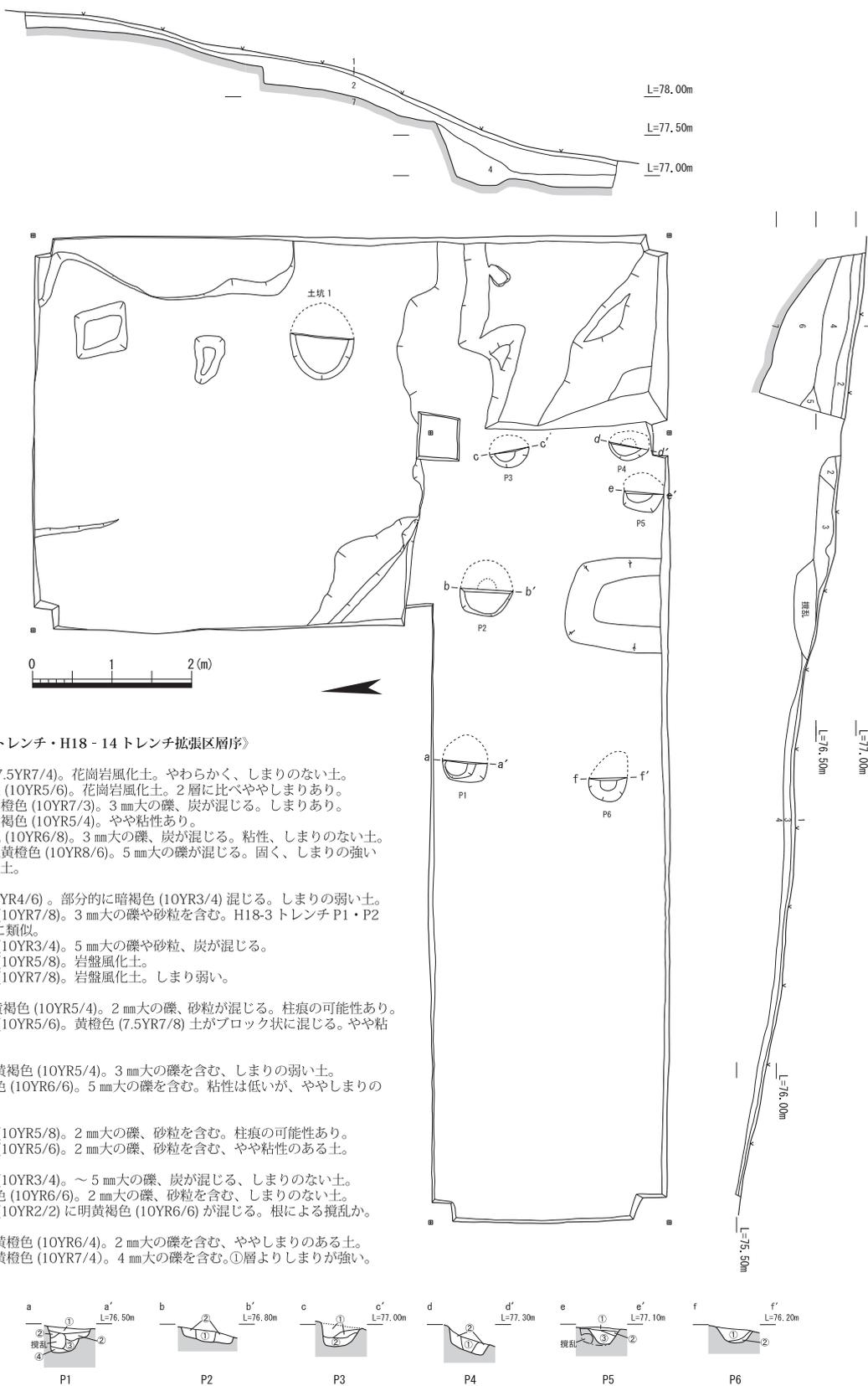


図3-30 H18-14 トレンチ・14 トレンチ拡張区平面および断面図

(4) H18 - 14 トレンチ拡張区

H18 - 14 トレンチでピットを検出したことを受け、平成 19 年度に H18 - 14 トレンチを拡張した。その目的は、新たなピットを検出し、配置や出土遺物から、ピットの性格や時期を判断することであった。拡張区は 14 トレンチの東側に位置し、規模は東西 5 m × 南北 8 m である。

調査の結果、これらのピットは、前年度調査で確認したピット検出層より下層の状況から、後世の攪乱であることが判明した。

10 cm 程度で堆積する表土（1 層）、10 ～ 30 cm で堆積する 2 層を除去したところ、トレンチ北側で固くしまりの強い岩盤風化土（7 層）を検出した。これに対し、トレンチ南側では H18 - 14 トレンチと同様に 4 層が広がることから、7 層は拡張区中央付近で南に向かい落ち込むことが分かった。さらに、4 層以下の状況を確認するため、一部を先行的に掘り下げたところ、4 層下層から現代の瓦片を出土した。

このことから、H18 - 14 トレンチで地山と判断していた 4 層は、比較的新しい段階に堆積したことが明らかになった。したがって 4 層に掘り込まれた H18 - 14 トレンチの 6 基のピットも瓦片以降の時期の遺構となり、永納山城に伴うものではないことが確実となった。

なお、4 層以下は、拡張区の南壁に部分的に堆積する 5 層、60 cm の厚さで堆積する 6 層を除去したところで、トレンチ北側で検出していた固い岩盤風化土（7 層）を確認した。

以上のように、当トレンチでは永納山城に伴う遺構は確認できなかった。

H18 - 15・16 トレンチ

H18 - 15・16 トレンチを設定した平坦面は、3 地点の平坦面のうち最も標高が高い。下の 2 つの平坦面に比べると面積は狭いものの、非常に見通しが良い点の特徴である。中央の谷に向かうと正面に医王山を見据え、北は燧灘やしまなみ海道を、南には永納山山頂の向こうに石鎚山を望む。

現地踏査の段階では、調査区全面にシダが生い茂り地表面を覆い隠していたが、その後の草刈りによって周辺の状況を確認することができた。この尾根は露岩が目立ち、長さ 30 cm 程度から大きいものでは 2 m を越えるものが平坦面や斜面など、いたるところで見られる。

(1) H18 - 15 トレンチ (図 3 - 31)

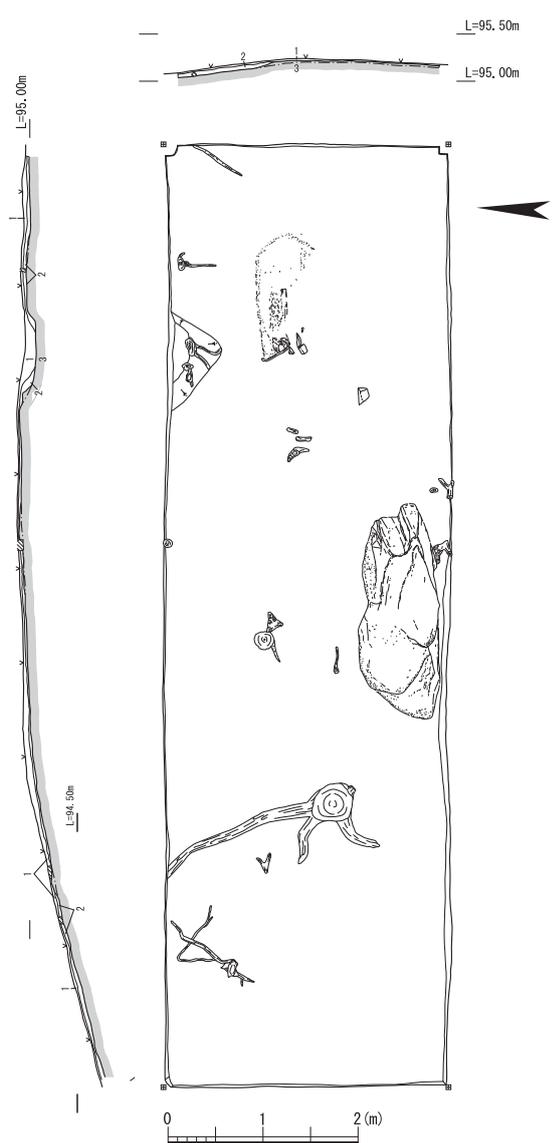
本トレンチは尾根筋に沿うように東西に長軸を取り、東西 10 m × 南北 3 m の規模で設定した。

厚さ 10 cm に満たない表土の下には、炭混じりの黒色土（2 層）がトレンチ全体に薄く広がる。2 層は、後述の H18 - 16 トレンチでも確認できるが、遺跡発見の契機となった山火事の痕跡とも考えられる。

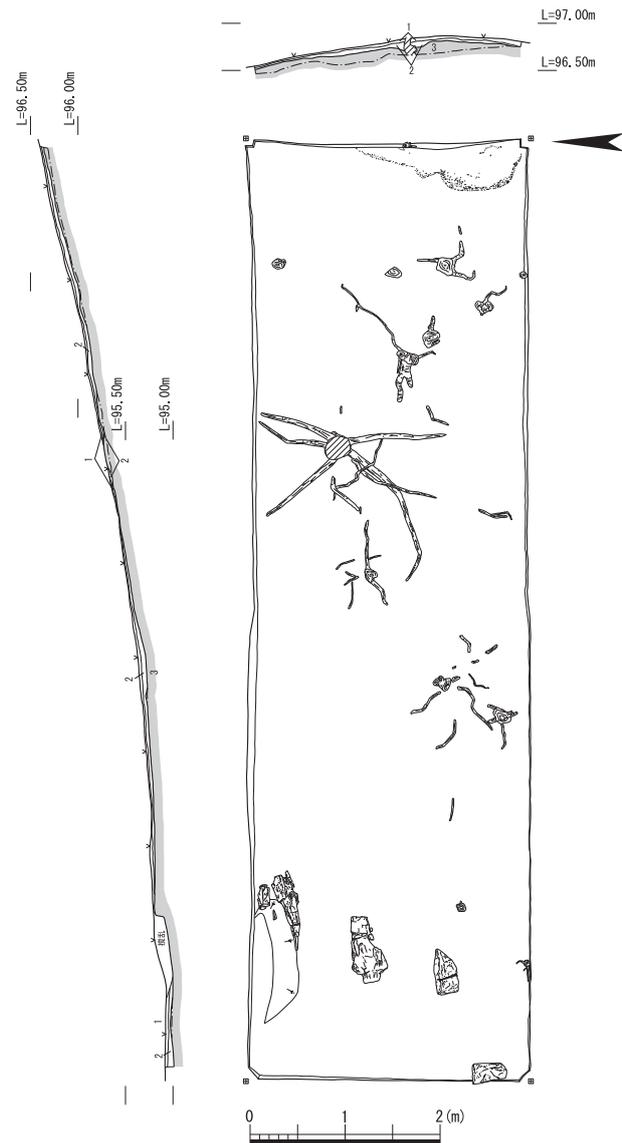
これらの層を除去すると、部分的に岩盤が露出した地山を検出したのみで、遺構は確認できなかった。

(2) H18 - 16 トレンチ (図 3 - 32)

H18 - 15 トレンチの 1 m 東に設定した、東西 10 m × 南北 3 m の規模のトレンチである。H18 - 15 トレンチと同様に、表土の下で薄く堆積する炭混じりの層（2 層）を確認した。本トレンチの 2 層は H18 - 15 トレンチの 2 層より、炭の混じる割合が若干多い。2 層を除去すると、部分的に岩盤



《H18 - 15トレンチ層序》
 1:表土。
 2:黒色(10YR2/1)に黒褐色(10YR2/2)が混じる。炭が混じったきめ細かい土。
 3:地山。にぶい黄橙色(10YR7/4)~(10YR7/3)。



《H18 - 16トレンチ層序》
 1:表土。
 2:黒色(2.5Y2/1)。炭が混じる。
 3:地山。明黄褐色(10YR7/6)。岩盤風化土層。部分的に岩盤が露出する。

図3 - 31 H18 - 15 トレンチ平面および断面図

図3 - 32 H18 - 16 トレンチ平面および断面図

が露出した地山を検出したが、遺構は確認できなかった。

なお、調査前に確認していた石は、岩盤や、岩盤から遊離した状態の石であることが判明した。

2 東部の調査 (図3 - 33)

H19 - 5 ～ 7 トレンチ概要

山頂から130mほど東に位置する尾根には、標高約89m付近と82m付近の2カ所に平坦面が存在する。尾根周辺には段々畑の痕跡が残り、平坦面には現在も鉄柵やネットが残っていることから、過去にこの一帯が改変を受けていることは明らかであった。しかし、表土下に改変を免れた遺構が存在する可能性もあるため、尾根筋と平行して3カ所にトレンチを設定した。トレンチの規模はいずれも3×10mで、標高の高い平坦面に設定したトレンチをH19 - 5トレンチ、低い平坦面に設定したトレンチを東からそれぞれH19 - 6・7トレンチとした。

(1) H19 - 5 トレンチ (図3 - 34)

10 cm程の厚さで堆積した表土(1層)を除去したところ、岩盤風化土(2層)を検出し、2層上面において8基の土坑と14基のピットを確認した。土坑は、0.8×1 m程度の規模の長方形、ピットは直径10～20 cm程度の小円形が中心である。さらにトレンチの西隅で、南北に走る溝状の掘り込みを検出した。これらの遺構からは遺物が出土しなかったため、正確な時期は不明であるが、同様の遺構を検出したH19 - 7・8トレンチの状況から、果樹を植える際の掘り込みであると推測される。また、2層の下では、トレンチ全体で地山を検出したが、地山面での新たな遺構はみとめられなかった。以上のように、本トレンチでは、永納山城に関する遺構・遺物は確認できなかった。

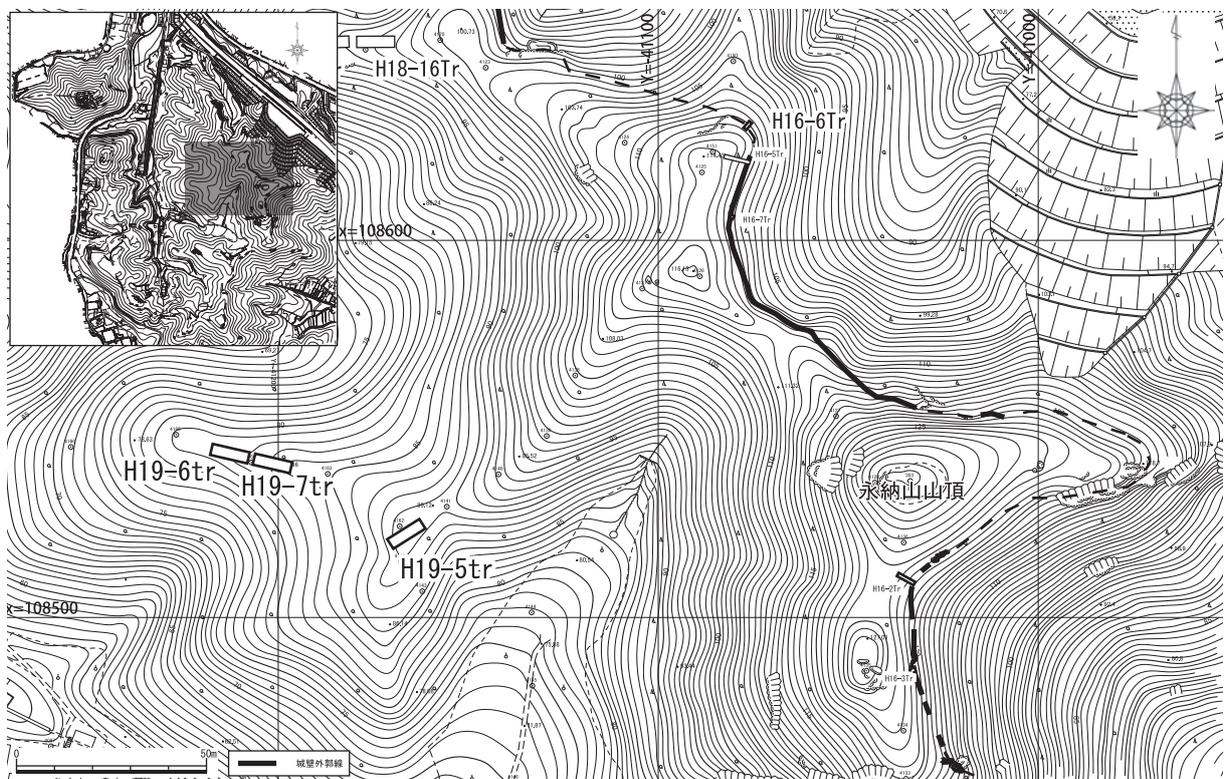


図3 - 33 東部内部施設確認トレンチ周辺地形図

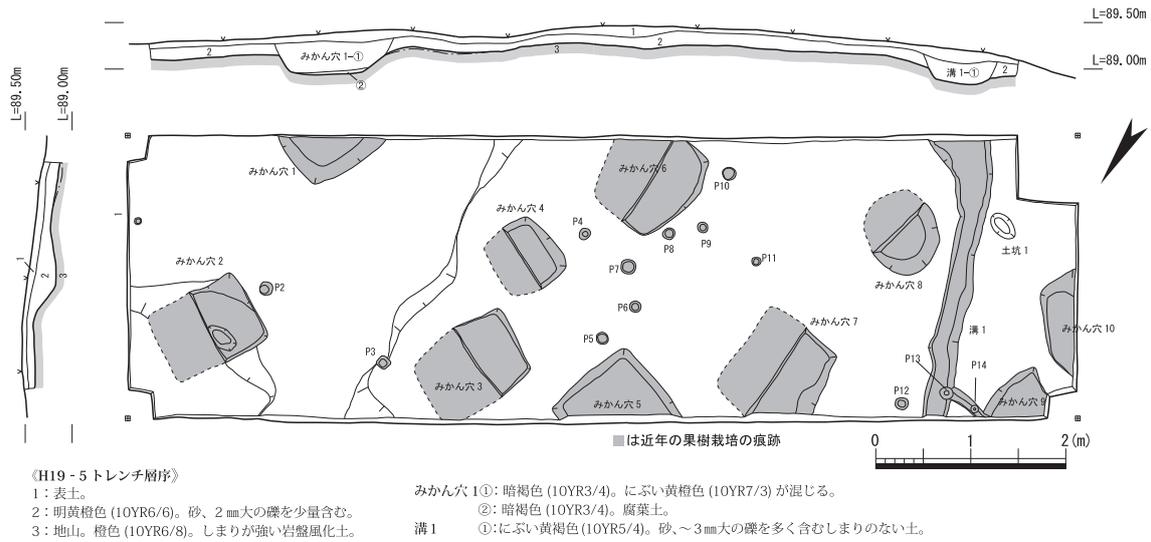


図3-34 H19-5 トレンチ平面および断面図

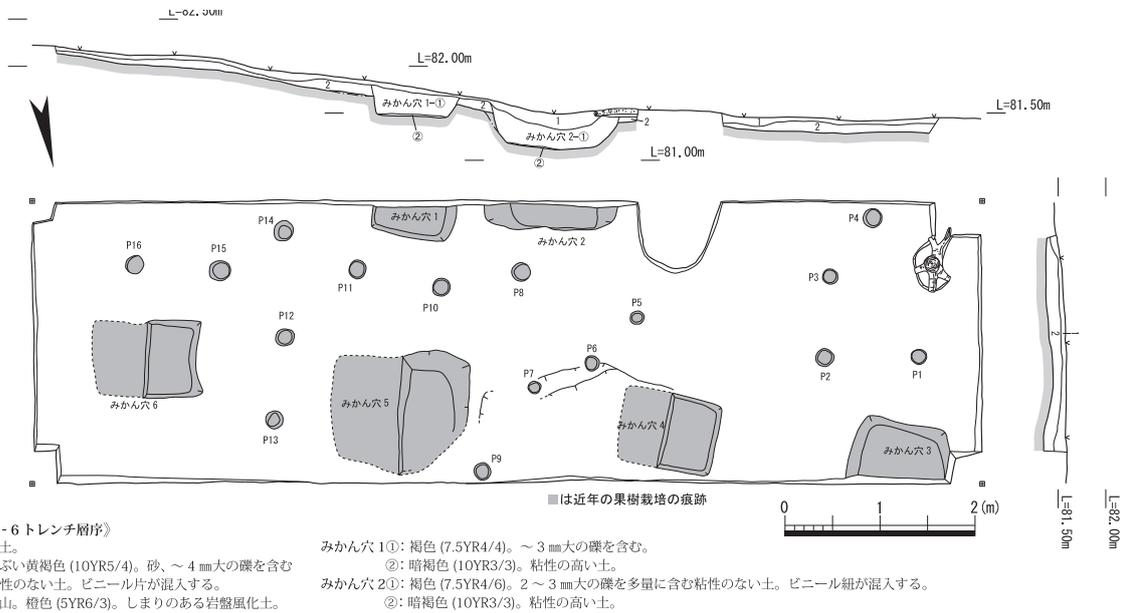


図3-35 H19-6 トレンチ平面および断面図

(2) H19-6 トレンチ (図3-35)

本トレンチは、3カ所のトレンチのうち、最も谷側に位置する。表土は、厚さ5～15cmで堆積し、これを除去したところで2層を検出した。2層中にはビニールが混在することから、後世の改変を受けたものと判断できる。また、H19-5 トレンチ同様に2層上面で土坑とピットを確認した。

これらの大きさはH19-5 トレンチで検出したものと同規模である。長方形の土坑は6基確認でき、そのうちの4基が約1.5m間隔で一列に並び、小円形のピットがそれを取り囲むように配置されていた。これらの埋土中には木片やビニール紐が残るものもあったことから、ピットには果樹を支える支柱などが立てられていたものと考えられる。

また、トレンチの西側外には、一列に並ぶこれらの土坑の延長線上に、枯れたみかんの木が現在も残っていた。この点からも、土坑はみかん栽培に関連するものである可能性が高い。なお、2層の下

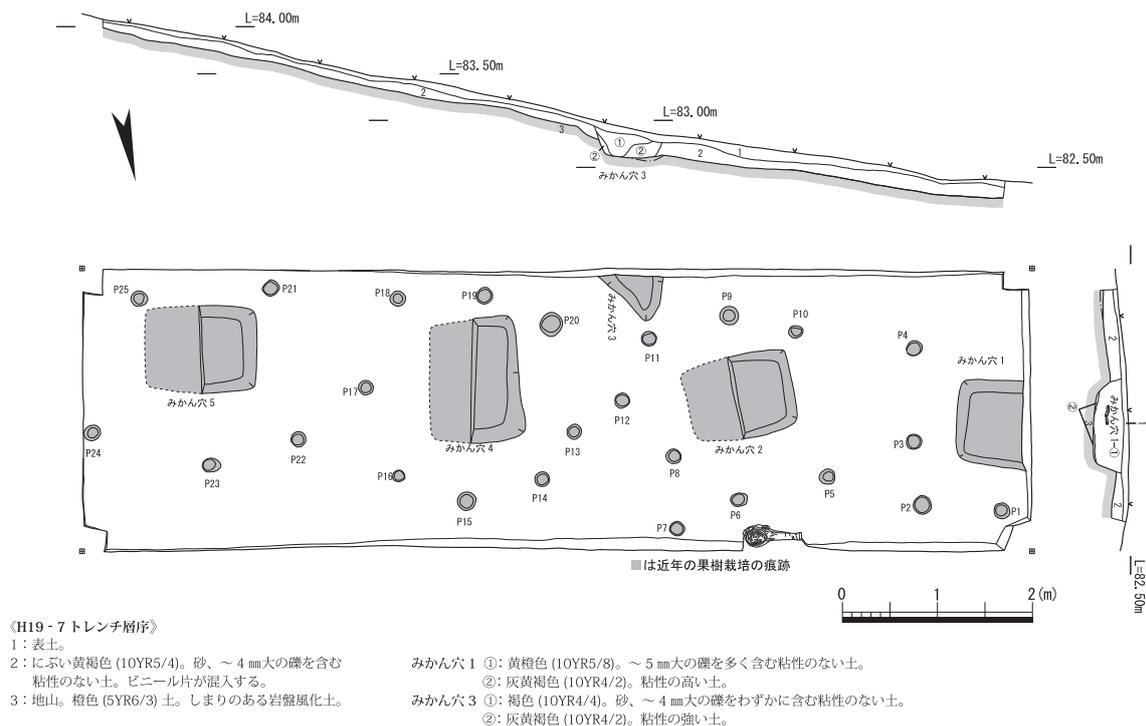


図 3 - 36 H19 - 7 トレンチ平面および断面図

では、地山を検出したが、新たな遺構は確認されなかった。

以上のように、本トレンチでは、永納山城に關係する遺構・遺物は確認できなかつた。

(3) H19 - 7 トレンチ (図 3 - 36)

本トレンチは、H19 - 6 トレンチの東側に設定したトレンチで、土層の堆積状況は H19 - 6 トレンチと同様である。

2 層上面において、H19 - 6 トレンチの土坑の延長とみられる一列に並んだ長方形の土坑と小円形のピットを確認した。これらの土坑・ピットの大きさは、先の 2 つのトレンチのものと同様である。これらの内、トレンチの西壁断面にかかる土坑の埋土中には、みかんの木の根が確認できた。

以上のように本トレンチにおいても、近現代の開墾の痕跡が残るのみで、永納山城に伴う遺構や遺物等は確認できなかつた。

3 南東部の調査 (H19 - 8 ～ 14 トレンチ)

H19 - 8 ～ 14 トレンチ概要 (図 3 - 37)

東部頂上と南東部頂上に挟まれる尾根筋のほぼ中央から、城内側に向かって延びる丘陵尾根に 6 カ所のトレンチを設定した。尾根筋からは眼下に広がる燧灘を一望できる。谷に向かい延びる尾根は、広い平坦面を持ち、さらに先端付近で南北に別れ、そこにも小さな平坦面を形成する。

そこで、これらの尾根平坦面に内部施設の存在を想定した。当初、この尾根上にはもう 1 カ所トレ

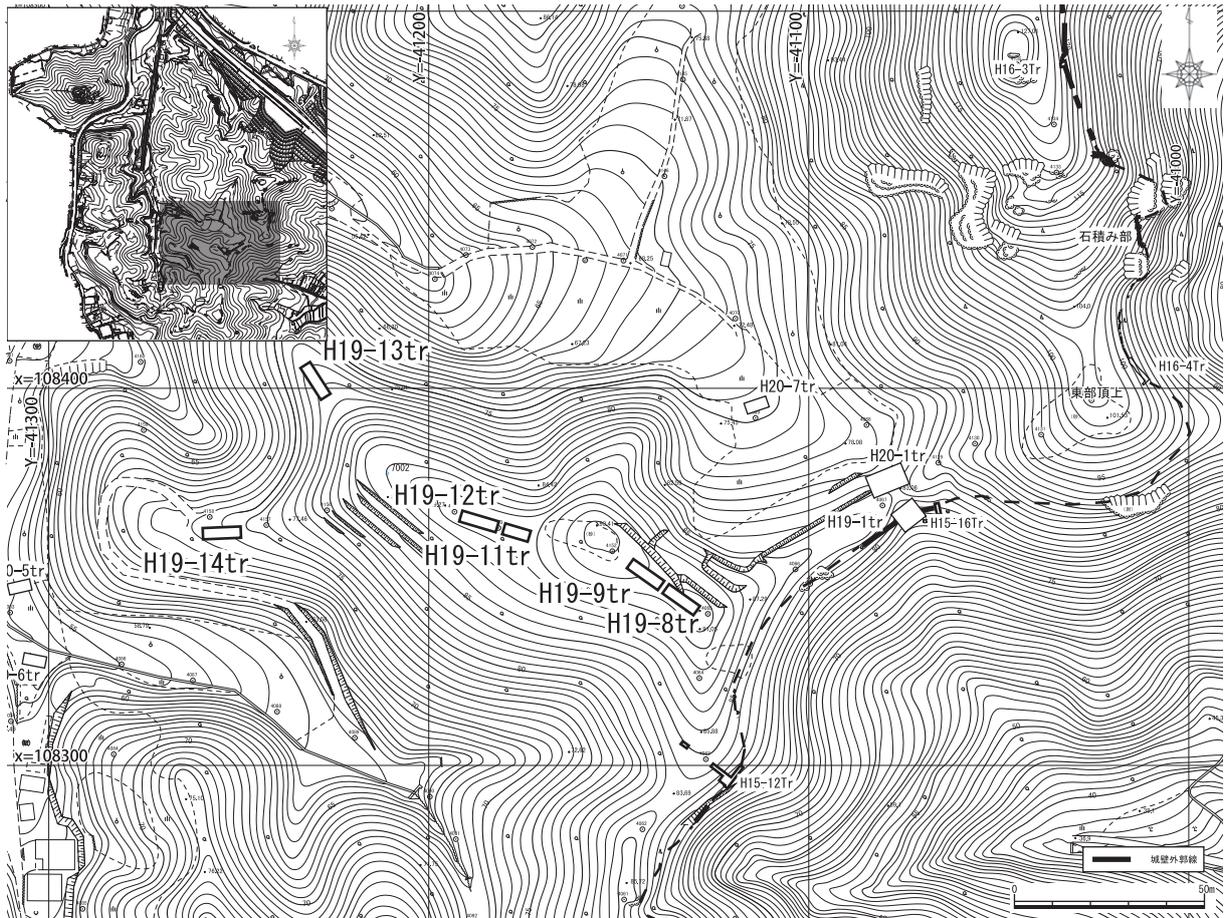


図3 - 37 南東部内部施設確認トレンチ周辺地形図

ンチを設定予定であったが、ここについては、表面清掃において地山を検出したことからトレンチの設定を中止した（H19 - 10 トレンチ欠番）。

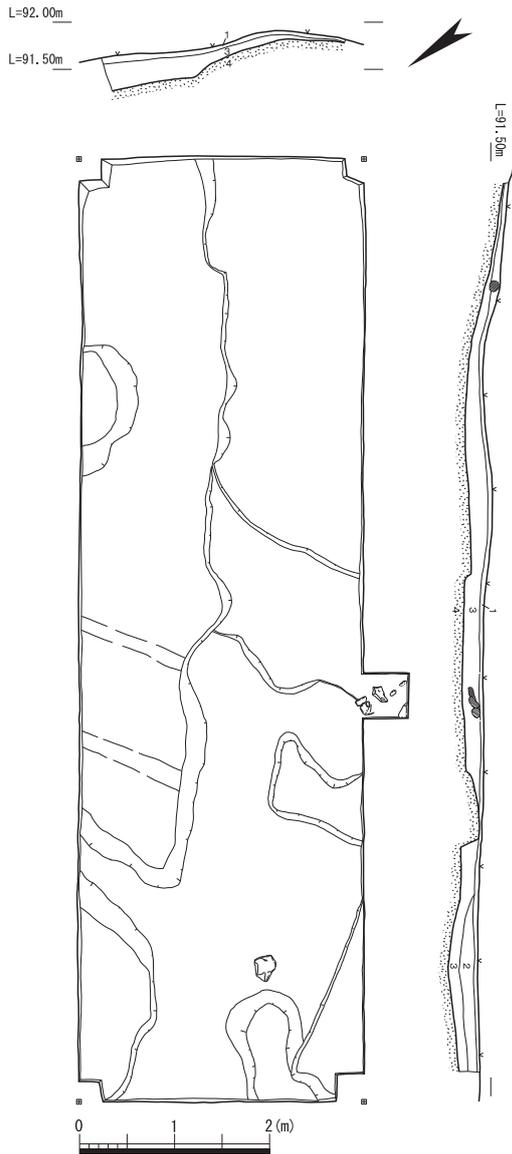
(1) H19 - 8 トレンチ (図3 - 38)

城壁線が巡る尾根筋に最も近い平坦面に設定した3×10mのトレンチである。本トレンチでは表土（1層）、花崗岩風化土（2層）を除去すると、トレンチ全体に地山（3層）を検出した。地山面には全体的に大小さまざまな凹凸が見られ、中には地山を平坦に掘削したように見受けられる段も存在した。これらの時期については、明確な時期を示す遺物の出土がなく不確定ではあるが、地山直上で錆化した針金が出土したことから、比較的新しい時期に形成されたものである可能性が高い。

このような状況のため、古代山城に伴うと判断できる遺構の存在は確認できなかった。

(2) H19 - 9 トレンチ (図3 - 39)

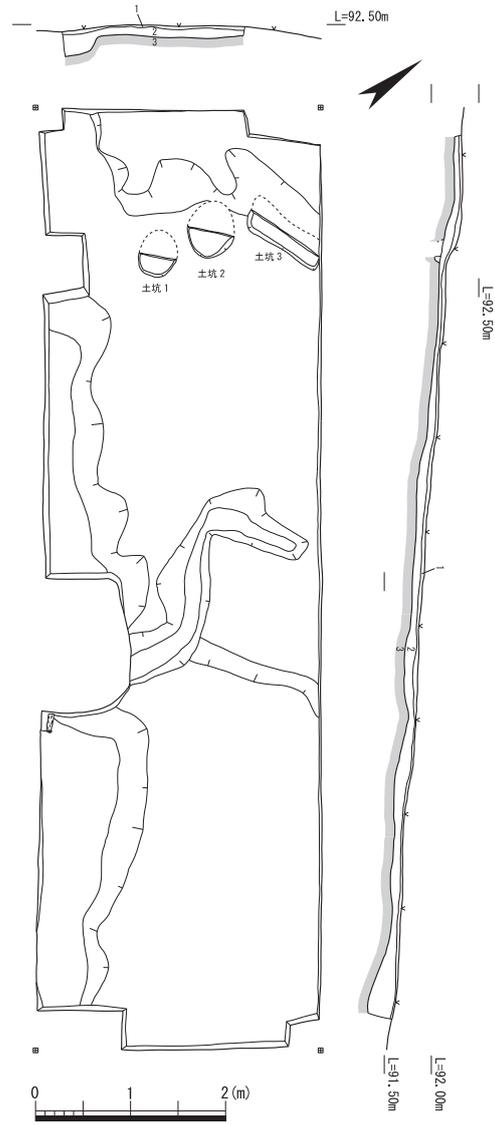
H19 - 8 トレンチの西側に設定した3×10mのトレンチである。薄く堆積した表土（1層）と、5～20cmの厚さで堆積した岩盤風化土（2層）を除去すると、地山（3層）を検出した。地山では、高さ20cm弱の浅い段や浅い溝状の窪みを確認した。これらの段及び溝状の窪みは、H19 - 8 トレンチ同様に近年に形成されたものと考えられる。また、この面では、さらに3基の土坑を検出した。土坑は、直径40～50cmの円形のものが2基（土坑1・2）、30×100cmの長方形（土坑3）のもの



《H19 - 8 トレンチ層序》

- 1：表土。
- 2：灰白色 (2.5Y8/7)。花崗岩風化土。
- 3：黄橙色 (7.5YR7/8)。花崗岩風化土。
- 4：地山 (岩盤)。

図 3 - 38 H19 - 8 トレンチ平面および断面図



《H19 - 9 トレンチ層序》

- 1：表土。
- 2：にぶい黄褐色 (10YR5/4)。砂質土に地山が混ざり合う、しまりのない土。
- 3：地山。浅黄橙色 (10YR8/4) に橙色 (7.5YR6/8) が混じる。部分的にもろい岩盤風化土。

図 3 - 39 H19 - 9 トレンチ平面および断面図

が 1 基で、いずれも深さは 5 cm と浅い。埋土から遺物の出土はなく、土坑の時期は不明である。

以上のように、本トレンチでは、永納山城に伴う遺構・遺物は確認できなかった。

(3) 19 - 11 トレンチ (図 3 - 40)

H19 - 10 トレンチの設定予定地であった小円丘から、西へ向かい緩やかに下る丘陵の平坦面に設定した 3 × 7 m のトレンチである。薄く堆積した表土 (1 層)、20 cm 程堆積した岩盤風化土 (2 層) を除去したところ、もろい岩盤の地山 (3 層) を検出した。この地山検出面では、5 基の土坑を確認した。土坑は、平面形が楕円形 (土坑 2・4・5) のものと方形 (土坑 1・3) のものがあるが、

規模・配置ともに規則性はみられない。なお、1辺が約1.5mの方形の土坑1では、埋土から現代の瓦片が出土した。

以上のように、本トレンチでは、永納山城に伴う遺構・遺物は確認できなかった。

(4) H19-12 トレンチ (図3-41)

H19-11 トレンチから1.8m西に設定した、3×10mの規模のトレンチである。

表土(1層)、岩盤風化土(2層)ともに非常に薄く、現地表面から深さ10cm程のところでは地山(3層)を検出した。地山面には、地形に緩やかな起伏はあるものの、人工的な遺構は確認できなかった。なお、トレンチ全体で、遺物は出土していない。

以上のように、本トレンチでは、永納山城に関する遺構・遺物は確認できなかった。

(5) H19-13 トレンチ (図3-42)

H19-12 トレンチを設定した尾根から、北に派生する小さな尾根上に設定したトレンチである。H19-12 トレンチからは約50m北東に位置し、標高は78m前後である。

各々の層の厚さが5～15cm程の表土(1層)、岩盤風化土(2層)を除去したところで、トレンチ全体に地山(岩盤層・3層)を検出した。この地山面において6条の溝を確認した。

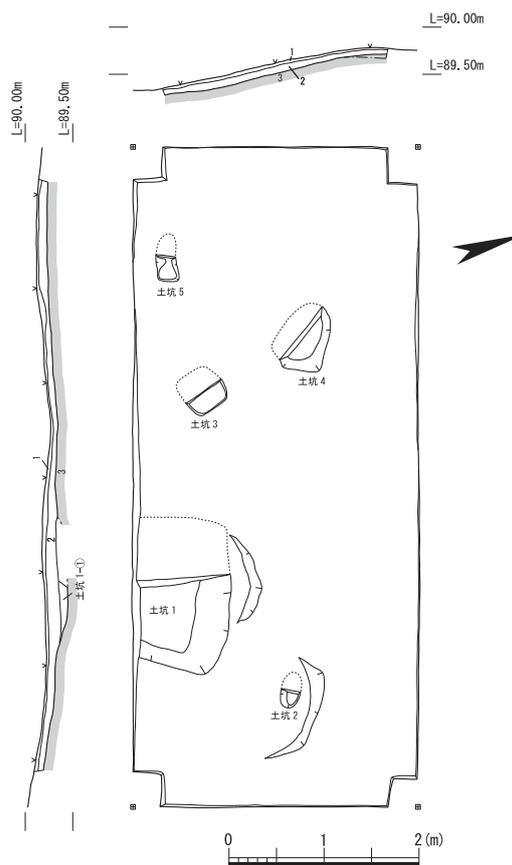
溝はすべて弧状を呈し、弧の外側を北(谷側)に向けて約1.5m間隔で南北方向に配置されている。溝はいずれも横断面形が狭い逆台形もしくはコの字状で、幅30～50cm、深さ50cm程度である。長さは不規則で、1.8m程度で完結するもの(溝3)から、トレンチ外まで延び3m以上の長さを有するもの(溝5)もある。溝埋土は砂質土が主であるが、溝4・5では床面に腐葉土が薄く広がっていた。

埋土から遺物の出土は無かったが、これまでに南部のトレンチで確認した溝との共通点から、現代の耕作に伴う掘り込みである可能性が高い。

以上のように、本トレンチでは永納山城に伴う遺構は、確認できなかった。

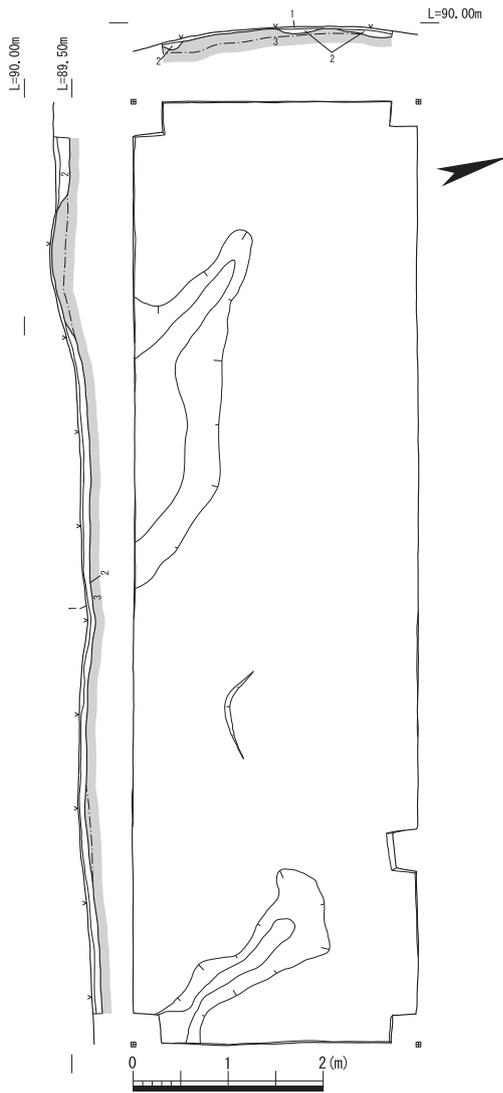
(6) H19-14 トレンチ (図3-43)

H19-12 トレンチから東に50m、標高75m前後の尾根の平坦面に設定した、3×10mのトレンチである。トレンチ周辺には段々畑の痕跡、網や柵などが残り、一帯が畑として利用されていたことがうかがえる。厚さ5cm程度の表土(1層)、2層を除去したところで地山(3層)を確認した。

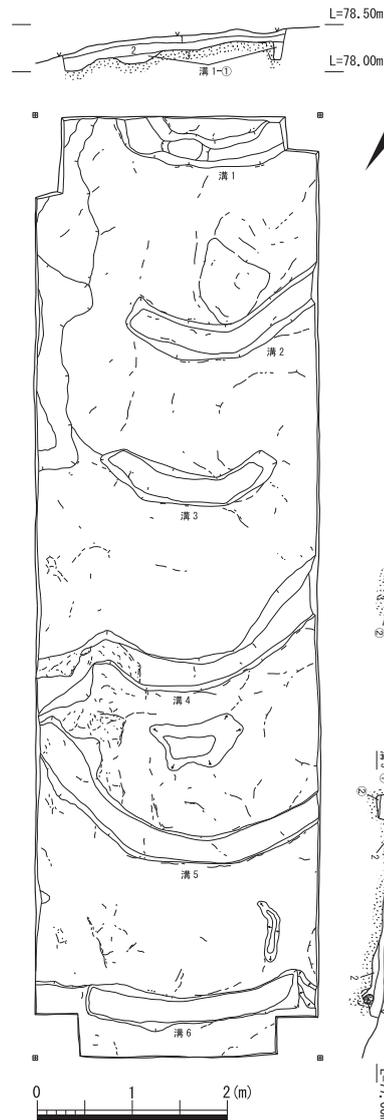


《H19-11 トレンチ層序》
 1: 表土。
 2: にぶい黄褐色(10YR5/4)。～5mm大の礫を含む、しまりの弱い砂質土。
 3: 地山。黄褐色(10YR7/8)～浅黄褐色(10YR8/4)。もろい岩盤風化土。
 土坑1
 ①: 灰黄褐色(10YR4/2) 砂、～10mm大の礫を含むしまりの弱い土。
 埋土から現代の瓦片出土。

図3-40 H19-11 トレンチ平面および断面図



《H19 - 12 トレンチ層序》
 1: 表土。
 2: にぶい黄褐色 (10YR5/4)。～5 mm 大の礫を含む、しまりの弱い砂質土。
 3: 地山。黄褐色 (10YR7/8)～浅黄褐色 (10YR8/4)。もろい岩盤。



《H19 - 13 トレンチ層序》
 1: 表土。
 2: 褐色 (10YR4/4)。～5 mm の礫を含むしまりの弱い土。
 3: 地山。浅黄褐色 (7.5YR8/4)。岩盤が露出する。
 溝 1
 ①: にぶい黄褐色 (10YR6/4)。砂質土。
 溝 2
 ①: にぶい黄褐色 (10YR6/4)。ややしまりのある砂質土。
 溝 4
 ①: にぶい黄褐色 (10YR6/4)。ややしまりのある砂質土。
 ②: 黒褐色 (10YR3/2)。腐葉土。
 溝 5
 ①: 明褐色 (10YR7/6)。しまりのある砂質土。
 ②: 黒褐色 (10YR3/2)。腐葉土。

図 3 - 41 H19 - 12 トレンチ平面および断面図

図 3 - 42 H19 - 13 トレンチ平面および断面図

地山面は開墾に伴うと考えられる段が東西方向に走り、北側が 30 cm 程高くなっている。この地山検出面において 1 基の土坑（土坑 1）を検出した。

土坑 1 は、1 辺 50 cm のやや不整形な方形である。埋土にビニール紐が混入していたため、現代の掘り込みであることが判明した。

以上のように、本トレンチでは、永納山城に伴う遺構・遺物は確認できなかった。

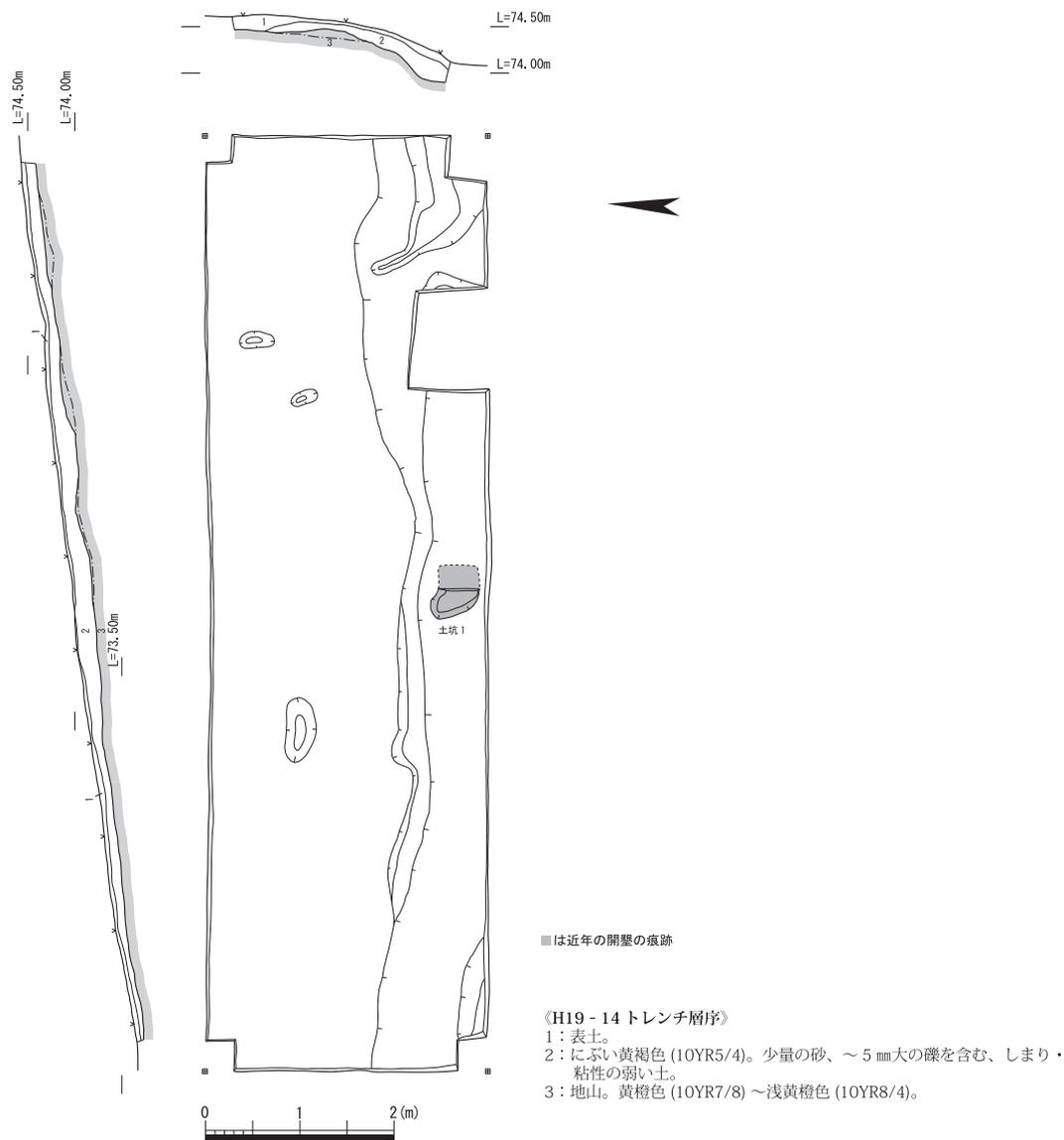


図3 - 43 H19 - 14 トレンチ平面および断面図

4 南部の調査 (H19 - 15 ~ 18 トレンチ)

H19 - 15 ~ 18 トレンチ概要 (図3 - 44)

南部には、南部頂上から北側にのびる丘陵が存在する。この丘陵尾根の先端部付近には1段の平坦面があり、尾根は頂上から緩やかに傾斜しながら、その先端部平坦面にいたる。そこで、この丘陵に内部施設の存在を想定し、その存否を確認するために4カ所にトレンチを設定した。トレンチは、南部頂上、緩やかな傾斜面にそれぞれ1カ所 (H19 - 18・15 トレンチ)、そこから15mほど北西へ下った平坦面に2カ所 (H19-16・17 トレンチ) 設定した。なお、調査中に地権者から、当調査地一帯は、過去に開墾のために大規模に掘削を行ったという情報を得た。

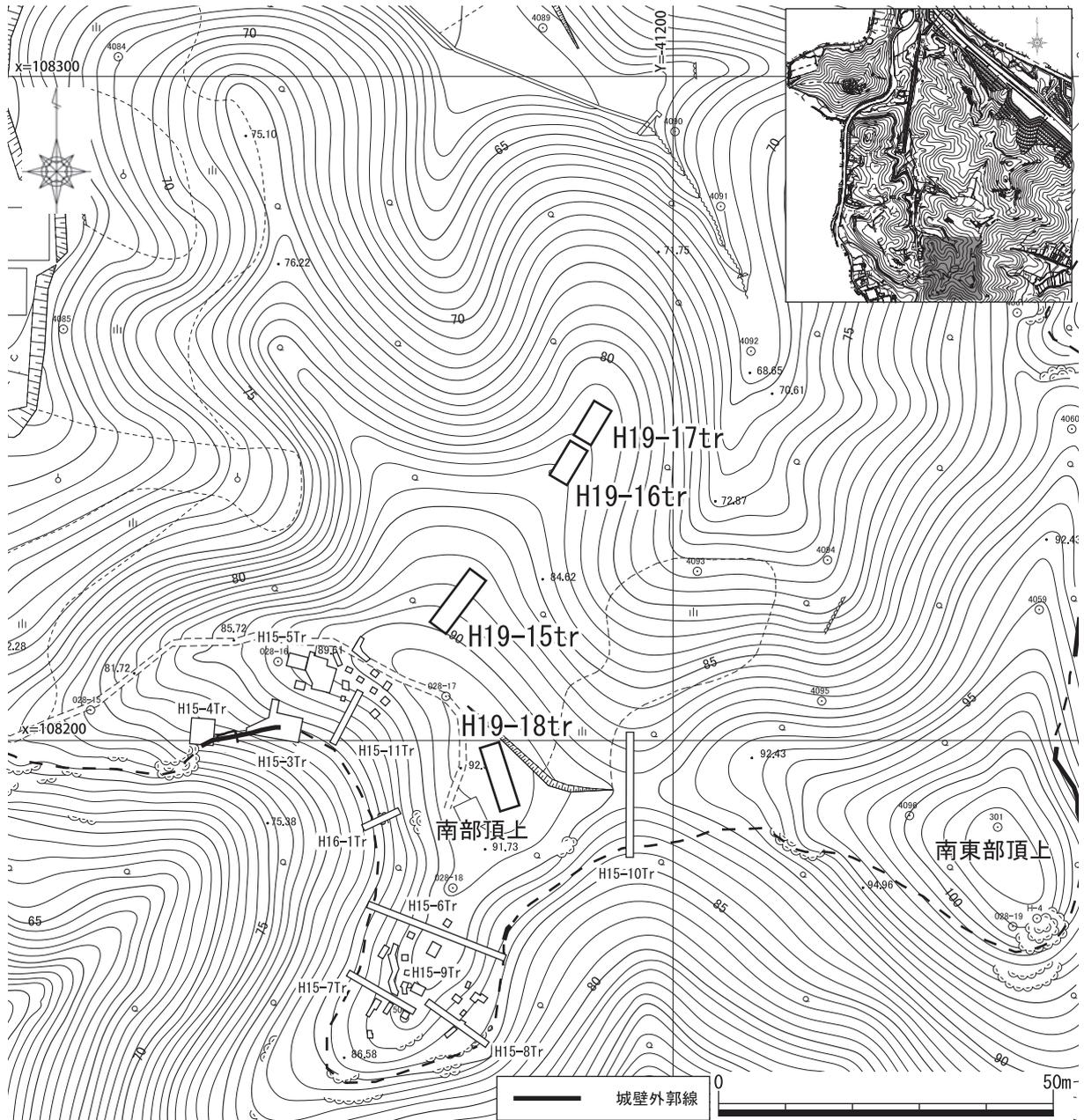


図 3 - 44 南部内部施設確認トレンチ周辺地形図

(1) H19 - 15 トレンチ (図 3 - 45)

南部頂上から尾根に向かう斜面に設定した 3 × 10m の規模のトレンチで、標高は南が高く約 90m、北は約 87m である。5 ～ 10 cm 程度の厚さで堆積する表土（1 層）と厚さ 5 ～ 30 cm 程度で堆積する 2 層を除去したところで地山を検出した。なお、2 層にはビニール片が混入しており、現代の層であることが分かっている。

地山面（4 層）で、31 基の土坑と 2 条の溝を確認した。溝 1 はトレンチのほぼ中央を南北に延び、両端はトレンチ壁にかかる。幅は最大で 1.2 m を測り、深さは現状で 60 cm 程度である。溝 2 はトレンチ北端に位置し、幅はおおよそ 20 ～ 40 cm を測る。土坑はトレンチ全体に分布し、それらの平面形態・規模は多様であり、配置にも明確な規則性はみとめられない。これらの中には土器片がわずかに出土

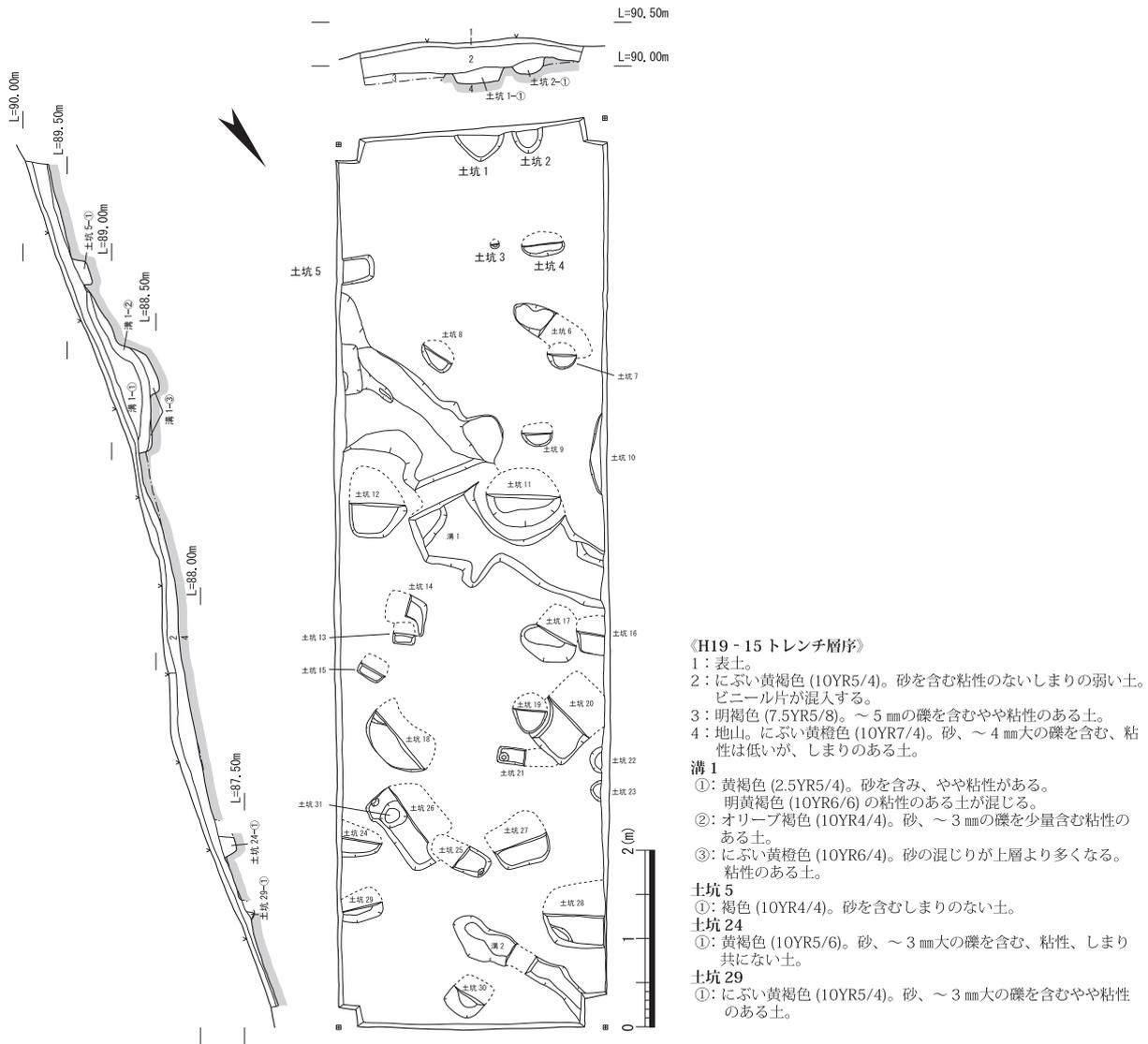


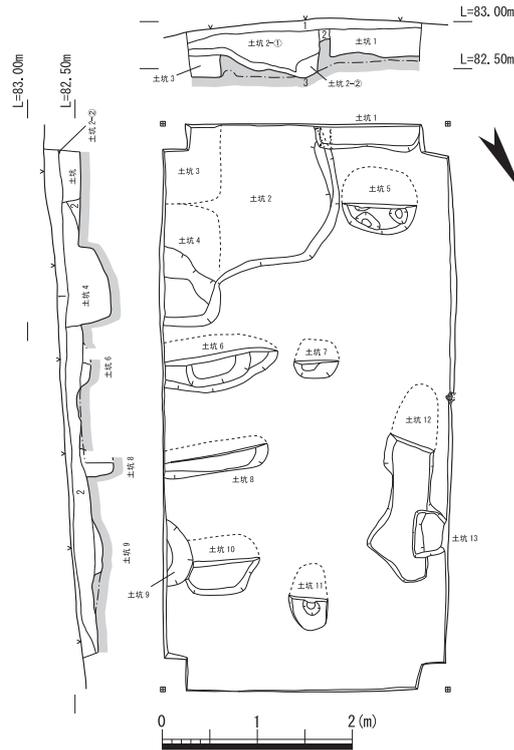
図3 - 45 H19 - 15 トレンチ平面および断面図

した遺構もあるが、ほとんどの遺構で遺物の出土はなかった。また、出土した土器片も細片のため、器種・時期等の判別は困難であるが、中には明らかに現代のものと思われる陶器片も含まれていた。

以上のように、遺構及び遺物からは、永納山城に確実に伴うと判断できる遺構は確認できなかった。

(2) H19 - 16 トレンチ (図3 - 46)

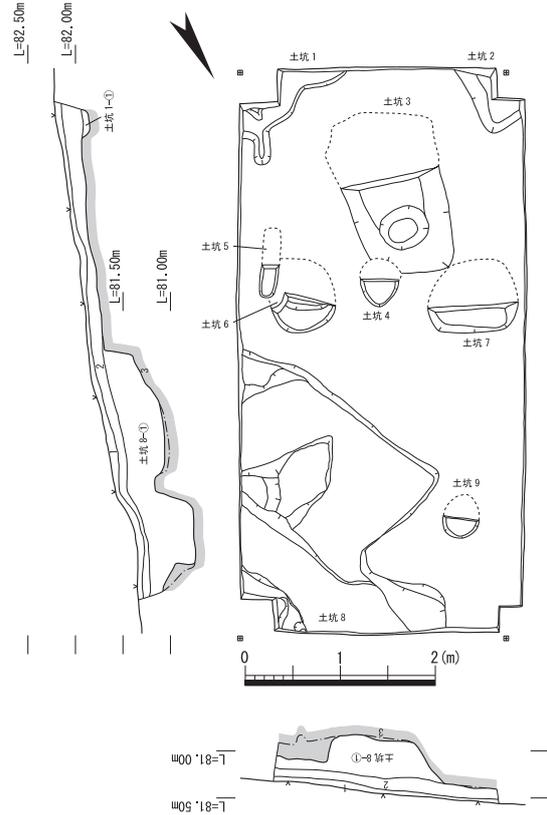
尾根下段の平坦面に設定した2カ所のトレンチのうち、山側に設定した3×6 mの規模のトレンチである。厚さ10～20 cm前後で堆積する表土を除去し、2層を検出した。2層では、トレンチ南側で2基の土坑(土坑1・2)を確認した。いずれもトレンチ外部まで続いており、正確な大きさは不明であるが、1辺2 m以上、深さ50 cm程度の規模を有し、ほぼ垂直に直線的に掘り込まれている。なお、土坑1の床面からプラスチック製のブラシの柄が出土したため、土坑1は現代のものと考えられる。さらに地山面では、11基の土坑を検出し、中には規則的に並ぶかのように見える長さ1.5～2 mの楕円形の土坑3基(土坑6・8・10)も存在するが、全体的には形態、規模ともに規則性は見られない。



《H19 - 16 トレンチ層序》

- 1: 表土。
- 2: にぶい黄褐色 (10YR5/4)。砂を含む、やや粘性はあるがしまりのない土。
- 3: 地山。浅黄橙色 (10YR8/4)。しまりの弱い岩盤風化した土
- 土坑 1
 - ①: 明黄褐色 (10YR6/6)。砂が多く、5 mm 大の礫もわずかに含む、しまりのない土。黄褐色 (10YR7/6) 砂質土がブロック状に混じる。
- 土坑 2
 - ①: 明黄褐色 (10YR7/6)。ブロック状に地山の土が入る砂質土。
 - ②: にぶい黄褐色 (10YR5/4)。～ 5 mm 大の礫を含む、ややしまりのある砂質土。
- 土坑 3・6・8・9
 - ①: にぶい黄褐色 (10YR6/4)。しまりの弱い砂質土。
- 土坑 4
 - ①: にぶい黄褐色 (10YR5/4)。砂を多く含む。

図 3 - 46 H19 - 16 トレンチ平面および断面図



《H19 - 17 トレンチ層序》

- 1: 表土。
- 2: 褐色 (10YR4/4)。砂、～ 5 mm の礫をわずかに含む、しまりのない土。
- 3: 地山。浅黄橙色 (10YR8/4)。かたくしまる岩盤風化した土。
- 土坑 1
 - ①: にぶい黄褐色 (10YR6/4)。砂質土。
- 土坑 8
 - ①: オリーブ褐色 (2.5Y4/3)。明黄褐色 (10YR7/6) の砂がブロック状に混じる、しまりのない砂質土。

図 3 - 47 H19 - 17 トレンチ平面および断面図

これらの土坑からは遺物がいっさい出土しなかったため、その時期は不明である。しかし、トレンチ南西隅で現代の糸切鋏が地山に刺さった状態で出土したことから、過去に地山面までの改変を受けていることは明らかであり、これらの土坑も新しいものである可能性が高い。

(3) H19 - 17 トレンチ (図 3 - 47)

H19 - 16 トレンチの 1 m 北側に設定した 3 × 6 m の規模のトレンチである。厚さ 5 cm 程の表土、5 ～ 20 cm 堆積した 2 層を除去したところ、固くしまった地山を確認した。

地山面では、9 基の土坑を検出した。トレンチの北側には、H19 - 16 トレンチ同様に垂直に掘り込まれた土坑 (土坑 8) があり、トレンチ外まで延びるため正確な規模は不明であるが、少なくとも 2 m 四方以上の規模となる。また、トレンチ南半部でも、規模・形態もさまざまな土坑を確認した。

これらの土坑から遺物は出土しておらず、その性格や時期は不明である。しかし、H19 - 16 トレンチで検出した土坑と掘り方が類似することから、ほぼ同時期の新しい遺構と考えられる。

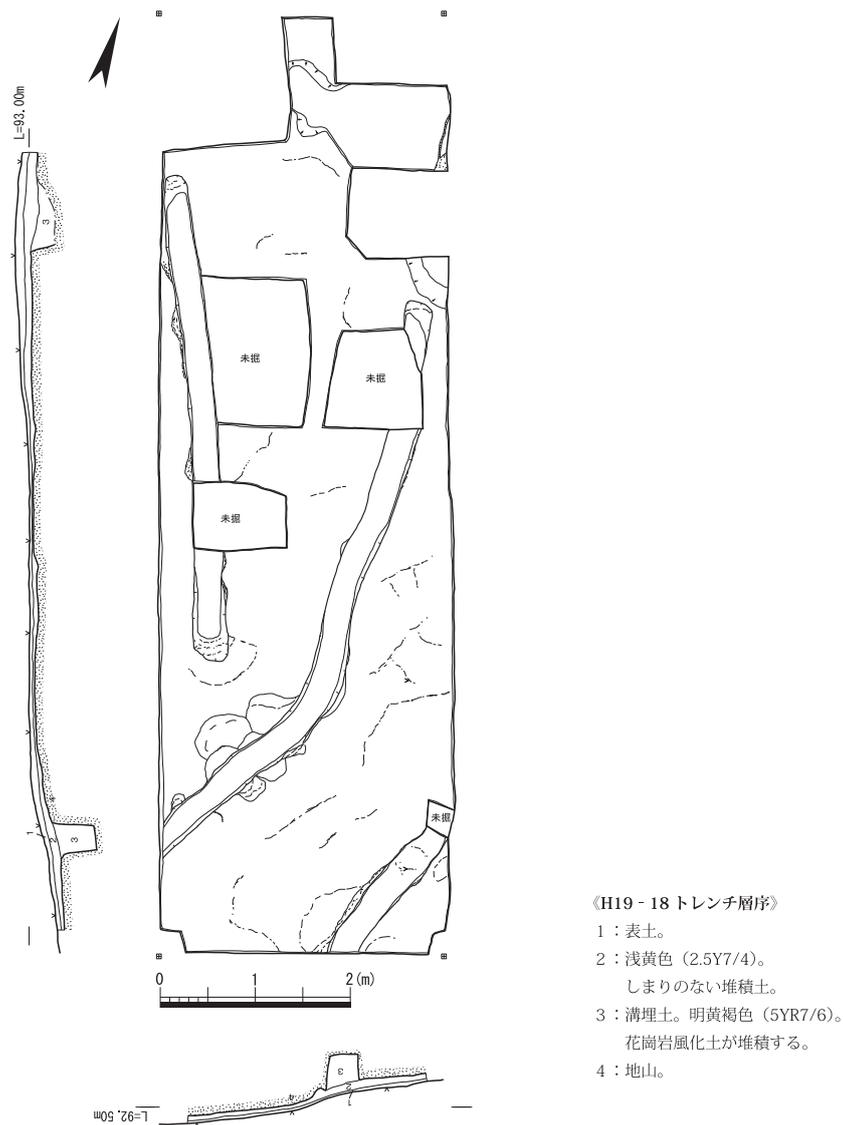


図3 - 48 H19 - 18 トレンチ平面および断面図

(4) H19 - 18 トレンチ (図3 - 48)

本トレンチは南部頂上の平坦面に、東西に長軸をとり 10 × 3 m の規模で設定した。表土下には、花崗岩風化土が同様に 10 cm 程度の厚さでトレンチ全体に堆積していたが、これらを除去するとすぐに地山となった。

地山には、幅 30 cm、深さ 40 cm 程度の溝を 3 条検出した。溝側面は上部から底面に向け若干すぼまりながら、ほぼ直線的に削平されている。また、底面は平坦に仕上げられ、溝端部については確認できる部分では、小口側から斜めに掘り込まれる。これらの溝は、平成 15 年度に本トレンチ周辺で検出した溝と一連のものと理解できるが、前回同様に溝の時期を示す遺物は出土しなかった。

5 南西部の調査 (図3 - 49)

南西部頂上から中央の谷に向かっては、東にのびる小さな尾根が存在する。この尾根は、先端部付近に比較的広い平坦面を有する。また、中央の谷に向かって尾根の北側・東側斜面は急傾斜で落ち込むが、南側斜面はなだらかな傾斜で、現在も果樹や樹木の苗が栽培されている。この尾根に、永納山城に関連する内部施設の存在を想定して、東西に長軸をとり3×10mの規模のトレンチ (H19 - 20 トレンチ) を設定し、調査を行った。また、南西部頂上から南に下る尾根にも比較的広い平坦面にも1カ所、トレンチを設定した (H19 - 19 トレンチ)。

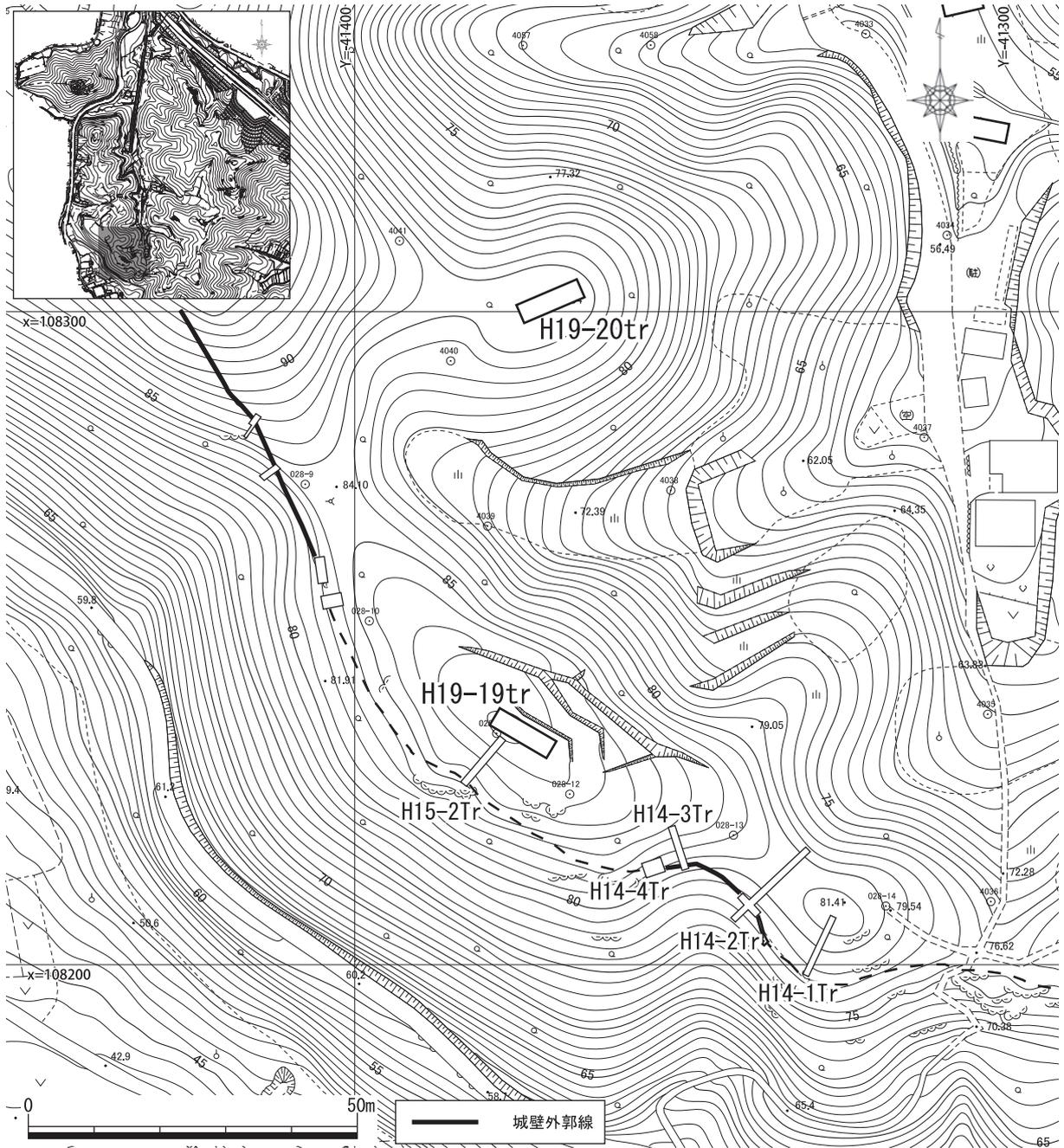


図3 - 49 南西部内部施設確認トレンチ周辺地形図

(1) H19 - 19 トレンチ (図3 - 50)

本トレンチは南西部尾根上に位置する比較的広い平坦面に、東西に長軸をとり 10 × 3 m の規模で設定した。表土は全体的に薄く堆積していた。表土下は、トレンチ中央付近では地山である岩盤が広がり、その周辺には花崗岩風化土 (2層) が 5 cm 程度の厚さで薄く堆積していた。2層を除去すると、トレンチ中央同様に地山を検出した。

地山には、幅 30 cm、深さ 40 cm 程度の溝を 3 条検出した。1 条はトレンチ西壁沿いに位置し、緩やかなカーブを描く。その他の 2 条はトレンチ中央から東側に位置する。中央の 1 条は東西方向に直線的に掘り込まれ、東壁沿いの 1 条は緩やかなカーブを描く。これらの溝が他のトレンチで検出したものと異なる点は、通常、尾根斜面に並行して造られている溝が、本トレンチでは、軸に統一性が無く、さらに東側で検出した 2 条の溝が接合する点である。しかし、これらの違いが一体何に起因するのかは不明である。

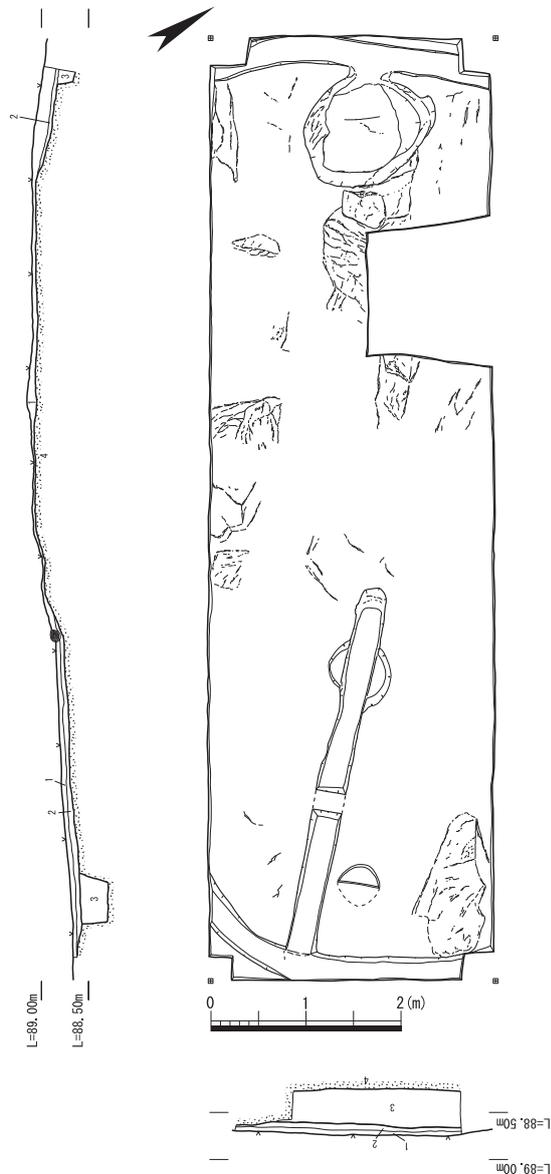
なお、溝の構造は、溝側面は上部から底面に向け若干すぼまりながら、ほぼ直線的に削平される点、底面は平坦に仕上げられる点等で、これまでに検出した溝と同様である。

以上のように、本トレンチでは、明確に永納山城に伴う遺構・遺物は確認できなかった。

(2) H19 - 20 トレンチ (図3 - 51)

本トレンチは、南西部頂上の東に位置する小さな尾根上に、東西に長軸をとり、10 × 3 m の規模で設定した。表土及び 5 ~ 30 cm 程の厚さで堆積する岩盤風化土 (2層) を除去すると、地山を検出した。地山では、固い岩盤が露出している西側を除いて、19 基の土坑を確認した。

これらの土坑は、平面形が長方形のものが多く、柱痕もみられず、柱穴と考えられる遺構は確認できなかった。また、土坑には、明確な規格性や並びもみとめられないことから、柱穴であったとしても、



《H19 - 19トレンチ層序》
 1:表土。
 2:褐色(7.5YR4/4)。岩盤風化土。しまりなく、ボサボサした土。
 3:溝埋土。明黄褐色(10YR6/6)。花崗岩の風化土が堆積する。
 4:地山。

図3 - 50 H19 - 19 トレンチ平面および断面図

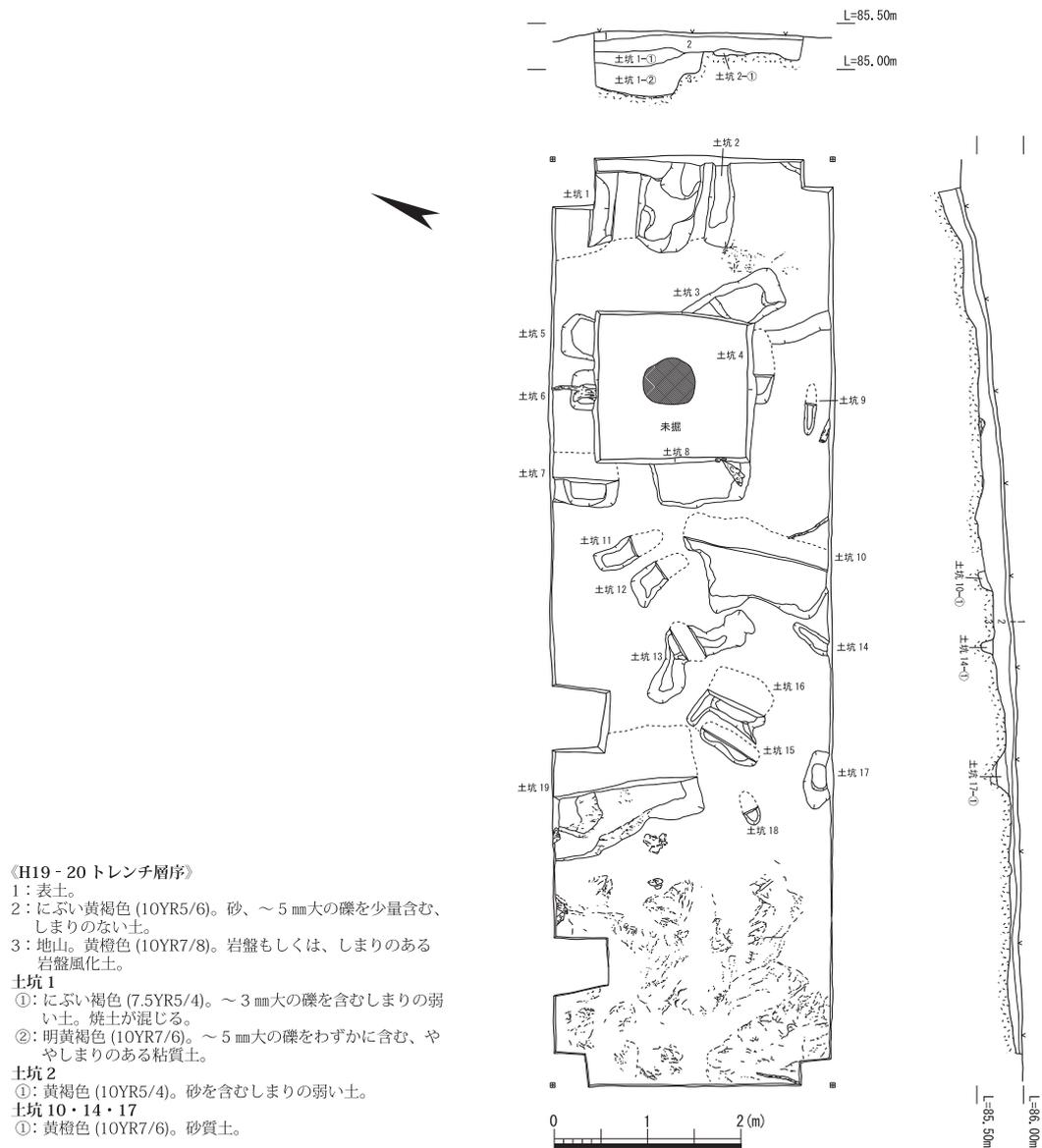


図 3 - 51 H19 - 20 トレンチ平面および断面図

何らかの建物が建っていた可能性は低い。

なお、トレンチ東端では、長さ 1.5m、幅 1 m (確認部分)、深さ 50 cm 程度の土坑 (土坑 1) を確認した。この土坑 1 は、2 層に分層でき、上層には焼土塊が混じっていた。また遺構検出面も焼けて赤く変質していた。

しかし、土坑 1 を含め、トレンチ内から遺物の出土はなく、確実に永納山城に関連すると判断できる遺構は確認できなかった。

6 西部の調査 (図3-52)

H19-3トレンチから約50m北東に、中央の谷に向かって伸びる尾根が存在する。調査前の現地踏査では、平坦面は確認できるものの、雑草が生い茂っているために地形の現状を把握することは困難であった。草刈後に、みかんの木や尾根中央に一列に並べて植えられた樹木を確認した。

このような状況から、この平坦面が過去に改変を受けたことは明らかではあったが、内部施設の存否を確認するために、尾根筋と平行に2か所のトレンチを設定した。規模はいずれも3×10mで、東(谷側)からH19-21・22トレンチとして調査を進めていった。

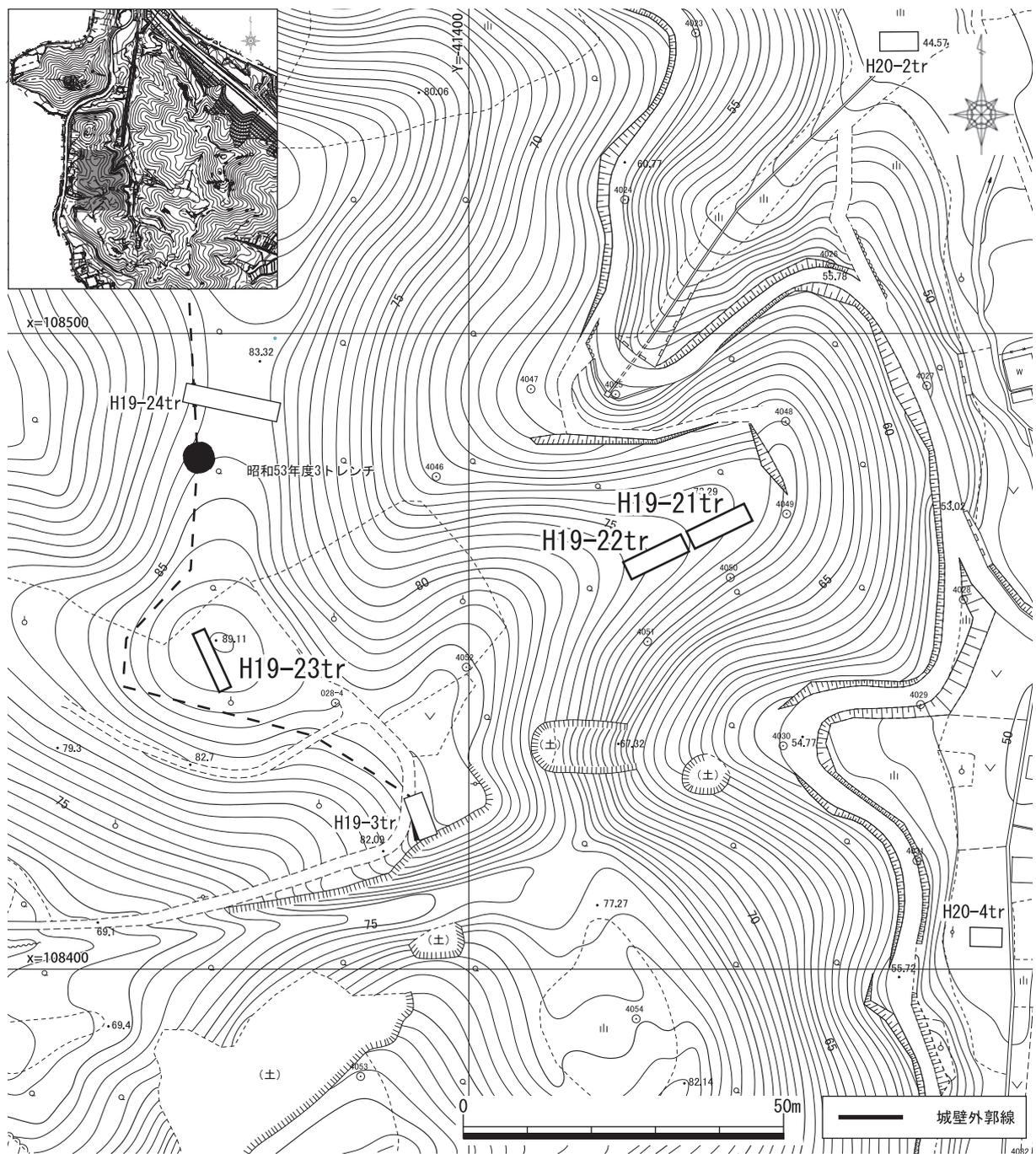


図3-52 西部内部施設確認トレンチ周辺地形図

また、H19 - 3 トレンチから北東に 60m の丘陵から、その北の鞍部（後述の H19 - 24 トレンチ周辺）にかけては、平成 11 年度に行われた東予市遺跡詳細分布調査で、「永納山西遺跡」として報告されている場所である。特に丘陵部は西側斜面の土塁周辺で須恵器片が採取されたことなどから、古墳の存在が示唆されている。

そこで、この丘陵頂上部に、永納山城関連施設と共に、古墳の有無を確認する目的で、H19 - 23 トレンチを設定した。

（1）H19 - 21 トレンチ（図 3 - 53）

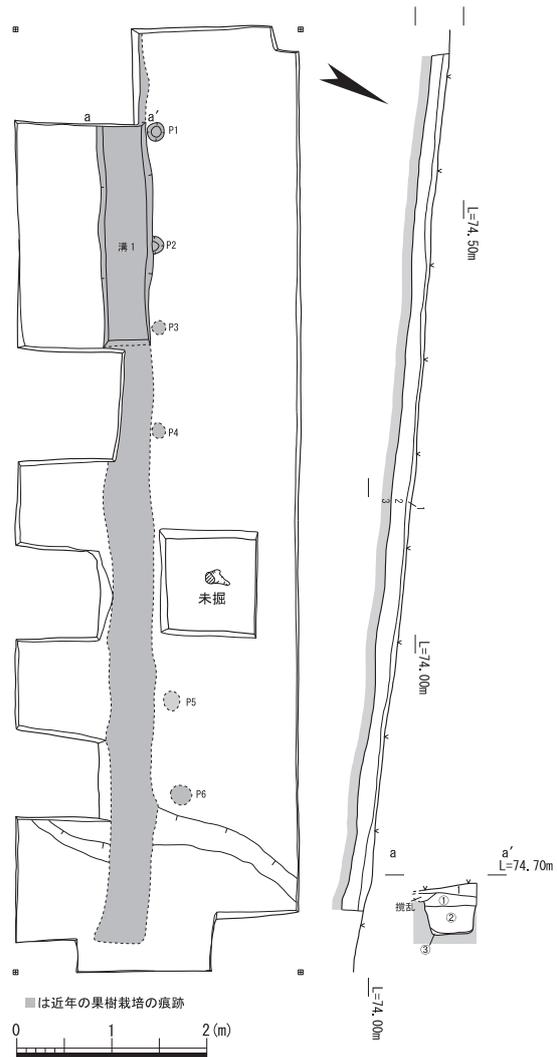
5 ～ 10 cm 程堆積した表土（1 層）、岩盤風化土（2 層）を除去したところ、地山（3 層）を確認し、地山面では、1 条の溝と 6 基のピットを検出した。溝は幅約 50 cm で、トレンチの中央やや南寄りを東西に直線的に走り、この溝に沿うように、北側に直径 10 ～ 20 cm 程度の小円形のピットが一行に並ぶ。トレンチ西側で溝を完掘したところ、他のトレンチの溝と同様に断面コの字状の溝であることを確認した。なお、溝の時期については、調査中に地権者から、このような溝は果樹を植える際の掘り込みであるという助言を得た点、さらに溝埋土中より筆筒の取手金具が出土した点から現代のものであることが確実となった。

以上のように、本トレンチでは永納山城に伴う遺構や遺物は確認できなかった。

（2）H19 - 22 トレンチ（図 3 - 54）

H19 - 21 トレンチの 1 m 西側に設定したトレンチである。厚さ約 5 cm の表土（1 層）、厚さ約 20 cm の岩盤風化土（2 層）を除去したところ、地山（3 層）を確認した。地山面で H19 - 21 トレンチと一連のものと考えられる溝 1 条と 8 基の小円形ピットを検出した。なお、これらの遺構およびトレンチからは遺物が出土しなかった。

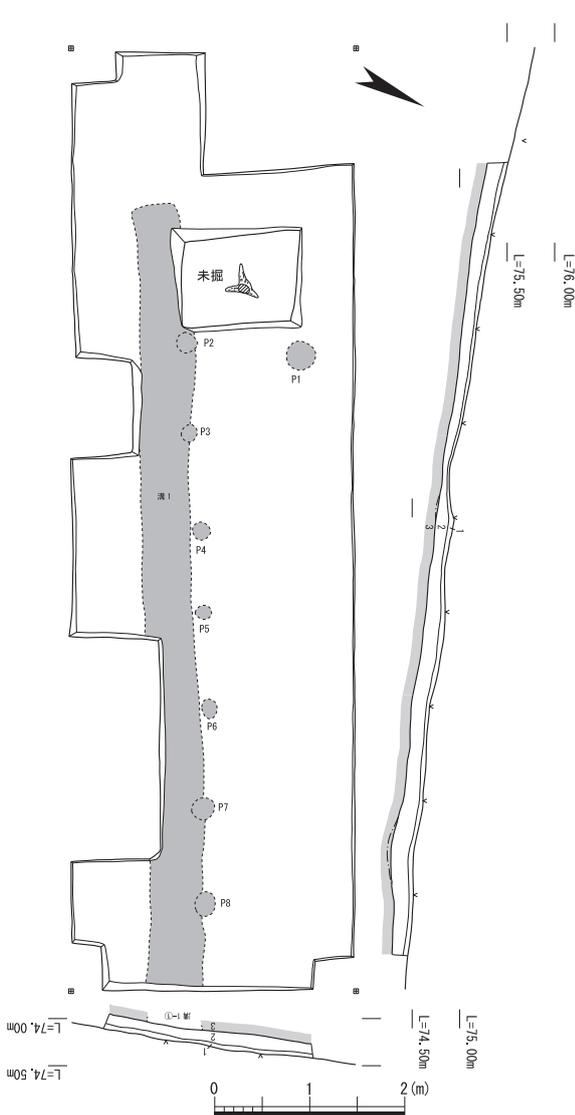
以上のように、本トレンチでは、近現代の開墾の痕跡が残るのみで、永納山城に伴う遺構は確認できなかった。



《H19 - 21 トレンチ層序》

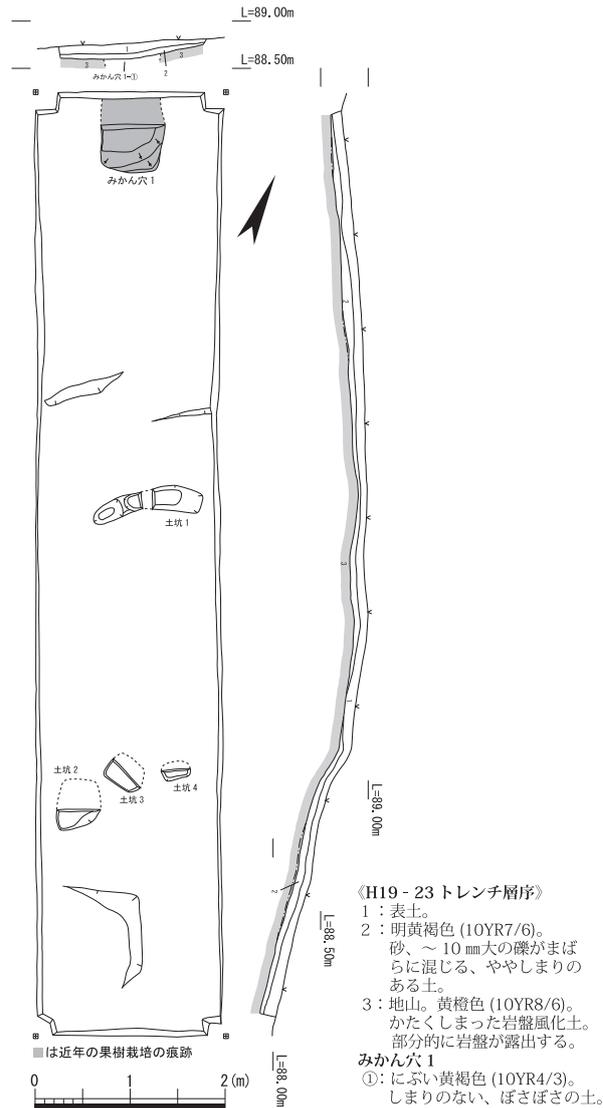
- 1：表土。
 - 2：にぶい黄橙色 (10YR6/4)。5 mm 大の礫を含む粘性のない土。
 - 3：地山。浅黄橙色 (10YR8/4)。部分的にしまりのある岩盤風化土。
- 溝 1
- ①：浅黄橙色 (10YR8/3)。しまりのない、ぼろぼろとした土。
 - ②：にぶい黄橙色 (10YR7/3)。～ 10 mm 大の礫を含む、しまりのない土。
 - ③：黒褐色 (10YR 3/2)。腐葉土。

図 3 - 53 H19 - 21 トレンチ平面および断面図



《H19 - 22 トレンチ層序》
 1：表土。
 2：にぶい黄褐色 (10YR6/4)。5 mm 大の礫を含む、粘性のない土。
 3：地山。浅黄橙色 (10YR8/4)。部分的に強くしまる岩盤風化土。
 溝 1
 ①：にぶい黄褐色 (10YR7/3)。H19-21 トレンチ溝②層に対応。
 単筒の取手金具検出。

図 3 - 54 H19 - 22 トレンチ平面および断面図



《H19 - 23 トレンチ層序》
 1：表土。
 2：明黄褐色 (10YR7/6)。砂、～ 10 mm 大の礫がまばらに混じる、ややしまりのある土。
 3：地山。黄橙色 (10YR8/6)。かたくしまった岩盤風化土。部分的に岩盤が露出する。
 みかん穴 1
 ①：にぶい黄褐色 (10YR4/3)。しまりのない、ぼさぼさの土。

図 3 - 55 H19 - 23 トレンチ平面および断面図

(3) H19 - 23 トレンチ (図 3 - 55)

5～15 cm 程度堆積した表土 (1 層)、2 層を除去すると、浅いところでは表土より 15 cm 程の深さで地山 (3 層) を確認した。地山は部分的に岩盤が露出しており、この面で 4 基の土坑、1 基のみかん穴を検出した。

土坑には短い溝状もの (土坑 1) と方形のもの (土坑 2～4) とがみられる。土坑 1 は幅 20 cm、長さ 1.2m、深さ 10～20 cm の規模で、土坑 2～4 の規模は 1 辺 30～50 cm、深さ 10 cm 前後となるが、いずれの土坑埋土からも遺物は出土せず、性格・時期共に不明である。

以上のように本トレンチでは、永納山城に伴う遺構は確認できなかった。

6 谷低地部の調査（図3 - 56）

中央の谷部は、永納山城城内の尾根及び斜面に何らかの施設が存在した場合、そこで使用された遺物が堆積している可能性が高い場所である。また谷あいの平坦地には、現在も民家が残っており、古代においても建物が存在し、地中にはそれに伴う遺構が現存していることも想定できる。また、周辺の丘陵部に建物が存在していたならば、城内で使用されていた遺物がこの低地部に集積していることも考えられた。そこで、遺構・遺物の確認を目的としてトレンチを設定した。

調査に先立ち、戦後の開拓団入植の頃からの状況を知る所有者から聞いた話によると、当初この谷は水田として利用していたが、度重なる大規模な土砂災害を被り、畑作に切り替えたとのことであった。また、現地は土砂崩れによる流土の堆積と、畑作切り替え時の造成により現在の高さとなっているが、入植当初の地表面は2～3m低かったそうである。この2～3mという数値自体は主観的なものであろうが、現地表面が土砂災害や造成によるという事実は、調査実施に当たり大きな情報であった。

トレンチを5カ所に設定し、調査を実施したが、実際に掘り下げを進めると、どのトレンチにおいても湧水があり、限られた範囲での確認作業を行わざるを得ない状況となった。

各トレンチの状況は後述するが、結果として、谷内部では、現在の湧水点が現地表面から1m内外の高さにあることが明らかとなった。この高さは、当然地山よりも高く、造成土や崩落土の堆積する段階であり、地山確認のためには湧水層をさらに掘り下げていく必要があった。しかし、これらの層の中には砂が厚く堆積する場合もあり、湧水による壁面の崩落等の危険防止のため、確実に地山と判断できる層までの掘り下げを行えなかった。したがって、谷内部の状況については、課題が残された。

（1）H20 - 2 トレンチ（図3 - 57）

中央の谷の中で最も北に位置する。表土下には造成土・崩落土が厚く堆積し、現地表面から1.6m掘り下げた時点で壁から水がしみ出てきた。これ以降は、トレンチ北東部を部分的に掘り下げ、層の堆積状況の確認を行った。湧水層以下は、現地表面から約2.6mの深さまで掘り下げたが、依然として砂質土や粘質土が続き、明確な遺構面は確認できなかった。

このような中で、32層・34層は有機質を含む層であり、時代は特定できないものの、何らかの生活面であった可能性も残る。

（2）H20 - 3 トレンチ（図3 - 58）

トレンチ東側では、表土より約40cm掘り下げたところで暗渠を検出した。この暗渠を破壊しないよう、これ以降は掘り下げ範囲を西半部に縮小した。掘り下げを進めると、現地表面から約80cm下で、9層及び9層を掘りこむ攪乱層をトレンチ中央で検出した。攪乱層には漁労網が混じり、耕作に伴う鳥除けネットとして利用されていたものと考えられる。

表土から9層までの間には、旧水田層の可能性もある粘質土層（5層）を確認したが、このように下層で攪乱層を検出したことから、5層は戦後の開拓団入植後に利用された水田層であると判断できた。

なお、9層と前後するレベルで湧水がみとめられたため、10層検出面で一端精査を行い、これ以降は、

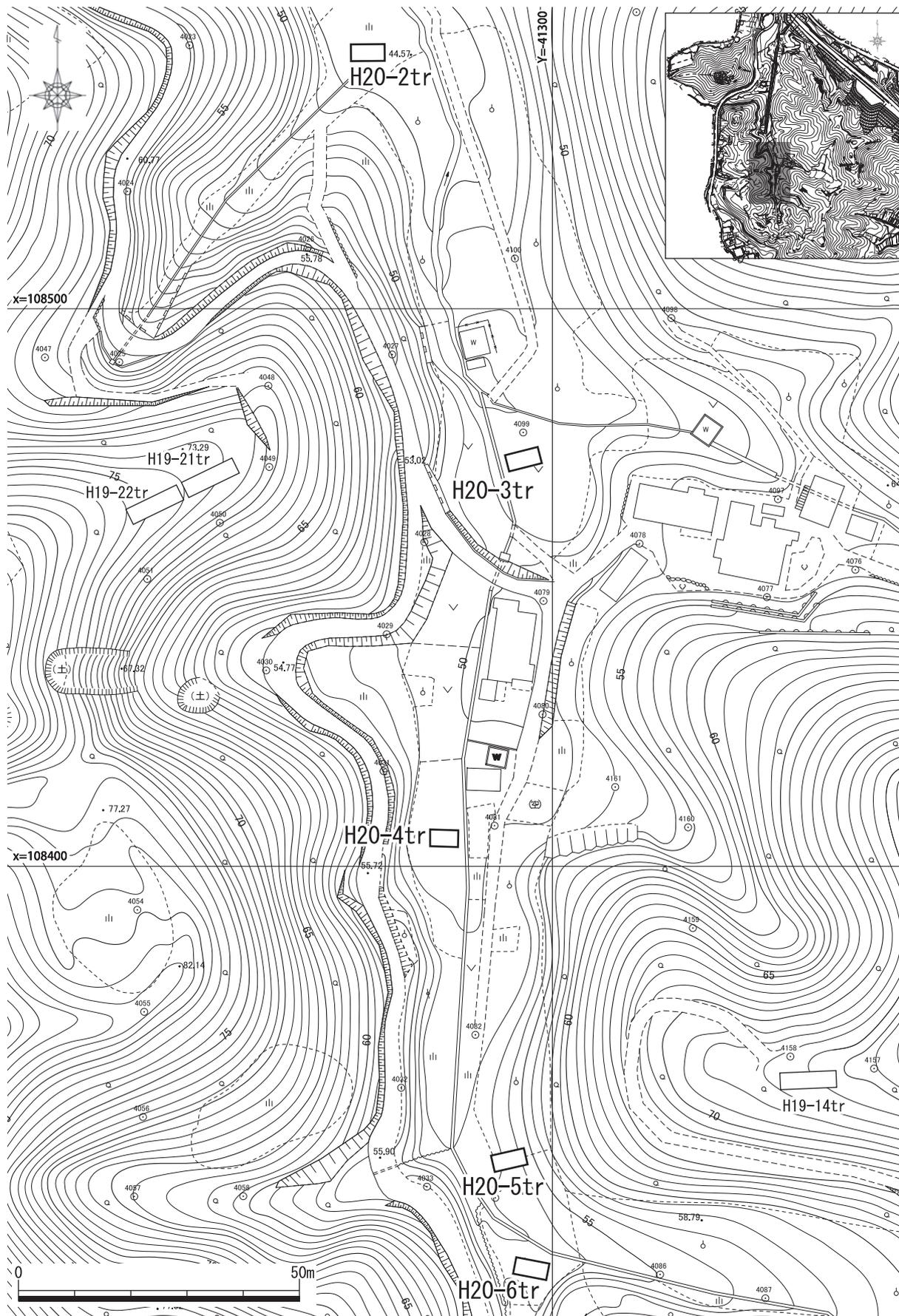
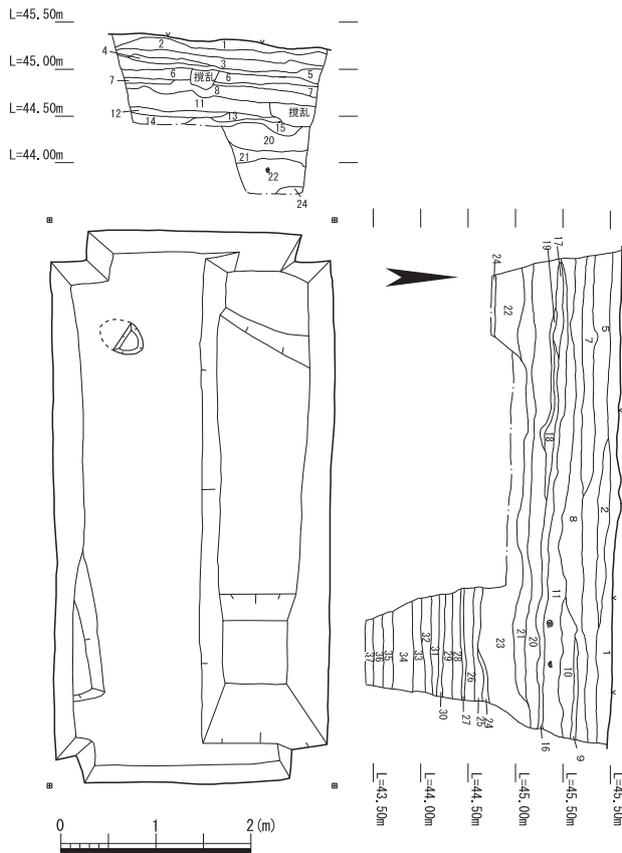


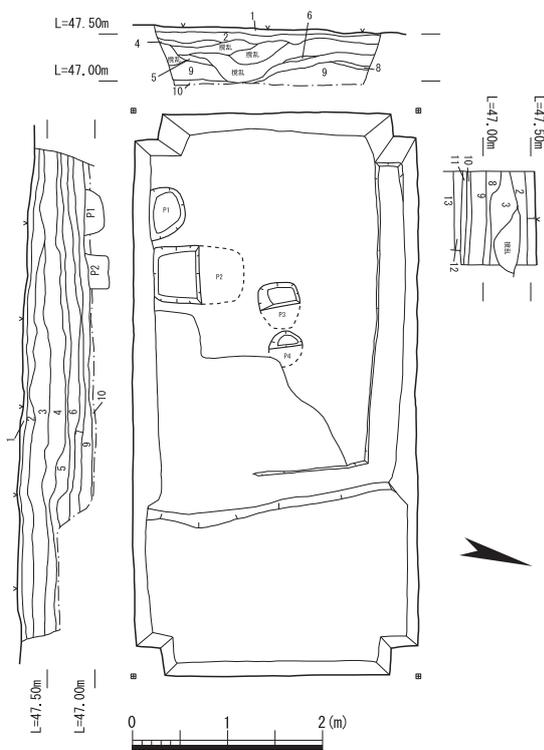
図3-56 谷低地部内部施設確認トレンチ周辺地形図



《H20 - 2 トレンチ層序》

- 1: 表土。
- 2: 褐色 (7.5YR4/6)。3～5 mm の礫をまばらに含む、粘性、しまりともに弱い。
- 3: 暗褐色 (10YR3/4)。砂、～3 mm の礫をまばらに含む、硬くしまる。
- 4: 暗褐色 (7.5YR5/6)。砂、～3 mm の礫をまばらに含む、粘性がなくきめ細かい。3 層より硬くしまる。
- 5: 褐色 (7.5YR5/6)。5～8 mm の礫を多量に含む、粘性がなくぼろぼろ崩れる。ブロック状に砂が入る。
- 6: 褐色 (7.5YR4/6)。もろく、ぼろぼろと崩れる砂質土。
- 7: 暗褐色 (10YR3/4)。砂を含み、もろくぼろと崩れるが、粘性あり。
- 8: 黄褐色 (10YR5/8)。硬くしまる砂層。上層は粒子が細かく、底面は 3～4 mm の礫が薄く堆積する。
- 9: 橙色 (5YR6/6)。きめ細かく、礫を含まない砂層。
- 10: 黄橙色 (2.5Y5/6)。～5 mm 大の礫を多く含む、弱い粘性を持つ。
- 11: 明黄褐色 (10YR6/8)。～3 mm 大、わずかに 50 mm 程度の礫を多く含む、硬くしまる土。トレンチ東側において拳～人頭大の石を多量に検出。
- 12: 黄褐色 (10YR5/8)。粗い砂層。
- 13: 褐色 (10YR4/6)。～3 mm の礫をまばらに含む、やや粘性があるがぼろぼろ崩れる。
- 14: 褐色 (10YR3/4)。ブロック状の砂、10～40 mm 大の礫をまばらに含む、若干粘性がある。
- 15: 明褐色 (7.5YR5/8)。粗い砂を含む、しまりのない。
- 16: 明黄褐色 (10YR6/8)。～5 mm 大の礫を含む粗い砂層。
- 17: にぶい黄褐色 (10YR5/3)。砂を含む弱い粘質土。
- 18: 黄褐色 (10YR5/6)。粗い砂層。
- 19: 明黄褐色 (10YR7/6)。ぼろぼろ崩れる細かい砂層。
- 20: 暗褐色 (10YR3/4)。～3 mm 大の礫をまばらに含むやや固い。
- 21: 明褐色 (7.5YR5/8)。～3 mm 大の礫、ブロック状に明褐色 (7.5YR5/8) 土を含む、粘性、しまりのある土。
- 22: 暗褐色 (10YR3/4)。多量の砂、オリブ褐色粘質土 (2.5Y4/6) をまばらに含む、やや粘性のある土。
- 23: 暗灰黄色 (2.5Y4/2)。～3 mm 大の礫を含む、強い粘質土。
- 24: 明黄褐色 (10YR6/8)。～5 mm 大の砂利層。
- 25: にぶい黄褐色 (10YR4/3)。～2 mm 大の砂質土。湧水層。
- 26: 明黄褐色 (10YR6/8)。～10 mm 大の礫を含む砂利層。
- 27: 黄褐色 (10YR4/3)。～2 mm 大の砂利層。
- 28: にぶい黄褐色 (10YR5/3)。～30 mm 大の礫層。10cm 大の礫も若干混じる。
- 29: 明黄褐色 (10YR7/6)。～10 mm 大の礫層。
- 30: 黄褐色 (10YR5/8)。弱い粘性のあるシルト層。
- 31: 暗灰黄色 (2.5Y4/2)。粘土層。水田層か？
- 32: 暗オリブ褐色 (2.5Y3/3)。～10 mm の礫を含む砂質土。有機物 (植物の根か) が混じる。
- 33: 暗灰黄色 (2.5Y4/2)。粘土層。水田層か？
- 34: オリブ褐色 (2.5Y4/4)。砂質土。有機物 (植物の根か) が混じる。
- 35: 黒褐色 (2.5Y3/2)。粘土。
- 36: 黒褐色 (2.5Y3/2)。～5 mm 大の砂利層。
- 37: 明黄褐色 (2.5Y7/6)。砂層。

図 3 - 57 H20 - 2 トレンチ平面および断面図



《H20 - 3 トレンチ層序》

- 1: 表土。
- 2: オリブ褐色 (2.5Y4/3)。耕作土。砂、～3 mm 大の礫を含む、やや粘性のある土。
- 3: にぶい黄褐色 (10YR4/3)。砂、～3 mm 大の礫の礫を含む。粘性弱い。橙色 (7.5YR7/6) のやや粘性のある土が混じる。
- 4: にぶい黄褐色 (10YR6/4)。細かい砂層。
- 5: にぶい黄色 (2.5Y6/3)。非常にきめ細かい粘質土。細かい砂が若干混じる。鉄分沈着層 (旧水田床土か?) 時期不明の土器片出土。
- 6: 灰黄色 (2.5Y7/2)。細かい砂層。土器片・石鏝出土。
- 7: 浅黄色 (2.5Y7/3)。～3 mm 大の礫を含む細かい砂層。砂粒は 6 層より粗い。
- 8: 浅黄色 (2.5Y7/3)。砂質土層。砂、～5 mm 大の礫を多く含む、粘性は低く、比較的硬くしまる。
- 9: 暗灰黄色 (2.5Y5/2)。砂、～4 mm 大の礫を少量含む、粘性の高い土。東部に暗渠検出。
- 10: にぶい黄色 (2.5Y6/4)。砂をごくわずかに含む、非常にきめ細かい粘質土。湧水あり。
- 11: 黄色 (2.5Y7/8)。～4 mm 大の砂利層。
- 12: 明褐色 (7.5Y5/8)。～8 mm 大の砂利層。強い湧水あり。
- 13: 灰白色 (2.5Y8/2)。砂層。～3 mm 大の礫を多く含む。

図 3 - 58 H20 - 3 トレンチ平面および断面図

トレンチ北西隅を部分的に断割り、層の堆積状況を確認するに留めた。

その結果、10層以下は粘質土層・砂礫層・砂層からなるが、時期の特定できる明確な遺構は確認できなかった。また10層以下は、さらに激しい湧水があり、それ以上の掘り下げは困難な状況となり、掘り下げを停止した。

(3) H20 - 4 トレンチ (図3 - 59)

表土下には、畑の耕作土や造成土・崩落土が厚く堆積する。現地表面から約1～1.3mの深さで確認した10層においてもビニールの肥料袋が検出しており、過去に水田や畑としての利用と土砂の崩落・堆積が繰り返されていたことがわかる。

トレンチ内は、現地表面から80cm程掘り下げた時点(7層)で湧水がみられたが、この10層検出面でさらに激しい湧水に見舞われた。そこで、以降はトレンチ北西端を部分的に掘り下げ、土層の堆積状況を確認することとした。その結果、現地表面から約1.6m掘り下げたところで、砂礫層を検出した。この層が地山であるのか、過去の土砂災害や造成による堆積層であるのかは判断できなかった。しかし、湧水のため、これ以上の掘り下げは行えなかった。

なお、本トレンチでは、明らかに現代のものと考えられる瓦・陶器片が出土した以外に遺物は確認できなかった。

(4) H20 - 5 トレンチ (図3 - 60)

本トレンチは、谷の中央を流れる水路の東側に位置し、トレンチ東側は丘陵から谷に向かってのびる尾根の先端斜面に位置する。表土を除去すると、水路側(西側)の平坦面に、果樹栽培に伴うと考

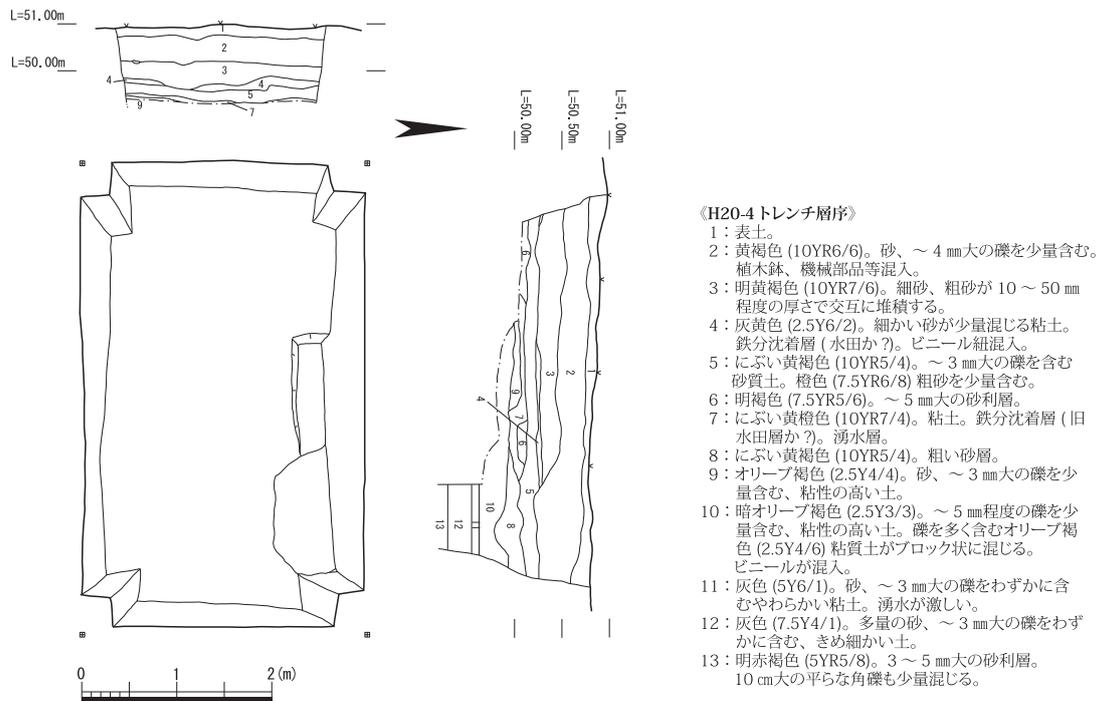


図3 - 59 H20 - 4 トレンチ平面および断面図

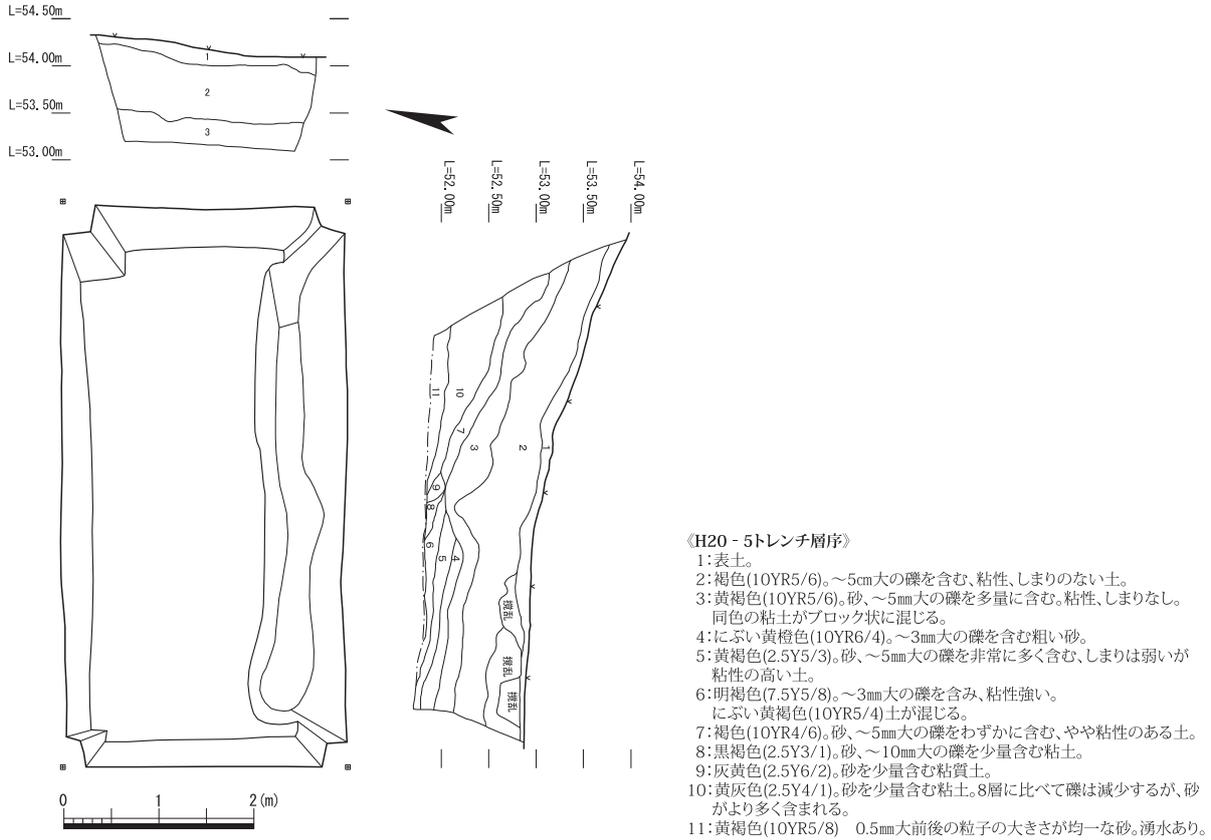


図 3 - 60 H20 - 5 トレンチ平面および断面図

えられる攪乱層を検出した。

トレンチ内の埋土は、斜面の傾斜に沿うように崩落土層が東から西に向け傾斜をもち厚く堆積する。現地表面から1m程度下で堆積する層の傾斜は若干弱まり、5層以下は粘性をもった層がそれぞれ15cm程度の厚さで堆積するようになる。

また、8層や9層のように人為的に混入されたような非常に粘性の強い土が、ごく限られた部分に見られることから、これらの層は開拓団入植後の造成による可能性が高い。しかし、11層検出段階で激しい湧水があったため、これ以上の掘り下げによる確認は実施できなかった。

なお、本トレンチでは、遺物は確認できなかった。

(5) H20 - 6 トレンチ (図 3 - 61)

本トレンチは、谷内部に設定したトレンチの中で最も南に位置する。3×6mの規模でトレンチを設定したが、西側は水路に近接するため、水路側1mは掘削を行わなかった。

表土を除去し掘り下げを進めたところ、トレンチ全体に造成土が厚く堆積している状況を確認した。現地表面から深さ80cm程度(2層～16層)までは、わずかに礫の混じる砂質土や粘質土が堆積していた。その下の17層は厚い砂層であり、この層で激しい湧水に見舞われ、壁面が崩落したため、これ以降はトレンチ東半部のみを掘り下げることとした。

しかし、その後、湧水は激しさを増すばかりであったため、現地表面から1.5m下げた時点で調査を停止した。17層以下は、粘質土と砂質土層・砂層が堆積する状況を確認したが、掘り下げを停止

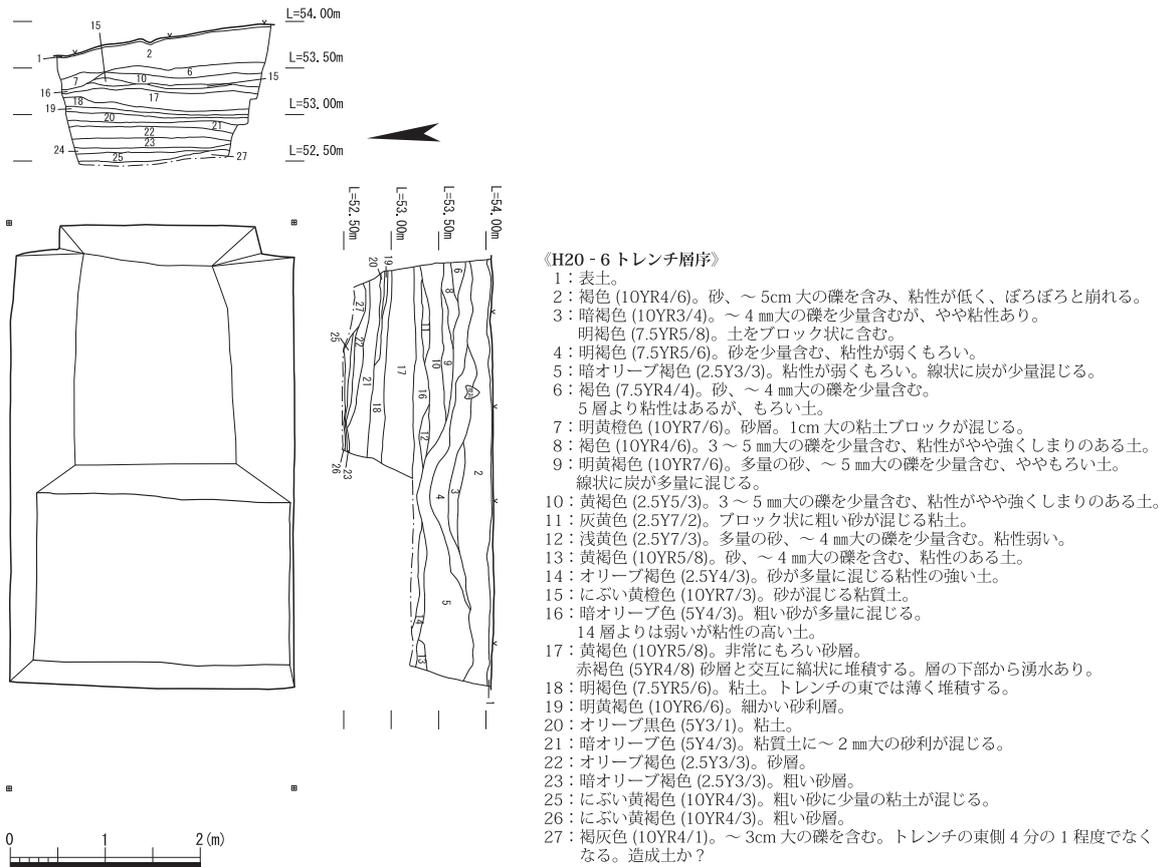


図3-61 H20-6 トレンチ平面および断面図

した面においてもなお部分的に造成土とも考えられる粘土ブロックを含む層（27層）を確認できたことから、地山面はさらに深い位置にあることが明らかとなった。

なお、本トレンチでは、造成土内から須恵器片が出土した。

7 南東部城内尾根緩斜面の調査（図3 - 62・63）

遺跡中央を南北に走る谷に向かい、八手状に延びる尾根の斜面の中で、南東部の尾根斜面は他の尾根斜面に比べ、緩やかな傾斜であり、比較的広い平坦面を有する。この傾斜に関しては、後世の開墾による影響も考えられるが、広く平坦な空間は、遺構の想定地として十分な候補地であった。

また、尾根筋は燧灘に面しており、結果として城門の存在は確認できなかったものの城門推定地もあり、この南東部は永納山城全体を周辺環境から捉えた場合に、重要な位置である可能性が高い場所であった。

そこで、この緩斜面に永納山城に関連する遺構の存在を想定し、確認調査を実施することとした。なお、トレンチは、東西6m×南北3mの規模で1カ所設定した。

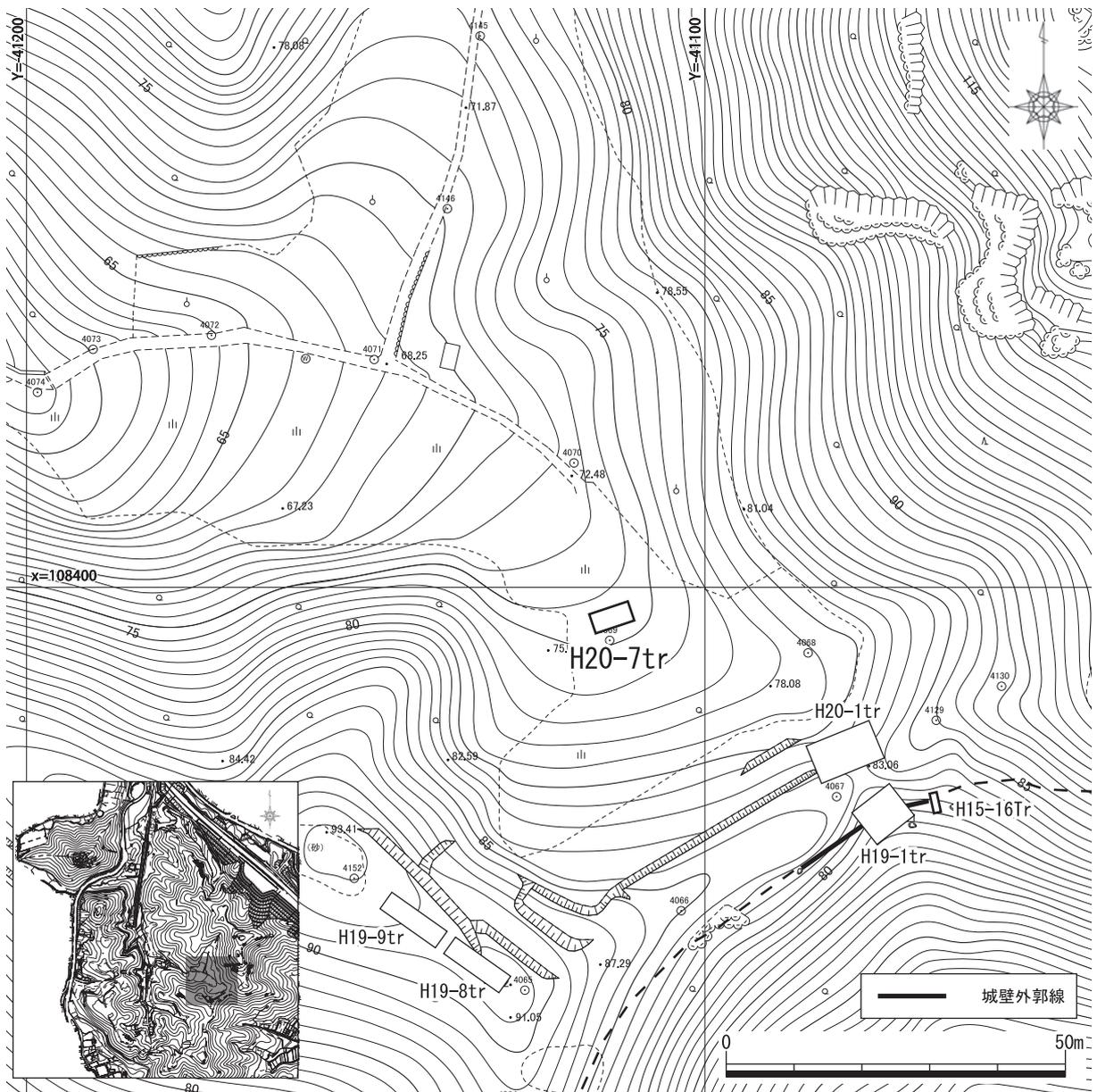


図3 - 62 南東部尾根緩斜面の内部施設確認トレンチ周辺地形図

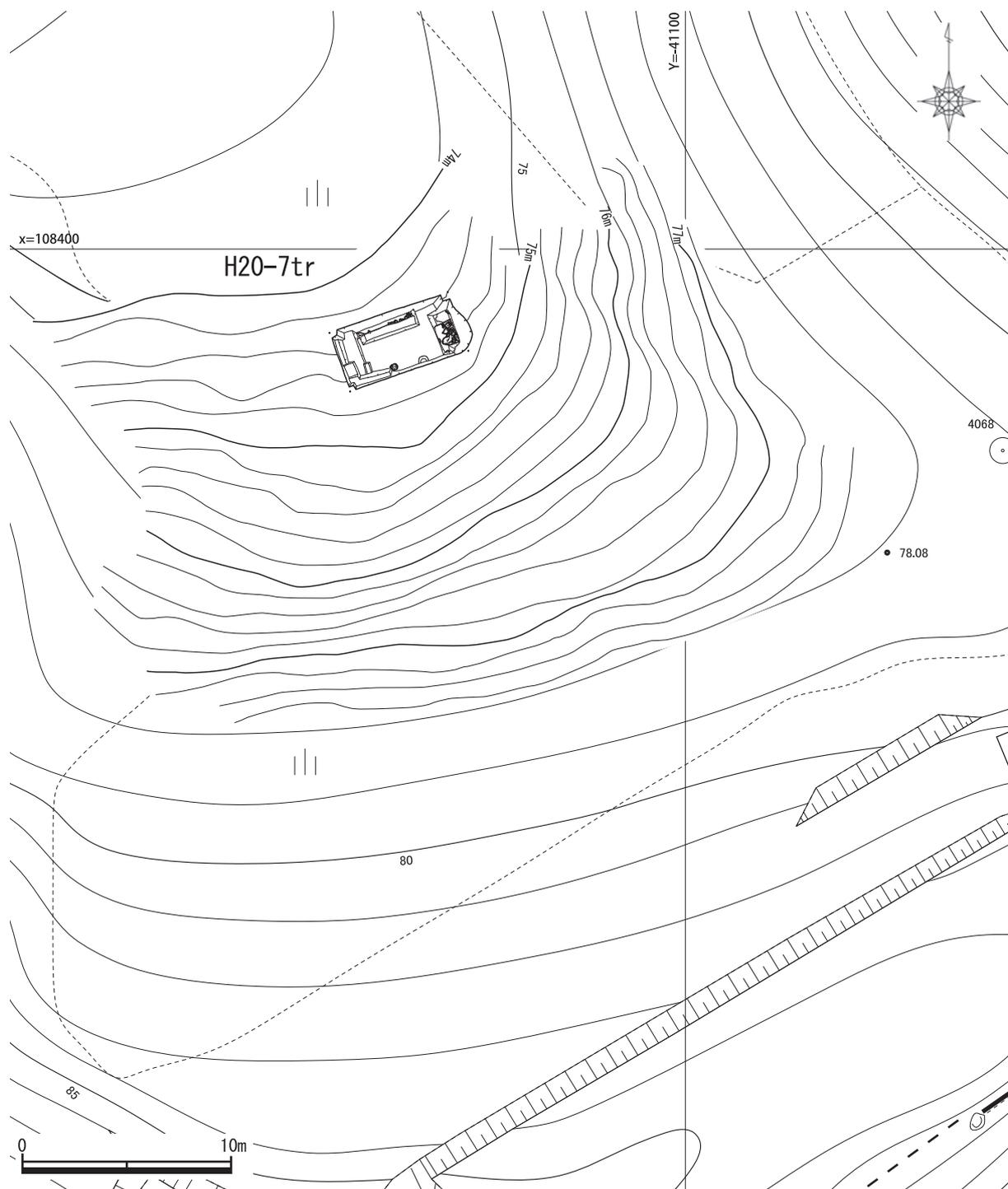


図3 - 63 H20 - 7トレンチ周辺地形図

(1) H20 - 7トレンチ (図3 - 64・65)

表土からおよそ1.5～1.8m下までは、戦後から近年に至るまでの間に畑地として利用された際の攪乱や、それ以前の過去の土砂崩落に伴う堆積層(2～13層)を確認した。

これらを除去すると、トレンチ全体に暗褐色粘質土(14層)を検出した。14層は、現地表面の傾斜に沿うように南から北に向け若干傾斜して下るものの、現在の斜面の傾斜と比較すると水平に近い堆積状況を示していた。また、比較的しまりのある土の具合は、上層の崩落土層とは明らかに異なり、

ある段階で整地された層、あるいは生活面として利用されていた層であることも十分考えられた。そこで慎重に精査を進めた結果、南壁沿いで、ピット1基（P1）と礫1個を検出した。P1は、径60cmの円形を呈し、埋土は粗い砂の混じる粘質土である。しかし、遺物は出土しなかったため、時期は



写真3-4 H20-7 トレンチ東壁沿いの集石

不明である。その西に検出した礫は、長辺36cmと小振りの石であるが、上面は平坦であり、何らかの加工がなされている可能性もあった。そこで、東西に軸をとって礫の左右を断割り、礫と14層との関係を調査したが、礎石を据えるための掘り方は確認できず、人為的に置かれた可能性は低いと判断した。なお、14層では、精査中にトレンチ中央から須恵器胴部片が1点出土した。

これより下層については、13層までの崩落土の大半が砂層であり、調査中にも数度壁面が崩壊する事態が発生したことから、全体の掘り下げを行うことは危険と判断し、トレンチの北・東壁沿いを部分的に掘り下げ、14層以下の層の堆積を確認することとした。

その結果、いくつかの所見を得ることができたので、以下に述べていく。

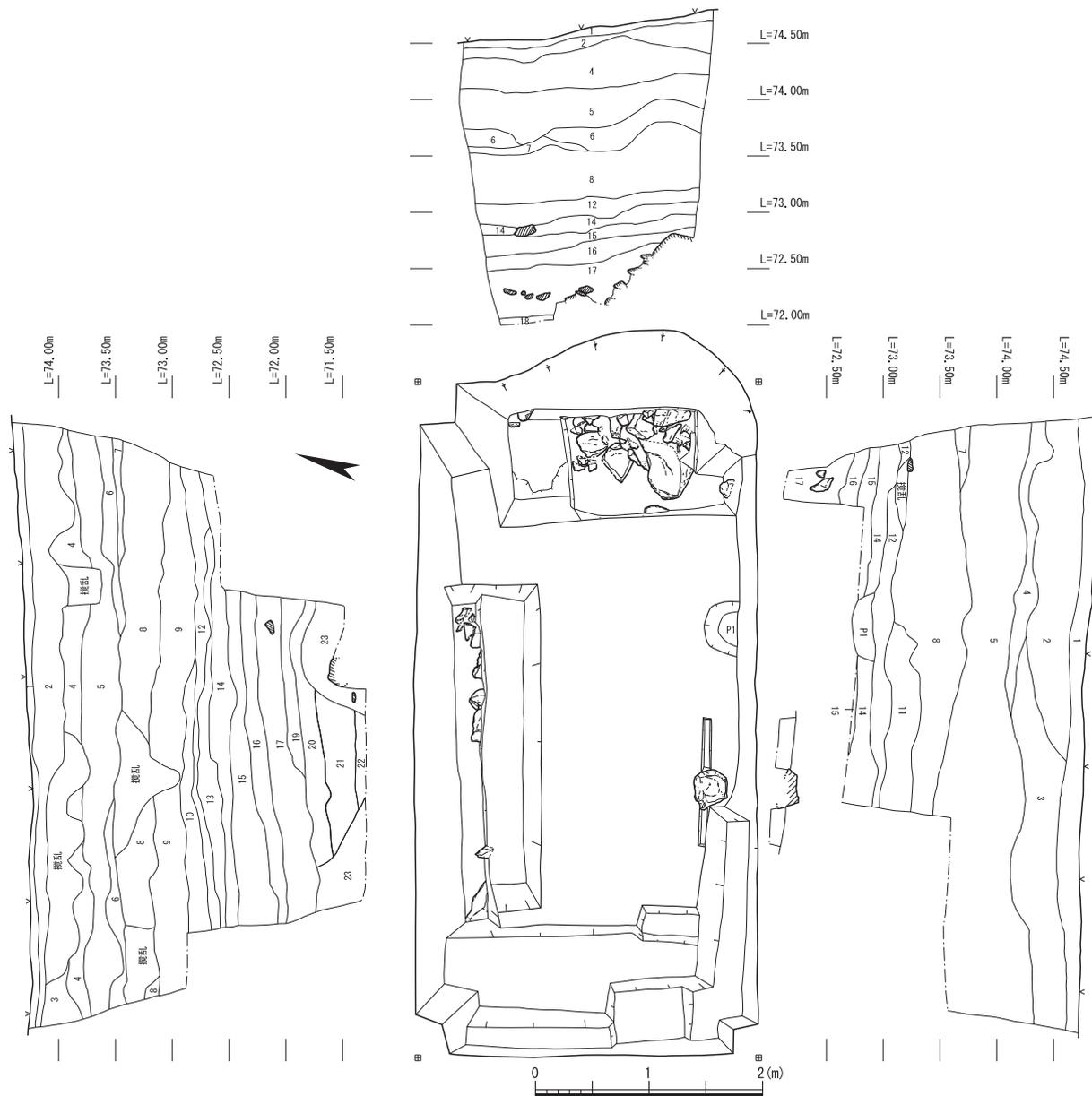
まず14層下には、14層同様に暗褐色粘質土からなる15層を検出した。15層は、北・東両壁で確認でき、トレンチ全体に広がる可能性も高く、14層同様に安定した層である。本層では、北壁沿いの断割りで、打製石鏃が2点出土している。さらに、16層、17層を除去していく段階で、東壁沿い及び北壁沿い断割りの東部で、拳大～60cm以上に及ぶ礫が堆積している状況を確認した。これらの礫の堆積状況には規則性が見られないことや、細かく割れたようなものも見られることから、人工的に積まれたというよりも、何らかの理由で崩れたものが堆積したと考えられる。

これらの礫の評価については、本来この辺りに積まれていたものがその場で崩れた可能性、あるいは周囲の尾根沿いにあったものが流れてきた可能性等が考えられる。

続いて、北壁沿いでは、断面観察上においては、23層を掘り込むように堆積する砂層（21・22層）を確認した。しかし、これが自然流路のようなものであるのか、土坑のような掘り込みであるのかは現段階では不明である。

以上のように、本トレンチでは、14層以下で安定した層の検出、集石の検出等、これまでの内部施設確認トレンチとは異なった状況が明らかとなった。これらが永納山城と関連する可能性もあるが、部分的なトレンチ調査では、情報量の限界から、得られた事実に対する正確な評価を下すことができない。各層の時期に関しても、数点の遺物で判断するには危険が伴い、現段階では不明と言わざるを得ない。

今後は、トレンチを大幅に拡張して調査を行い、周辺の状況も明らかにした上で土層・遺構の性格や時期を評価していく必要がある。



《H20 - 7トレンチ層序》

- 1: 表土。
- 2: にぶい黄褐色(10YR6/4)～橙色(10YR7/6)。砂を多く含む、粘性は低い。しまり強い。
- 3: 灰黄褐色(10YR6/2)。砂、～3mm大の礫を含む、しまりのない土。
- 4: 橙色(10YR6/8)。砂、～5mm大の礫を多く含む。粘性あり。ややしまりのある土。
- 5: 明褐色(7.5YR5/8)。粗い砂、やや粘性のある土が2～5cm単位で互層状に堆積するが、層全体としてはしまりがない。攪乱を多数検出。
- 6: にぶい黄褐色(10YR5/4)。砂、～10mm大の礫を少量含む。粘性はややあるが、しまりは弱い。
- 7: 黄褐色(10YR7/8)。粗い砂、～5mm大の礫を含むしまりのない土。
- 8: 明褐色(7.5YR5/8)。砂、～10mm大の礫を少量含む。やや粘性、しまりのある土。須恵器片、羽釜片出土。
- 9: 橙色(7.5YR6/8)。粗い砂がブロック状に混じるが、礫をほとんど含まない、やわらかく、粘性の高い土。
- 10: 橙色(7.5YR6/6)。砂、～5mm大の礫を含む、粘性は低い。しまりのある土。
- 11: 黄褐色(10YR7/8)。細かい砂層。
- 12: にぶい黄褐色(10YR4/3)。砂、～3mm大の礫を少量含む、粘性、しまりともに弱い土。トレンチ東南で集石を検出。
- 13: 明黄褐色(10YR6/8)。きめが細かくやわらかい、しまりのない砂。
- 14: 暗褐色(10YR3/4)。砂、～3mm大の礫を含む、粘性、しまりの強い土。
- 15: 暗褐色(7.5YR3/4)。～5mm程度の礫をごくわずかに含む。粘性は14層よりやや高く、しまりもより強くなる。上面で1辺20～30cm程度の石を検出。石礫2点出土。

- 16: 褐色(7.5YR4/6)。砂、～5mm程度の礫をごくわずかに含む。やや粘性あり。
- 17: 明褐色(7.5YR5/6)。砂を多く含むが、やや粘性の高い土。トレンチ東南で拳大～50cm大の礫数点が崩落したような状況で検出。
- 18: 明褐色(7.5YR5/6)。しまりの強い粘質土。若干砂が混じる。
- 19: 明褐色(7.5YR5/8)。しまりのない粗い砂層。
- 20: 橙色(7.5YR6/6)。～4mm大の礫を含むしまりのない粗い砂層。
- 21: 暗褐色(10YR5/8)。しまりの弱い粗い砂層。
- 22: 明褐色(7.5YR5/6)。18層と似るが、非常にしまりが強く、さらに固くなる。また礫を多量に含む。やや粘性のある硬化土(橙色(5YR6/8))が混じる。
- 23: 明褐色(7.5YR5/6)。砂を多く含む。粘性、しまりともにやや強い土。17層同様に礫を検出。北壁両端で検出。間には砂層(21・22層)が堆積する。遺構あるいは落ち込みの肩の可能性あり。
- P1(南壁14層検出)
 - ①: 暗褐色(10YR3/3)。粗い砂が少量混じる、粘性の高い土。

図3 - 64 H20 - 7トレンチ平面および断面図

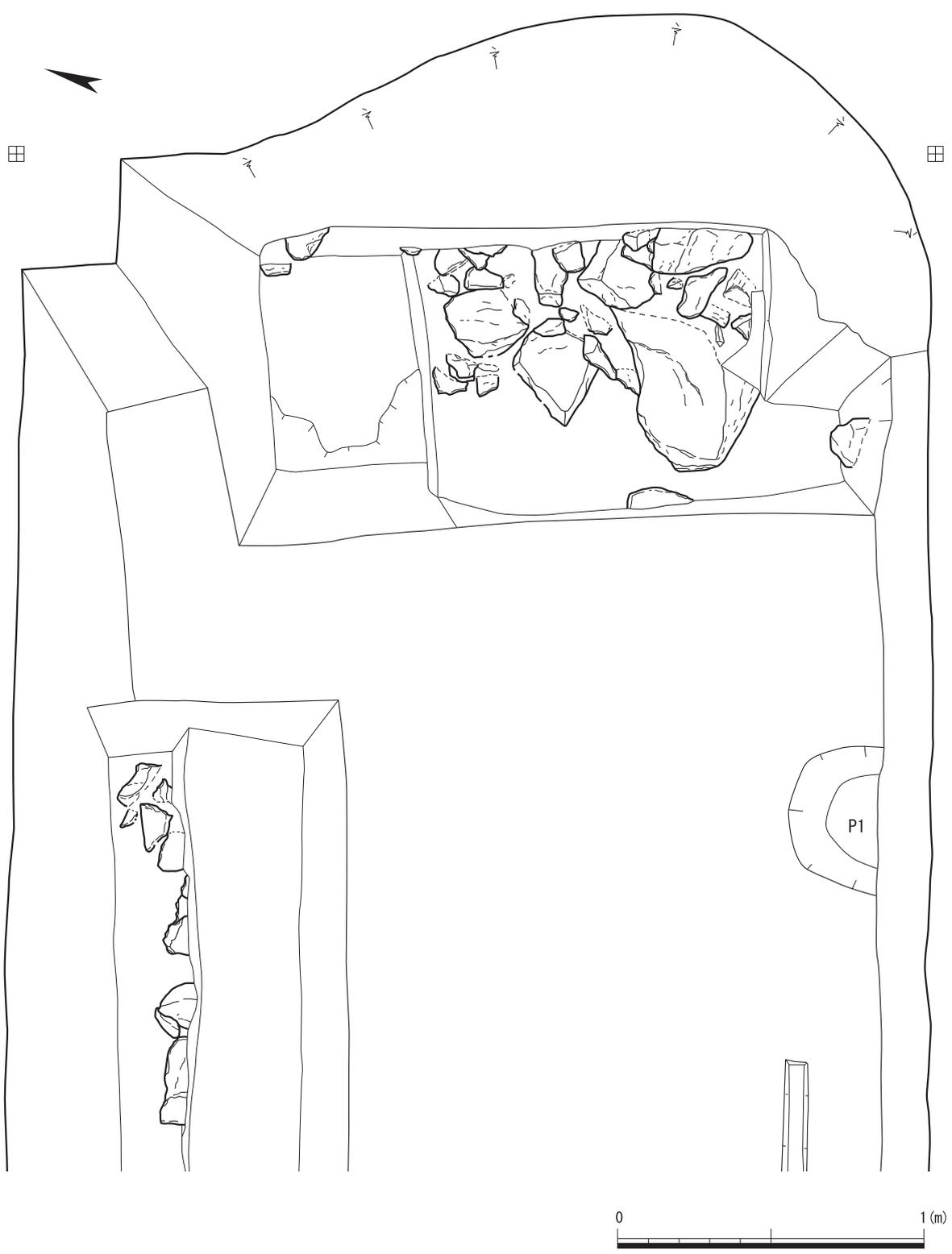


図 3 - 65 H20 - 7 トレンチ断割り部 礫検出状況

第4節 城壁構造の調査

永納山城の城壁については、発見当初の調査（1・2次調査）ならびに平成14年度～16年度（3次調査）における調査で、外郭ラインがほぼ明らかにされている。しかし、その構造については、不

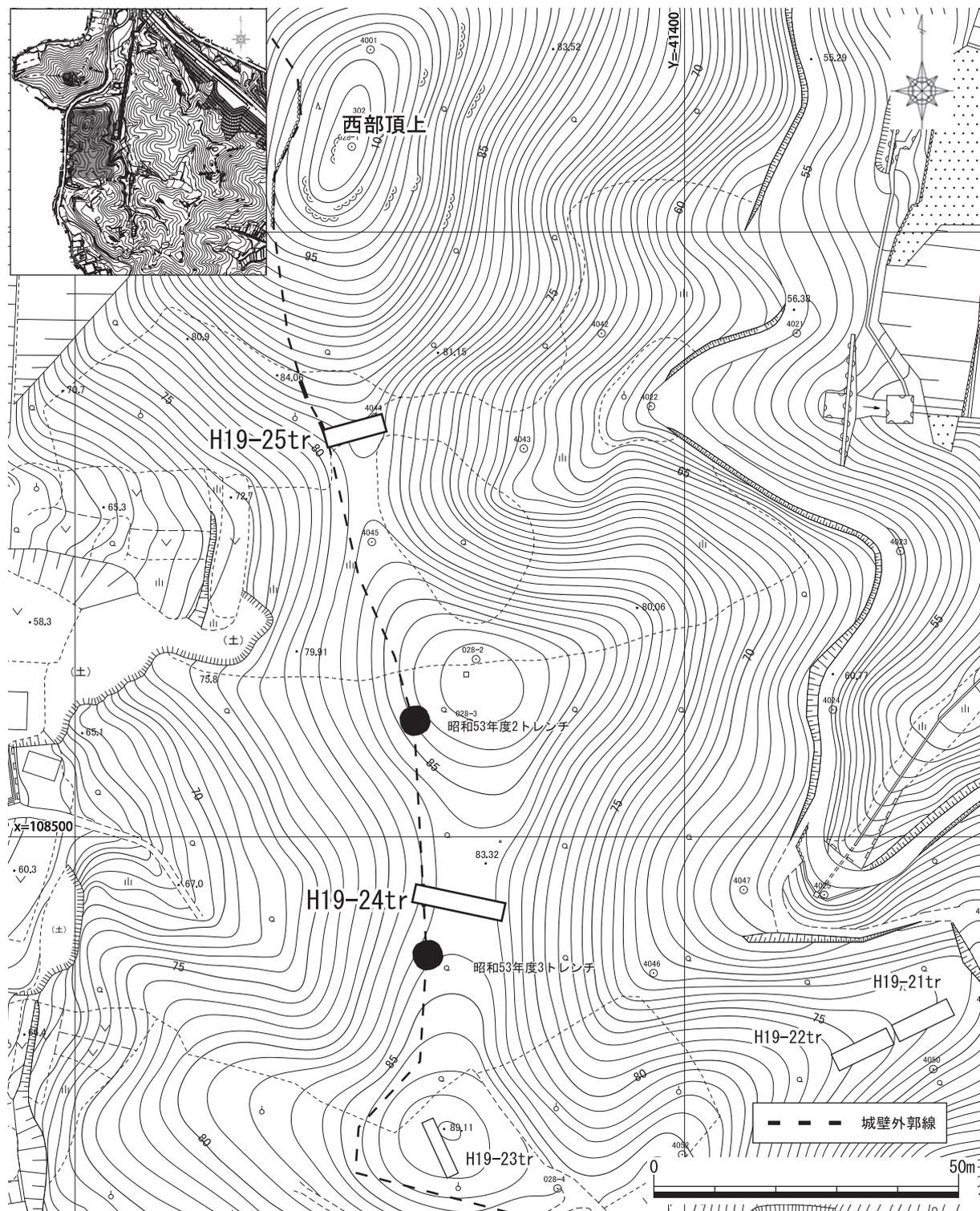


図3-66 西部城壁構造確認トレンチ周辺地形図

確定要素も残されていた。特に土塁による列石の被覆・非被覆問題や列石前面の柱穴の有無、夾築土塁の問題などである。これは、丘陵斜面に位置し土砂の流出が著しく、なおかつ後世の攪乱を受けているといった現状にも影響されているが、今一度、十分な確認調査を実施する必要がある。そこで、城壁外郭線の中でも比較的残存状況が良好と考えられ、3次調査でトレンチを設定しなかつた西部地区において、これらの調査を実施することとした。なお、西部地区は、1・2次調査において、記録に残るだけで2カ所にトレンチが設定され、外郭線の調査がなされている。



写真3-5 西部丘陵遠景（西から）。○はトレンチの位置。左からH19-25・24・3トレンチ。

(1) H19-24 トレンチ (図3-67～69)

本トレンチは、永納山の西部に位置する丘陵の中央の尾根に設定した。当初トレンチは新たな発掘調査による遺構の損壊をできる限り少なくするため、1・2次調査で設定されたトレンチを拡張するかたちで調査を行う予定であった。しかし、過去のトレンチを探すため踏査を進める過程で、報告さ

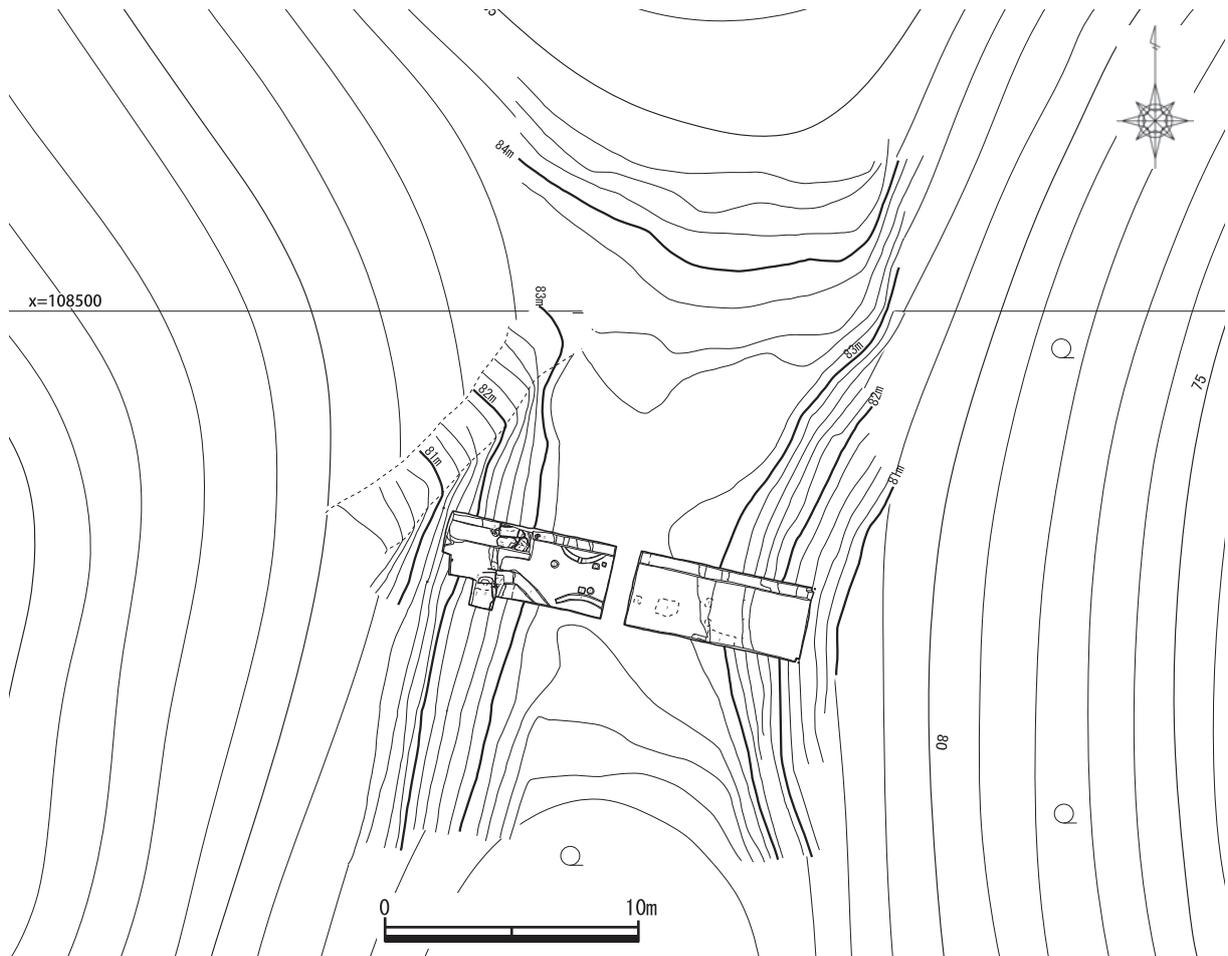


図3-67 H19-24 トレンチ周辺地形図

れているトレンチ以外にも記録に残っていないトレンチ（極小範囲の掘り込みも含む）が数カ所に存在することが明らかとなった。その一方で、報告されているトレンチがその中のどれであるのかを表面観察のみでは把握できなかったため、尾根周辺の現状を踏まえて最も城壁構造の良好に残っていると判断した場所にトレンチを設定した。トレンチは旧トレンチの一つを取り込む形で南北3 m×東西15 mの規模で設定した。なお尾根をはさんで城外側を西区、城内側を東区として調査を実施した。



写真3-6 H19-24 トレンチ設置前に検出した過去のトレンチ。

西区 まず、西区北壁沿いに幅50～80 cmで東西方向に掘られた、旧トレンチの埋土を除去する作業を行った。埋土を除去した段階で、全面に土塁と思われる硬化土を検出したが、この段階では、列石を検出できなかった。しかし、ピンポールを用いた事前確認により、列石の可能性が高い石の存在を確認したことから、土塁の一部を断割り、列石の検出及び城壁構造の確認を行うこととした。

その結果、土塁の下に列石を検出し、さらに列石の前面に盛土を確認した。また、盛土の状況を確認するために部分的に断割りを行った結果、盛土中に柱穴を検出した。これらの成果を踏まえ、トレンチ全体で表土・崩落土の掘り下げを行い、土塁・列石を確認した。また、先行して断割りを行っていた北壁沿いでは、さらに上方（尾根筋側）へ断割りを延長し、土塁の構造把握を行った。これらの調査において、先述の柱穴を含め、列石前面に2基、列石背面の土塁下に1基のピットを検出した。以下にこれらの成果を報告する。

列石及び下部構造 断割り部分で確認した2石の列石は、ともに幅40 cm前後・長さ約80 cmを測り、奥行きを長くとって据えられる。また、厚さは北側のもので30 cmであった。石材には、花崗岩の粗割り石が用いられる。これらの列石は、背後の状況をみると、地山を削り平坦面を作り出した後に据えられたと考えられるが、前面をみると盛土（北壁31・32層）がなされている。この点から、平坦面形成後、盛土によって調整をした上に列石を据えていたものと理解できる。なお、この盛土層も土塁同様に非常に硬くしまった土である。

土 塁 最も残りのよい北壁断面を見ると、土塁の残存高は約1.2 mを測る。構成土は、列石上面から約85 cmまで高さにある各層（北壁8～30層）は、厚さ2～10 cmと薄く積み上げられるのに対し、上方（北壁3～9層）では30 cm前後の厚い層が見られ、積み方が粗くなる。これらの土塁各層は、ほぼ水平に積み上げられるが、奥側は地山に向かい若干斜めに上がっている。また、地山には、幅1 m弱の緩やかな平坦面が2段確認できる。これらは、土塁積み上げの作業のために造られた平坦面と考えられる。

次に土塁と列石との関係を見ると、土塁が列石を明らかに覆っている状況を確認した。これらの土塁は長い年月の間に次第に崩れてきているため、本来の前端部を確認することはできなかったが、今もなお、列石前端より約5 cm前方まで土塁が残存している。このような状況から、当地点では築城当初、列石は土塁によって被われ、その姿を地表面に露出していなかったことが明らかとなった。

ピット 本トレンチでは3基のピットを検出した。これらは、それぞれ検出状況が異なるので、まず

は個別にその特徴を説明した後、その役割について考察する。

P 1 列石前面の土塁・盛土除去中に検出した。ピットの東半部は列石の下に位置し、西半部も盛土と土塁によって埋め殺された状況であった。全体形は不確定であるが、円形と想定した場合、直径は復元推定で約 24 cm となる。深さは現状で 68 cm、列石下からは約 50 cm を測る。

P 2 P 1 の 2.3m 南側の列石前面に位置する。列石の前面は崩落土で被われており、これを除去した段階で、列石とピットを検出した。したがって、トレンチ北側で確認した列石を被覆する土塁の存否は確認できない状態にあり、P 2 が P 1 のように土塁で埋め殺されていたのかどうかを判断することはできなかった。しかし、ピットの掘り方は、少なくとも列石の下には及んでいない。また、ピットは、一辺 56 cm でややふくらみをもつ隅丸方形を呈し、規模・形態でも P 1 と異なる。深さは現状で 20 cm を測る。なお、中央には柱痕と考えられる層が確認できる。

P 3 トレンチ北端の土塁断割り調査中に検出した。ピットは列石の背後、列石を据え置くために削り出されたテラス面より一段高い、段の落ちぎわに位置する。地山を掘り込むかたちで掘り込まれており、現状で直径 20 cm、深さ 24 cm を測る。土塁とピットの関係については、ピットが断割り部分の中央に位置し、両壁にかからないことから、土塁中にもその痕跡を残していたのかどうかは把握できなかった。しかし、断割り前の土塁検出段階で精査した際には、土塁上にピットは確認されなかったため、少なくとも P 3 に立てられた柱（杭）は、土塁完成後に地上に姿を現していた可能性は低い。

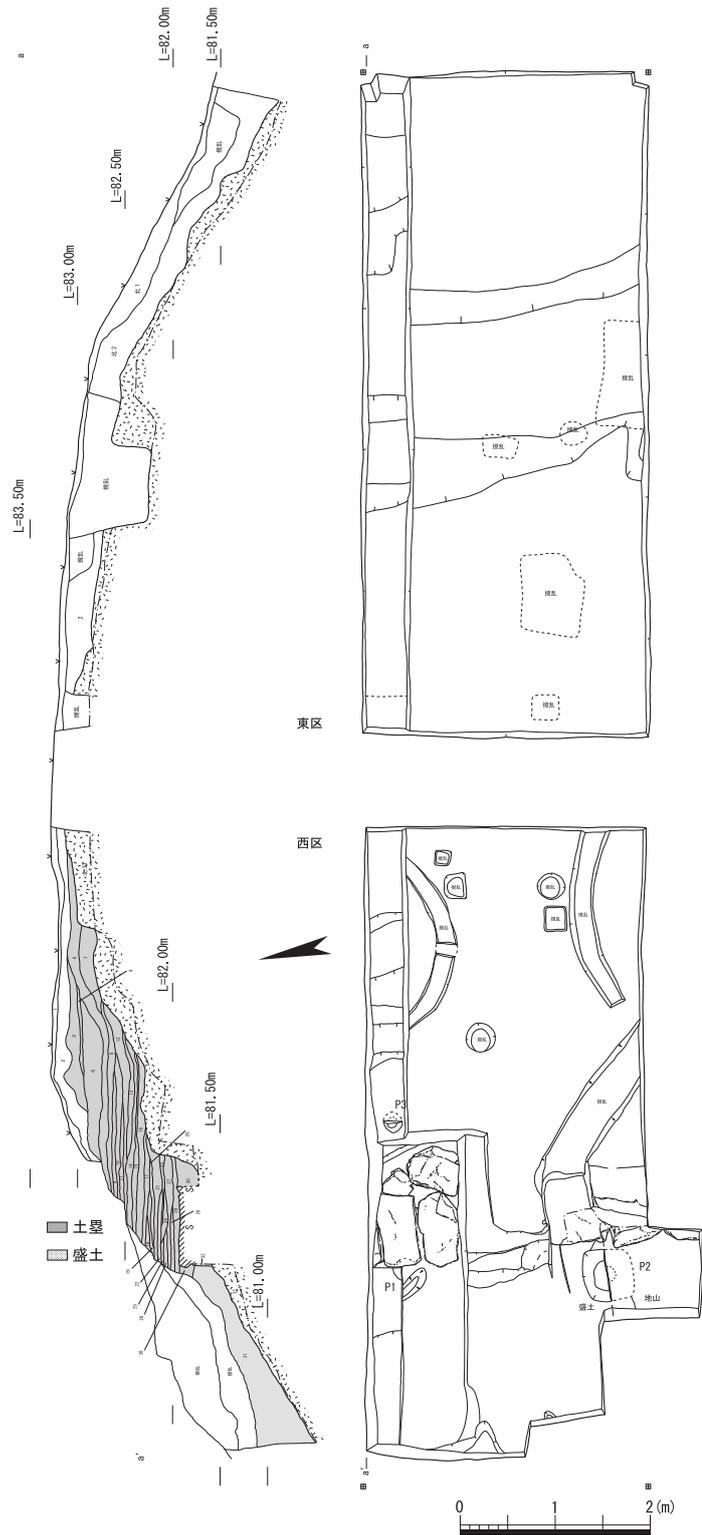
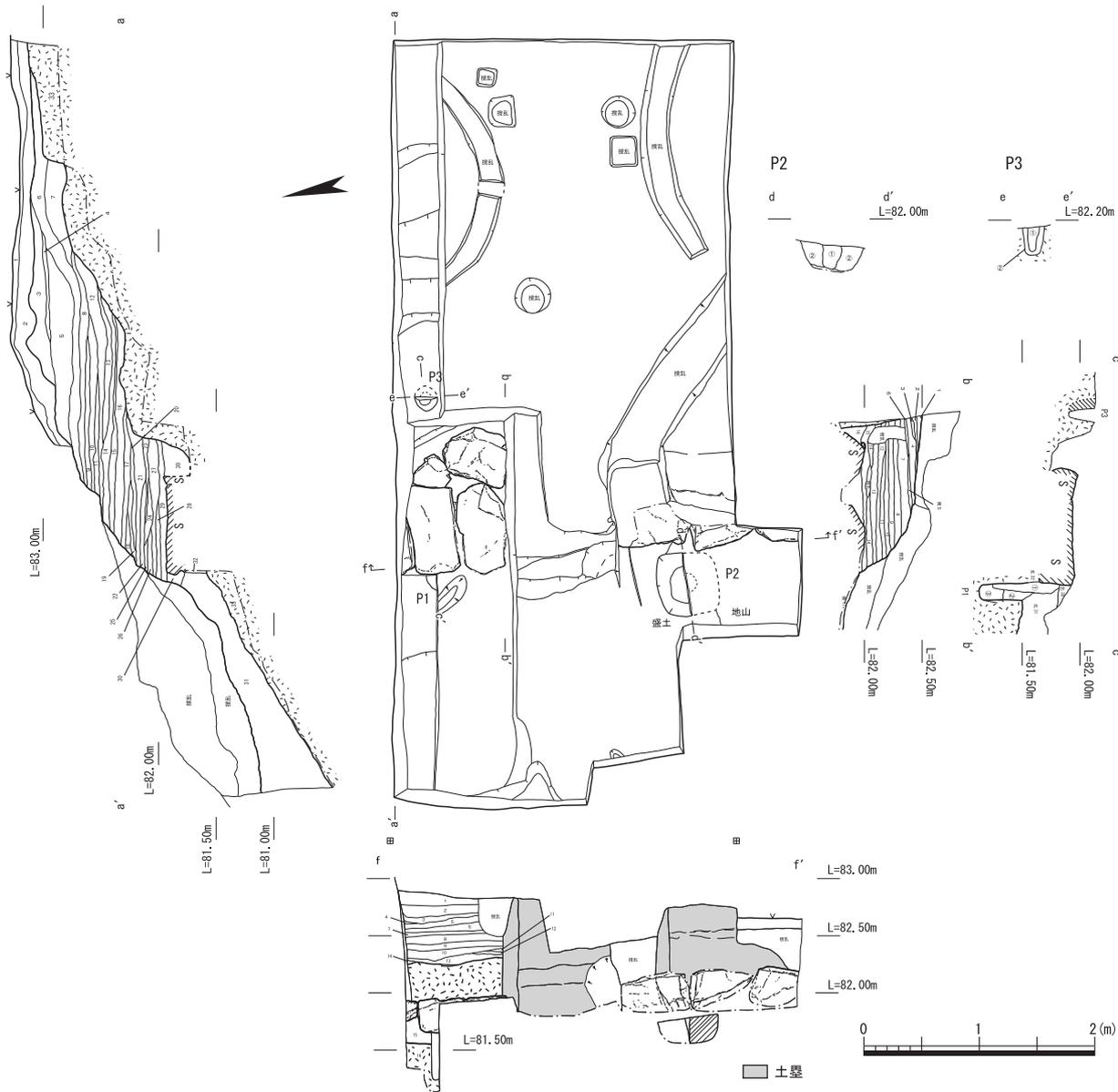


図 3 - 68 H19 - 24 トレンチ平面および断面図

断割り部分の中央に位置し、両壁にかからないことから、土塁中にもその痕跡を残していたのかどうかは把握できなかった。しかし、断割り前の土塁検出段階で精査した際には、土塁上にピットは確認されなかったため、少なくとも P 3 に立てられた柱（杭）は、土塁完成後に地上に姿を現していた可能性は低い。



《H19 - 24 トレンチ層序》

北壁土層 (a 断面)

- 1 : 表土。
- 2 : 黄褐色 (2.5Y5/6) 旧耕作土。

土塁構成土

- 3 : 明黄褐色 (10YR7/6) ~ 5mm の礫を含む、弱い粘性を持つ硬くしまった土。
- 4 : 黄褐色 (10YR5/6) 粘質土。硬くしまる。
- 5 : 明黄褐色 (10YR7/6) 5mm 程度の礫を含む粘性のある硬い土。北3層に比べると若干しまりがない。
- 6 : 黄褐色 (10YR5/8) 硬く粘性が強い。
- 7 : 黄褐色 (10YR7/6) きめ細かい硬い土。
- 8 : 黄褐色 (10YR7/8) 北5層とよく似るが、北5層に比べ砂質が強い。
- 9 : 6層と同様。
- 10 : 明黄褐色 (10YR7/6) 北9層に類似するが、8層よりも小礫、砂の混じりが多く硬くしまる。
- 11 : にぶい黄褐色 (10YR6/4) きめ細かく硬くしまる、弱い粘性のある土。
- 12 : 明黄褐色 (10YR6/8) 北11層同様きめ細かく硬くしまるが北11層に比べ若干赤み強い。
- 13 : 褐色 (10YR4/6) きめ細かい砂質土。~3mm 程度の炭の混入あり。
- 14 : にぶい黄褐色 (10YR5/4)。硬くしまるがこれまでの層に比べ粘性が強い。炭が混じる。
- 15 : 黄褐色 (10YR5/6) とにぶい黄褐色 (10YR5/4) が混じりあう。砂質が強く、硬くしまる土。
- 16 : 明黄褐色 (10YR6/6) 弱い粘性を持つ、きめ細かく硬い土。
- 17 : 15層と同様。
- 18 : 11層と同様。
- 19 : 12層と同様。

- 20 : 明黄褐色 (10YR6/6) 砂の混じりが多く、硬くしまる。
- 21 : 16層と同様。
- 22 : 20層と同様。
- 23 : 浅黄褐色 (10YR8/4) きめ細かく硬くしまる。小礫をほとんど含まない。
- 24 : 21層と同様。
- 25 : 19層と同様。
- 26 : 色調は19層と同様だが、粘性が強い。
- 27 : にぶい黄褐色 (10YR7/2) きめ細かく硬くしまる砂質土。
- 28 : 20層と同様。
- 29 : 21層と同様。
- 30 : 黄褐色 (7.5YR7/8) きめ細かく硬くしまる土。盛土
- 31 : 明黄褐色 (10YR6/8) 硬い。何度かに分けて積み上げられている可能性もあるが、現状では分層できない。
- 32 : 色調は31層と同様だが、31層より若干粘性が強く硬い。

地山

- 33 : 黄褐色 (10YR8/6)。固い岩盤風化土。

東壁 (見通し)(f 断面)

- 土塁構成土
- 1 : 北壁5層に対応。
 - 2 : 北壁6層に対応。
 - 3 : 北壁8層に対応。
 - 4 : 北壁9層に対応。
 - 5 : 北壁10層に対応。
 - 6 : 北壁11層に対応。

- 7 : 北壁12層に対応。
 - 8 : 北壁13層に対応。
 - 9 : 北壁14層に対応。
 - 10 : 北壁16層に対応。
 - 11 : 8層と同様。
 - 12 : 褐色 (10YR4/6) やや粘性のある硬い土。
 - 13 : 北壁17層に対応。
 - 14 : 北壁21層に対応。
- 盛土
- 15 : 北壁32層に対応。
- 地山
- 16 : 黄褐色 (10YR8/6)。固い岩盤風化土。

南壁土層 (b 断面)

- 土塁構成土
- 1 : 東壁8・北壁13層に対応。
 - 2 : 東壁9・北壁14層に対応。
 - 3 : 東壁10・北壁16層に対応。
 - 4 : 東壁11層に対応。
 - 5 : 南壁3層と同様。
 - 6 : 東壁12層に対応。
 - 7 : 東壁13層に対応。
 - 8 : 東壁14・北壁21層に対応。
 - 9 : 1層と同様。
 - 10 : 北壁21層に対応。
 - 11 : 9層と同様。
 - 12 : 8層と同様。
 - 13 : 7層と同様。
 - 14 : 8層と同様。
 - 15 : 北壁29層に対応。

- 16 : 北壁30層に対応。
 - 17 : 北壁31層に対応。
- 地山
- 18 : 黄褐色 (10YR8/6)。固い岩盤風化土。

P1 埋土 (c 断面)

- ① : 明黄褐色 (10YR7/6) ぼさぼさだが、少し硬くしまる。
- ② : 黄褐色 (10YR8/6)。ぼさぼさして、しまり無し。
- ③ : 黄褐色 (10YR8/6)。しまりはないが、細かい土。

P2 埋土 (d 断面)

- ① : 明黄褐色 (10YR7/6) ぼさぼさの土。柱痕か。
- ② : 明黄褐色 (10YR7/6) 黄褐色 (10YR8/6) がブロック状に混じる。弱い粘性があり、硬い。

P3 埋土 (e 断面)

- ① : 黄褐色 (10YR5/6) ~ 3mm の礫を含むやや粘性のある土。上面に炭が混じる。
- ② : 明黄褐色 (10YR7/6) 砂、~3mm 程度の礫を含むしまりのある土。

図3 - 69 H19 - 24 トレンチ西区 平面および断面図

P1・P2は、平面的には列石前面に位置する。従来列石前面の柱穴は、土塁版築時の堰板の支柱や土塁前面の柵列としての役割りが考えられている。しかし、2基のピットのうち、明らかに土塁に埋没しているP1に関しては、これらとは目的が異なったものと考えられる。なぜなら、土塁積み上げ段階には、柱（杭）はすでに機能していない可能性が高いからである。このように考えた場合、列石背後に検出したP3と関連付けて、その役割りを考えてみたい。それは、城壁築造の縄張り、すなわち、列石を据えるための基準としての役割りを果たした可能性はないだろうか。永納山城に限らず、全周数kmに及ぶ城壁を築く上で、その配置には十分な設計がなされていたはずである。当然、現地においても実際のテラス造成作業の目印となる杭のようなものを立てていた可能性は十分考えられる。もちろん今回、列石の前後に確認した2基のピットのみで確定的な事は言えず、想像に頼らなければならない部分も多いが、可能性の一つとして、縄張りとしての杭の存在を想定したい。

東 区 表土下には旧耕作土が堆積し、その下には地山が広がる。旧耕作土中及び地山には後世の攪乱が多数検出されたが、土塁やその他永納山城に関連する遺構は確認できなかった。

（2）H19 - 25 トレンチ（図3 - 70）

H19 - 25 トレンチは、西部頂上の南に位置するなだらかな尾根の鞍部に、城壁の構造を確認する目的で設定したトレンチである。現在、西側（城外側）斜面は中腹から山裾まで畑として利用されているが、土地所有者によると、過去にこの鞍部一帯を開墾し、その際に列石の多くを除去したとの事であった。そこで、西部頂上付近から鞍部に向け下ってくる斜面に露出した列石線を基準として、開墾による改変を受けていないと思われる場所にトレンチを設定した。トレンチの規模は南北3m×東西10mで、推定の列石線に直行するように東西に長軸をとった。トレンチ周辺の地盤がもろく、崩落の危険性があったため、掘り下げは最小限の範囲にとどめ、調査の進展に従って拡張を行っていった。調査の結果、土塁は残存していなかったものの、列石とその下部構造を確認した。

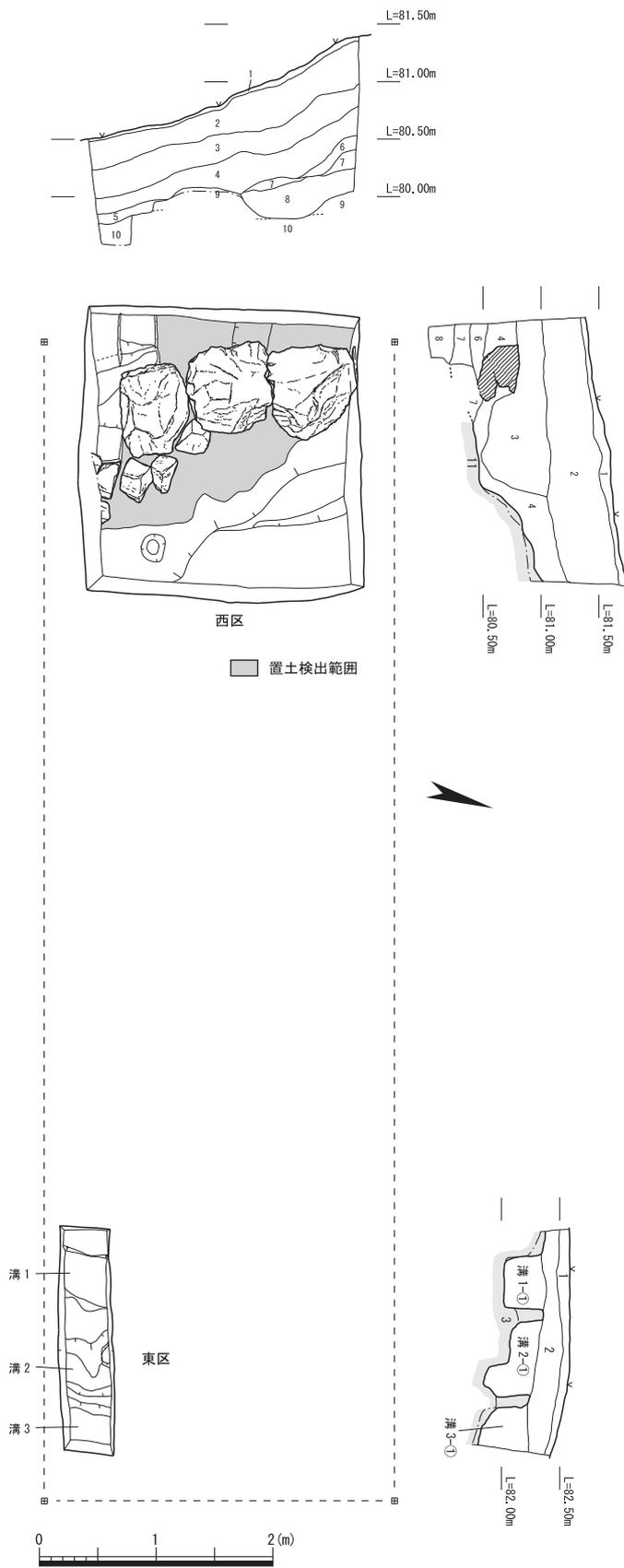
列石および下部構造 表土（1層）、耕作土及び土塁崩落土と推定される堆積土（2～4層）を除去したところ、3個の列石を検出した。列石はいずれも幅約60～70cm・長さ約80cm、厚さ約30～40cm程度を測る粗割りの石で、小口側の平らな面を城外側に向けて並べられている。

これらの列石は、岩盤風化土の地山（10層）を平たく整形した後に、盛土（5～9層）によって構築したテラスの上に据えられる。列石より城内側は、地山を水平に削り、奥行きが約80～100cmのテラス面を造りだしている。これに対し、列石を据え置く面は地山が急激に落ち込んでいるため、盛土を施して高さを揃えていた。また、列石前面のテラスの有無については、トレンチのすぐ外側が崩落しているため、確認できない。盛土の最上面はきめの細かい粘質土（6層）で、平坦面全体に見られる。6層は、最も残存状況の良い列石周辺では20cm程度の厚みがあるが、背後の平坦面上では非常に薄く、地山に貼り付いている程度である。

なお、列石検出当初、列石の背後で20～30cm大の裏込め状の石を20個程度確認したが、いずれも元位置を保っていなかった。

土 塁 列石の背後には、前述した盛土の6層が薄く広がるのみで、その上層には崩落土と考えられるしまりのない土が厚く堆積し、土塁は全く残存していなかった。

また、尾根筋での土塁残存状況を確認するために、トレンチの東側を部分的に掘り下げたが、ここでも土塁は残存しておらず、後世の開墾の際に掘られたと考えられる溝を検出したのみであった。



《H19 - 25 トレンチ層序》

西区

- 1 : 表土。
- 2 : にぶい黄橙色 (10YR6/4)。砂、～2mm大の礫をわずかに含む、しまりのない土。
- 3 : 褐色 (10YR4/4)。～5mmの礫を含む、粘性、しまりのない土。
- 4 : 橙色 (7.5YR6/8)。～10mm大の礫をわずかに含む、しまりのない土。下層に行くほど赤みが強くなる。
- 5 : 橙色 (10YR6/8)。しまりのない、ぼろぼろの土。攪乱の掘り込みの可能性あり。

列石置土

- 6 : 明黄褐色 (10YR5/8)。～3mm大の礫、炭を含むしまり、粘性のある土。
- 7 : 黄褐色 (10YR5/6)。5層に比べると、ややしまりが弱い、他の層よりはしまりのあるきめの細かい土。炭が混入する。
- 8 : 明黄褐色 (10YR6/8)。砂、～5mmの礫を含む粘性、しまりの弱い土。
- 9 : 黄褐色 (7.5YR8/8)。砂、炭を含むややしまりのある土。
- 10 : 明褐色 (7.5YR5/8)。砂を含むが、きめ細かくしまりのある土。

地山

- 11 : 浅黄橙色 (10YR8/4)。しまりのある岩盤風化土。

東区

- 1 : 表土。
- 2 : 西区2層と同様。
- 3 : 地山。西区10層と同様。

溝1・3

- ① : 黄褐色 (10YR5/6)。地山が小さなブロック状に混じるしまりのない土。プラスチック片が混入する。

溝2

- ① : 黄橙色 (10YR7/8)。やや粘性のある、きめの細かい砂質土。

図3 - 70 H19 - 24 トレンチ東区 平面および断面図

第5節 出土遺物

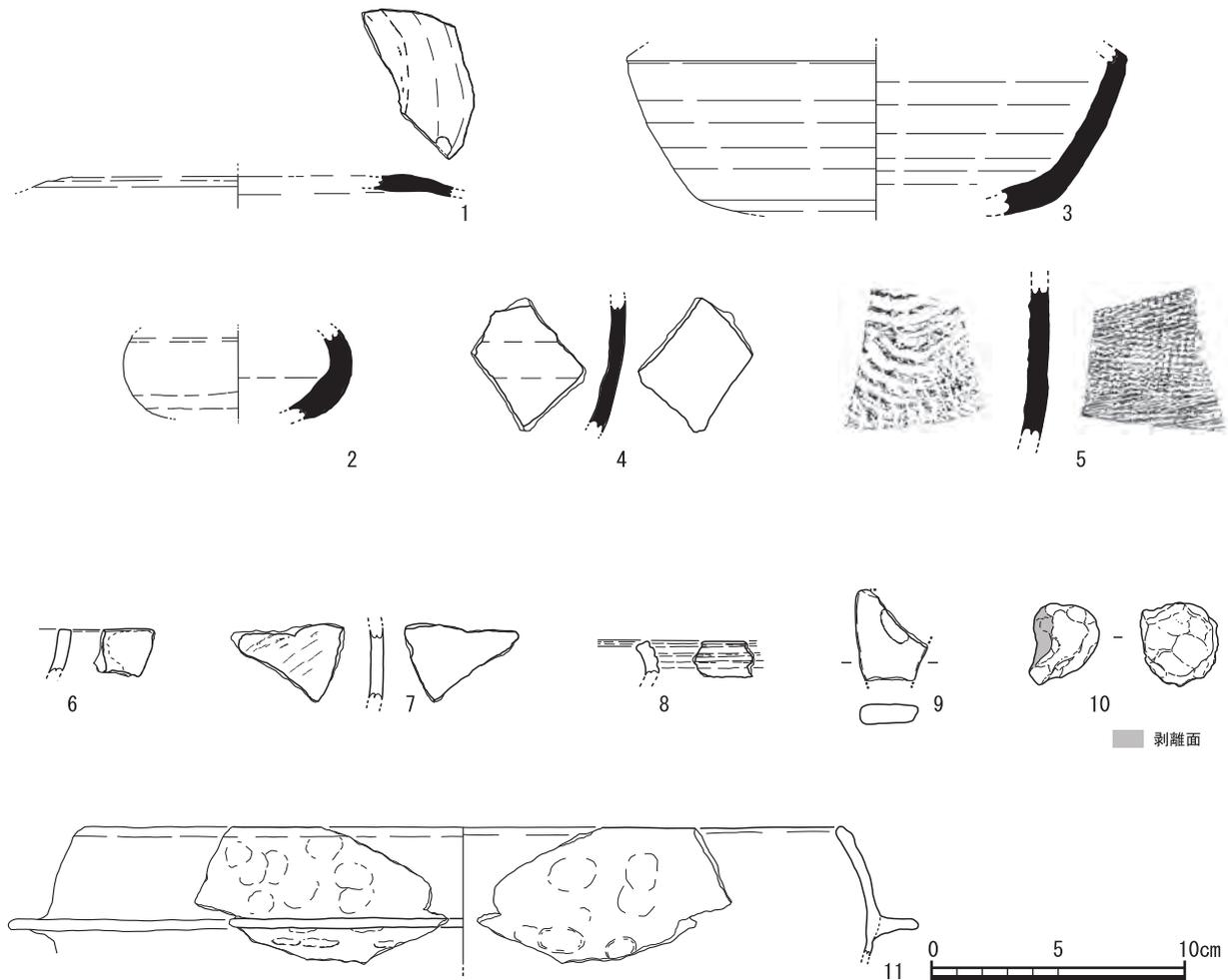
今回の調査では、明らかに遺構に伴う遺物はなかったものの、トレンチ内から若干の遺物の出土があった。また、調査中に表採された遺物もあり、それらについて報告する。

1 土器・土製品 (図3 - 71・72)

(1) 須恵器 (1～5)

1は杯蓋の天井部片である。天井部と口縁部との境付近にあたり、天井部に施された回転ヘラケズリにより、境には強い稜が入る。天井部中央につまみが付く、扁平な杯蓋になると考えられる。時期については、やや幅広いが、7世紀後半から8世紀前半の範疇に納まるものと考えられる。

2～5は、胴部片である。2は、胴部最大径が復元推定で8.6cmを測る。強く内湾する形状も踏まえると、小型の壺となる可能性が高いが、形態は不明である。



(1: 西南部頂上表採、2:H20-6 トレンチ 18 層、3: 西部丘陵表採 (H11 年度)、4:H20-3 トレンチ 2 層、5:H20-7 トレンチ 14 層、6:H18-14 トレンチ 3 層、7:H18-10 トレンチ 1 層、8:H18-7 トレンチ 2 層、9:H18-13 トレンチ 1 層、10:H19-14 トレンチ 3 層、11:H20-7 トレンチ 8 層) (4・5・7・9・10: 傾きは推定)

図3 - 71 永納山城跡出土遺物 1

3は平瓶もしくは長頸壺の底部から胴部最大径部にかけての破片である。胴部最大径は、復元で19.8 cmを測り、胴上部に向け強く内傾する。胴下部が比較的直線的に立ち上がり、胴上部についても屈曲部の傾斜から判断すると、あまりふくらみをもたないと推測でき、全体的に扁平な胴部形態を呈すると思われる。このような状況から、遺物の時期を推測すると、8世紀前半を前後する時期と考えられる。また、同時期の長頸壺をみると底部と胴部の境付近に高台が付されるものが主体となるが、当土器にはこれがみられない。この点から判断すると、平瓶となる可能性が高い。

4は残存高 5.3 cmを測る。内外面ともにヨコナデが施される。

5は残存高 6.3 cmを測る。外面にはタタキの痕跡が残る。

(2) その他の土器 (6 ~ 11)

6は、土師質土器の口縁部片である。杯もしくは碗の口縁部の可能性が高いが、形態・時期ともに不明である。

7は、土師質の土器胴部片である。内面には、ヘラケズリが施される。

8は、弥生時代中期の高杯口縁部片である。外面には、比較的明確な3条の凹線が施される。一方、口縁端部は、横ナデにより凹線状に浅くくぼむ。

9は、時期・器種ともに不明の土器片で、上下は不明である。図面上で示した上・下部は破損しているが、左右両側部は破損しておらず、特殊な形態を呈している。土器というよりもむしろ、何らかの土製品の可能性も考えられる。

10は、把手片である。表面は指頭痕により凹凸が著しい。時期は不明である。

11は、釜の口縁部から胴部にかけての破片である。口径は復元推定で30 cmを測る。胴部最大径部には幅1.3 cmの鐙が巡らされ、この最大径部から口縁部に向けて強く内湾する。厚みは全体的に3~4 mmと薄く、表面には内外ともに指頭痕が明瞭に残る。また、外面には煤が付着している。中世から近世の釜と考えられる。

(3) 管状土錘 (12 ~ 15)

12~15は、管状土錘である。完形の3点(12~14)をみると、12が全長6.6 cmを測り、全長5 cm前半の13・14に比べ若干大きいのが、ほぼ同形態を呈する。15は破片であるが、残存している部分から判断すると13・14とほぼ同規模になるとと思われる。これらには共伴遺物はなく、時期は不明である。

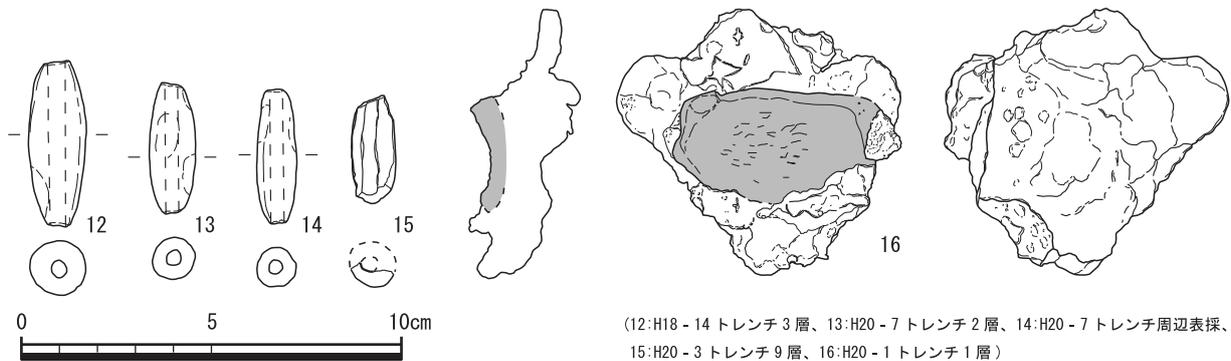


図3 - 72 永納山城跡出土遺物 2

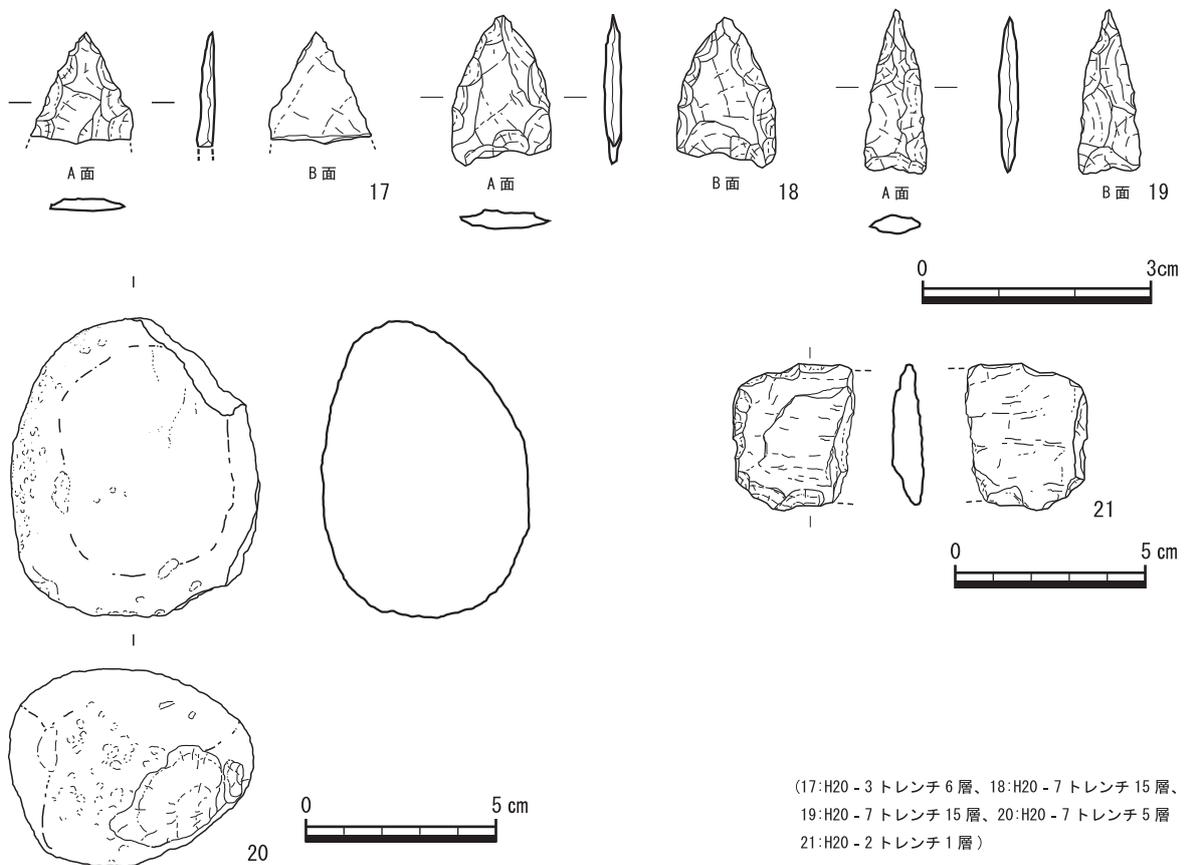
(4) 不明遺物 (16)

16は、幅約5cm程の土器片が金属滓のような塊に付着している遺物である。金属滓と思われる塊に関しては、非常に軽く、鉄滓のような重みはない。また各所に発泡の痕跡が残り、比較的高温に達した段階があったことがうかがえる。しかし、この遺物が一体何であったのかは、不明な点が多く、今後化学分析も含め調査を行う必要がある。

2 石器 (図3 - 73)

(1) 石鏃 (17 ~ 19)

17 ~ 19は、サヌカイト製の打製石鏃である。17は打製石鏃の未製品で、基部が欠損している。A面には、側辺部に剥離が行われているが、B面は一次剥離面のみで、縁辺部の剥離調整が行われた痕跡は残っていない。18・19は、凹基式の打製石鏃である。18は、平面形態が二等辺三角形に近いが、側辺部は若干外側に膨らみつつ先端部にいたる。両面共に主要剥離面を残すが、側辺部は比較的細かく剥離調整が行われる。19は、平面形態が細長い二等辺三角形となる。側辺部の剥離調整は、A面は比較的細かく丁寧に行われているが、B面は一つ一つの剥離面が大きく、粗い。



(17:H20 - 3 トレンチ 6 層、18:H20 - 7 トレンチ 15 層、
19:H20 - 7 トレンチ 15 層、20:H20 - 7 トレンチ 5 層
21:H20 - 2 トレンチ 1 層)

図3 - 73 永納山城跡出土遺物 3

(2) その他 (20・21)

20は、砂岩の円礫を利用した敲石である。表面全体で敲打痕が確認されるが、特に側面と下端部に敲打痕が集中する。

21は、結晶片岩製の石片である。片面に自然面を残す。途中で欠損しているが、平面形態は長方形を呈し、端面に抉りのような若干の窪みが確認できる。打裂調整は行われているものの、研磨は行われていない。形状から判断すると、石庖丁の未製品の可能性もある。

表3-1 永納山城跡出土遺物観察表(1)

No	出土地点	器種・部位等	法 量	形 状・調 整 等 の 特 徴
1	南西部頂上 付近表採	坏蓋・天井部	残高 0.8 cm	内外面共に回転ヨコナデ。天井平坦部は回転ヘラケズリ。色調は、外面：灰色、内面：灰白色。
2	H20 - 6tr18 層	小壺?・胴部	残高 3.4 cm・最大径 8.6 cm (復元推定)	小型の壺胴部片。外面下半は回転ヘラ削り。外面上半及び内面はヨコナデ。胴部上半に浅い沈線状の段あり。
3	西部丘陵部表採 (平成 11 年)	提瓶あるいは 長頸壺・胴部	残高 6.6 cm・最大径 19.8 cm (復元推定)	内外面共に強いヨコナデ。底部外面は回転ヘラケズリ。
4	H20 - 3tr2 層	不明・胴部	残高 5.3 cm	内外面ともにヨコナデ。内面は強いヨコナデにより凹凸がある。
5	H20 - 7tr14 層	不明・胴部	残高 6.3 cm	外面にタタキ痕、内面に青海波文が残る。
6	H18 - 14tr3 層	坏?・口縁部	残高 1.4 cm	ゆるやかに内湾する土師器坏口縁部片。内外面共にヨコナデ。色調は浅黄橙色であるが、一部明赤褐色。塗色か。
7	H18 - 10tr1 層	不明・胴部	残高 3.0 cm	内面はヘラケズリ。色調は外面：明赤褐色、内面：橙色。
8	H18 - 7tr2 層	高坏・口縁部	残高 1.3 cm	外面に明確な稜をもつ3条の凹線、端部はナデにより凹線状にゆるやかにくぼむ。浅黄橙色。
9	H18 - 13tr1 層	不明	残高 6.3 cm	内外面共にナデが施される。色調：灰色。
10	H18 - 14tr3 層	不明・把手	残高 3.4 cm	全体に指頭痕が残る。焼成は良好。暗オリーブ褐色。
11	H20 - 7tr8 層	釜・口縁~胴部	残高 5.4 cm 最大径 36 cm (復元推定)	鈹部から口縁端部に向け強く内湾する。内外面ともに指頭痕が残り粗いつくりである。外面下部には煤が付着する。にぶい黄色。
12	H18 - 14tr3 層	土錘	全長 4.4 cm、最大幅 1.5 cm、 重量 7.5 g	中央に最大径をもつ紡錘形の管状土錘。橙色。
13	H20 - 7tr2 層	土錘	全長 3.5 cm、最大幅 1.3 cm、 重量 3.3 g	中央に最大径をもつ、紡錘形の管状土錘。にぶい橙色。
14	H20 - 7tr 周辺 表採	土錘	全長 3.5 cm、最大幅 1.1 cm、 重量 4.0 g	中央に最大径をもつ、紡錘形の管状土錘。にぶい橙色。
15	H20 - 3tr9 層	土錘	残存長 2.8 cm、重量 1.5 g	管状土錘片。にぶい橙色。
16	H20 - 1tr1 層	不明		土師質の土器片が混じる。

表3-2 永納山城跡出土遺物観察表(2)

No	出土地点	器種・部位等	法 量	形 状・調 整 等 の 特 徴
17	H20 - 3tr6 層	打製石鏃	残存長 1.5 cm、重量 0.3 g	未製品。基部欠損。A面には、側辺部に剥離が行われているが、B面は一次剥離面のみ。縁辺部の剥離調整が行われた痕跡なし。
18	H20 - 7tr15 層	打製石鏃	全長 2.0 cm、基部幅 1.3 cm、 厚さ 2.2 mm、重量 0.6 g	凹基式。平面形態は、二等辺三角形に近い。
19	H20 - 7tr15 層	打製石鏃	全長 2.2 cm、基部幅 0.8 cm、 厚さ 2.3 mm、重量 0.4 g	凹基式。平面形態は、細長い二等辺三角形。
20	H20 - 7tr5 層	敲石	全長 8.0 cm、幅 6.5 cm、 厚さ 5.4 cm	砂岩の円礫。側面と下端部で特に側面と下端部に敲打痕が集中する。
21	H20 - 2tr1 層	石庖丁?	残存長 3.2 cm、縦幅 3.9 cm、 厚さ 0.8 mm	結晶片岩製の石片。打裂調整は行われているものの、研磨は行われていない。

第4章 ま と め

以下に、調査目的に沿ってその成果と課題を再確認し、3カ年の調査のまとめとしたい。

第1節 調査の成果

1 城門推定地の調査

今回の調査では、城門推定地として北東部2地点、南東部1地点の3地点に計4カ所のトレンチを設定し、調査を実施した。

この内、尾根鞍部に位置し、なおかつ列石が途切れているという状況から城門推定地として調査したのが、北東部のH18-3トレンチ、南東部のH19-1トレンチ・H20-1トレンチの2地点である。しかし、調査の結果、H19-1トレンチのように両サイドの列石の上に土塁が確認できた場所はあるものの、肝心の列石が途切れる区間では、急傾斜の地山を検出したのみで、城門に関連すると判断できる遺構はまったく確認できなかった。このような状況から、これらの列石の途切れる区間については、本来城壁が続いていたものが、地崩れ等により崩壊した結果、現状のようにになっている可能性が高いと判断した。

次に平成16年度の調査で城壁外郭線中に石積みを確認していたことから、城門推定地としたのがH18-2トレンチである。石積みの延長を掘り下げた結果、そこには石積みと接するかたちで、列石と土塁からなる城壁が構築されており、城門の存在はみとめられなかった。なお、なぜこの緩やかな尾根筋の城壁に突如として石積みがなされたのか、その目的は明らかにできなかった。

以上のように、今回城門推定地として調査を行った3地点は、調査の結果、いずれも城門は存在する可能性が低いことが明らかとなった。

2 水門推定地の調査

(1) 水門推定地調査区概要

水門推定地の調査は、永納山の中央を南北に走る谷の開口部にあたる北部に1地点(H18-1・H19-4トレンチ)、小さいながらも谷地形を形成する西部に1地点(H19-3トレンチ)の合計2地点で実施した。

北部の谷開口部東側斜面に設定したH18-1トレンチでは、列石と土塁を検出したが、これらは共に谷部に向かい崩落しており、元位置を保っていないことが判明した。同時に、この地点は通常の城壁線の周辺であり、この谷における水門の存否について言及できる場所ではないことが明らかとなった。そこで、水門関連の遺構の存否を確認するために、さらに谷部側への調査が必要となり設定したのがH19-4トレンチである。

しかし、H19-4トレンチにおいても直接水門の存在を示す遺構(石積み等)は確認できなかったが、その一方で本トレンチでは、谷に並行する列石とそれを据えるための造成土、造成土面に掘り込まれ

たピットを検出した。これらは、残存状況が良好とは言えないものの、位置関係や他の古代山城の例から判断すると、水門の横に付随する城門の可能性が最も高いと想定できる。なお、この遺構に対し、城門の可能性が最も高いとした根拠については後述する。

続いて、西部の谷付近に設定した H19 - 3 トレンチでは、列石と土塁が良好に残存しており、水門に伴う遺構は確認されなかった。しかし、この谷の最も低くなる部分は、本トレンチの南側に位置し、過去の土採りによって大規模に掘削されているため、そこに水門が存在していた可能性は、完全には否定できない。

(2) H19 - 4 トレンチ検出遺構について

まず、遺構の立地環境については、水門推定地として調査を行ったことから分かるように、谷の低地部に位置し、その開口部付近にあたる（図4 - 1）。この谷は、永納山城の中央を走り、なおかつ最も大きな谷であり、トレンチ設定地点はその開口部周辺であることから、石塁・城門が存在した可能性は高い。それでは、今回検出した遺構はいったいどのような施設であったのだろうか。残念ながら遺構そのものの残存状況は決して良好とはいえず、想像に頼らなければならない部分も多いが、残された情報から推定を試みたい。そのためには、まず事実関係を明確に整理し、そこから遺構の位置づけを行う必要がある。調査によって明らかとなった事実は以下の3点である。

- ①谷に並行するように並ぶ列石の存在（尾根を谷に向い下の城壁推定ライン（東西方向・一部で列石確認）に対し、ほぼ直角に折れ南北方向に並ぶ）
- ②列石の前面の柱穴と考えられるピットの存在
- ③これらの列石・ピットは、人工的に造成された地業層の上に存在する

以上の点から、この遺構が単なる城壁線の痕跡とは考えづらい。しかし、発掘調査では、これ以上の所見を得ることができなかった。

ア 遺構の立地環境

すでに述べたとおり、トレンチ設定箇所は、永納山最大の谷の開口部付近に位置し、東西両側の尾根が谷に向かい、急傾斜で下ってくる低地部にあたる。まず、谷部に築かれる構造物として、考えられるの遺構は水門と石塁である。しかし、本トレンチでは、通常水門にみられる石積みがまったく確認できなかった。したがって、水門や石塁そのものの痕跡である可能性は低い。そこで次に考えられるのが、水門あるいは石塁に関連（付随）する何らかの施設である。谷に造られた主たる施設である水門・石塁自体は、従来の指摘どおり、今回トレンチを設定した地点よりさらに西側に存在し、旧国鉄（現 JR）の線路の工事の際に破壊された可能性が高く、今回確認した遺構はそれに付随する施設の一部であると推測される。

そこで、他の古代山城において、水門・石塁がどのようなかたちで確認されているのかを検討したい。

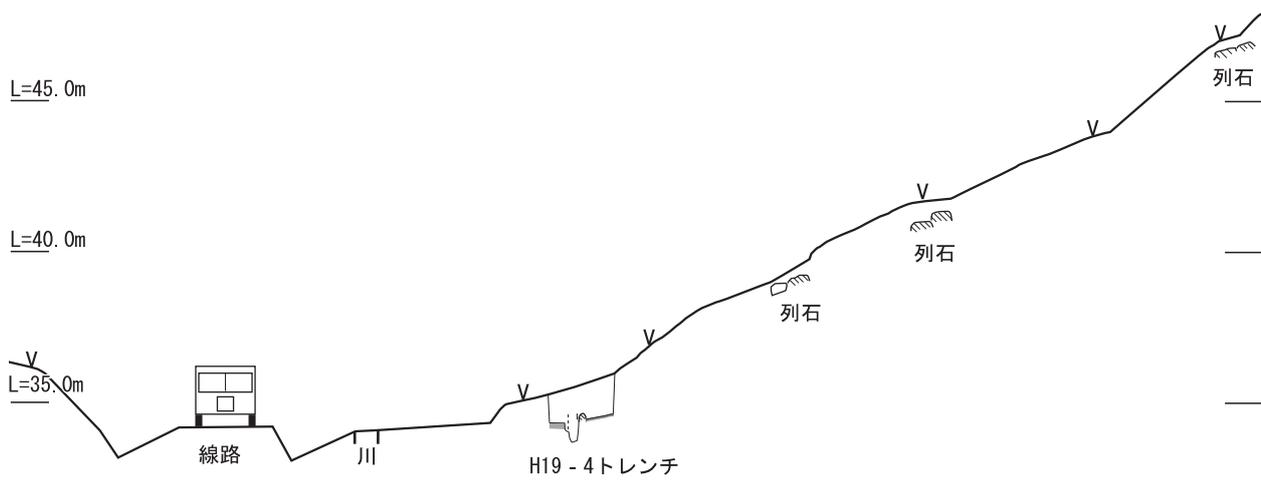
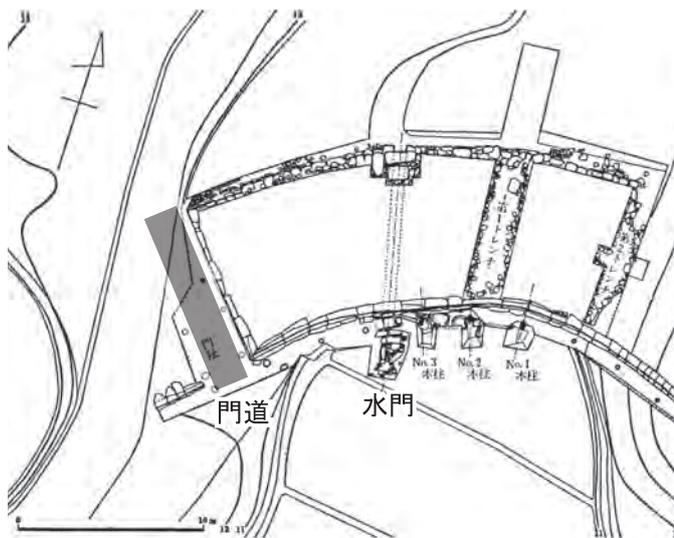
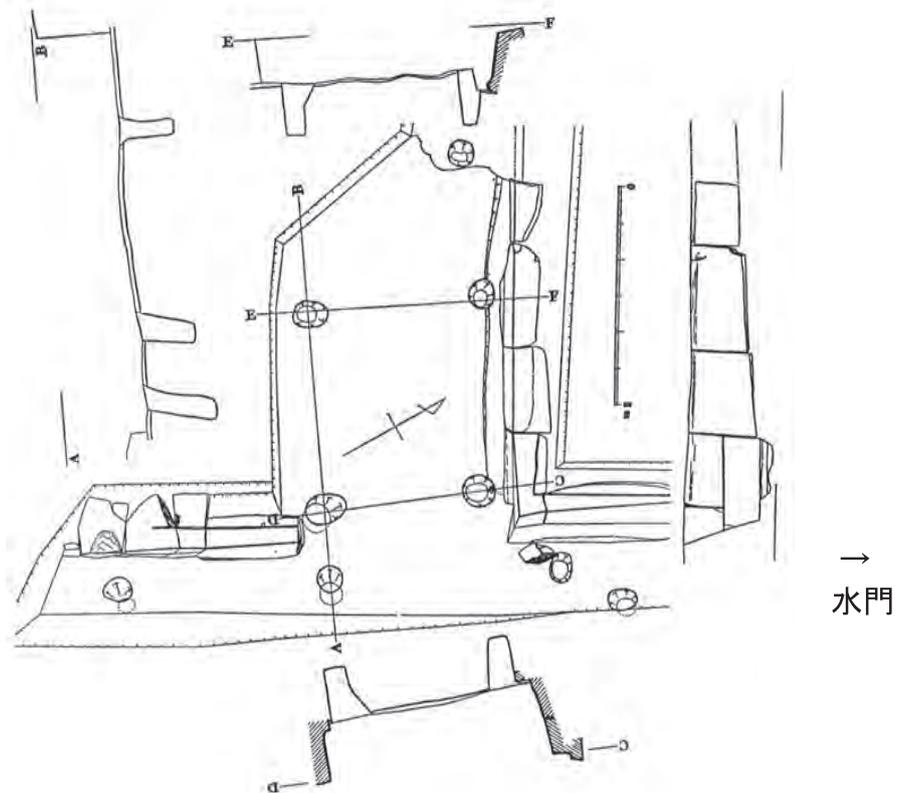


図 4 - 1 H19 - 4 トレンチ周辺の地形断面図 (S=1/250)



②：第1水門・南門 測量図 (S=1/400)

①：地形図



③：南門測量図 (S=1/100)

図4-2 谷部に位置する水門・城門の例(1) 佐賀県おつぼ山神籠石

*それぞれ、章末に記す参考文献から引用、一部加筆。

イ 他の古代山城における水門・石塁施設

まず、谷部に水門（石塁）を有する山城の例を見ると、水門（石塁）が単独で築かれる場合と水門と城門が併設される場合とがある。ここで注目したいのが、水門と城門とが併設される場合である。以下にいくつかの例を挙げてみたい。

まず、佐賀県おつぼ山神籠石では、1963年から1964年にかけて実施された発掘調査によって、第1水門の横に南門が確認されている（図4-2）。第1水門は、2段からなる石積みに水口を設けた水門である。城門は報告書によると「水門の石垣正面西端の石と、列石の間に3mの空間があること、南北に並べられた切石が水門正面に対して直角に連なり、門の東壁を構成するという構造」であることが明らかにされている。門側部は、東側（水門側）では水門の端部の列石が門壁を兼ねているのに対し、西側では側部の列石は確認されておらず、盛土によって門壁が構成される。門道部分は、つき固められてはいるものの、敷石は施されない簡素なつくりである。なお、この面が地山であるのか、地業がなされているのかは確認されていない。また、両側部には、それぞれ対になると考えられる柱穴が確認されている。

福岡県御所ヶ谷神籠石の場合、北側斜面の大きな谷の一つに位置する中門が立地的に類似する。報告書では、中門では「石塁は谷を遮るように構築され、その東よりの部分に城への通路が設けられている」とされる（図4-3）。門道部を含めた石塁全体の長さは約26mであり、石塁は二段に構築される。そして、石塁下段の中位には排水口が設けられている。城門自体に対する発掘調査は行われておらず、門の構造は不明であるが、東側の石塁のあり方などから、幅6mの門道が想定されている。

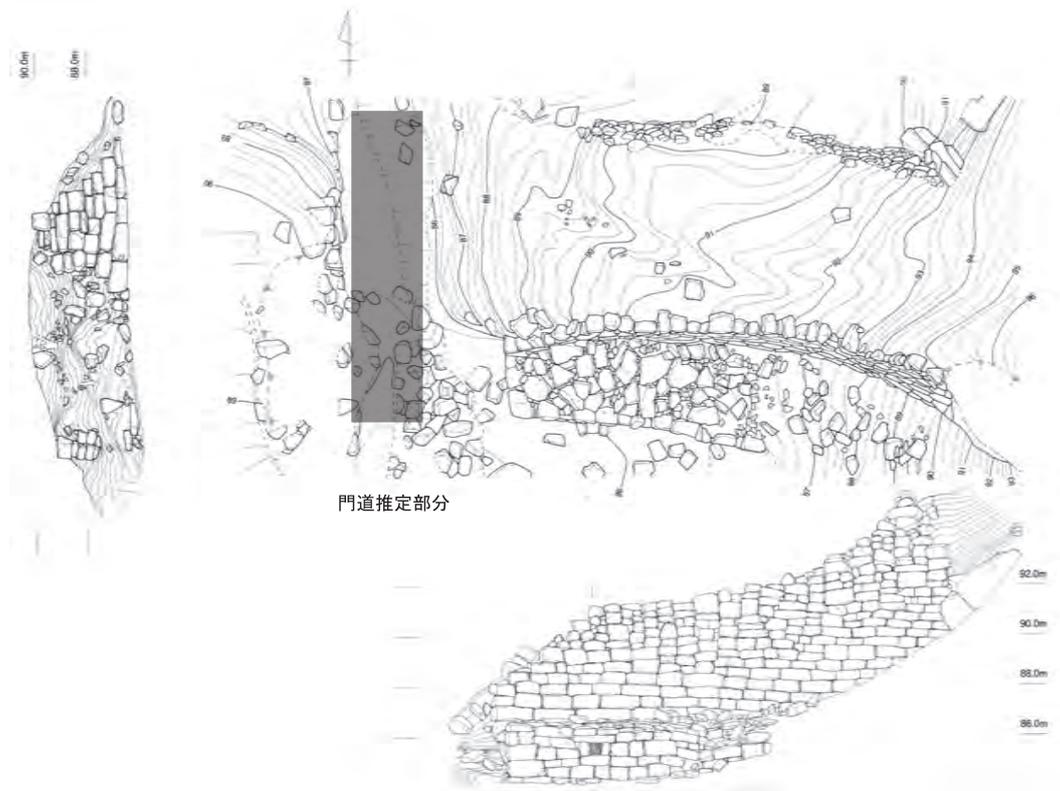


図4-3 谷部に位置する水門・城門の例（2） 福岡県御所ヶ谷神籠石（S=1/300）

* 章末に記す参考文献から引用、一部加筆。

同じく福岡県に所在する大野城跡では、南側に位置する城門の一つである太宰府口城門とそれに接する谷に築かれた水の手口石塁との関係が参考となる。「城門西側の袖部の前面は石塁城外側の面と一致し、城外側からは石塁に連続してすぐに門があるようにもみえる」と報告されており、水門と城門の近接した位置関係がみられる。なお、石塁中に水口は確認されていない。

これらの例から、山城ごとに細部は異なるものの、谷部の水門（石塁）横に位置する施設として城門の存在する例があり、H19 - 4トレンチで検出した遺構に関しても、城門の可能性が高いと判断できる。

ウ 城門の構造

それでは、城門の構造はいかなるものであったのだろうか。この点に関しては、全くの推測となるが、周辺地域の例を参考にその可能性を探ってみたい。門の構造については、各地の山城で調査がなされ、資料が増加している。西日本の古代山城の城門を類型化した山口祐平氏の研究を参考にすると、城門構造は大きく掘立柱構造（A類型）と礎石立構造（B類型）とに分類される。山口氏はさらに、掘立柱構造を単純な掘立柱建物となる「掘立柱構造」（A - i類）と掘立柱建物で柱の下部に扉口として石製唐居敷が添う「唐居敷構造」（A - ii類）に細分している。永納山城跡の場合、柱穴と考えられるピットを検出していることから、掘立柱構造（A類型）となることはほぼ間違いない。しかし、「掘立柱構造」となるのか「唐居敷構造」となるのか、その詳細に関しては発掘調査では明らかにできなかった。

そこで、遺構周辺の状況を見てみると、本トレンチ周辺ではこれまで石製唐居敷は発見されていない。また、永納山城全体をみても、唐居敷の存在は知られていない。この点のみで判断するならば、単純な掘立柱構造（A - i類）であったと考えられる。一方で、もう少し視野を広げて瀬戸内海沿岸の古代山城を概観すると、複数の山城で石製唐居敷の確認されている状況が読み取れる（写真4 - 1、図4 - 4）。このような状況を地域性と捉えた場合、唐居敷構造（A - ii類）であった可能性も十分考えられる。

しかし、これらの構造については、残念ながら遺構の現状からみても、周囲で石製唐居敷の発見がない限り、直接的に解明される可能性は低い。また同様に門壁や門道の構造についても、他の古代山城ではいくつかの形態が見られるが、永納山城検出遺構では上部構造が残存していないため、詳細不明である。



写真4 - 1 石製唐居敷
（山口県光市 石城山神籠石）



図4 - 4 石製唐居敷が用いられた城門例
岡山県総社市 鬼ノ城西門平面図 (S=1/300)
* 章末に記す参考文献から引用、一部加筆。

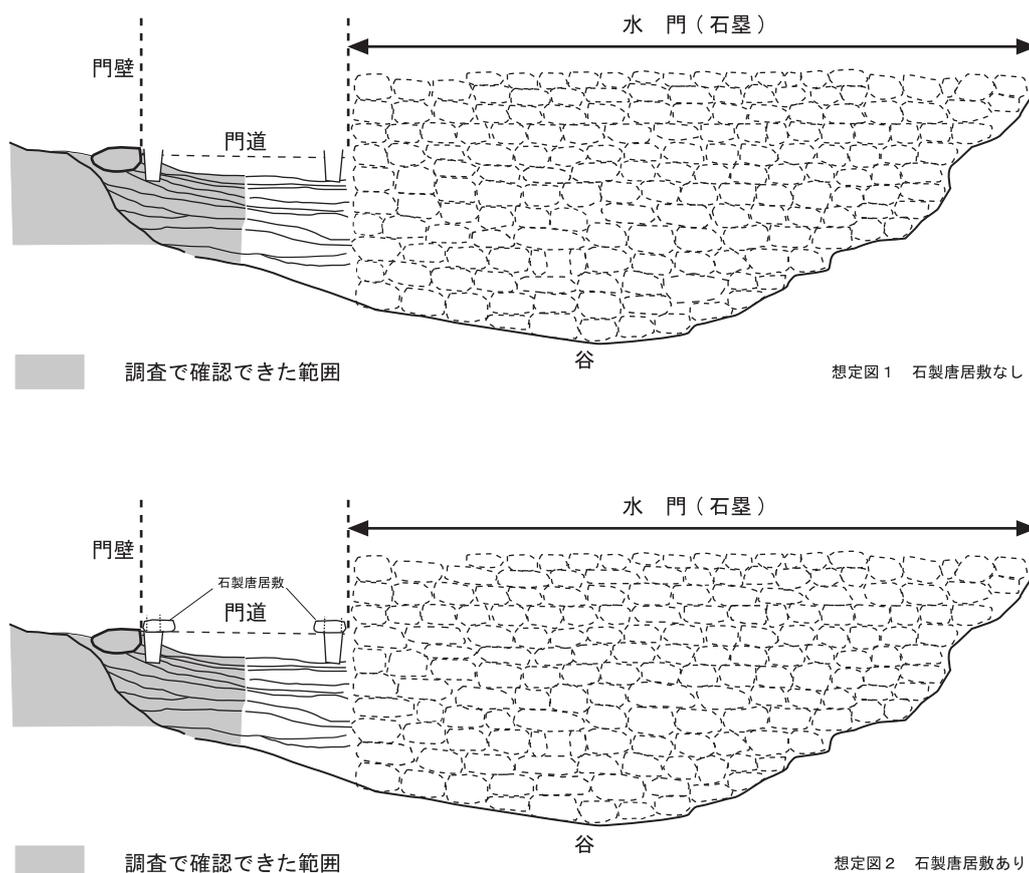


図4 - 5 永納山城跡城門想定図

以上のような状況であるが、これまでの検討を基に永納山城跡の城門を想定すると、図4 - 5のようなイメージ図となる。

3 内部施設推定地の調査

内部施設については、地形的特徴を考慮して次の3つの地形に該当する場所を推定地とし、調査を行った。

- ・城壁の巡る尾根筋から中央の谷に向け八手状に派生する尾根の平坦面
- ・永納山中央を南北に走る谷の低地部
- ・列石の巡る尾根筋から中央の谷に向けて緩やかに下る斜面

以下に、それぞれの調査成果を述べていく。

(1) 城壁の巡る尾根筋から中央の谷に向け八手状に派生する尾根の平坦面

城内に平坦部の少ない永納山城の中で、比較的広範な平坦面を有しているのが、中央の谷に向かい派生する各尾根であり、そこに33カ所のトレンチを設定して調査を行った。

その結果、各トレンチにおいては、戦後の開拓団による開墾の痕跡が確認される場合が多く、明確に永納山城跡に伴うと判断できる遺構はみとめられなかった。その中で、H18 - 5トレンチのように浅いピットを複数検出した場合もあるが、ピットに規則性はみられず、また遺物の出土もなかったこ

とから、時期・目的は不明である。

しかし、各トレンチともに表土(腐葉土)を除去すると直ちに地山に至るという土砂堆積状況のため、本来存在していた遺構が後世の開墾により破壊されたのか、あるいは当初から施設が造られていなかったのかは判断できなかった。

(2) 永納山中央を南北に走る谷の低地部

5カ所にトレンチを設定し調査を行った結果、戦後の造成や土砂災害による1m以上におよぶ現代の土砂が堆積していた。また、これらの下層からは激しい湧水があり、調査範囲が限られたため、遺構の確認はできなかった。

古代と現在とでは地下水位も異なるであろうが、中央の谷として城内の雨水が集約されていた状況を考慮すると、この谷低地部に広範囲にわたり建物等の施設が造られていた可能性は低いと思われる。

(3) 列石の巡る尾根筋から中央の谷に向けて緩やかに下る斜面

南東部斜面に1カ所トレンチを設定した。その結果、約1.5mという厚い崩落土を除去すると、暗褐色粘質土の有機質層(14・15層)を確認した。これらの層は、谷に向け若干傾斜するものの、現在の斜面の傾斜に比べ水平に近く、人工的に整地された層の可能性が考えられる。

さらに地山の確認を目的に実施した北・東壁沿いの断割りでは16～17層にかけて多量の礫を検出した。これらの礫には、現状では規則性がみとめられないことから、検出された状況がそのまま当時の遺構の姿を留めている可能性は低い。そこで、以下のような3つの可能性を想定した。

- ①この場にあった何らかの遺構が崩壊し、そこに用いられていた礫が堆積した。
- ②周囲に礫を用いた遺構があり、遺構が崩壊した後、使用されていた礫が流れてきた結果、この場所に堆積した。この場合、遺構はトレンチより上方(尾根筋側)に存在していたと考えられる。
- ③特に遺構は存在せず、山中にあった自然礫が流れてきて、この場所に堆積した。

大きくは、以上のような可能性が考えられるが、現段階では、これらを検証し、絞り込むことのできる情報は得られていない。

また、14層以下の層からは、須恵器片・打製石鏃が数点出土しているのみで、これらの層や集石の時期の特定もできていない。

以上のように、3×6mという限られた範囲の調査であったため、残された課題は多いが、これまでの内部調査の結果とは状況が明らかに異なり、この周辺に何らかの遺構が存在する可能性は高い。さらには、それらが永納山城と関連することも十分考えられる。

4 城壁構造の調査

平成16年度までの調査で城壁線の確認はほぼ完了していたが、これらは史跡指定を目的とした城域確定が主目的であった。したがって、城壁構造の良好な部分というよりもむしろ、城壁線の不明確な部分にトレンチを設定していたため、遺跡の範囲確定には成果は上がったものの、詳細な城壁構造については課題も残されていた。そこで今回は発見当初の調査で、城壁が良好に残存していることが確認されていた西部丘陵にトレンチを設定し、構造の確認を行った。

(1) 列石を覆う土塁の確認

古代山城の調査が進展するにつれ、各地の山城で列石を覆った版築土塁の例が増加している。土塁による列石の被覆・非被覆の問題は、城壁の築造過程や完成後の城の姿、列石の役割等を考える上で重要な問題である。永納山城においても、発見当初の調査で列石が被覆されていたとの報告がなされているが、具体的な資料の提示が少なかったことや、その後の調査地点において、そのような状況が確認できなかったことから列石の被覆・非被覆の問題は、今後の課題として残されていた。

今回、H19 - 24 トレンチおよび水門推定地として調査したH19 - 3 トレンチにおいて、発見当初の報告どおり列石を被覆する版築土塁を再確認し、特にH19 - 24 トレンチでは、その様子を鮮明に観察することができた。土塁は、築城当初の姿を完全に示しているわけではないが、現状でも列石の前方5cmまで土塁が列石を覆う状況を確認できた。

これらの状況から、永納山城の列石も土塁によって被われていた箇所が存在することが確実となったのであるが、これが城壁全域に及んでいたのか、あるいは部分的なものであったのかは、すでに大部分の列石が露出している現在では検証することができない。ただ、これまでの調査で確実に列石が被覆されている状況を確認できたのは、この西部丘陵のみである。

(2) 列石前後のピット

今回の調査では、H19 - 24 トレンチにおいて、山城の縄張り段階で機能したと想定できるピットの存在が明らかとなった。ピットは、城壁構造を確認するために土塁及び列石前面の盛土を断割った結果、列石の前後に検出した。これらのピットは土塁・盛土によって被われており、土塁・盛土検出面では確認できなかったことから、城壁完成当時にはピットに立てられていた柱あるいは杭は、地上に姿を現していなかったものと判断できる。この点から、柵列としての役割を果たしていた可能性は低い。また、列石前面のピット(P1)については、一部が列石の下に位置する点や列石を据える盛土に埋め殺される点から、土塁版築のための堰板支柱としての機能も考えづらい。また、列石の前面に検出したもう1基のピット(P2)に比べると、規模が小さく列石との位置関係も異なる。P1の一部が列石下に潜り込むのに対し、P2は明らかに列石の前方に位置する。これらのことから、列石前面のピットは、すべてが同じ役割を果たしていたのではなく、役割の異なるものが存在していたことも考えられる。

そこで、ピットの位置をもう一度、検討してみると、列石背後のピットは列石を据え置くためのテラスの落ち際に位置し、前方のピットは列石の前端とほぼ一致する。そこで、これら列石前後のピットがセットとして機能したと理解すると、テラス築造の段階で目印として打たれた杭としての役割を想定できないだろうか。全長数kmにおよぶ城壁を築く古代山城において、その設計に際しては、自然地形に左右されるとはいえ、場当たりのものではなく、綿密な計画が立てられていたであろう。そして現地作業においても城壁線を結ぶ縄張りがなされ、工事に入ったと想像できる。

今回検出したピットは、断割り部という限られた範囲であり、その連続性や方向性も確認できていない状況である。このわずかな情報から本来の目的を明らかにすることは容易ではなく、機能を即断することはできないのは十分承知しており、今回導き出したピットの役割も、あくまで可能性の一つとして想定したものである。したがって、今後の調査によって見直されることも十分ありうる。しかし、

土塁版築のための堰板支柱にみられるように、山城築城のための工事の痕跡の一部は実際に各地の山城で確認されており、現地での縄張りから実際の城壁築造までの一連の作業痕跡が遺跡に残されている可能性は十分考えられる。このような工事のための遺構の存在も念頭に置き、今後の調査を進めることは、古代山城の構築過程を解明していく上でも重要なことと考える。

なお、福岡県飯塚市 鹿毛馬神籠石において、土塁中に柱が確認されているが、ここでは、列石前面の柱と組み合わせで土塁の版築に使用されたと考えられている。

(3) 石積み遺構について

19年度の外郭構造確認調査に伴い、永納山城では3カ所目となる石積みによる城壁を確認した。場所は西部頂上付近であり、トレンチを設定して調査を実施したのではないが、西部丘陵の調査に伴い、周辺の草刈り等清掃を行う過程において遺構を確認した。この石積みは発見当初の調査によってすでにその存在が知られており、今回が初発見という訳ではないが、本格的な調査は行われなまま樹木に覆われている状態であった。

そこで、周辺の清掃というごく簡単な作業を行い、現状を確認したところ、最大5段に積まれる石積みが約20mにわたり続くことが明らかとなった(写真4-2)。石材は列石同様に花崗岩の割石が用いられ、大きさは横幅40cm~1m程度である。裏込めの存在は不明である。

5 出土遺物について

遺物の確認は、遺跡の時期決定や城内の利用状況を把握するために重要であり、今回の調査においても重要な目的の一つであった。しかし、調査の結果、遺構に伴う遺物は出土しなかった。また、遺構に伴わない遺物についても、弥生時代から現代に至るまで広い年代幅の中で、わずかな量が出土したのみである。

このような中で、表採資料ではあるが、今回新たに確認できた須恵器蓋杯片(図3-71-1)・平瓶片(図3-71-3)は永納山城の存続した期間の一時期を示していると思われる。ともに破片資料であるため詳細な時期は特定できないものの、その形質的特徴から7世紀後半~8世紀前半のものである可能性が高い。

遺物に関しては以上のような状況であり、前回調査において出土した畿内系土師器等を含めると、次第に資料は増加しているとはいえるものの、全体的な遺物の出土量はいまだに少なく、課題は今後の調査に残されたままである。



写真4-2 西部頂上付近の石積み

第2節 今後の調査に向けての課題

永納山城では、遺跡発見以来4次にわたる調査が実施され、その調査の度に新たな発見や成果が上がってきたが、遺跡の全容解明にはいまだ多くの課題が残されている。しかし、現地は後世の開発等に伴い、すでに大規模な地形の改変を受けている場所もある。そこに存在したであろう永納山城に関連する遺構や情報は、すでに失われている可能性が高く、それらについては、発掘調査によって直接的に課題を解決することはできず、残された情報を基に周辺環境や他の山城との比較による推測を行わざるをえない。

しかし、一方で今回の調査結果から、新たな調査による遺構の存否確認や、構造確認を行うべき必要のある場所も絞られてきた。

まず、内部施設推定地については、尾根平坦面、中央の谷、尾根から中央谷に向かう斜面において調査を行った結果、尾根平坦面と中央の谷については、現在遺構が存在する可能性の低いことが明らかとなった。このような中、H20-7トレンチにみるように、尾根から谷に向かう緩やかな斜面に遺構の存在する可能性が残された。この周辺については、今後追跡調査を行い、遺構の存否を明らかにしていく必要がある。

また、構造確認という点では、西部頂上付近で確認した石積みによる城壁部分の調査が必要となる。土塁及び列石による城壁については、今回の調査も含め、これまでの調査によりその構造も明らかにされつつある。これに対し、石積みによる城壁は少なく、構造に対する調査は全く行われていない。石積みについては、調査後の影響や保存方法等を十分に考慮した調査方法を検討した上で、本格的に調査を実施する必要があるが、その前段階として、まずは現状での遺構の記録化を行わなければならない。

《参考文献》

- 鏡山 猛 編 『おつば山神籠石』 佐賀県教育委員会 1965
- 小川 秀樹 編 『御所ヶ谷神籠石Ⅰ』 - 福岡県行橋市大字津積ほか所在古代山城の第1次～第11次調査 - 行橋市教育委員会 2006
- 須原 緑 編 『国指定史跡 鹿毛馬神籠石』 穎田町教育委員会 1998
- 村上幸雄他編 『古代山城 鬼ノ城』 - 鬼城山史跡整備事業に伴う発掘調査 - 総社市教育委員会 2005
- 山口 祐平 「西日本における古代山城の城門について - その類型と変遷 - 」 『古文化談叢』 第50集 (上) 2003
- 横田 義章 編 『特別史跡 大野城跡Ⅶ』 - 太宰府口城門跡発掘調査概報 - 福岡県教育委員会 1991

写真図版

H18 - 1 トレンチ
完掘状況（北西から）

手前の列石は土塁崩落土の上に乗る。



H18 - 1 トレンチ
北壁断面（南から）



H18 - 1 トレンチ
北壁断面アップ

崩れた土塁が列石の前面にブロック状に堆積している。
（右上が列石）





H18 - 1 トレンチ
北壁断割り状況

地山直上まで崩落土が堆積している。



H18 - 1 トレンチ
中央東壁断面



H18 - 1 トレンチ
南壁断面

谷側にも、水門等に関連する遺構は確認できなかった。

H18 - 2 トレンチ
完掘状況 (1) (南東から)

石積みの延長には、列石・土塁
が続く。



H18 - 2 トレンチ
完掘状況 (2) (南東から)



H18 - 2 トレンチ
北壁沿い土塁断割り状況

これまでの調査の中で、最も良
好に土塁が残っていた。





H18-2 トレンチ 北端部土層断割り状況 (南東から)



H18-2 トレンチ 北壁沿い土層断割り状況



H18-2 トレンチ 土層断割り部列石・裏込め状石
検出状況 (北東から)



H18-2 トレンチ 列石前面テラス確認状況 (南東から)

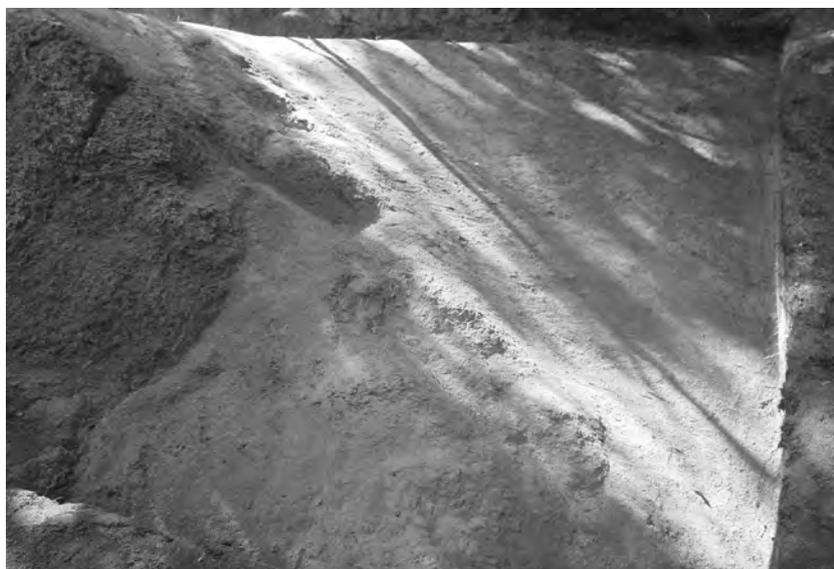
H18 - 3 トレンチ
完掘状況 (1)

崩落した斜面の両端には、現在も列石が残っている。



H18 - 3 トレンチ
完掘状況 (2)

地すべりにより、地山の現状は急な斜面になっていた。



H18 - 3 トレンチ
北壁断面

土塁の痕跡は全く残っていなかった。





H18 - 4 トレンチ
完掘状況 (西から)



H18 - 6 トレンチ
完掘状況 (北から)

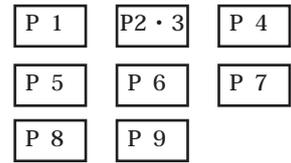


H18 - 5 トレンチ
完掘状況 (北から)

規則的に並ぶかのように見える
ピット。時期は不明。



H18 - 5 トレンチピット半裁状況



H18 - 5 トレンチ拡張区完掘状況 (西から)



H18 - 7 トレンチ
完掘状況 (東から)



H18 - 8 トレンチ
完掘状況 (東から)



H18 - 9 トレンチ
完掘状況 (西から)



H18 - 10・11 トレンチ 完掘状況 (東から)
土坑は後世の攪乱。



H18 - 10 トレンチ 完掘状況 (東から)



H18 - 10 トレンチ 岩盤・礫検出状況 (東から)



H18 - 12 トレンチ 完掘状況 (西から)



H18 - 13 トレンチ 地山検出状況 (南から)



H18 - 13 トレンチ ピット半裁状況 (西から)



H18 - 14 トレンチ ピット半裁状況 (西から)



H18 - 14 トレンチ ピット検出状況（西から）



H18 - 14 トレンチ 拡張区完掘状況（西から）



H18 - 14 トレンチ拡張区 西壁断面

ピット検出面より下層で現代の瓦が出土したことから、
ピットは古代山城より新しいものであることが判明した。



H18 - 15 トレンチ完掘状況（東から）



H18 - 16 トレンチ完掘状況（西から）



H19 - 1 トレンチ全景（東から）

トレンチ中央では、列石・土塁が途切れている。



H19 - 1 トレンチとその西側の城壁（東から）

トレンチ外の列石と比べ、大型の石が用いられている。



H19 - 1 トレンチ 西壁土層残存状況 (東から)



H19 - 1 トレンチ下方で列石に並行して並ぶ石列 (南から)

H19 - 1 トレンチ
下段の列石（南から）



H19 - 1 トレンチ
下段の列石断面（西から）



H19 - 1 トレンチ
土塁頂部付近に並ぶ石
（東から）





H19 - 3 トレンチ
土塁検出状況（西から）



H19 - 3 トレンチ
土塁断割り・列石検出
状況（西から）



H19 - 3 トレンチ
断割り部断面（北から）

H19 - 3 トレンチ
列石を覆う土塁（北から）



H19 - 3 トレンチ
列石前面ピット検出状況
（西から）



H19 - 3 トレンチ
列石前面のピット断割り
状況（北から）





H19 - 4 トレンチ北区
石検出状況（南から）



H19 - 4 トレンチ北区
北壁断面

埋土には、多量のガラス片が
混じる。



H19 - 4 トレンチ北区

石の下にも、ガラス片混じり
の土が続く。

H19 - 4 トレンチ南区
トレンチ拡張前の遺構検
出状況（南から）



H19 - 4 トレンチ南区
拡張中（1）（西から）



H19 - 4 トレンチ南区
拡張中（2）（西から）

列石周辺には、転落したような
礫を多数確認。





H19 - 4 トレンチ南区 完掘状況 (北から)
列石を境に西と東で土の違いがはっきりと分かる。
列石西側の掘り込みは、地山確認のための断割り。



H19 - 4 トレンチ南区 完掘状況 (西から)

H19 - 4 トレンチ南区
列石及び前面のピット
(西から)



H19 - 4 トレンチ南区
列石下の造成土(南から)



H19 - 4 トレンチ南区
列石前面のピット
(南から)





H19 - 4 トレンチ南区
南壁断面



H19 - 4 トレンチ南区
南壁アップ

1m 以上におよぶ造成がなされる。



H19 - 4 トレンチ南区
東壁断面

H19 - 5 トレンチ
完掘状況（西から）

トレンチ内の土坑は、みかん穴。



H19 - 6 トレンチ
完掘状況（西から）

みかん穴が一行に並んでいる。



H19 - 7 トレンチ
完掘状況（西から）





H19 - 8 トレンチ
完掘状況 (東から)



H19 - 9 トレンチ
完掘状況 (東から)



H19 - 11 トレンチ
完掘状況 (東から)

H19 - 12 トレンチ
完掘状況（東から）



H19 - 13 トレンチ
溝検出状況（北から）



H19 - 13 トレンチ
完掘状況（北から）





H19 - 14 トレンチ
完掘状況（西から）



H19 - 15 トレンチ
遺構検出状況（北から）



H19 - 15 トレンチ
完掘状況（北から）

H19 - 15 トレンチ
土坑断面（西から）



H19 - 16 トレンチ
完掘状況（北から）



H19 - 17 トレンチ
完掘状況（北から）





H19 - 18 トレンチ
完掘状況 (南から)



H19 - 18 トレンチ
溝取東部 (北から)



H19 - 18 トレンチ
南壁溝断面 (北から)

H19 - 19 トレンチ
完掘状況（西から）



H19 - 20 トレンチ
完掘状況（西から）



H19 - 21 トレンチ
完掘状況（東から）

トレンチ中央に耕作に伴う溝
が走る。





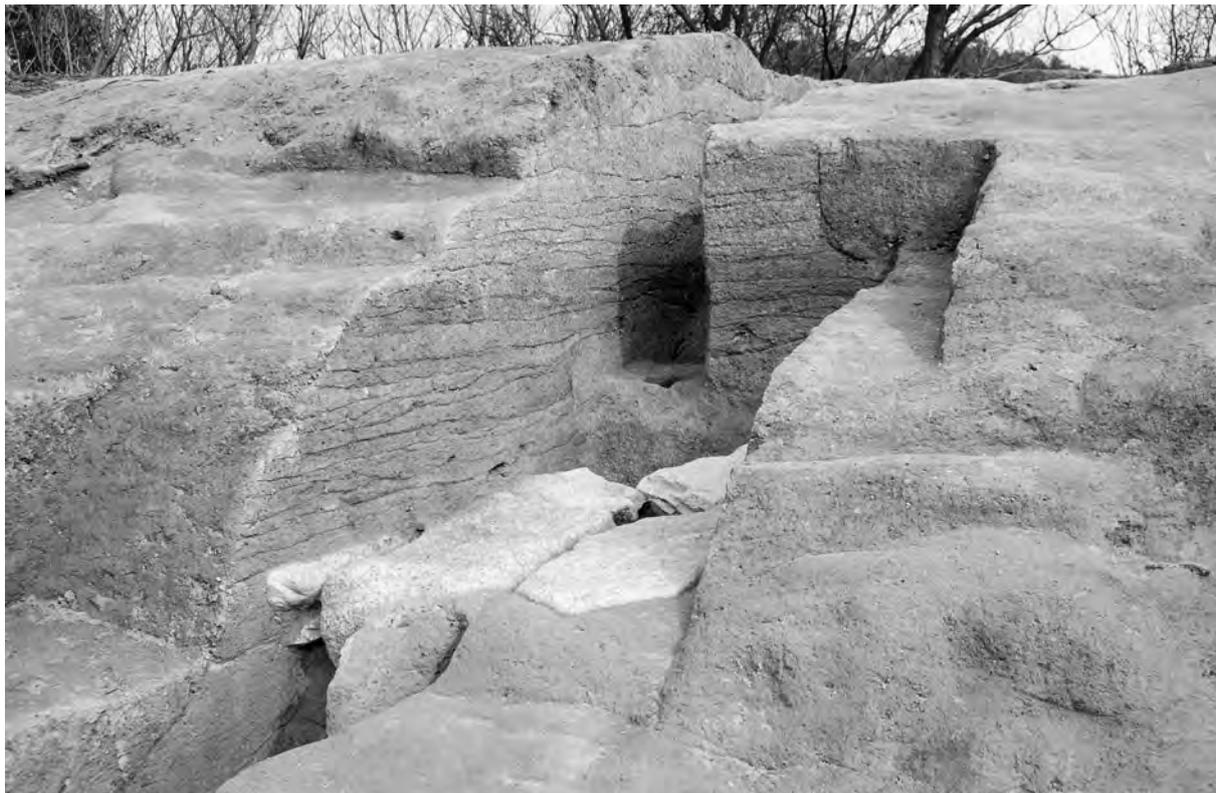
H19 - 21 トレンチ
西壁溝断面（東から）



H19 - 22 トレンチ
完掘状況（東から）



H19 - 23 トレンチ
完掘状況（南から）



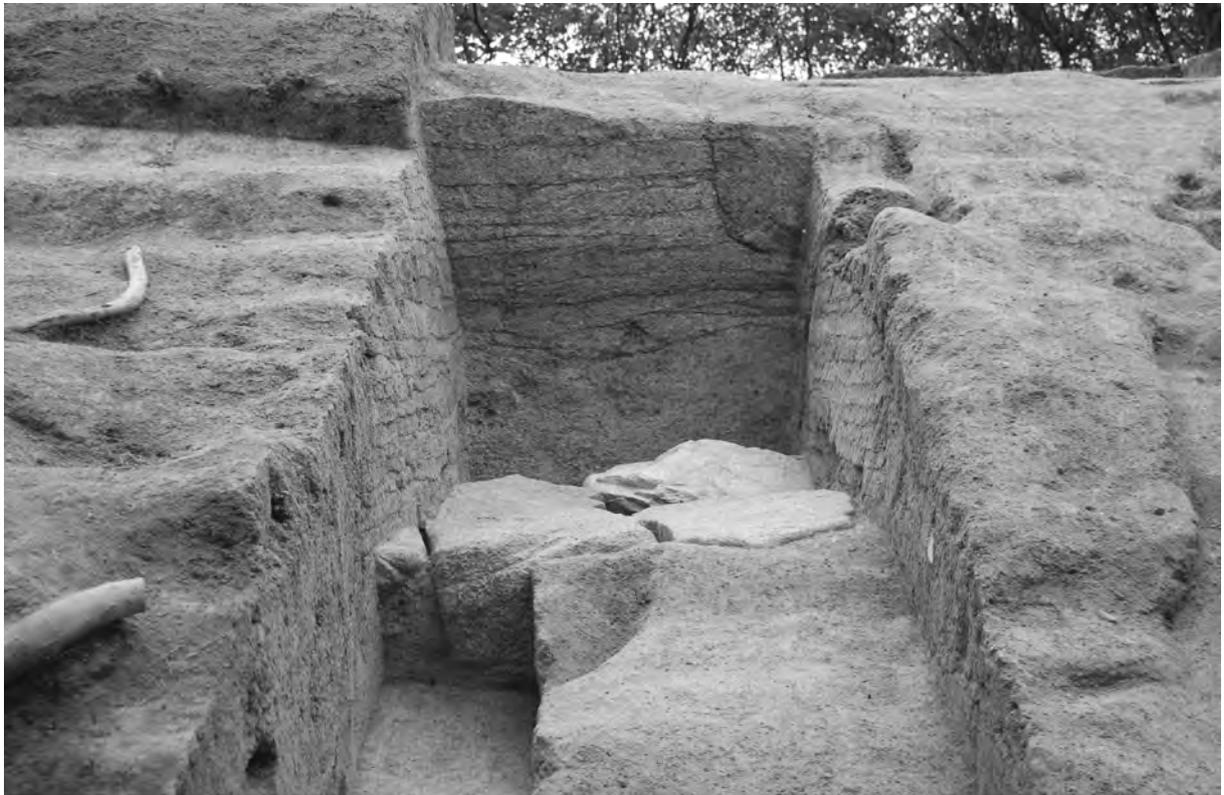
H19 - 24 トレンチ 列石検出状況（南西から）



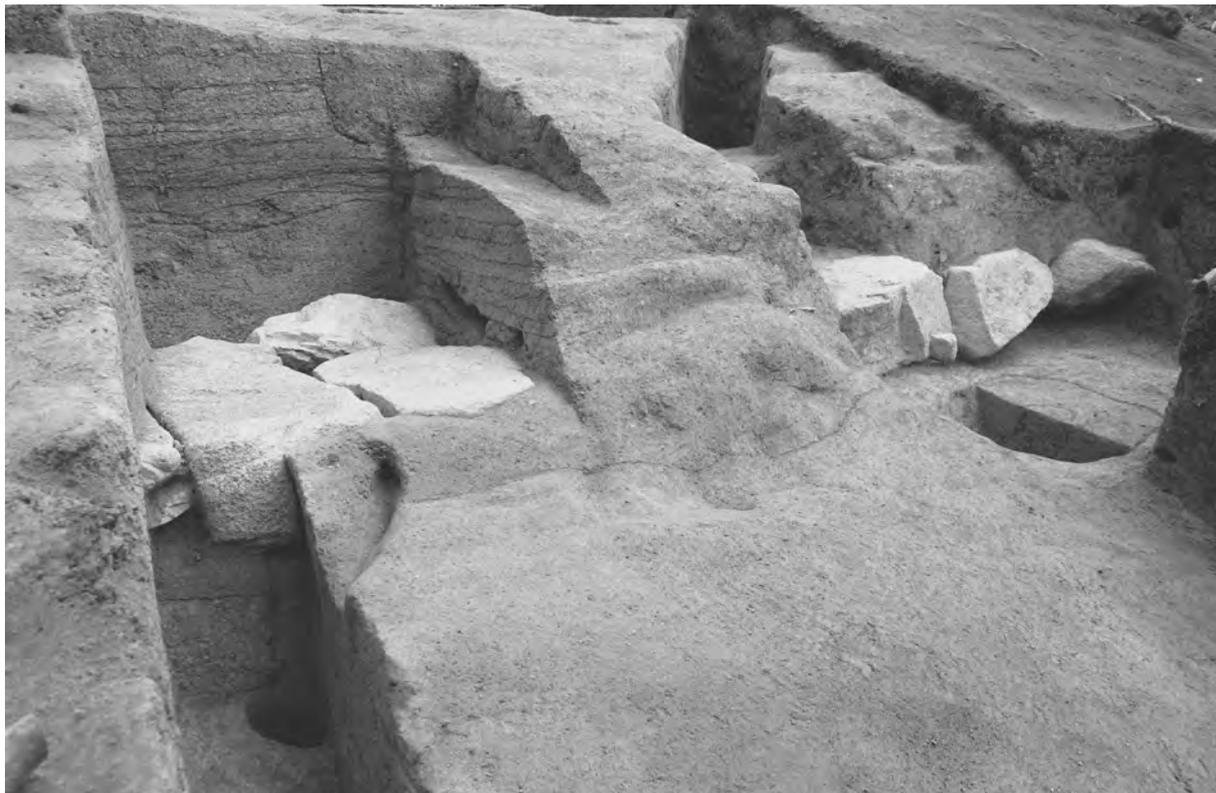
H19 - 24 トレンチ 土塁断割り状況（南から）
土塁が列石を覆う状況を確認。



H19-24 トレンチ 列石を覆う土塁（南から）



H19 - 24 トレンチ 土塁断割り状況（西から）



H19 - 24 トレンチ 完掘状況 (西から)

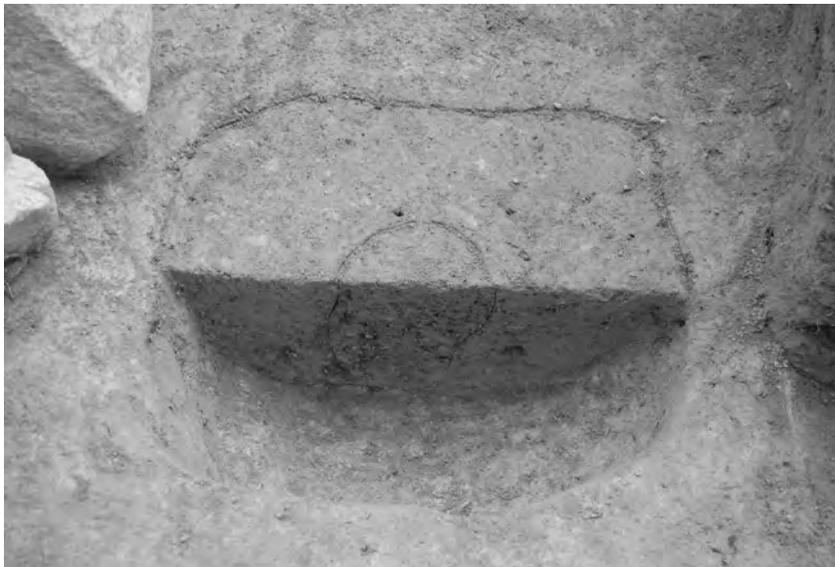
石の前面には、2種類のピットを検出した。



H19 - 24 トレンチ 完掘状況 (北から)



H19 - 24 トレンチ
P 2 検出状況 (西から)



H19 - 24 トレンチ
P 2 半裁状況 (北から)



H19 - 24 トレンチ
列石背後の土塁断割り前の
状況 (南から)

土塁表面には、ピットは確認できない。(手前の穴は後世の攪乱坑)

H19 - 24 トレンチ
列石背後のピット (P 3)
検出状況 (西から)



H19 - 24 トレンチ
P 3 アップ (西から)

地山まで掘り込まれる。



H19 - 25 トレンチ
完掘状況 (南から)

列石背後の土塁は、完全に流出していた。





H20 - 1 トレンチ
完掘状況（北から）

表土の下には地山が広がり、城門に関連する遺構は確認できなかった。



H20 - 1 トレンチ
中央に検出した2段の時期不明のテラス（西から）



H20 - 1 トレンチ
東壁断面（西から）

H20 - 2 トレンチ
北壁断面（南から）



H20 - 2 トレンチ
北壁東端部断面（南から）



H20 - 3 トレンチ
完掘状況（西から）





H20 - 4 トレンチ
北壁断面 (南から)



H20 - 5 トレンチ
南壁断面 (北から)



H20 - 6 トレンチ
完掘状況 (西から)

H20 - 6 トレンチ
東壁断面（西から）

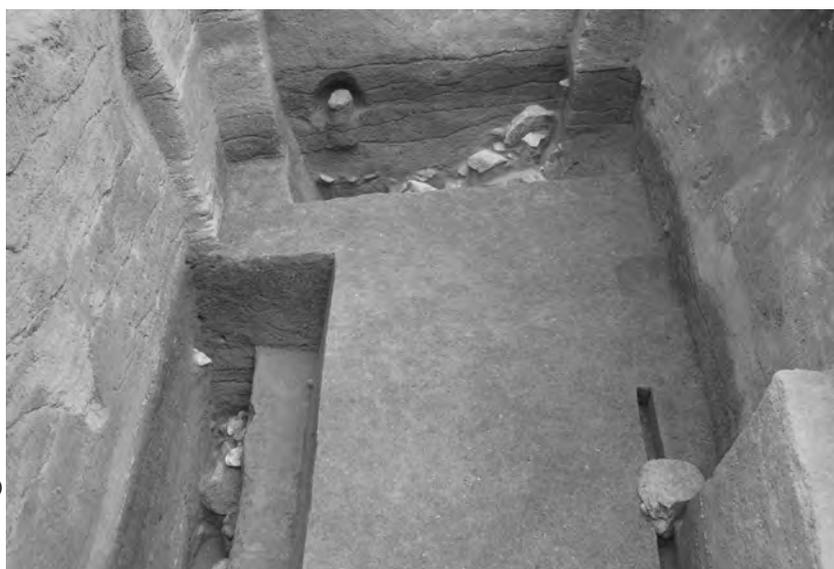


H20 - 7 トレンチ
完掘状況（西から）



H20 - 7 トレンチ
完掘状況東半部（西から）

断割りの状況では、東半部に礫
が集中していた。





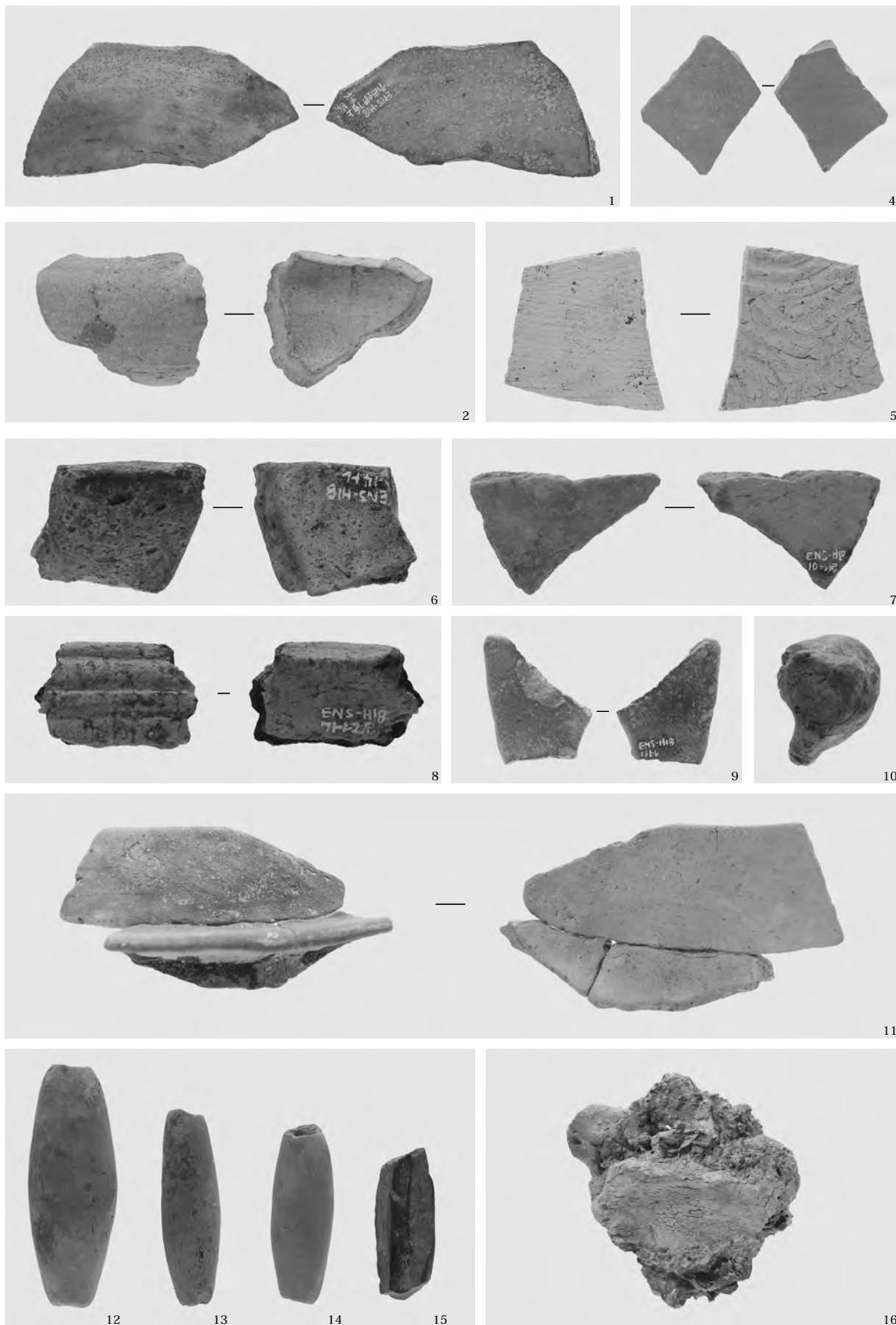
H20 - 7 トレンチ
東壁沿い断割り部礫検
出状況（西から）



H20 - 7 トレンチ
北壁断面（南から）

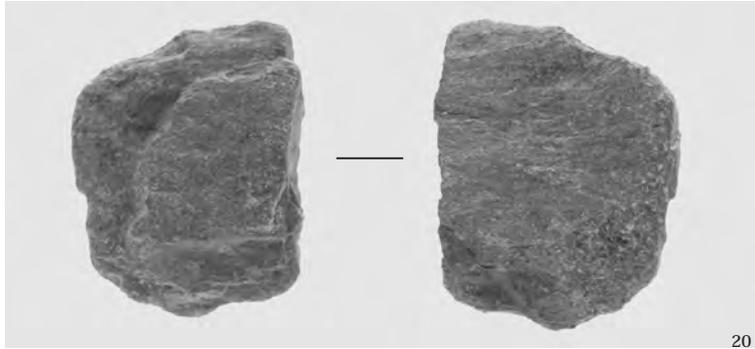
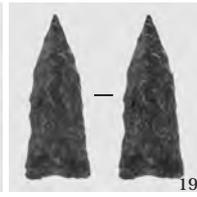
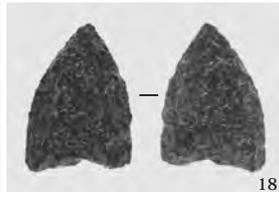
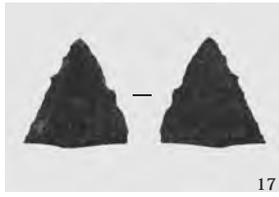


H20 - 7 トレンチ
北壁沿い断割り部礫検出
状況（西から）



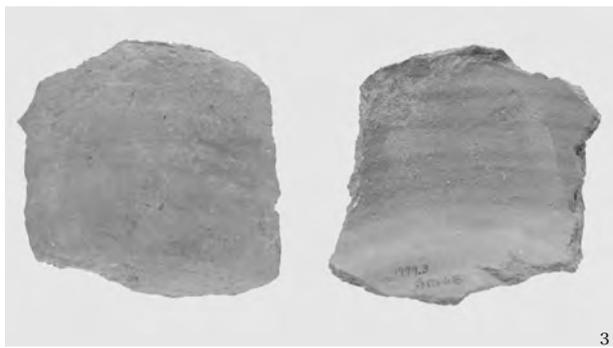
永納山城跡出土遺物（1）

縮尺不同



縮尺不同

永納山城跡出土遺物（2）



永納山城跡出土遺物（3） 平成 11 年表採資料

報告書抄録

フリガナ	シセキ エイノウサンジョウアト							
書名	史跡 永納山城跡 I							
副書名	- 水門・城門・内部施設等確認調査報告書 - (平成 18～20 年度調査)							
巻次								
シリーズ名	西条市埋蔵文化財発掘調査報告書							
シリーズ番号	2							
編著者名	渡邊 芳貴・田中 いづみ・児玉 渚							
編集機関	西条市教育委員会							
所在地	〒793-0023 愛媛県西条市明屋敷 164 番地 TEL (0897) 56-5151							
発行年月日	2009 年 3 月 31 日							
所収遺跡名	所在地	コード		北緯 ° ' "	東経 ° ' "	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村番号	遺跡番号					
永納山城跡	愛媛県西条市河原津・ 今治市孫兵衛作	38206		33° 58' 23" ～ 33° 58' 55"	133° 02' 55" ～ 133° 03' 26"	平成 18 年度 ～ 平成 20 年度	18 年度：450 m ² 19 年度：725 m ² 20 年度：165 m ²	内容把握のため の確認調査
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項			
永納山城跡	山城	古代	城壁(列石・土塁)、 城門?	須恵器片				
要約	永納山城跡は、平成 17 年に国史跡に指定された古代山城である。今回の調査は、これまで発見されていない城門・水門・内部施設等について、存否確認を行う目的で実施した。その結果、発掘調査によって初めて城門の可能性の高い遺構を検出するなど、多くの成果が上がった。							

西条市埋蔵文化財発掘調査報告書第2集

史跡 永納山城跡 I

—水門・城門・内部施設等確認調査報告書—
(平成18～20年度調査)

2009年(平成21年)3月31日

発行 西条市教育委員会
愛媛県西条市明屋敷164番地

印刷 有限会社 野口印刷所
愛媛県西条市丹原町丹原185

この電子書籍は、西条市埋蔵文化財調査報告第2集を底本として作成しました。本データは、閲覧を目的としています。詳細な図版などが必要な場合には、底本から引用してください。

底本は、西条市内の図書館、愛媛県内の市町教育委員会、国立国会図書館などにあります。所蔵状況や利用方法は、直接、各施設にお問い合わせください。

書名：史跡永納山城跡Ⅰ

発行：西条市教育委員会

〒793-8601

愛媛県西条市明屋敷164番地

電話：0897-56-5151

電子書籍制作日：2024年8月1日